
東方紅蓮閃光

コラッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方紅蓮閃光

【Nコード】

N6365K

【作者名】

コラッタ

【あらすじ】

紅き閃光ファイズ——乾巧。戦いの果て、彼は異世界“幻想郷”にたどり着いた。

これは東方projectと仮面ライダー555のクロスオーバー作品です。執筆初心者ですがよろしくお願いします。

はじめに（前書き）

はじめまして。こちらは注意書きとなります。

本編をご覧になる前にこちらを一度ご覧ください。

「全然OK!」という方はどうぞ本編へお進みください。

はじめに

はじめまして。作者のコラッタという者です。

この小説は仮面ライダー555と東方projectのクロスオーバー作品です。

東方や仮面ライダーのクロスオーバーものが許せないという方は、お手数ですがご退室お願いします。

この作品には以下の要素が含まれています。

・ネタバレ。特に仮面ライダー555には劇場版のネタバレがあります。

・東方における二次設定。

・亀更新＆不定期更新。

・ご都合主義

・幻想入り

・東方は実際にプレイしたことがなく、二次創作やプレイ動画を眺めた程度の知識しかありません。

・作者は執筆初心者です。そのため、駄文構成やどこかで見たことがある様な描写が含まれていると思われるます。

・オリジナル設定

・オリジナルキャラ

以上の注意書きを見て「見てやるよ」と言う方は、駄作ではありませんが
お付き合いよろしくお願いします。

序章 パラダイス・ロスト

遠くない未来、世界は人類の進化系“オルフェノク”によって支配されていた。

かつては日本一の巨大企業としての表の顔を持ち、その実態はオルフェノクの巣窟であった“スマートブレイン”が人間を強制的にオルフェノクへと進化させる“青い蝶”を世界中に解き放ったことにより、ほとんどの人間が青い蝶によってオルフェノクに覚醒するか、灰となって息絶えていった。

その結果、スマートブレインが事実上全世界を手中に収めた。

この青い蝶の影響を免れて僅かに残った人類は武器を手にとって“人間解放軍”を結成し、スマートブレインとの戦いを始めた。――
無論、人間がいくら銃火器を使っても強靱な肉体を持つオルフェノクには僅かなダメージを与えることしかできず、スマートブレインが生み出したベルトの戦士“カイザ”も人間側について戦うも、オルフェノクの圧倒的な数とその戦闘力により、人類が優位に立つことはなかった。

そんな中、解放軍の間である噂が流れ始めた。

――救世主ファイズが闇を切り裂き、世界に光をもたらす。――

“ファイズ”とはカイザと同じようにスマートブレインが生み出したベルトの戦士で、ファイズに変身していた青年“乾巧”はかつてスマートブレインの総攻撃の前に敗れ、連れ去られていった。

しかし、それからしばらくの後ファイズとして復活した巧はスマートブレインに連れ去られた大事な仲間である少女“園田真理”を救うため単身スマートブレインに乗り込み、スマートブレイン最強で

ある二人の“帝王のベルトの戦士”を見事打ち倒した。

——しかし、彼の戦いはまだ終わることはなかった。

『お前、スマートブレインに狙われているんだろ、この疫病神!!』
『出ていけ!!』

真理を救いに行く直前、解放軍の面々にこのような暴言を投げられた巧はスマートブレインに向かうと同時に解放軍から出て行った。救出した真理と、巧と共に解放軍を抜けたもう一人の大事な仲間である青年“菊池啓太郎”に対して巧はこう言った。

「俺につきあつて嫌われ者になることねえだろ。お前らだけでもあそこに戻れよ。」

二人に解放軍に戻るように促すも、二人は「巧を放っておけない。」
と言つて巧と共に行くことを選んだ。——巧自身がオルフェノクであることを承知の上で。

そして、スマートブレインの残存戦力が巧たち三人をつけ狙うようになった。

スマートブレインとの戦いの中、真理や啓太郎と同じ様にオルフェノクにも人間の心を持った者がいると考える人間や、巧と同じ様に人間との共存を望むオルフェノクが巧たちと共に闘うようになるも、圧倒的な戦力の前に巧たちは次第に追い詰められていき、彼らはある決意を固めた。

——スマートブレインとの戦いに決着をつける。

そうして彼らはスマートブレインの本社に乗り込んでいった。

——両手の感覚がほとんどなくなっている。意識がもう無くなりかけている。

ほとんど廃墟と化したスマートブレインの本社にファイズとなった巧が佇んでいた。しかしその姿は遠目から見ても満身創痍であることがわかる。

胸部のフルメタルラングは大きく抉れ、パワーアップツールのファイズアクセルとファイズブラスターは完全に破損している。体中のいたるところから血がにじみ出ており、左手は黒こげになりほとんど炭化しており、ギリシャ文字のφをモチーフにした仮面は大きく破損してしまっていた。

（——俺もここまでか、……真理の奴は俺のこと救世主だとか言っただけだよっぱガラじゃねえな。こんな最期を迎えるんだからな。）
と、巧は無くなりかけた意識で己を自嘲する。

（……いや、あたりまえか。今まで数え切れないほどのオルフェノクを殺してきたんだから……）
そう周囲を見渡した巧の目に入ったのは——自分が殺してきたオルフェノク達の灰の山。その中には自分と共に闘って命を落としたオルフェノクや人間の姿も見られる。その灰も吹きかけてきた風によつて次々と飛ばされていった。

「——巧っ！大丈夫!？」

そう言つて巧に駆けつけてきたのは真理だった。彼女は巧ほどではないにしろ、怪我を負っていたにも拘らず巧の身を案じていた。

「お前っ…そんなボロボロでどうしたんだよ…。…啓太郎はどうした…？」

「啓太郎なら大丈夫だよっ、ちょっと気絶しただけだから…。それ

につ、巧の方がずっとボロボロじゃない！」

巧も真理と啓太郎の身を案じたが二人とも無事のようなのである。特に真理は見た目とは裏腹に声がはつきりしてる分、むしろ大丈夫であるかもしれない。

「ねえ巧、ここまでやればもう十分だよ。…あとは人間とオルフェノクが手を取り合っついていけるようになるまで生き延びようよ…」

「……ああ、…そうだな…」

「ほら、わかったならつかまって、あっちに啓太郎や生き残った皆もいるから…」

そうして巧は真理の肩を借り、出口に向かって歩きだしていった。

(…悪い木場。俺、お前との約束果たしきれないかもしれないかもしれねえな…)
今にも死にそうな巧の脳裏に浮かんだのは、人間とオルフェノクの共存を夢見たオルフェノクの青年“木場勇治”だった。彼はスマートレインの罠により人間に絶望し、帝王のベルトの戦士“オーガ”になってファイズになった巧を追い詰めたが最終的には敗れ、人間の心を取り戻した彼は巧に自分の夢を託して息を引き取っていた。

——ガラガラッ

(——っ?!)

「っ！巧っ、あれっ!!」

岩が崩れたような音がして巧と真理が振り向いた先には——木場の仲間であった“海堂直也”と“長田結花”を殺め、彼が絶望するきっかけを作った元凶。人としての名残を完全に捨てた巨大なサイを模したオルフェノク——エラスモテリウムオルフェノクが弱り切っ
ていながらもその姿を現した。

「(——仕留め切れてなかったのかよっ!!) 真理っ！離れてろっ
！」

Exceed charge

その姿を視界に収めてからの巧——ファイズの行動は死にかけているとは思えないほど素早かった。

ベルトに装着しているファイズフォンのenterキーを押してクラウチングスタートのような姿勢を取り、右足首に装着した唯一残った攻撃ツール——ファイズポインターにフォトンブラッドが送られるのを確認すると、エラスモテリウムオルフェノクに向かって走り出した。

ある程度接近したところで高く跳び上がり、空中で一回転してファイズポインターからポインターマーカーが発射されてエラスモテリウムオルフェノクの目の前で円錐状に展開し、その巨体を拘束する。「やああああああああああつっ!!」

空中で蹴りの姿勢に入ったファイズは雄たけびと共にマーカーに突っ込んでいき、マーカーがドリルの様にその巨体に突き刺さった瞬間、大きな爆発が生じた。

「たくみいいいいいいいいっ!!」

爆発が止んだ後、そこにはエラスモテリウムオルフェノクの物と思われる灰だけが残り、ファイズの姿はどこにも見当たらなかった。

幻想郷。

我々の住む世界とは隔離された、幻想となったモノたちが住まう世界。その幻想郷の何処とも知れない場所にある家屋に、鮮やかな金髪を持ち、紫を基調とした服を纏った女性がいた。

「…あら、何かしら、これ。」

彼女の名は“八雲紫”。この幻想郷を作り、“境界を操る程度の能力”で外界と隔離した大妖怪である。また、九尾の妖狐を元にした式神を従えているのだが、現在は彼女の命により外出中である。

「藍宛て……ではなさそうね、封筒のようだけど。」

そう言つて彼女が拾い上げたのは青い蝶がプリントされた一通の封筒だった。式神宛てのものだとも考えたが、宛名が自分であることを確かめ、すぐにその考えを打ち消した。

(……妖術や魔法の類の罫が仕込まれているわけでもなさそうね。) 罫が仕込まれている様子もないことを確認し、中身を見てみることにした。…最も、例え仕込まれていたとしても、彼女の能力でなかったことにできるが。

——そして、封筒の中の便箋には一文だけ、こう書かれていた。

—— Paradise Lost ——

「…“パラダイス・ロスト”？…“樂園の喪失”だなんて、随分大それたことを…あら。」

そう紫が呟いた矢先、手に持っていた便箋が青い炎に突然包まれて焼かれていった。

「……っ！？…こっ、これは…？」

焼かれていく便箋を見つめていた紫の身体に突然ある異常が起こり、声にならないうめき声を上げた。

「…これは、少々不味いことになったわね…。」

顔に冷や汗を浮かべながらそう呟いた紫の視線の先には、先程まで便箋だった灰の山があった。

第1話 幻想郷（前書き）

コラッタです。

今回、オリキャラがほんのちょっとだけ出てきます。

第1話 幻想郷

「…う…ん…」

やけに心地よい風に当てられ、巧は目を覚ました。

「…あれ…俺、生きてんのか…？」

——あの時、エラスモテリウムオルフェノクに突っ込んだ瞬間、自分は爆発に巻き込まれた筈だ。その上、あの時の自分の体はいつ死んでもおかしくない状態だった…なのにこうして生きているのはどういうことだ…？

巧がそう思うのも無理はなく、実際、意識を失うまで彼は生死を彷徨っていたのである。

そのため、巧の頭はやや混乱状態にあった。

（ここは…和室か？それにこの服、おもいきり和服…だよな…）
ある程度落ち着いてきた巧は周囲を見渡して状況整理を行うことにした。

そして彼の目に入っただのは今時の日本ではなかなかお目に掛かれな
いであろう純朴な和室と、その中央部分に位置している布団に寝か
されている自分が身につけている患者が着るような真っ白い和服だ
った。

（ここは…診療所みたいなもんか？…にしてもすげえな。あんなに
黒こげだった左手までピンピンしてやがる。下手したらスマートブ
レイン並の治療技術じゃねえか。）

今いる場所を診療所と仮定した巧は次に自分の体を調べ始めた。
傷のないところを見つけるのが難しかったほどボロボロだった身体
は、ほとんどの傷が完治しており、巧が驚いた通りにほとんど炭化

していた左手も綺麗に治っていた。

——そして、唐突に部屋の出口である引き戸の向こう側を見つめ始めた。

（…誰か来るな。）

巧の正体であるウルフルフェノクは、文字通りオオカミの特性を備えたオルフェノクである。そのため、嗅覚や視力などといった感覚器官が非常に発達しており、人間の姿でもその感覚能力を引き出すことができる。

それ故にこの部屋に近づく何者かの気配を感じたのである。

（とりあえず話を聴いてみるか。…何をするにしてもそれからだ。）
巧は今近づいてきている者になぜ自分を助けたのか、ここは何処なのかを問いだすつもりでいた。——仮にスマートブレインの残党が自分を利用するために治療したのならぶっ潰してやればいい。そう心に決めながら。

そしてその人物が引き戸を開けた時——

「あ、目が覚めましたか？」

「なっ——っ!？」

——巧は驚きの余り言葉を失った。

引き戸をあけた人物は——少女だった。ピンクがかった紫色の髪と赤い瞳を持ち、学生が着るようなブレザーとスカートを身に纏っていた。——だが、巧が驚いた部分はそのではなく、頭から生えている兎の耳だった。——もう一度言おう。兎の耳が頭に付いているのではなく、頭から生えているのだ。…よく見ると丸い尻尾がちらりと見える気がする。

「あ、ちよつと待って下さいね。今師匠を呼んできますから。」
「え、あ、ちよつ、おいっ——」

そう言うのと兎耳の少女は師匠なる人物を呼びに再び部屋から出て行った。

「…何だつてんだ。一体。」
落ちて着いていた巧の頭が再び混乱し始めていた。

「——治療の経過は良好のようね、どこか痛むところはあるかしら？」
「…いや、ないな。体中がピンピンしてる。」
「そう、良かったわ。」

あれから暫くして再びやってきた人物は、赤と青が真ん中で分かれたような変わった衣装と帽子を身に纏った銀髪の女性だった。おそらくこの女性が先程の少女が言っていた“師匠”なる人物なのだろう。と巧は推論づけた。

「俺の怪我、あんたが治してくれたのか？」
「ええ、酷い怪我だったわよ。私の腕を持ってさえ完治するのに1週間はかかったのだから。」
「（あの大怪我を1週間つて…とんでもねえ腕だな…）そうか。…悪かったな、手間かけさせて。」
「気にしないでいいわ、貴方は患者なのだから。」
どうやらこの女性は医師のようである。1週間以上も見ず知らずの自分を治療してくれた件に関しては、普段口の悪い巧も素直に感謝の言葉を述べた。

「じゃあ改めて自己紹介しましょうか、私は八意永林、ここ永遠亭の薬師をしているわ。あなたは？」

「…乾巧だ。…ってか、その…えいえん…てい…だったか？なんだそりゃ？」

「…やはり、着ていた服から察してはいたけどどうやら外来人のようね。」

「…外来人？…どういうこつた。」

——さつきからこの永林と名乗った女の言ってることがよくわからない。永遠亭と言う場所についてはともかく、外来人という言い方はまるでここが日本ではないかのような言い方だ。

「そう言つと思つてね、今から説明をするからよく聞きなさい。…ここ“幻想郷”について。」

「——ということなんだけど、解つたかしら？」

「…すまん、ちょっと考えさせてくれ。」

「まあ、流石にすぐに理解するのは難しいでしょうね。」

永林から聞いた話はどれもこれも巧からしてみれば冗談だと言いたくなるような物ばかりだった。

曰く、ここは“幻想郷”と呼ばれる世界で自分がいた世界とは別の世界である。

曰く、幻想郷は外の世界とは結界と呼ばれるもので隔離されている。曰く、ここは妖怪や吸血鬼、果てには神などといった外の世界で幻想となり果てたモノたちが住まう世界である。

曰く、たまに外の人間——外来人が迷い込むことがあり、自分はおそらくそれに当てはまるのだと。E t c…

(…とんでもなく非常識な事態に巻き込まれているみたいだな、俺

…)

かつて巧がいた世界もオルフェノクに支配されるという非常識極まりない状態であったが、神や妖怪が暮らしている分この世界の方がより非常識に思えたのだった。

「…そっぴゃさつき俺の様子を見に来たあの兎の耳が生えた女もその…妖怪だっというのか？」

「そっぴゃ。彼女の名は鈴仙・優曇華院・イナバ。正確には妖怪、だけれどね。」

「…妖怪、ね…あんたはどうなんだ？人間に見えるけど。」
そっぴゃは言ったものの、巧は肯定の返事が返ってくるとは思っていなかった。

自分の内側に眠るオルフェノクとしての本能が、彼女は普通の人間ではないと伝えていたからである。

「いいえ、私は蓬莱人といってね、…一言で言うなら不老不死の人間ってところかしらね。…なんなら証拠を見てみる？」

「…もう何でもアリだな。あと見せなくていいから。」

…さすがに、不老不死とは思ってもよらなかったが。

「あら残念。…でもそういう貴方も、見た目こそは人間そのものだけれどそうではないのでしょうか？」

「……気づいてたのか。」

「ええ、身体を調べる際にね。」

——どうやら自分が人間ではないことを目の前の女は気づいていたようである。

「調べたところ月が送り込んだ刺客ってことはなさそうだし、かといって妖怪でもない。まるで人間の体に得体の知れない何かが融合している。そんな感じだったわ。…貴方、一体何者？」

「……………」

永林の問いに対する巧の返答は無言だった。——いくら人間ではな

いことがバレているとしても、「自分は人間の進化系と言われるオ
ルフェノクといって、本当の姿は化け物そのものだ。」と馬鹿正直
に話す気は巧には毛頭なかった。それ故の、無言。

「……まあ、話したくないというのならそれでいいわ。誰にでも秘密
にしたいことはあるだろうし。それにとある妖怪の言葉を借りるな
ら“幻想郷は全てを受け入れる。”と言うしね、あまり深く考える
必要はないと思うわ。」

「……そうか。」
明らかに気落ちした巧に対して永林が“詮索はしない”とも取れる
言葉を投げかける。

その言葉が巧にとってはどことなく心地良かった。

「——失礼します。師匠、慧音さんがお見えになってますけど。」
「あら、有り難ううとんげ、じゃあ呼んできてくれないかしら。あ
なたが運んできた患者が目を覚ましたって。」

「わかりました。」
そう言って部屋に入ってきた先程の少女——鈴仙は永林の指示を仰
いだ後、再び部屋を後にした。

「……慧音？誰だそりゃ？」
「竹林で倒れてた瀕死の貴方をここまで運んで来たのよ。お礼くら
いは言っておきなさい。」

「……なるほど」
どうやらその慧音という人物は、自分を助けてここまで運んでくれ
たようだ。……さすがに礼くらいは言っておかないとまずいかもしれ
ない。

「——失礼する。…おお、無事に目を覚ましたのだな。いや心配したぞ、見つけた時には今にも息を引き取りそうだったからな。」
そう言つて入ってきたのは一人の女性だった。水色の髪を持ち、青いワンピースのような服を纏い、変わった帽子をかぶっていた。その顔は理知的で凜々しい顔立ちでありながらも、どこか暖かな優しさを含んでいた。

「…あんたが、慧音つて人なのか？」

「そうだ、私は上白沢慧音という者で、人里で寺子屋を開いている。君の名は何と言う？」

「乾巧だ。あんたが倒れてた俺を助けてくれたんだつてな。…ありがとな。」

「ふむ、巧と言うのか。それと、そんなに気にすることはない。困った時はお互いさま、と言うしな。」

「…そつか。…あ、それとよ。俺が倒れてた近くにベルトみたいなもんは落ちてなかったか？」

礼を述べた巧が尋ねたのは今自分の手元にはないファイズギアの行方。手元にないことから慧音が永林の下にあると考えられるが…

「…もしかしてこれのことか？」

慧音から手渡されたのはファイズアクセルとファイズブラスターを除いたファイズギア一式。その中には壊れたはずのデジカメ型パンチングユニット“ファイズショット”も含まれていた。

（…なんでこいつが直ってるんだ？…いや、この世界じゃ何が起こつても不思議じゃねえのかもな。）

「君の物かと思つて保管していたのだが…どうやらその通りらしくて安心したよ。」

「ああ、わざわざ済まねえな。」

「何、喜んでもらえたのなら幸いだ。…それで、これから君はどうするつもりだ？」

慧音が尋ねたのは巧のこれからの行く先。その問いに対する巧の答えは決まっていた。

「そりゃ勿論元の世界に帰るさ。…なあ、帰るにはどうすればいい？」

——そうだ、まだ生きているというなら自分にはやるべきことがある。スマートブレインは自分たちが潰した。あとは人間とオルフェノクが共存できるようにしていかなければならない。自分たちにはその義務がある。

あいつの——木場の夢の為にも。

「そうね、それなら博麗神社に行くといいわ。」

巧の問いに答えたのは永林だった。

「…博麗神社？」

「ああ、幻想郷については聞いたか？」

「ああ、だいたいは八意に聞いた。」

「なら話は早い、幻想郷を包んでいる結界は博麗神社の巫女が管理している。そして、その巫女なら君を外の世界に帰すことができるだろう。」

どうやら元の世界に帰るには、その神社の巫女に頼むのが一番手っ取り早いらしい。

「なるほどな。…じゃあな、世話になった。」

そう言つて巧は布団から立ち上がり、部屋から出て行こうとした。

「待て、普通の人間が幻想郷を一人で出歩くのは危ない。そもそも行き方がわかるのか？」

「それに、一人で竹林を歩いたら道に迷つてのたれ死ぬわよ。…比喩ではなく、ね。」

が、女性二人の常識的な言葉が耳に入り、その足は止まった。：特に永林が物騒なことを言った気がする。

「どの道、今から向かったって途中で日が暮れるだろうしね。慧音、貴方が彼を一晚泊めてあげたら？」

「そうだな、神社に向かうのは明日の朝でもいいだろう。」

——なんだか、自分の知らぬところで話が進められてる気がする。

「：おい、俺がどうしようが俺の自由だろ。だいたい本人を無視して勝手に話を進めんなよ。」

と、普段の口の悪さを全開にした巧が話に置いてけぼりになったことに反論するも、

「じゃあ貴方は一人で妖怪に襲われても平気と言いたいのかしら？
：来たばかりの外来人は大抵妖怪に食われるという末路を迎えているのだけ。」

「そうだぞ。それに、人の好意は素直に受け取っておくものだ。」

「……………」

と、正論で返され何も言えなくなっていた。

「じゃあ、お大事にね。」

「ああ、色々と世話になったな。」

あの後話し合った結果、今日は一旦人里にあるという慧音の家に泊まることになり、明日の朝彼女と共に改めて神社に向かう、ということになった。そのため、慧音と共に人里へ向かうことになった巧は着替えなどの準備を済ませ、永遠亭の出口にまで来ていた。

ちなみに、今巧が着ている服はここに来る前に着ていた服ではなく、動きやすさを重視した質素な和服であった。永林曰く、着ていた服

はほとんど使い物にならなくなっており、処分したとのこと。

「では行こうか。」

「ああ」

と、慧音が巧に呼び掛けて竹林に向かって歩き出すも、巧はじつと永林を見つめていた。眼光を若干鋭くして。

(……)

(…安心しなさい。誰にも貴方の身体の事は喋ってないし、勝手に話すこともしないから。)

(…そうか。)

そう、巧が危惧したのは永林が自分の正体を他者に言いふらしていないかどうか、ということである。それ故にアイコンタクトを交わしたのだがどうやら杞憂だったようである。

「…どうした？早く来ないと置いて行くぞ？」

「わかってるって。今行く。」

巧がついてこないことに気付いた慧音が呼び掛けたため、これ以上留まる必要のなくなった巧は素直に彼女に付いていくことにした。

(……幻想郷の話を聞いた上で自らの正体を隠したいだなんて、変わってるわね彼。)

二人の姿が完全に見えなくなった後、一人残された永林は、巧の正体を隠そうとする姿勢に考えを巡らせていた。その過程で最近里の近くで姿を見せるようになった正体不明がウリだとか言う妖怪が浮かんだがすぐにその考えを打ち消した。

(彼の場合は——そう、自分の正体に気付かれること自体に怯えている感じだった。)

その話題に触れた時の巧の目が真剣であったことに気付いていた彼

女は、巧が決して面白半分で正体を隠しているわけではないと思いついた。

（ま、すぐに帰るようだし、関係ない事を気にしても仕方ないわね。）
そう一人ごちた彼女は永遠亭に踵を返していった。

「…あれの打ち上げは終わったのかしら？」

「ええ、ちゃんと信号もキャッチできますよ。」

幻想郷の何処とも知れない場所。そこに4人の男女が集まっていた。その内、妖艶な雰囲気を纏った女性が眼鏡を掛けたインテリ系の男性に何かの経過を尋ねており、その問いに対する男性の答えは“順調”を意味するものだった。

「へえ…じゃあ、あとはアレが直れば遊ぶことができるんだね…たのしみだなあ。」

と、その報告を聴いていた少年が楽しみで仕方がないとも言いつつ言葉を發した。

「…あのような妙な機械に頼らずとも目的を果たすことぐらい可能だろう。」

「あら、仲間に加わって日が浅い貴方は知らないかもしれないけどアレを使えば私たちの力をより引き出すことができるのよ？」

「…どうだかな。」

話題に上がっている物の必要性に否定的な言葉を發したのはこの場で唯一、背中から黒い翼を生やした青年だった。その言葉に女性が弁明の言葉を投げかけるも、青年は半信半疑といった感じだった。

「ねえねえ、アレが完成したらばくが使ってもいいよね。」

「ええいいわよ。好きになさい。」

少年がその使用許可を求めたところ、女性は快く了承した。が、
「……なんで、貴方ばかり……」

そのことに対し、男性が拗ねたような愚痴を呟いたのだが――

「あれえ？…今、何か言ったかなあ？」

「えーい、いや、なななんでもないですよ！」

――少年にはしっかりと聞こえていたらしく、脅されて縮こまっていた。

「ほらほら、いじめないの。……そう言うわけだから、私たちの目的達成はもうすぐよ。私たちの使命――」

一旦言葉を区切った女性は他の三人がこちらを見たのを確かめた後、三人と共に同じ言葉を発した。

「……王の目覚めの為に」「」「」

その言葉が、この空間に響いていた――。

第1話 幻想郷（後書き）

コラッタです。

第一話ですが、如何だったでしょうか？

ペーペーの素人なため、東方キャラの口調が合っているかどうかとても不安です。

気付いた点や誤字・脱字などがありましたらご意見いただけると嬉しいです。

第二話以降ですが、本格的に亀更新＆不定期更新になるかと思われます。

稚作を見てくださる方には待たせることになるかもしれませんが、時間に合間を見つけて少しずつ執筆していきたいと思います。

それではまた次回。ノシ

第2話 闇夜の豹（前書き）

お待たせしました。

第2話です。

8月3日、修正しました。

第2話 闇夜の豹

朝、幻想郷に爽やかな日光が降り注いだ。

「…朝か。」

そう言つて巧はうつろながらも目を覚ました。——精神的に疲れ切つた体に鞭を打つて。

あれから慧音と共に人里へやってきた巧は、慧音と共にいたこともあつて里の人間たちによる質問攻めにあつたのだつた。

彼女は里の守護者をやっていることもあつて、里の人間たちから大きな信頼が寄せられているらしい。そのため、その彼女が連れてきた見知らぬ男——巧に非常に興味が湧いたのである。

元々自分の事を話すのを好まない巧は里の者たちの質問を口下手でありながらも必死にかわしていたのだが、慧音が開いているという寺子屋に通う子供たちの

「せんせえ、このにいちちゃん、だれ？」

「せんせいのかれし？」

などと言うトンデモ発言により、収まりかけていた場が再びにぎわい始め、先程よりも強烈な質問攻めにあつたのだつた。……中には怨嗟の視線や呪詛のようなものが混じつていた気がするが。

もつとも、その直後に慧音が子供たちを筆頭にした里の者たちに“ステキなエガオ”を向けたことでその場はお開きになったのだが。そのため、慧音宅に着いた巧は真つ先に眠りについたのでつた。

「おはよう巧。よく眠れたか？」

巧を起こしに来たのか。慧音が襖からやって来た。

「ああ、…昨日のアレがなけりやもつとよく眠れたんだけどな。」

「ははは……皆、外人が珍しいのだろう。悪く思わないでくれ。」
「ま、そんなところだろうな。」

巧がつい漏らしてしまう余計な一言にも彼女は全く怒ることはなく、昨日の質問攻めっぷりを思い出したのか、若干引きつった笑みを浮かべていた。

「さて、朝食にしようか。着替えたら居間まで来てくれ。」

「ああ。」

そうして居間に向かった慧音を追うべく、服を着替えた巧は居間に向かった。

——そして居間に入った巧の目に入ったのは、ご飯、漬物、焼き魚、そしてほどよく湯気を立てた味噌汁。…もう一度言おう、湯気の立った味噌汁である。

「お。巧、おはよう。」

「…ああ。」

「なんだなんだ？朝からそんなしかめっ面して。」

「…別に。」

そう言つて居間に入った巧を出迎えたのは、赤いもんぺを穿き、艶のある白髪にリボンを付けた気の強そうな顔立ちをした少女——藤原妹紅であった。彼女は慧音の友人で、昨日は貴重な酒が手に入ったらしく、慧音と一緒に飲み明かしてそのまま泊まっていたらしい。——最も、疲れ切った巧はその頃には既に爆睡していたのだが。

さて、なぜ巧が味噌汁を視界に収めたことでしかめっ面をしたのかと言つと……巧は重度の猫舌だからである。その猫舌っぷりは周囲が冬にホットミルクを飲むのに対し、一人だけ冷たい牛乳を飲むほどであった。

「では巧も来たことだしいただきます。——いただきます。」

「いただきます。」

「……いただきます。」

そう言つて三人とも朝食を食べ始めたのだが、慧音と妹紅はどの料理も分け隔てなく食べてるのに対し、巧は決して味噌汁に手をつけようとはしなかった。

「……どうしたんだ巧。味噌汁にだけ手をつけてないじゃないか？」

「ほんとだ。……お前、味噌汁嫌いなのか？」

「……いや、嫌いってわけじゃない。」

味噌汁に全く手をつけようとしない巧に対して慧音と妹紅が疑問の声を上げるも、元から口下手な巧は曖昧な返事を返すことしかできなかった。

「……料理を残すのは、食材となつた命に対してとても失礼なことなんだぞ？」

「そうだぞー。ちゃんと残さず食べ。」

「……わかつたよ。」

二人に正論を言われ、残さず食べるように促された巧は今まで手をつけなかったアツアツの味噌汁を口に近付け――

フー、フー、フー

「……」

フー、フー、フー

時が、止まった。……ザ・ール。とか言つてはいけない。

「……あー……あの、巧？」

「フーフー……なんだよ。」

「……お前つてもしかして猫舌？」

「悪いか。」

流石に沈黙に耐えきれなくなったのか、妹紅が湧きあがつた疑問を

巧にぶつけるも、巧はそう一言だけ告げて再び作業に集中していた。

「…あー、アレだ、スマン。けど猫舌がいる家庭には福が来ると言
って——」

「…妹紅、全くフォローになっていないと思うぞ。」
「……………」

余計なお世話だと思いながら味噌汁を冷ましていく巧であった。

「着いたぞ。ここが博麗神社だ。」

「この石段の上か？」

「そうだ。」

あの後、準備を終えた巧と慧音は神社に向かうべく里を出発し、（妹紅は家があるという竹林に帰っていった。）こうして今、博麗神社にたどり着いたのだった。道中、妖精やらが悪戯を仕掛けてきたのだが、慧音が弾幕で撃退した。

ちなみに、弾幕を見た巧の感想は“デタ。メ人間の万。ビク。シヨ。”であった。

「霊夢、いるか？」

「あら、慧音じゃない。お賽銭でも入れに来た——わけじゃなさそうね。……そちの人は外来人かしら？」

石段を登りきった慧音が呼び掛けたのは、黒い髪をリボンで結んでいてなぜか腋が無い赤い巫女装束を身に纏った少女だった。

「そうだ、今日来たのは彼を外に帰してほしくてな。やってくれるか？」

「なるほどね。貴方、名前は？」

「…乾巧だ。あんたがこの神社の巫女つてやつか？」

「乾巧…ね。そうよ、私は博麗霊夢。またの名を“楽園の素敵な巫女”。」

と、自己紹介をする二人だったが、

「素敵、とか自分で言うか？フツ！」

「……」

……また余計な一言を発してしまう巧であった。

「…じゃ、じゃあ、さつさと帰しちゃいましょうか。ちょっと待つてなさい。…たつく、紫の奴ちゃんと結界の管理しなさいよねー…」

「……」

と、復帰した霊夢が澄んだ声で外の世界に帰すための祝詞を読み上げていった。

「…ゆかり？」

「ああ、“八雲紫”。この幻想郷を作りだした大妖怪だ。普段結界の管理は霊夢と彼女が行っている。」

「…とんでもねえ奴だな。」

聞きなれない名前に湧きあがった巧の疑問に答えたのは慧音だったが、その答えの内容のスケールのでかさに内心笑い飛ばしたくなっていた。

「……。ふう、終わったわよ。後はあの鳥居から下りて

いけば帰れるから。」

と、祝詞を読み終えた霊夢が指したのは淡く発光している自分たちがぐぐって来た鳥居。どうやらあそこから下りれば帰れるようである。

「そうか、世話になったな。」

「そうね、これでお賽銭入れていってくれたら嬉しいんだけど。」

……何気にちゃっかりしている巫女である。

「慧音も、短かったけど世話になったな。」

「どういたしまして。——達者でな。」

「ああ。」

「あ、それと下りきるまでは絶対に振り向いたりしちゃダメだからね。」

「わかったわかった、じゃあな。」

慧音にも礼を言い、霊夢の忠告を受け取った巧は鳥居をくぐって石段を下りて行った。

が、

（…あれ？）

下りてる最中で視界がぶれたかと思うと、目の前にあるのは上りの石段だった。

（…どういこうった？）

とは言ったものの、振り返るなど言われたので後ろに戻るわけにもいかず、石段を登り始めた。

そして——

「…あれっ？」「」

巧の目に飛び込んできたのは、驚愕の表情で自分を見つめる慧音と霊夢の二人だった。

「…なんで言ったそばから戻ってきてんのよ…」

「バカ言うな。俺は真っ直ぐ歩いてたんだぞ。」

「ま、まあ。もう一度試してみてはどうだ？」

「ま、それもそうね。——」

そう言い、霊夢は再び祝詞を読み上げていった。

「——。はい、おしまい。じゃ、今度は戻って来ないでね。」

「ああ、今度こそ帰ってやるさ。」

「……まあ、達者でな。」

そう言い、再び巧は石段を真つ直ぐ下りて行つたのだが――

「……」

――再び神社に戻ってきてしまったのだった。

「……」

「……巧、そう気を沈めるな。」

あれから何度も帰還を試してみても失敗してしまい、霊夢は「原因はこつちで調べてみる。」と言い、これ以上神社にいても仕方なくなった巧と慧音は里に戻り、その頃には既に夕方になっていた。

「……なあ。」

「……どうした？」

「……他に元の世界に戻る手段つてのはないのか？」

そう、巧は霊夢の知らせを待つだけではなく、元の世界に戻るための手段を自分の方でも探すつもりでいた。

「……八雲紫ならできるかもしれないな。」

「それつて……ここを作ったとかいう妖怪か？」

巧の問いに対する慧音の答えは八雲紫なる妖怪に会うということだった。

「そうだ。彼女の“境界を操る程度の能力”なら君を元の世界に帰すことができるだろう。」

「そいつは何処にいるんだ？」

「……残念だが、彼女は普段何処にいるのか見当がつかん。探すにしても時間がかかるだろうし……下手をすれば一生見つからない、ということもあり得る。」

最も、その手段は賭けの要素が強く厳しい手段だったが。

「なるほどな。……でも、いつか見つけてやるさ、帰る手段を。」

「そうか…強いのだな、巧は。」

「別に、そんなんじゃないよ。」

慧音が諦めの表情を浮かべない巧を称賛するも、巧はそれを否定した。

—— そうだ。自分は強い奴なんかじゃない。自分を信じず、他人を裏切ることには怯える自分が強いはずが、ない。

「——っ！先生！大変なんだっ！」

と、突然家に飛び込んできたのは一人の里の青年だった。その顔には汗がいくつも浮かんでおり、よっぱど急いでいたことが読み取れる。

「耕一ではないか。どうした？そんなに慌てて。」

「それが、妹の巴がつ、薬草を詰みに森に行つたまま帰ってきてないんですっ！もうすぐ日が暮れるつてのにっ！」

「なんだって！？」

青年—— 耕一はどうやら妹が森から帰つてこなく、慧音に救助を頼みに来たようだった。

—— 慧音や八意から聞いた話では夜は主に妖怪の活動時間だと言う。もしそんな時に知能が低く言葉を持たない妖怪や野犬などにはたの人間が出くわしてしまえば——！

「あつ、おい！まてっ、巧っ！」

その言葉を聞いたとたん、巧は慧音が止めようとするのも聞かず、ファイズギアを手に家を飛び出して森に駆け出していった。

「っつ、全く！耕一はここで待っている！」

「い、いえ！俺も行きます！妹一人守れないような兄じゃ死んだ才ヤジとお袋に合わせる顔がありません！」

「——っ、…わかった！絶対にはぐれるなよ！」
「はいっ！」

——そうして、慧音と耕一も森へ駆け出していった。

「……ど……？」

道に迷ってしまったのか、十一ぐらいに見える少女がすっかり暗くなつた森の中を彷徨っていた。

「けいねせんせえ…にいちゃん……」

——そして、そんな彼女の姿を近くから見つめる存在がいた。

「…お、獲物がいるな。」

それは男性だった。歳は二十代後半くらいで、革ジャンを身に付けていた。格好から外来人であることがわかるが、普通の人間のものではない雰囲気を感じており、その目つきは獲物を見つけた肉食獣のものだった。

「ようし、じゃあ——行くか。」

そう言った男の体に紋様が浮かんだ後、その身体は豹を模した灰色の異形へと変化していた。

「さあて——狩りの時間だ。」

死神が、すぐ傍まで迫っていた。

（あー、今夜は月が明るいわねー。）

同じ頃、霊夢が森の上空を飛んでいた。彼女はお茶の葉が切れてきたため、香霖堂に茶葉をたかりに行き、現在はその帰りの最中だった。

た。

(……しかし、昼間のあれはどう言うことかしら。)

彼女の脳裏に浮かぶのは、昼間の外来人——巧を外に帰せなかった現象。

あの後、“裏技”を使って紫を呼び出そうとしたのだが、彼女は一向に現れる様子はなかった。

「たつく……紫の奴、ホントに何してんのかしら。」

この場にはいない紫への愚痴を思わず口に出した時——

『きやあああああああああつー!』

「っ!？何、悲鳴!？」

少女の絹を裂くような悲鳴が森に響き渡った。

「一体どこから……あそこかつ!」

悲鳴の発生源を探し始めた霊夢の目に飛び込んできたのは、見たこともないような妖怪に追いかけている少女の姿だった。

その姿を視界に収めた後、霊夢は急いでその場に飛んでいった。

「はい、そこまで。」

「どわあああつ!？……っつ、なんだ貴様あ？」

「は……博麗の……巫女さん!？」

弾幕を打ちこみながらその場に着陸した霊夢は、追われてた少女を背にしながら目の前の妖怪に札を構えていた。

「楽園の素敵な巫女さんの登場よ。……さあて、私に見つかったからには妖怪の本分に従っておとなしく退治されなさいな。」

と、妖怪に札を突き付けるも、

「妖怪だつて?……クツクツクツ、ひゃーっはっはっは!」

妖怪は全くたじろぐことはなく、寧ろおかしくてたまらないといった感じで笑い声をあげていた。

「俺たちを妖怪なんて下らんモンと一緒にしないでもらおうか！俺たちはつぎやああああああっ！？」

「退治するって言ったでしょ。」

妖怪が何かを言いきる前に霊夢は弾幕を発射しており、その弾幕は妖怪に命中して仰け反らせていた。

「っ！このアマ！何しやがる！ヒトのセリフ遮りやがって！」

（…うそっ！？効いてない！？）

弾幕は命中したものの、ダメージは思ったよりも少なく、その妖怪は未だ健在であった。——スペルカードを使えば退治できるかもしれないが、近くには追われていた人間の少女がおり、巻き添えにしてしまう可能性が高かった。

「…もうっ！掴まって、逃げるわよ！」

「あっ、は、はい！」

「待てえっ！逃がすかあっ！」

そのため、霊夢は一旦安全な場所まで弾幕で牽制しながら逃げることにした。

「おいっ！今悲鳴が聞こえなかったか！？」

「ああっ！あっちだ、急ごう！」

「はいっ！…待ってるよ、巴っ！」

一方、巴を探していた巧たちは巴の物と思われる悲鳴を聞きつけた後、その方向に向かって走っていた。——そうして走っていた時

「きゃあっ！？」

「のわっ!？」

前からやって来た何者かにぶつかりそうになった。

「あ、アンタ…昼間の巧…だっけ?それに慧音も。」

「お前っ、霊夢か!？」

「兄ちゃん!先生え!」

「「巴!」」

やって来たのは霊夢と少女——巴だった。

「良かったあ無事で…怪我はないか？」

「う、うんっ、大丈夫。」

「ほらちよつと!感動の対面に浸ってる場合じゃないわよ、早く逃げなさい!」

再会して安心していた兄妹を霊夢が切羽詰まった表情で叱りつけた。

「…何かに追われてるのか？」

「ええ、……弾幕が効かない、見たこともない妖怪にね。」

「弾幕が…効かない？」

「見つけたぞおっ!」

「もっつ!追いつかれたっ!」

と、慧音が逃げていた理由を霊夢に問いただした時、その元凶である妖怪が姿を現した。

（——なっ!あれはっ——）

その妖怪を視界に収めた時、巧の表情は驚愕の色一色になった。——なぜなら、その妖怪とは元の世界で自分が戦い続けてきた存在、

（——オルフェノクっ!？）

——オルフェノクだったのだから。

「ほう、獲物が増えてやがる。こいつぁいい。」

追いついてきた妖怪——パンサーオルフェノクは、追っていた獲物

の数が増えたことでその顔に歓喜の表情を浮かべていた。

「まずは…その生意気な女からだあつ！」

パンサーオルフェノクが霊夢に襲いかかり、そのスピードに霊夢の反応が遅れて攻撃が当たりそうになったが――

「あぶねえっ！……っ、ぐああああつ！」

「「巧っ！！」」

咄嗟に巧が飛び出して霊夢を庇ったことによりパンサーオルフェノクのパンチを受け、茂みに吹き飛ばされていた。

「くっ…よくも巧を！はあつ！」

「ああもっ！…ふっ！」

慧音と霊夢が弾幕を出して応戦するも

「ぐおおっ……！……っ、なめるなよ下等生物風情がああつ！」

「ぐあああつ！」

「きゃああああつ！」

パンサーオルフェノクには少しのダメージにしかならず接近を許してしまい、反応が遅れた二人は木に叩きつけられてしまった。

――何よコイツ！なんて馬鹿力してんのよ！

攻撃を食らう直前、霊夢は霊力による防御膜を身体中に張り、威力を軽減した。

だがパンサーオルフェノクの攻撃は霊夢も、半獣である慧音すらも容易く吹き飛ばし、容易には立ち上がれない状態に陥らせていた。

――もしも防御膜を張るのが一瞬遅れていたら、人間である霊夢は肋骨どころか内臓も確実にやられていただろう。

「さあて……まずはそこに縮こまっている二匹から始末してやるうか。お前らはそこで指を咥えて見てな。」

「なっ……！っつ、耕一！巴！逃げろあつ！」

「早くっ！走って！」

パンサーオルフェノクの発した残酷な死刑宣告に反応した慧音と霊夢が二人に逃げるように促すも――

「に、兄ちゃん……」

「くっ、くそっ！くんじゃねえっ！この灰色妖怪！」

――パンサーオルフェノクの姿と力に恐怖し、足が動かなくなってしまっていた。

「じゃあな。――死ね。」

「くっ、巴っ！」

「やめなさいっ！」

「やめろおおおおおおおっ！」

とうとう兄妹の目の前まで接近したパンサーオルフェノクの手が振り上げられ――

「やああああああああっ！」

「ぐああああああああっ！？」

先程吹き飛ばされた巧がパンサーオルフェノクを蹴り飛ばしたことにより、その手が振り下ろされることはなかった。

「巧！無事だったか！」

「ていうかアンタ、その腰の…何？」

「……」

ようやく起き上がった慧音と霊夢が安堵の声と疑問の声を挙げた。

霊夢の言う通り、巧の腰には銀色に輝くベルト――ファイズドライブバーが巻かれていた。

「ぐうっ…、こ、この野郎…」

「……てめえ」

起き上がったパンサーオルフェノクを睨みつけながら巧は手元の携帯電話――ファイズフォンを開く。

「よくも好き勝手やってくれたな。」

そう言いながらファイズフォンにキーを入力していく。

——コード 555。

「今度はこっちの番だっ！」

そうしてenterキーを入力し、

Standing by

「変身！」

ファイズフォンを天高く掲げ、腰のファイズドライバーに装着した。

Complete

その瞬間、ファイズドライバーから巧の全身に紅い光——フォトリームが駆け巡り、強烈な紅い光に包まれた後、巧の姿は変わっていた。

「た、巧……！」

「…何よ…これ……」

紅い光が消えた後の彼の姿は黒いボディースーツを下地にソルメタルと言う戦車砲の直撃に耐えうる装甲を纏い、胸部のフルメタルラングが鈍く銀色に輝き、Φの字を彷彿させる黄色く大きな複眼を持つ仮面をつけ、全身の紅いフォトリームと複眼がその存在を主張するかの如く輝く戦士となっていた。

その戦士の名は——ファイズ。

「…覚悟しやがれ。」

紅き閃光ファイズが今、幻想郷の地に降り立った。

第3話 開幕

「巧…その姿は…？」

「あんた…一体…」

「……」

ファイズとなつた巧に慧音と霊夢が驚きの声を上げるも、ファイズは「説明は後だ」と言わんばかりに無言で返し、目の前のパンサーオルフェノクを睨みつける。そして右手を小さくスナップした。カシャツという、小気味良い金属音があたりに響いた。

「その姿……まさか…テメエがファイズか！」

「…ふん。」

どうやらこのオルフェノクはファイズの事を知っているようだが、ファイズはそんな驚きの声に対して静かな怒りの意思を返した。

「…こうなつたら先ずは貴様から始末してやる！」

パンサーオルフェノクは標的をファイズに変え、鋭い爪を立ててファイズに襲いかかった。

何も構えようとしないうファイズにその爪が当たると思われた瞬間――

「ぐはああっ！？」

ファイズはそれを僅かな動きでかわし、直後にカウンターという名のパンチをお見舞いした。

「くっ、くそっ！やりやがったな貴様！」

立ちあがったパンサーオルフェノクはそれからもキック、回し蹴り、タックルなど様々な攻撃を仕掛けたのだが――

「ふっ――だああっ！」

「くっそおおおっ！」

ファイズはその全てを難なく捌いたため当たることはなく、お返しと言わんばかりに次々とカウンターを決めていった。

「——すごいな。」

「ええ…弾幕が効かない相手にあそこまでダメージを与えるなんて。」

「ファイズとパンサーオルフェノクの戦いぶりを眺めていた慧音と霊夢は驚きが隠せないといった感じでそう呟いた。弾幕でもダメージを与えることはできたが、その効果は微々たるもので決定打には到底至らなかったのである。」

しかし、巧——ファイズの攻撃はパンサーオルフェノクを着実に弱らせていることがわかる。

「それもあるが…見てみる、巧の攻撃を。」

「?……あら、これは…」

慧音にそう言われ、霊夢が見た先ではファイズが丁度パンサーオルフェノクの攻撃を弾いて腹にパンチを決めたところだった。

「そうだ、彼は攻撃を自分からは滅多に仕掛けることはなく、ほとんどをカウンターで決めている。…その上、攻撃した箇所は鳩尾、頭部、脇下などと言った人体の急所ばかりだ。何処を攻撃すれば効率よくダメージを与えられるか、ということをよく熟知している。」

「そうとう戦いなれてるわね。……一体どんな生活してきたんだか。」

——巧は元々特に格闘技などをやっていたわけではない。だが元の世界における何千何万という数のオルフェノクとの戦いの中で多くの経験を積んできた巧の喧嘩殺法とも取れる戦闘センスは、非常に優れたものとなっているのである。

今の二人は口が悪い男と思っていた目の前の外来人に対して疑問と驚きを隠せないでいた。

「こつ、この野郎…調子に乗りやがって！見てろっ！」

攻撃が当たらないことに業を煮やしたパンサーオルフェノクは近くの木に登り始め、他の木へ飛び移り続ける事で相手を攪乱する戦法に出た。

ファイズを見てみると、自分を見失ったことで暫く警戒していた様だったが、次第に諦めたのかだらけた様子で立ちすくしていた。

（チャンスだっ！……この俺を怒らせたことを後悔させてやるっ！）
今が好機だと思ったパンサーオルフェノクはファイズの背後の木からその鋭い爪を立て、飛びかかって来た。

（死ねええっ！）

そうしてその爪がファイズを切り裂くかと思われた瞬間——ファイズが振り向きざまにパンサーオルフェノクを殴り飛ばしていた。

「なんでだあああああ！？」

「お前みたいなのが考えることなんてお見通しなんだよ。バカ野郎。」

数多くの経験からパンサーオルフェノクの思惑を見破っていたファイズはそう言いながらとどめを刺すべく、ファイズフォンのミッシヨンメモリーを懐中電灯型ツール・ファイズポインターに装填した。

Ready

展開したファイズポインターを右足首に装着し、ファイズフォンのenterキーを押す。

Exceed charge

フォトンストリームを通してファイズポインターに凝縮されたフォトンブラッドが送られる。右足に身体を預けていたファイズはそれを確認すると、弱り切ったパンサーオルフェノクに向かって一回転

しながら飛び上がった。

するとファイズポインターから紅いポインターマーカーが発射され、パンサーオルフェノクの目の前で円錐状に展開し、その身を拘束する。

「なっ、何だよこれっ！？う、動けねえ！？」

身の危険を感じたパンサーオルフェノクは逃げようとするも、マーカーに拘束されたその身体はピクリとも動くことはなかった。

「やああああー！ーっ！ー！」

——やがて、空中でキックの姿勢になったファイズがマーカーに突入すると同時に、マーカーがドリルのようにパンサーオルフェノクの身に突き刺さり、次の瞬間ファイズはその背後に着地していた。

「ぐああああああー！ーっ！ー！」

クリムゾンスマッシュ。

ファイズ必殺のその一撃はパンサーオルフェノクに紅いφの紋章を刻み、青い炎に包まれたその身を灰へと還していった——

「…大丈夫か？」

「あ、ああ…」

「は、はい…」

変身を解除し、ファイズの姿から戻った巧は茫然と自分を見つめていた耕一と巴にそう尋ね、無事であることを確認すると「そうか。」と言い、慧音と霊夢の方に向かっていった。

「お前らも大丈夫か？さっき倒れてたけど。」

「あ、ああ。もう大丈夫だ。」

「——同じく。」

二人も動揺しつつも、すでに身体を動かすのに支障はなかったよう

である。

「な、なあ…あんだ。」

「?…なんだよ。」

と、巧に尋ねたのは巴に手を貸しながら立ちあがった耕一だった。

「た…助けてくれてありがと。あの、さっきの変な妖怪の事アంత
何か知って」

耕一が妖怪——オルフェノクの事を巧に尋ねたのは当然のことだった。——少なくとも耕一は今まで弾幕が効かないような妖怪など見たことも聞いたことも無いのだし、巧は奇妙な姿に変わってその妖怪を難なく倒してしまったのだから。

「はい、そこまで。」

しかし、そんな耕一の言葉を霊夢が手を叩くことで遮った。

「いつまでもここにいたら他の妖怪が来て危険でしょうし、里の人們が心配するだろうから貴方達は帰った方がいいでしょう。」

——確かに、霊夢の言う通り、もうここにいる必要はないし、他の妖怪がやってきたら巧、慧音、霊夢の三人はともかく戦う術を持たない耕一と巴にとっては危険だろう。

「そうだな。……耕一、お前が先程の事を今無理に知る必要はないし、もし必要なことであれば私から里の皆に知らせる。それでいいか?」

「——そう…ですね、わかりました。…帰ろうか、巴。」

「うんつ。」

霊夢のその提案に慧音が賛同し、彼女が耕一を諭したことにより、彼は話を聞くことを一旦取りやめた。

「さて、帰ったら話を聞きたいのだが…いいかな?巧。」

「…ああ、別にいいぜ。」

「じゃ、行くわよ。」

そうして、一行は里へと向かって行った。

あれから耕一と巴を送り届けた後、巧、慧音、霊夢の三人は慧音の家の居間に集まっていた。無論、巧から詳しい話を聞くためである。

「…で？何が聞きたいんだ？」

「そうだな…では、あの変な妖怪について教えてくれないか？」
頬をつきながらそう切り出した巧に問いかけたのは慧音だった。

「奴からは本来妖怪が持つはずの妖気を全くと言っていていいほど感じなかった。それが妙に思えてな。」

「そうね。それに、スペルカードを使わなかったとはいえ弾幕が余り効かなかったもの。アンタ、何か知ってるんでしょ？」

慧音と霊夢の疑問は幻想郷に住むものにとって当然のことだった。
慧音の言う通り、妖怪はどんな弱いものであっても妖気、もしくは魔力を持っているのである。

霊夢の疑問にもあるように、彼女が最初に当てた弾幕はいつもの弾幕ごっこで使うものであるが、それ以降に当てた弾幕は殺傷力を高めたものであったにもかかわらず、どうしても致命傷を与えるには至らなかったのだ。

「…あいつらは、オルフェノクだ。」

「オル…フェノク？」

「…妖怪とは違うようだったけど、どういつやつらなのかしら？」

「やつらは進化した人類って言ってる。…ま、自称だけだな。」

オルフェノクは人間が一度死ぬことで覚醒する存在である。そのため、彼らは自分たちの事を“人類の進化系”と呼んでいるのである。

「進化した人類…ね。まあ変わったことを言うわね、そのオルフェノクってのは。」

「…しかし、何故彼らの様な存在が生まれたのだろうか？」

さらに詳しい説明を求める慧音に対して巧は「さあな。」とだけ返した。

「俺にもわかんねーよ。…あいつらがどうして生まれたか、なんてな。」

——巧のその言葉に嘘は入ってなかった。彼自身、何故人間がオルフェノクに覚醒し始めたのか知らないのだから。それに、オルフェノクが元々は人間だということも言う気はなかった。……幻想郷にいるオルフェノクがあれだけとは思えないし、目の前の二人に余計なことは背負わせたくないからである。

「……そうか。…いや待て、あいつらと言ったな？それはつまり…」
「…組織を作ってる線が高いだろうな。」

——そうだ、あのオルフェノクはファイズの事を知っているようだったし、スマートブレインの様な組織を作っているオルフェノク達がいるのだろう。

人間を滅ぼさんとする、オルフェノク達が。

「それはまた面倒ね……じゃあ次、あんたが変身したあの姿、何？」
今度は霊夢が質問を投げかけた。どうやらファイズに関してであるようだ。

「あれは……ファイズだ。」

「「ファイズ？」」

霊夢と慧音がそろって同じ疑問の声を挙げ、巧はそれに「ああ。」

と答えた。

「俺は元の世界でこのベルトでファイズになって、オルフェノクと戦ってきたんだ。」

「…薄々感じてはいたが、元の世界、と言うことはオルフェノクは元々外の世界にいたのだな。」

「で、ファイズってのはオルフェノク用の退治道具ってところね？」

「…ま、そんなとこだ。」

慧音と霊夢の問いと解釈に巧は肯定の意を返した。

「じゃあ次ね。そのオルフェノクに弾幕があまり効かなかったのはどういうことなのかしら？」

「ふむ…：単なる威力不足とも考えられるが…：巧はどう思う？」

次に論点に当たったのは、弾幕の効果が薄かったことについてだった。

霊夢と慧音は単純に弾幕の威力不足かもしれないという考えを上げ、巧に意見を求めたところ、次の様な返事が返ってきた。

「さあな、多分そうなんじゃねえのか。」

元の世界でも、オルフェノクに対して銃などといった普通の武器は怯むくらいのダメージは与えても、決定打には到底至らなかったのだ。おそらく、この世界の弾幕においても同じことが言えるのかもしれないが、現在巧にはそれを知る術は無い。

「さあなって…：はつきりしないわね…」

「仕方ねえだろ、知らねえんだからよ。」

もつとも、普段から物事を語るのが苦手な巧はこのような言い方ができないのだが。

「…ま、技にもよるけどスペルカードを使えば対抗できるかもしれないわね。やってみなきゃわかんないけど。」

「…さつきから思ってたんだけどよ。そのスペルカードってそんなに強力なのか？」

巧の疑問は当然のもので、彼は幻想郷に来てから一度もスペルカードを使ったところを見たことが無いのだ。

「ああ、弾幕ごっこ——スペルカードルールについては話したよな？」

「確か、人間と妖怪が命を奪わずに対等に戦うための決闘法。だってか。」

——巧が聞いた話によると弾幕ごっこでは相手のスペルカードを全部破った方が勝ち、とのことである。

「そうだ、その際に自分のスペルカード名を宣言することで強力な弾幕を発することができるんだ。」

「ま、スペルカードってのは必殺技みたいなもんと考えてくれていいわ。中にはでっかいレーザー出す奴もいるし。」

「——なるほどな。」

——確かに、それほどの威力を誇る弾幕ならオルフェノクの強靱な肉体にも有効かもしれない。しかし、でかいレーザーを出すなんてどんな妖怪だよ。

巧は知らないが、そのレーザーを出す者は人間だったりする。

「……ふう。」

あれから話し合った結果、慧音は明日にでも里の者にオルフェノクの事を知らせ、霊夢は知り合いと対策も兼ねて話し合っておく、ということ解散になった。

そして今、巧は宛がわれた部屋で一人寝そべっていた。

（……しかし、この世界にまでオルフェノクがいるなんてな。）
どうやら自分とオルフェノクは切っても切れない縁があるらしい――

そう思いながら巧はこれからの事を考えていく。――それは組織を作っているであろうオルフェノク達からこの世界の住人を守ることである。

幻想郷の在り方については既に聞いている。

――妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を退治する――

それを聞いた時、人間とオルフェノクの共存を望んでいる巧としては、人間と妖怪も対立する運命にあるのかと煮え切らない気持ちになった。

妖怪は人間を襲うことで己の意義を保たなければ存在できないため、オルフェノクと違い、人間を襲わなければ生きていけないということも分かっている。

――理解は出来るのだが、納得がいかなかった。

もつとも、ここ数年では人間と妖怪たちの距離も縮まっており、『人間を襲う』という概念も擬似的なものになっているらしい。――言葉も喋れない様な知能の低い妖怪を除けば。

それ以前にこの世界の住人でない巧はこの問題に自分が入るのは筋違いだと考えていたし、この世界の問題はこの世界の住人達が解決していくべきだとも考えていた。

しかし相手がオルフェノク――それも元の世界の者だとすれば話は別だ。

先程戦ったオルフェノクはファイズの事を知っていた。ということ

はバックにはスマートブレインの様な組織がいるはずだ。そしてその組織を引っ張っているのは十中八九元の世界にいたオルフェノクなのだろう。

あのオルフェノクだって組織の一員として一緒に幻想郷に来たのかもしれないし、もしかしたら元々は幻想郷に迷い込んだ人間だった——と言ったこともあり得る。

そして、このまま奴らを放っておけばどういう事態に陥るのか巧はよく知っている。

それは——自分のいた世界の二の舞。

元々オルフェノクとは何の関係もないこの世界が、あの悲惨な世界の様になってしまうのは巧にはどうしても我慢ならなかった。

だから元の世界に戻る前に、巧は幻想郷でオルフェノク達と戦うことを決めていた。オルフェノクの脅威から、無関係なこの世界の住人を守るため。

幻想郷の住人たちには戦う力があるため、オルフェノクと戦うことも出来るだろう。だが巧にとって戦える戦えないは問題ではない。ただそこに暮らしている“ヒト”を、人間も妖怪も——オルフェノクでも関係なく守りたい。その数だけあるであろう“夢”を守りたい。

巧にとって、最も大事なことはそれだった。

「……救世主つてのはガラじゃねえけど……」
そうして巧は拳を握る。自らの決意を込めて。

「ま、やれるだけやってみつか。」
この世界を守るといふ決意を——

「聞きましたか？… ファイズが現れたそうですよ。」

「…… そうらしいわね。」

パンサーオルフェノクが所属していた組織のアジト。その一室で眼鏡の男性と女性が話し合っていた。—— ファイズが現れたことについて。

彼らが先日打ち上げたモノで部下が幻想郷を監視していたところ、ファイズがパンサーオルフェノクを倒したところを目撃したのである。

「どうします？我々の計画の邪魔になるのは明らかでしょうし。」

「そうね、勿論——」

「倒すにきまつてるじゃない。」

女性の言葉を遮り、繋げるように会話に入ってきたのは少年だった。

「き、北崎さん……」

少年——北崎は男性の若干怯えるような視線を受け、純粹そうな笑みを浮かべて女性に問いかけた。

「ねえ影山さん、ぼくが行ってもいい？」

「ダメよ、北崎君はもう少し我慢してなさい。」

女性——影山冴子はそんな北崎の要望を取り下げた。

「…… ちえ、つまんないなあ——」

—— ガッ！！

拗ねた表情を浮かべながらそう言った北崎は突然男性の左腕を握りしめた。

「ひっ、ヒイッ！」

すると男性は怯えながら必死に北崎の腕を取り払った。

「な、何をするんですか北崎さん！」

「やだなあ、琢磨くん。ぼくはただ手を握っただけじゃない。なんでそんなに怯えてるの？」

「そ…それは……」

男性——琢磨逸郎は右手で握られた部分を擦りながら北崎に異を唱えた。

北崎は触れたモノを全て灰にしてしまう能力を持っている。琢磨はそんな彼の力に——、特に触れられることに非常に恐怖しており、実際、北崎に握られた部分は若干灰化してしまっていた。

だが北崎はそんな琢磨の心境を知ってか知らずか楽しそうな笑みを浮かべ、彼に問いかけるような言葉を投げかけた。

「それくらいにしてあげなさい、北崎君。」

「——はあい。」

——もつとも、話が進まなくなることを懸念した影山によって、北崎の『琢磨くんいじり』は中止されることになったのだが。

「さて、ファイズの事だけど…暫くは放っておきましょう。」

「な、何故です！？奴なら必ず我々の邪魔を——！」

そして影山の提案はファイズを放置するものであり、当然のごとく琢磨がそれに異議を唱えたのだが——

「だからこそ、よ。……仮に刺客を出して、始末するのに失敗してみてごらんなさい。」

「……なるほど、仮にそうなってしまうえば我々の計画が向こうに筒抜けになってしまいますね。」

「へえ…結構考えているんだね。」

——そう、彼らがファイズを放置するのは『相手に情報が漏れない

様にするため』であり、ファイズの始末に失敗し、情報が漏らされて計画に支障が出れば元も子もなくなるからである。

「——わかりました。では、私はこれで。」

「——じゃあね、ふたりとも。」

話が纏まったところで、琢磨と北崎はそう言って部屋から退室していき、残ったのは影山一人になった。

「……私たちの邪魔は絶対にさせない——。」

そう言っただけで影山は近くにあった写真を手に取り、燃やした。その写真に写っていたのは——ファイズ。

「覚えておきなさい。ファイズ…乾巧…！」

そうして、影山は憎しみをこめた表情で燃えてゆく写真を見つめていた——。

第3話 開幕（後書き）

えー……コラッタです…

いくら亀更新と言っている、何の音沙汰もなく待たせてしまうのはマズイなーとは思っています。…改善しようとしn（ピチューン

現在は学校のほうでもやるが多く、不定期&亀更新ぷりが多くなると思っています。

それでもこの自己満足小説に付き合ってくださいる方が居ましたら今後ともよろしく願います。

では今回はこの辺で、4話をお楽しみに。ノシ

第4話 風祝と御阿礼の子

「およ？なんだこれ？」

——妖怪の山。

その名の通り様々な妖怪や八百万の神が住まう山。

その山の中腹にて、ツインテールにした水のような青い髪とリュックサックを背負った少女がいた。

彼女の名は“河城にとり”、この山で暮らす妖怪“河童”の一人である。

「うーん……？」

そう唸るにとりの前にあるのは——バラバラになった、何かの機械の残骸だった。

——河童は幻想郷において最も高い技術力を持った妖怪であり、その技術は実用クラスの光学迷彩を作ってしまう程である。——もっとも、光学迷彩は某巫女の“勘”の前に見破られてしまったのだが。

そうして暫く残骸を睨みつけていた時

「……もしかして、これってバイク？」

たしかに、その部品の形状から、目の前のモノはバイクの残骸のように見える。

——河童の技術力ならバイクを作るのは容易い。だが普段空を飛べる彼らにとってバイクはこれっぽっちも必要が無いのだ。

にとりも香霖堂にあった外の雑誌からバイクを作った事がある。：

…勿論、まともに乗ったことはないが。

「……おお……！」

すると、にとりの目が次第に輝き始めた。

何故なら——目の前のバイクの残骸の中には、彼女も見ることが無いような部品がちらほら見えるのだ。

——解析したい、修理したい、改造したい、バラしたい、解析したい——！！

……どうやら、この元バイクを目にしたことにより、彼女の河童の——技術者の血が騒ぎ始めたようである。

こうなった彼女の取る手段は一つしかない。

（さあて、さっそく家に運ばないと！）

そう、彼女はこのバイクを解析、修復、あわよくば改造する気でいた。——この時はかなりテンションが上がっていて我を忘れていたと、後の彼女は語る。

「ふっふーん、どんなのになるのか楽しみだな」

そうして彼女は鼻歌を歌いながら、バイクの残骸を運んで家路についた。

——これは、乾巧が幻想郷にやって来る約二週間前の出来事である——。

「——はいよ、毎度あり！」

「ああ」

——人里、巧は今、慧音からお使いを頼まれていた。

慧音は寺子屋の仕事で忙しく、さすがに泊めてもらっているのに何も手伝いをしないわけにもいかなかった巧がこうして夕食の買い出しに出ていた。

「じゃ、先生によろしくな。ご贔屓につて」

「ああ、わかったわかった」

店主に別れを告げ、巧は帰路についた。

（——あれからオルフェノクは見えてない、か…）
この地で初めてオルフェノクと対峙してから一週間、あれから巧は暇さえあれば里の周囲を見回ってオルフェノクの襲撃に備えていた。が、現時点ではオルフェノクを見かけることはなく、また里の人間に聞いてもオルフェノクを見たり襲われたりしたということもないようである。

（——だからって、気を抜くわけにはいけねえ。いつ誰が襲われるかわかんねえんだ）
しかし気を抜くという選択肢はなく、巧はもう一度気を引き締める。単に自分の知らないところで誰かが襲われている可能性も十分あり得るのだ。

——油断した結果、何かあったのでは意味が無いのだから。

そうして考え事に没頭していた時――、

「うおっ！？」

「きゃっ！？」

角からやって来た少女にぶつかってしまい、使いの品を落としてしまった。

「ああっ！すいません！ちょっと急いでて…！」

「いや、俺の方こそ悪かった――ほらよ」

「す、すいません…！」

巧は自分の物と少女の物を拾いながら少女の方を見てみた。

歳は十代半ばほどだろうか、ぱつちりとした目に一般的に可愛いという部類に入る顔立ちをしており、紫色のおかっぱにした髪に花の飾りをつけ、身につけている服は袖の部分だけ黄色という少し変わった着物だった。

「あ、有り難うございました！では急いでいるので、これで！」
落ちている物をあらかた拾い終えると少女は急いだ様子で里の通りを走り抜けて行ってしまった。

その光景を見ながら巧はため息をついた。

（…考えすぎて周りを見落とすなんて、何やってんだ、俺。）
そう思いながら帰路につく巧だった。

「護衛？」

その日の晩、夕食時にある話を切り出した慧音に巧はそう返した。

「そうだ、私の知り合いが明後日妖怪の山に出かけることになっていて、山の天狗たちには話をつけてあるが道中で何があるかわからんからな。私は別件で里を離れることはできないからもしよければ頼まれてほしいのだが…」

慧音の話を聞いた巧はなるほどな、と思った。

万が一オルフェノクに襲われるような事があってもファイズになれば立ち向かうことができるだろうし、妖怪に襲われてもファイズの力ならば対抗できると踏んだのだろう。

しかし――

「護衛するのはいいけどよ、俺は弾幕なんて出せねえぞ？」

幻想郷での戦闘は基本的に弾幕ごっこで行うという。それなのに弾幕の出せない自分では役不足なのではないか――。そう思った巧だった。

「ああ、その点は心配ない。山の方からもう一人、道案内を兼ねた巫女も護衛としてやってくるからな。弾幕の方は彼女に任せると良い」

どうやら護衛は自分の他にも居るようだが、彼女の口ぶりからしてどうやら霊夢ではないらしい。

「…そっか、——でもよ…」

「里の方は大丈夫なのか？と言いたいのだろう？」

自分が言おうとした言葉を先に言われほんの少し啞然とした表情になる巧。そんな巧を見つめて慧音は自信を秘めて言葉をつなげる。

「私は昔から里の守護をしているから里を守ることにについては心配ない。——それに私自身、もうオルフェノクに遅れを取るつもりはない」

静かに、かつ力強い目でそう語った。

「…わかった。それで？俺が護衛すんのはどんな奴なんだ？」

そんな慧音を見て、巧は彼女を信じ、依頼を受けることに決めた。

「ありがとう。お前に護衛してもらおう彼女の名は——」

そうして慧音は紡ぎだす。『彼女』の名を——

「——稗田阿求。幻想郷の記録係だ」

「…さて、待ち合わせはこの筈だけだな…」

二日後、巧は護衛する人物『稗田阿求』との待ち合わせ場所に来ていた。

（…ファイズギアは持ってきたが、使うことが無けりゃいいんだけどな…）

何事もない事を祈りつつ、ファイズギアが入った袋を眺めていた時

「あ、貴方は…」

「？…お。お前は…」

巧に話しかけてきたのは、先日ぶつかった少女だった。

「奇遇ですね。またお会いするなんて」

「まあな」

言葉を繋げようとしないうちに気まづくなったのか少女は困ったような笑みを浮かべ、次第にきよろきよろと視線を動かし始めた。

「誰か待ってんのか？」

「あ、はい…山に行くために慧音さんが言っていた乾巧という方を待っているのですが…」

——慧音？それに、乾巧と言ったか？

少女の発した単語に反応した巧はもしやと思い、あることを尋ねた。

「なあ、もしかしてアンタが稗田阿求か？」

「はい、そうですが…。もしかして貴方が…？」

「ああ、俺が乾巧だ。アンタの護衛をすることになった…らしい」

その言葉を聞いた時、少女——阿球は驚いた表情から納得したような表情に変わった。

「そうですか、貴方が…。稗田阿求です、本日はよろしくお願いいたします」

ぺこりと、穏やかな表情を浮かべてお辞儀をした。

「おう、よろしくな。…それで、護衛がもう一人来るって聞いてたんだが——」

それに対して巧がぶつきらぼうながらも言葉をつなげようとした時「すみません！遅くなりましたあ！」

一人の少女が慌てた様子で空から降りてきた。

霊夢と同じ様になぜか腋の無い、青を基調にしたような巫女装束をまとい、背中まで伸びた緑色の髪に蛙と蛇の髪飾りをつけた、霊夢と同じくらいの歳の少女だった。

「早苗さん、お久しぶりです。時間には遅れてないから大丈夫です

よ」

阿球が少女——早苗にそう呼び掛けた。

「すいません阿求さん……ええと、そちらの方は？」

巧を視界に入れた早苗がそう尋ねて、それに答えたのは阿求だった。
「こちらの方は慧音さんの紹介で今回同行してもらう乾巧さん。乾さん、こちらの方が道案内と一緒に護衛していただく東風谷早苗さんです」

「そうですか……はじめまして乾さん。私が守矢神社の風祝、東風谷早苗です」

「……乾巧だ……」

丁寧な自己紹介をする早苗に対し、無愛想な自己紹介をする巧に対して二人は「ははは……」と苦笑いしていた。

「……それでは皆そろったようですし、出発しましょうか」
そうして、三人は人里を後にした。

「……聞いたか？今ファイズを狙うのは禁止されてるんだつてよ」

「ああ、……あの人たちは一体何を考えてるんだか……」

どこかに存在している建造物、その通路にてスーツに身を包んだ男性が二人。歩きながら会話していた。

「ファイズなんて邪魔でしかないんだからさっさと始末しまえばいいのに……」

「それがよ……何でも向こうに情報が漏れないようにするためって話だぞ」

「はあ！？何だよそれ、俺たちの事信用してねえってことかよ！」

情報が漏れることを防ぐ——それはつまり、倒しに行ってもやられることを前提に考えていることである。

その事を聞いて、自分たちの力を過信しているこの二人はおとなしく従う様な性分ではなかった。

「ああ、全くだ。…だからどうだ？ここは一つ…」

「…いいな、俺たちの力をあの方たちに見せつけてやるうぜ」

歪んだ笑みを浮かべながら、その二人の男性は通路の闇に消えていった。

「…じゃあ、お前は元々外の世界から幻想郷にやって来たって言うのか？」

「ええ、外では信仰が得られなくなったので幻想郷の妖怪たちから信仰を得るために、幻想郷へやって来たんです」

妖怪の山の麓付近、人里を出発して暫くたった巧、早苗、阿求の三人が歩いていた。

この中で空を飛べるのは早苗一人であり、空を飛べない巧と阿求を身体能力は普通の少女レベルである早苗が二人を抱えて飛ぶなど出来るわけもなく、こうして歩いて向かっているのであった。

「けどよ、幾らこっちに来るしかなかったからって、向こうに未練はなかったのかよ？…家族とかも、いんだろ」

早苗の話を聞いた巧が思ったことは『本当に良かったのか？』ということ。

早苗の話では、彼女が仕えている神が外の世界で信仰が得られなくなり、存在を保つために神の存在が一般化している幻想郷にて信仰を得るため、この世界に移ってきたとのことである。

——だが、人間というものは本来、自分が育ってきた土地、家族、

友、財産といったものを簡単には捨てきれない生き物なのだ。――
それへの思いが強ければ、尚更。

目の前の少女はそんな『つながり』を本当に捨てる覚悟でこの世界に來たのか――巧はそれが気がかりだった。

「…確かに、神奈子さまから話を聞いた時には、すごく悩みました」
巧の言葉を聞いた早苗は足を止め、ポツリポツリと静かに口を開いていた。

「もちろん、今だって時々ですけど、向こうが恋しくなる時もあります」

いつの間にか、巧と阿求も、足を止めて早苗の話を聞いていた。

「でも私は神奈子さまの風祝ですし、何より――お二人が好きだから」

そう言う早苗の脳裏に浮かぶのは、軍神にふさわしき威厳と気さくな雰囲気を持つ神と、普段は子どものようなだけ深い愛情を与えてくれる神。

二人とも、彼女にとってかけがえない存在である。

「こつちに来てから楽しい事がたくさんありましたし。…だから、後悔はしてません」

「…なるほどな」

話を聞き終えた巧は歩き出し、早苗にすれ違った時こう言った。

「ま、あんまり溜め込みすぎんなよ……手貸す位は、やってやる」
最期の方を小声で呟き、巧は歩を進め始めた。

「…慧音さんから聞いてはいましたけど…」

「え？」

早苗がふと横を見ると、そこには楽しそうな笑みを浮かべた阿求がいた。

「乾さん、普段は口が悪いけど本当は優しい人なのかなって」

「…そうですね」

阿求の話を聞き、彼女につられるように早苗も微笑みを浮かべて巧を見ていた。

「おいお前ら！早く来ねえと置いてくぞ！」

二人がついてこないことに気付いた巧がその声を張り上げる。

「ふふっ、叱られちゃいましたね」

「じゃあ行きましょうか、阿求さん」

そう言っただけで彼女たちは巧の後を追いかけて行った――。

「秘術『グレイソーマタージ』！」

「ひええええええっ！」

スペルカードを発動し、早苗から発せられる普段よりも質も量も優れた弾幕が、猿のような妖怪の身体を撃ち抜き、妖怪は情けない悲鳴を上げながら逃げて行った。

「…スペルカード使うとこ見るのは始めてだけど、ホントに派手だな」

「ええ、弾幕ごっこにおけるスペルカードは普段よりも美しさと避けづらさを求められるものなんですよ」

「…あんなんどうやって避けるってんだよ」

あのような高密度の弾幕を避ける術など、今は変身できないファイズ・アクセルフォームくらいしかないだろう。巧はそう思っていた。

「皆さんは弾幕の僅かな隙間を通り抜けるなどをして避けてますよ。特に霊夢さんや魔理沙さんの腕は幻想郷でもトップクラスですから」

「そうなのか？」

魔理沙という人物は知らないが、霊夢が弾幕ごっこにおいてかなり

の実力者であることを知らなかった巧は少しか驚いていた。もっとも、巧は霊夢の闘う姿を碌に見たことがないから無理もないのだが。

「お二人とも、お待たせしました」

話してるうちに、妖怪退治を終えた早苗が二人の下に戻ってきた。

……若干、楽しそうな表情であつたが。

「……なんか、楽しそうだな……」

「ええ！最近は妖怪退治するのが楽しくつて。例えばですね——」

よほど楽しいのか、そう語る早苗の眼は活き活きと輝いていて、若干引き気味になった二人に向けて熱弁をし始めた。

（……別に、相手の命を奪う必要はないんだもんな）

早苗の熱弁を尻目にし、巧は想いを馳せていた。

幻想郷での闘いは命の奪い合いを求めてはいない。ただ上下を決めるために戦う。そこに種族の対立など、ない。

殺し殺されがいつまでも続いてきた自分の闘いとは、到底かけ離れたものである。……だからこそ、早苗も人間とオルフェノクが対立する荒みに荒みきった外の世界から幻想郷にやって来たのだろう。

だからだろうか、楽しいと思うことができ、皆と笑ってられる早苗が——いや、幻想郷の者たちが、顔には出さないが微笑ましく思え、……同時に、少しだけ羨ましくもあつた。

「——乾さん。聞いてますか？」

その阿求の声で、巧の意識は現実へ引き戻された。

どうやらいつの間にか早苗の話は終わっていて、今からまた歩き出そうといったようだった。

「あ、ああ。悪い、なんだ？」

「そろそろ山の麓なので、そこでお昼にしましうって言ったんですよ」

「そこなら天狗の縄張りに近いから、大抵の妖怪はあまり近寄らないですよ」

たしかに、太陽の位置からして、そろそろ昼時といった時間になっていた。

「そうか、——やっと休めんだな」

歩き続けて少し疲れたのか、巧がやれやれといった感じで歩き始めたその瞬間——

——ぎゃあああああつ！——
絹を裂くような悲鳴があたりに響いた。

「っ、何だ！？」

「悲鳴…でしょうか…？」

——ガサガサッ

茂みから音が聞こえ、振り向いたところで現れたのは——

「あれは…さっきの？」

先程、早苗が退治した妖怪だった。

しかし明らかに様子がおかしい。足元はふらふらとしており、その表情は恐怖で彩られており、先程までの好戦的な様子は一切感じられなかった。

「た…た…すけ…て…」

猿妖怪が三人に向かって助けを求めるように手を伸ばすも——

「な…！」

「え…？」

「そ、そんな…！」

——その手が、身体が、灰となって崩れ落ち、さっきまで猿妖怪だったモノは灰の山と化していた。

それは阿求や早苗にとっては異常で、巧にとっては見慣れてしまっ

た光景だった。

「よ、妖怪が…灰に？」

「こんなこと…一体何が…」

突然の出来事にうろたえる阿求と早苗の声を尻目に、巧は思考を巡らせていた。

人間を——いや、妖怪すらも灰にしてしまふ。そんな芸当ができる存在など、巧の中では一つしかない。それは——オルフェノク。

「…ちっ、やはりあんな雑魚では覚醒できなかったか」

妖怪の後を追うように現れたのは、サラリーマンの風貌をした男性だった。その言葉から、先程の妖怪が灰になったのはこの男の仕業であることは三人には容易に理解できた。

「さっきのは…貴方の仕業なんですか！？」

「こんな事、幻想郷のルールに反しています！」

そうとわかった途端、早苗と阿求が男を非難する。

——幻想郷では、妖怪が生きるために人間を食らう事や存在を保つために人間を襲うことがあっても、無意味に人間を——妖怪も殺すことはあつてはならない。そのため、そのルールを堂々と破った男に対して憤慨するのは無理もなかった。

「守矢の巫女に、記録係…か。ふん、決まっているだろう。オルフェノクでないモノなどに生きる価値などないからな」

しかし、目の前の男はそんな事知った事かと言いたげな表情で、人間も妖怪も存在する価値は無いと言い放ったのだ。

このような事、幻想郷に住む者は勿論、外の人間だって滅多に言う事はないだろう。

「…貴様がファイズだな？」

「…だったらどうした」

早苗と阿求を一瞥した男は、腰にファイズドライバーを巻きつけて

こちらを睨んでくる巧にそう言い、返事が返るとニイと歪んだ笑みを浮かべた。

「勿論死んでもらう。ついでに——」

そう言いながら男の身体に紋様が浮かび上がり、肉体が盛り上がって灰色に変色していった。

「——そのベルトもいただこうか」

そして、男の姿は鹿の特性を持つ灰色の異形、ディアーオルフェノクに変化していた。

「人間が…妖怪に!？」

「まさか…あれがオルフェノク…？」

「…やっぱりな…!」

オルフェノクという存在を初めてその目にした阿求と早苗の二人を庇うように巧が一步前に踏み出した。

Standing by

「乾さん、何を…？」

「お前らは下がってる——変身!」

Complete

二人に下がるように告げた巧はすぐさまファイズフォンをドライバに装着し、ファイズへと変身した。

「乾さんが…変わった!？」

「!…これが、“ファイズ”…!」

ファイズへの変身を見て驚いた二人を視界の片隅に置き、ファイズはディアーオルフェノクと対峙する。

「さあて、…悪いが死んでもらおうかつ!」

「ふん、言ってるっ!」

言い終わるや否や、ファイズとディアーオルフェノクが互いの敵を倒すためぶつかり合った——。

第4話 風祝と御阿礼の子（後書き）

どうも、コラッタです。今までとんでもない間違いを侵してました…

博麗霊夢の”博麗”ですが、先日まで”博霊”と勘違いしてました…
・・・穴があつたら入りてええ…orz

今まで投稿した分も直しておいたのでよければそちらもご覧ください。
い。

今回はこの辺で、それでは。ノシ

第5話 蘇りし鉄騎（前書き）

当作品を見てくださる方々。お待たせしましたコラッタです。
日本対カメルーンを見ながらの更新となります。

今回はいつもより少し長めに仕上がりました。
それでは蘇りし鉄騎（後編）、どうぞ。

第5話 蘇りし鉄騎

「…できた…！」

妖怪の山、にとりの自宅。

気持ちのよさそうな汗を流し、満足した表情を浮かべるにとりの目の前には数週間前まではただの残骸だったバイクが見事にその本来の形を取り戻していた。

「いや」見た事無い部品が多かったから時間かかるとは思ってたけど、まさかここまでとは…」

そう言いながらにとりはここ数週間の出来事に思いを馳せる。

最初は見た事無い部品に少し手間どうだけで、すぐに完成すると思っていた。——しかしいざ組み立てると部品の構造や組み合わせに思った以上に手間がかかり、完成するのにここまでかかってしまったのである。

「さーで、まずは試運転、ひいては改造を…」

これからのことに思いを馳せながらにやけた笑みを浮かべ、手をわきわきさせながらバイクへと近づいていくにとり。

その瞬間——

B a t t l e m o d e

「へ？」

突如バイクから電子音声が上がリ、呆氣にとられたような声を上げるにとりを片隅にバイクはその形を本来の二輪車の姿から、人型のロボットに変形していった。

「え、え、ええ！？」

余りの出来事に驚きの声を上げるにとりを見失うかのように、そのバイク——いや、バイクだったモノは背部のスラスタを稼働さ

せ、飛び立っていつてしまった。

「……はっ。ちょ、ちょっと待って！わたしの知恵と汗と涙の結晶
く！」

我に返ったにとりはそれを自分の手に取り戻すべく、慌てて追いかけて行った。

「——りやあっ！」

「うおおっ！」

現在、ファイズとディアーオルフェノクは互いに引けを取らない戦闘を繰り広げていた。

このディアーオルフェノクは以前戦ったパンサーオルフェノクと違い、それなりの戦闘経験と実力を備えていた。

ディアーオルフェノクがパンチを繰り出せばファイズはそれを掴みとり、近くの木に向かって投げ飛ばす。ファイズがキックを繰り出せば、それを避けたディアーオルフェノクがファイズに向かってラリアットを繰り出す。

そのような状況が続き、数年にもわたる戦闘経験を持つファイズが有利ではあるものの、なかなか決定打を得られずにいた。

「くそっ……！しぶてえ野郎だなっ！」

「貴様なんぞに殺されるつもりは無いんでなあっ！」

そう言いながらファイズとディアーオルフェノクは互いに駆けだしに行く。

先に仕掛けたのはファイズだった。動作を最小限に抑えたパンチを繰り出したのだが、ディアーオルフェノクは野生の勘とも言つべき

反射神経で寸でのところで回避、隙ができたファイズにタツクルを仕掛けていった。

「っ、なめんじゃねえっ！」

だがファイズもただ攻撃を食らうだけでは終わらず、タツクルによって自身に密着したディアーオルフェノクをがっしりと掴んで巴投げの要領で後ろに投げ飛ばし、瞬時に起き上がって次々と攻撃を仕掛けていった。

「ぐおおおっ！」

最後に腹の部分を蹴り飛ばし、木に当たったところで勢いが止まったディアーオルフェノクに止めを刺すべく、ミッシェンメモリーをファイズショットに装填した。

R e a d y

展開したファイズショットを左手に持ち、e n t e r キーを押してフォトンブラッドを送り出す。

E x c e e d c h a r g e

走り抜けながら左腕にフォトンブラッドが送られていき、ディアーオルフェノクの目前まで来た頃にはすっかりエネルギーが詰まった左拳を振り上げた。

しかし――

「――ぐあああっ！」

――その拳が振り下ろされることは無く、反撃を受けたファイズは後方へたたらを踏んでいた。

ファイズが己の胸部を見てみるとそこには斬られたような傷ができていた。

そしてディアーオルフェノクの方を見やると――

「――危ない危ない。もう少しでやられるところだったぜ」

その手には先程まで無かった――鹿の角を模したような歪な剣が握られていた。

さっきはこの剣で、拳を振り上げた自分を咄嗟に斬りつけたのだらう。

「…武器持ちかよ。めんどくせえな」

オルフェノクの中には自分の武器を自在に呼び出せる者がおり、中にはその武器を使う事で人間をオルフェノクにする“使徒再生”を行うオルフェノクもいる。

「――こっちは今手元に剣も無いつてのによ！」

ミッションメモリーを元に戻し、手首を軽く数回スナップしたファイズは再びディアーオルフェノクへと駆けだしていった。

「…乾さん…」

「……」

ファイズとディアーオルフェノクの闘いを眺めていた早苗と阿求は困惑していた。

現在の幻想郷での戦闘は命の奪い合いが無い弾幕ごっこが主流となっており、肉弾戦の上、命を奪いあう戦闘など滅多に起こる事は無かった。

しかし今目の前で繰り広げられてる闘いはそんな幻想郷の現状など忘れたかのように、弾幕も、美しさのかけらもなく、ただ互いを打ち倒すだけの凄惨な闘いだった。

早苗も、九代目として生まれてからの阿求も、このような闘いを目にすることは無く、どうすればいいのか困惑していた。

「阿求さん！ここに隠れていてください！」

——やがて、ファイズが押され始めたのを目にした早苗は何かを決意したかのように、そう言い放った。

「早苗さん、何を……!?」

「乾さんを助けに行きます。…妖怪退治は私の仕事、乾さんだけにまかせつきりにするわけにはいきません！」

阿求の問いに答えた早苗はお抜い棒を構え、闘いの場に飛び込んで行った。

「氣をつけてください！慧音さんの話ではアレに——オルフェノクに普通の弾幕では効果が薄いようです！」

阿求のその言葉を背中受けて止めた早苗は「わかりました！」と言い、速度を上げて飛んでいった。

「早苗さん…乾さん…どうかご無事で…」

その姿を見送った阿求は二人の無事を祈るかのように、目を閉じてその場にしゃがみこんだ。

——その背後に忍び寄る異形の影に気付かないまま。

(…くそっ、やりづれえ…！)

ディアーオルフェノクが剣を使い始めてから、それまで有利だったファイズは劣勢になっていた。

素手の自分と剣を使うディアーオルフェノク、どちらが間合いにお

いて有利になるのかと言うのなら、ディアーオルフェノクが有利である事は火を見るよりも明らかだろう。

「はっはあ！どうしたファイズ。お前はこんなモンかあ？」

「ちいっ——、なめんな！」

挑発とも取れる言葉を受けたファイズはディアーオルフェノクにパンチを繰り出していくものの、ディアーオルフェノクは剣のその枝分かれしたような刃の間でファイズの拳を絡め取り、弾いたところでファイズ目掛けて斬りつけていった。

「ぐあっ！——くそっ……！」

咄嗟の判断で後退することにより、相手の斬撃はファイズのフルメタルリングを斬りつけた程度で済んだが、後一瞬遅かったら肩から大きく斬り裂かれていただろう。

（……せめて、“アイツ”が居たら……！）

ファイズ——巧は今、『剣が欲しい』と思っていた。

しかしその剣を抜くのに必要不可欠な存在——『彼』は5年前に破壊されてしまった。だから、使えない。

そんな現状がファイズを煮え切らせずにいた。

そんな思いに意識がそれた時——

「よそ見してる場合かあ？」

目前まで迫ったディアーオルフェノクが剣を振りかぶっていた。

——しまった！

そう思って避けようとするものの、背後には木があって後退できず、なにより反応が遅れたことにより防御の体勢が間に合わずにいた。

（……やられる！）

ファイズがそう思った時——

「たあっ！」

「ぐおおおっ!？」

背中に弾幕が当たった事で怯んだディアーオルフェノクの腕を瞬時につかみ取り、後ろにあった木に思いっきり叩きつけた。
そしてファイズは弾幕を放った少女——早苗に近づいていった。

「おい、どう言うつもりだ。なんでこっちに来た!」

「乾さんだけじゃ危ないから助けるために決まってるじゃないですか!」

「ざけんな! 危ないってのはこっちのセリフだ!」

「危険なのは百も承知です! でも乾さん一人に闘わせて黙って見てるって言っんですか!？」

ファイズの言葉に険しい剣幕で答える早苗。

ファイズ——巧は目の前の少女に自分と同じ様な闘いをさせたくなかった。だから二人には下がるように言い、自分一人でオルフェノクを倒す気でいた。

——殺しの罪を、背負わせたくないから。

しかし早苗は来た。勿論巧の考えを知らない事もあるが、何よりも助けたいと思ったからだ。——他ならぬ、巧を。

「それに、妖怪退治は私の役目ですからね。ほっとくわけにもいきませんよ」

そうして早苗は——笑った。己を奮い立たせるために。

ディアーオルフェノクは叩きつけられたことによるダメージはあっても、弾幕によるダメージは殆ど見られなかった。

弾幕の効果は薄い。だから己を奮い立たせる。相手の気迫に押されないように。

「ぐっ……。この女め……!」

剣を手にしたディアーオルフェノクが立ち上がり、二人を睨みつけ

てくる。それに応えるように早苗はお祓い棒を構え、ファイズはやる気の無さそうな姿勢で構えた。

「ホントに余り効いてませんね…弾幕。厄介です」

「だったら下がってろよ」

「お断りします。言っただじゃないですか。…乾さんを助けたいって、そう語る早苗はてこでも動かない様な強い眼差しをしていた。

「ま、流石に接近戦はしませんけどね、援護に回らせてもらいます」
そんな早苗を見つめたファイズは数秒間黙り、呆れたようなため息を吐きながら口を開いた。

「…わかった、無理だと思ったらすぐ下がれよ。…あと…」
「何ですか？」

早苗がそう返すとファイズは表情こそ読み取れないが、照れくさそうに口を開いた。

「…さつきはありがとな。助かった」

そう言うファイズを見て早苗は思わず笑ってしまう。——奮い立たせるためでなく、心から。

「…ふふ、どういたしましてっ！」

そして二人はディアーオルフェノクへ駆けだしていった。

最初に仕掛けたのはファイズだった。

体勢を整えたディアーオルフェノクにパンチを繰り出していったものの、その拳は剣の腹の部分で止められていた。

「ふん、馬鹿の一つ覚えか！」

先程と変わらない攻撃をしてきたファイズを罵り、その拳を弾こうとするディアーオルフェノク。

その姿を見たファイズは仮面の下で——笑った。

——馬鹿の一つ覚え？んなわけねえだろ——

「私を忘れてませんか？」

次の瞬間、早苗の放った弾幕がディアーオルフェノクに命中し、ファイズはそれを上手く避けていた。

「ぐああっ！」

そして、隙だらけになったディアーオルフェノクの鳩尾目掛けて思いつき蹴りを叩きこんだ。

「~~~~っ！」

鳩尾に蹴りを叩きこまれ、声にならない叫び声を上げるディアーオルフェノクに対してファイズは攻撃の手を休める事は無かった。肩を掴み、何度も何度も殴っては蹴り、殴っては蹴りを繰り返し、最後には思いつき蹴飛ばしていた。

「ぐうっ、貴様ら……！」

痛みには耐えながら立ちあがったディアーオルフェノクは——絶句した。

先程の物とは比べ物にならないほど、高密度の弾幕が目の前に迫ってきたからだ。

——秘術『一子相伝の弾幕』

早苗のスペルカードによる強力な弾幕が、ディアーオルフェノクに確実にダメージを与えていった。

「があああああっ！」

そして、弾幕が止んだ頃にはダメージを食らったディアーオルフェノクがふらつきながらも立っていた。

「今度はちゃんと効いてますね！このまま押して……」

「……後は俺がやる。下がってろ」

追いつちを掛けようとする早苗を制し、ファイズフォンに手を伸ば

していくファイズ。

その時――

『きゃああああああっ！』

「っ！？」

――隠れていた筈の阿求の悲鳴が響いた。

「おい！今の……！」

「！乾さん、アレ！」

早苗が指した先に居たのは茂みから現れた蚊の特性を持つモスキートオルフェノクと、それに捕まった阿求だった。

「い、乾……さん……。早苗……さん……！」

「けっけっけっ。お前ら、このガキを殺されなくなったら……動くなよ？」

阿求を捕えたモスキートオルフェノクが品の無い笑い声を上げながらながら阿求の顔に口から伸びた針の先端の押しつけていた。――もし二人が迂闊に動いたらあの針で刺し殺すつもりなのだろう。

「――い、いやっ……！」

その針を見て、阿求の表情に死に対する恐怖が浮かび上がる。

……それも無理は無いだろう。

幾ら転生を重ねてきたといっても、十代半ばの少女が死に対する恐怖に抗う事など出来ないのだから。――もつとも、これは生きる者としては当然の事なのだが。

そして今、自らの命を奪い取るモノの前に、阿求は確かに怯えていた。

「……くそっ……！」

「……！」

そんな光景を目にし、脅されたファイズは忌々しそうに吐き捨て、早苗はその表情を悔しそうに歪ませていた。

「けつ、随分とボロボロにされちまったそうじゃねえか。ええ？」
「…ふん、今まで隠れていた貴様に…言われたくは無いな」
剣を支えに立ちあがり、少々体力も回復したディアーオールフェノクと阿求を捕えたモスキートオールフェノクの会話から、二人の仲はそれほど良くないという事が窺える。

——しかし、ファイズと早苗にはそんな事を思う余裕はなかった。
「さあて。…まずはファイズ、貴様のベルトを渡してもらおうか」
「！……」
「そんな…！」
ディアーオールフェノクの言葉はある意味予想道理だったと言える。彼らからしてみれば、ファイズを殺すよりもファイズの力を奪い、自分の力にした方が有益なのだから。

「だ…駄目、です…乾…さん…！」
「テメエは黙ってる、糞ガキ！」
「うつつ！」

阿求がベルトを渡さないように言おうとするものの、モスキートオールフェノクに絞めつけられ、言葉を繋げる事が出来なかった。

「——っ、…わかった」
「——！乾さん…！」

そんな光景に耐えかねたファイズがそう言うと、二人のオールフェノクはニヤリとした歪んだ笑みを浮かべた。

そして、ファイズの手がベルトに差し掛かった時——

——ガガガガガガッ！

「ぐはあっ!？」

「きゃあっ!？」

——『それ』はやって来た。

「っ、阿求さん！」

最初に動いたのは早苗だった。

背後から突如攻撃を喰らったモスキートオルフェノクの手から余りの衝撃に解放された阿求に向かって早苗が全速力で飛び込み、阿求を抱えて救出する事に成功した。

「なっ、貴様——ごはあっ！」

それに気付いたモスキートオルフェノクが慌てて二人を追おうとするものの、先程彼に不意打ち——ガトリング弾を喰らわせた『それ』の拳を顔面に受けて殴り飛ばされていた。

「……まさか……！」

ファイズは目の前で起きた事が信じられなかった——正確には、この場に乱入してきた『それ』が。

『それ』はもう存在しない筈だった。

『それ』は五年前のあの日、踏みつぶされてスクラップ同然になってしまった筈なのだから。

しかし、『それ』は確かにそこに居た。ピコピコと鳴る頭部をこちらに向けて。

『それ』の名は——オートバジン。

ファイズの相棒とも言える、可変型バリアブルビーグル——！

「……お前……」

やがて、ファイズの隣に降り立ったオートバジンは表情など存在し

ないその眼部センサーをファイズにジツと向ける。

—— 使え。と言いたいのだろうか——

「ああ、わかったよ」

Ready

仮面の下で笑みを浮かべたファイズ——巧はミッションメモリーをオートバジンの左ハンドルに装填し、一気に引き抜いた。

その手に握られたのはただのハンドルなどではなく、ハンドル型エナジーブレード、『ファイズエッジ』だった。

「お前はさっきの蚊の野郎の相手と、——あいつらを守ってくれ」
そう言うファイズの視線の先には宙に浮かんだまま、こちらを見てポカンとしたような早苗と彼女に抱えられた阿求だった。……早苗の目が輝いてるように見えたのは目の錯覚だと信じたい。

主の頼みを受けたオートバジンはお安い御用だと言いたそうにピコピコと電子音声を鳴らしていた。

「よし、——行くぞっ！」

そう言いながらファイズはディアーオルフェノクの下へ、オートバジンはモスキートオルフェノクの下へと駆けだしていった——

「なっ、何なんだよおっ！こいつはあっ!？」

優勢から一気に劣勢に立たされたモスキートオルフェノクは混乱していた。

後もう少しのところでファイズの力を手に入れられると思ったところで、目の前で拳を繰り出してくるロボット——オートバジンに妨害されてしまい、そして今、オートバジンに全く歯が立たずにいた。

「ぐへえっ！いつ、痛えっ！」

オートバジンの拳を鳩尾に喰らい、ごろごろと地面を転がったモスキートオルフェノクは情けない悲鳴を上げ、悶絶していた。

鳩尾に喰らったこともあるが、何よりも拳の威力が強すぎたからだ。彼が今まで襲ってきたのは低級妖怪や外来人などといった力の弱い者ばかりで、自分よりも強い相手と碌に戦ったことが無かった。

だから――

「ひっ、ひいっ！」

追いうちを掛けるべく、ゆっくりと歩み寄って来るオートバジンに恐怖するのは無理のない事だった。

「くっ、来るなあーっ！――ごはあっ！」

恐怖に耐えられなくなり、逃げようと背を向けたモスキートオルフェノクに弾幕が当たり、その身体が痛みと共に地面にへばりついた。弾幕が発せられた場所を恐る恐る見てみると――

「……阿求さんの分のお返しです。逃がしませんよ、蚊男さん」

阿求を背に隠し、鋭い目つきでお祓い棒を向ける早苗の姿があった。

「こっ、この女………ひっ、ひいっ！」

早苗に暴言を吐こうとしたモスキートオルフェノクだが、その表情は絶望の色に染められていった。

彼が見たのは――自分に拳を振り下ろしてくるオートバジンの姿だった。

「はあっ！——だあっ！」

「ぬうつ、くそおっ！」

一方、ファイズとディアーオールフェノクの闘い。

この二人の闘いはファイズがファイズエッジを手にした事により、再びファイズが優勢に立っていた。

ディアーオールフェノクの斬撃はファイズエッジによってことごとく防がれ、もしくは弾かれていき、その度にファイズのカウンターの斬撃を喰らっていた。

いくらディアーオールフェノクが剣を使いこなしていても、ファイズの数年にも渡る戦闘によって養われた型に嵌らない剣術の前に手を出せずにいた。

——やがて、攻撃が当たらない事で頭に血が上り、ディアーオールフェノクの攻撃は大ぶりで単調な物になっていた。

「うおおおおおっ！」

かけ声とともにディアーオールフェノクがファイズに力を籠めて剣を振り下ろしていったが、ファイズは受け止めずに後ろに少しステップすることでこれを回避した。

そこからもディアーオールフェノクは剣を振り続けたが、単調な軌道のそれはファイズを捉える事は無かった。

やがて——

「——りやあっ！」

「な……！？」

一閃。

ファイズの気合が籠ったその一振りはディアーオールフェノクの剣をあらぬ方向へ弾き飛ばしていた。

余りの出来事に一瞬呆然となったディアーオールフェノクにファイズは追いつちを掛けていく。

「ぐはあぁっ！」

ファイズエッジの斬撃をともに食らったディアーオールフェノクは体勢を整えられずに転がっていった。

そして——今度こそ止めを刺すべく、ファイズはenterキーに手を伸ばしていく。

Exceed charge

フォトンストリームを通じて、右手のファイズエッジの刀身へフォトンブラッドが送られていく。

やがて、フォトンブラッドが溜まりきると——

「やぁっ！」

地面に触れるようにファイズエッジを振り上げ、地面に触れた所から紅い斬撃波——フォトンウェーブがディアーオールフェノクに向かって走っていく。

「くっ！こんなもの……！」

それを迎えるようにディアーオールフェノクは身構えた。恐らく受け止めきって防ぐつもりなのだろう。

しかし——それは大きな間違いだった。

「何いつ!？」

フォトンウェーブがディアーオールフェノクの身体に触れた途端、その身を斬りつけるわけでもなく、何重もの紅いリングに展開して彼の身体を拘束した。

「くっ、くそぉっ——！」

拘束を解こうとしてもがいても既に遅かった。

——彼の前には、未だ紅く輝くファイズエッジを構えて目の前に迫って来たファイズが居たのだから。

「はあっ！——だあっ！」

一閃、続けてもう一閃ファイズエッジで斬りつけていく。

——スパークルカット。

ファイズの閃光の如き斬撃はディアーオルフェノクにφの紋章を刻み、その身を灰に還していった——

「——乾さんっ！」

声を掛けられたファイズが振り返ると、こちらに飛んでくる早苗と、阿求を抱えたオートバジンの姿があった。

「無事だったか。——あの蚊の野郎は？」

「それが……後一步のところで逃げられて……」

巧の問いに答えたのは阿求だった。

逃がしてしまったのが余程悔しいのか、早苗は顔を鬱向かせていた。

「……そうか。……ま、無事で何よりだ」

そう言いながらファイズの変身を解除した巧はオートバジンの下へ歩み寄り、胸部のエンブレムを押した。

Vehicle mode

ビークルモード——バイク形態へと変形したオートバジンの車体を、巧は嬉しそうに撫でた。

（……まさか、お前も戻ってくるなんてな……）

オートバジンは五年前、エラスモテリウムオルフェノクに踏み潰されてスクラップ同然になってしまったのだから。

理由は解らなくてもオートバジンが再び自分の下に来てくれたこと。そのことが巧には、何よりも嬉しかった。

——その時、

「……す」

「す？」

早苗が何かを呟きかけ、そばに居た阿求が尋ねようとした時。

「すつつつごいです！」

目をキラキラと輝かせた早苗ががばつと顔を上げた。

その時の声が意外と大きかったので阿求は耳を塞いでいた。

「すごいです！人間サイズのロボットなんて初めて見ました！しかもバイクになれるなんて！」

そう語る早苗の目はこれまでにないくらい活き活きとしていた。どうやら顔を鬱向かせていた本当の理由はこっちのようである。

——東風谷早苗、実はロボットアニメが大好きだったりする。

「さつきはガトリング弾を出してましたけど、ロケットパンチは！？ミサイルは出せるんですか！？実はバイク以外にもいろんな形態に変形できたりするんですか！？どうなんですか乾さ——」

「落ち着け」

「あいたっ」

——ビシッ。

段々暴走しがちになって来た早苗を鎮めるために、巧は軽くチョップするという強行手段（？）に出た。

「ううう、…すいません。つい人類のロマンの結晶を目にした事で嬉しくなっちゃって…」

「なんだそりゃ」

少し落ち着いたのか、ばつが悪そうに言う早苗に巧は少し呆れてい

た。

——ロボットみたいのならとっくに見たことあんだろ。…スマートブレインの、な……

「あ、でもさっきの変な妖怪と、乾さんが変身したのって何だったんでしょうか？」

「慧音さんから聞いた話だと、先程の妖怪みたいなのは“オルフェノク”、乾さんがなったのは“ファイズ”と言っらしいですよ」

「ファイズ…ですか…。かつこいいですね！名前も見えてくれもヒーローっぽくて！」

話題を切り替えた早苗とそれに応える阿求の会話を聞いて、巧は内心苦笑いしていた。

「おい、誰がヒーローっぽいって？俺がそんなガラに——」

そう繋げようとした巧の言葉が途切れ、早苗の言葉にあった異和感に気付いた。

（…“変な妖怪”？…なんで外から来た筈なのにオルフェノクの事を知らないんだ？）

巧が居たのは五・六年前から日本どころか世界中がオルフェノクに支配された世界だった。

そのため、オルフェノクが存在を知らないという者はまずいない筈である。

その上、早苗の話では幻想郷に来たのは二年前と言うではないか。それなのにオルフェノクの事を知らない。巧が気付いた異和感というのはそれだった。

「…乾さん？」

「どうかしました？」

急に黙り込んだ巧の顔を早苗と阿求が心配そうに覗く。

「…おい、早苗」

「はい？」

「お前が幻想郷に来た時の日本はどんな状況だった？」

「どんなって…それはですね——」

早苗の話を聞きながら、巧は頭に浮かんだある仮説が嘘であってほしいと願う。

それは——自分の居た世界と“この幻想郷がある世界”は全く別の世界ではないかということ——

「はっはっはっ……ひいっ」

モスキートオルフェノクに変化していた男は走っていた。

ただがむしゃらに逃げていた。

こんな筈ではなかった。

後一步のところで自分たちは——いや、自分はファイズの力を手に入っていた筈だった。

そして“あの方たち”を超える力を手に入れた筈だった。

なのにこの現実なんだ。

自分はファイズに手を触れる事さえ無く、ロボットと小娘にいいようにあしらわれ、あまつさえ、仲間が殺されてしまった。

そして今、こうして自分はボロボロになりながらみつともなく逃げているではないか。

「ちくしょう…ちくしょう…！ちくしょ——へぶっ！」

足が石に躓いて、顔面から地面にぶつかった。

痛い。痛い。いたい。

「いてえ…いてえよお…」

顔面からぶつかった痛みと、情けなさに涙が出できた。

どうして自分がこんな目に遭うんだ。

どうして。どうして。

「…まったく、情けないですね。こんなのがオルフェノクとは思いたくありませんね」

「……………！」

聞き覚えのある声に反応して彼が顔を上げた先には、詩集を手に持つ男性——琢磨逸郎が居た。

「貴方は我々の命令を無視したばかりか、ファイズにも敗れ、こうしておめおめと生き恥を晒している」

「あわ…あわわわわ……！」

琢磨が淡々と言葉を並べていく反面、男の顔は絶望のそれへと塗り替えられていく。

「貴方にはもはや利用価値は無い。…消えてもらいます」

「わっ、うわああああーっ！」

『消す』

その言葉を聞いた途端とうとう男は発狂し、絶叫と共にモスキートオルフェノクに変化した。

そして未だ身構えない琢磨に腕を振り回しながら突進していった。

——しかし

「あ…あれ…？」

胸に違和感を感じ、身体に力が入らなくなった。

下を見ると、そこには自分の胸を貫く灰色の鞭があった。

その鞭を持つのは琢磨——センチピードオルフェノク。

「え…あ…そ…、し……たく……」

死にたくない。

その言葉を言えぬまま、モスキートオルフェノクは灰になった。

「ファイズにも勝てないのに、ラッキークローバーである僕に勝てるわけが無いでしょう」

モスキートオルフェノクだった灰を見下ろしながらそう告げた琢磨はその場から去っていった。

「——といった、平和で退屈な日本でしたけど……？」

「……………」

絶句。早苗の話を聞き終えた巧はそうするしかなかった。

そして、自分の仮説が当たったことを確信した。

やはり自分の居た世界と幻想郷があるこの世界は全く別の世界だったのだ。俗に言うパラレルワールドという奴だろう。——そして、なぜ博麗神社から帰れなかったのかも説明がつく。

答えは簡単である。霊夢ができるのは『幻想郷を包む結界の外から来た人間を、結界の外に帰すこと』なのだ。しかし巧は結界の外から来たわけではなく、そもそも住む世界が全く違うのだ。これでは霊夢が帰せないのも無理はない。

(…これは、ホントに八雲紫って奴に頼るしかなさそうだな)

慧音から聞いた話だと、彼女は『スキマ』なるモノを使ってどこにでも一瞬で移動することができ、それどころか世界を超えることもすらもできるとの事である。

だから——巧が元の世界に戻るには彼女の協力がどうしても必要になりそうだった。

「…あの、どうかしましたか？乾さん」

阿求の声で我に返った巧が見たのはこちらを心配そうに見つめる早苗と阿求だった。いきなり黙り込んでしまったのだから気がかりになるのも無理は無いだろう。

「あ、ああ。悪い、なんでもない」

巧は自分が外の人間ではなく、異世界人であるとは言わなかった。

今この二人に言っても仕方のない事だし、自分の居た世界がどんな世界なのか聞かれなくなかったからである。

オルフェノクに支配された世界のことなど、何の関係も無いこの世界に教える気にはなれなかったし、『辛い環境で生きてきた』などという様な同情は掛けられなくなかったからである。

「…早苗、目的地までは飛んであとどれくらい掛かる？」

話題を切り替えた巧は早苗にそう尋ねた。

「え？守矢神社には飛べばすぐにつきますけど…」

返事をした早苗に巧は「そうか」と言い、オートバジンの下に歩いていった。

そして、オートバジンの横で二人に振り向き、口を開いた。

「阿求、後ろに乗れ。早苗は飛んで案内してくれ」

「乗れるんですか？」

「まあな。…歩くよりもこいつで行った方が手っ取り早いだろ」

このまま歩いて行くよりも早苗が飛んで先導し、オートバジンで追いかけたほうが早く着くと踏んだのだろう。ヘルメットが無いのが心許ないが、オルフェノクとしての感覚器官をフル活用するしかないだろう。

そうして巧はオートバジンに跨る——ことはなく、何も無い場所にいきなり腕を伸ばした。

その腕はそのまま宙を切るかに思われたが――

「ひゅいつ!？」

緊張感のない悲鳴と共に、見えない何者かの肩をしっかりと掴んだ。そしてその空間から『何者か』の姿がすうーっと浮かんできた。

「な、何でバレたのさ」

「にとりさん!？」

そこに居たのは早苗もよく知る河童、河城にとりであった。

「お前の身体からオイルの臭いがプンプンすんだよ」

「……ちゃんと洗ってんのに、どんな嗅覚してんのさ」

巧の言う『オイルの臭い』というのは常人、果ては一般の妖怪でも嗅ぎ取れない様な極僅かな臭いである。実際、阿求と早苗は全く気付かなかつたのだから。

しかし、巧に備わるウルフォルフェノクとしての嗅覚はそんな極僅かな臭いを確かに捉えたのだ。

「鼻が効くからな。……で、お前は何の用だ」

「わたしは……このバイクを連れ戻しに来たんだよ」

そう言うにとりが指差したのはオートバジンであった。

「一ヶ月かけて修理した苦勞の結晶を手放すわけには――」

「……お前が、こいつを直してくれたのか？」

にとりの言葉を遮り、愕然とした表情をした巧はそう尋ねた。

「う、うん。一ヶ月くらい前に山で拾って……」

その言葉を聞いた巧は――頭を下げた。

「ありがとう。……こいつを直してくれて」

この場に園田真理、または菊地啓太郎がいたら驚きの余り啞然となっていただろう。

なにせ無愛想が服を着て歩いているような男である巧が他人に頭を

下げて素直に礼を言うなど見たことが無いのだから。

「あ……そ、それなら是非とも改造させて欲しいかなー……」

その言葉を聞いた途端、頭を下げてた巧の身体がピクッと揺れた。

「…うん、そうだよ！せっかく直してあげたんだから改造くらいしてもいいよね！まずは…ロケットパンチにミサイルでしょ、それにわたしお手製ののびーるアームがいいなあ。あ、変形がロボットとバイクだけじゃ寂しいからプチ戦車…いや、小型潜水機なんてのもいいなあ。ねえ、いいよね！改造しても——」

話しているうちに目が輝き始め、口調もかなり興奮してきて暴走気味になったにとりが巧の方に振り返った時目にしたのは――

「そこまでつきあってられるか」

「えー……いいじゃないですかロケットパンチ。かつこいいのに…」

「…ごめんなさい、にとりさん」

巧の言葉に文句を垂れる早苗と、阿求を後ろに乗せてオートバジンのエンジンをふかしている巧の姿だった。

「おら、行くぞ。…じゃあな」

「むー……」

「それでは、また…」

そう言って三人はその場から去っていった。

「…ちよつと待ってええ！改造なんて言わないからせめて解析させてええ！」

涙声でそう叫び、慌てて三人を追いかけてく河童の姿がそこにあった。

第5話 蘇りし鉄騎（後書き）

どうも、コラッタです。ここでちょっと補足しておこうと思います。

まず、パラダイス・ロストの物語の時期はこの作品では2004年となっています。

そしてこの話の時期はそれから5年後の2009年、非想天則の後となっています。

つまり、たつくんは24歳となります。

今回はこの辺で、それではまた。ノシ

第6話 束の間の休息

——守矢神社、境内。

「ねーええ、せめて解析させてよー……」

「嫌だね。お前にやらせると分解されそうなんだよ」
「あうう」

しかめっ面の青年——乾巧と、うな垂れる河童——河城にとりの姿があつた。

現在、阿求は早苗が仕えている八坂神奈子が行っているという山の産業革命について聞くため、早苗と共に神社の中に居た。

この時、二人は巧にもその場に参加しないかと提案したのだが——

「……いや、やめとく」

「どうしてですか？」

「俺が居たって邪魔なだけだろうし、お前らだけで行ってこいよ」

と言つて、縁側にて二人を待つことにしたのだった。

……本音は、ただ単に長くなりそうな話に付き合つのが面倒なだけだったのだが。

そして今、追いついてきたにとりに捕まり、未だに「オートバジンを解析させて欲しい」とせがまれていた。

「大体なんでそこまでアイツに拘るんだよ。自分で作ればいいだろ」
巧が聞いた話では河童は幻想郷でも最先端の技術を持っているという。

実際、先程の光学迷彩だってオイルの臭いさえなければ全く気付かなかったのだからオートバジンのようなバイクぐらい作れるだろうと思っていたのだが――

「……自分で作ればいい」？……それができたら苦労しないよ」
するとにとりが何かを堪えるような声を発した次の瞬間――

「バイク一台に収まったあの武装！見る者の度肝を抜き、ある種の感動を覚えさせるあの流れるような変形動作！そして完全に独立した思考を持ったような人工知能！どれもこれも私の知らない技術や部品が使われていると来た！これらを求めずにして何が技術者か！何が河童かーっ！」

早口で、かつ特大の音量でそう言い切った。
巧の予想は大きく外れ、彼女にとってもオートバジンは十分オーバーテクノロジーだったようである。

「ね、ね！ホントにお願い！この通り！」

そう言って頭を下げて必死にお願いするにとりの姿に巧は内心揺らぎ始めていた。

流石にここまで必死にお願いされるといくらなんでも断りづらくなってしまうものだ。

――かと言って迂闊に分解されたり改造されたりするのはご免だが。

「…お前、なんでアイツの事をそこまで知りたいんだ？」
「え？うーん…そうだねー…」

そう言われてにとりは頭を捻ったがすぐにその顔を上げた。

「技術者の血が騒ぐつてのもあるけど、夢の為…かなあ」
「…夢？」

「あ、夢って言うより目標…だけどね。いつか陸でも空でも水中だろ？が自由に動けるマシンを作りたいなーって」

にとりが語る間、巧は口を挟む事無く黙って彼女の話を聞いていた。夢を語るにとりの目がきらきらと輝いていたからである。

——夢を持つ者がするような、綺麗な目を。

『夢を持つとね、時々すつごく切なくなるけど、時々すつごく熱くなるんだ』

仲間の一人、園田真理がかつて口にした言葉が巧の中で繰り返される。

——今日の前に居る彼女も、そんな夢の為にここまで必死になれるのかもしれない。

「…分解したり改造しないなら…」
「え？」

巧が呟いた言葉に反応するにとり。

「分解したり改造したりしないって言うなら、触らせてやってもいい」

その言葉を聞いた途端、にとりの表情が花が咲いたかのようにぱああと輝き始めた。

「いいか、改造や分解なんてしてみる。今後一切触らせてやらねえから――」

そう言葉を続けようとした巧だったがその言葉は途中で途切れた。
なぜなら――

「ありがとー！いやあやつぱり人間は盟友だねえー！」

視線の先にはオートバジンを停めてある場所にすさまじいスピードで走っていくにとりの姿があつたのだから。
そんなにとりの姿が見えなくなった後、巧は盛大にため息をつきたくなった。

「…人の話聞けよ」

にとりの行動の速さに呆れ、オートバジンの身の安全が少し心配になった巧であつた。

「どういうことが説明してほしいんだけど」

「…さあ、何の事かな」

――人里の外れ。

食料の買い出しに来た霊夢は金色の髪と九本の尾を持つ女性、八雲藍に詰め寄っていた。

おそらく彼女も買い出しに来ていたのだろう。手に持つ袋の中には様々な食材の姿が見える。

「紫が全く顔を出さないのよ。……結界をちよこつといじったりしても、ね」

「呼ぶ度に一々結界をいじるお前にうんざりしてしまわれたんじゃないのか？」

霊夢の問いにもっともらしい答えを返す藍。

しかし――

「それはないわね」

霊夢は普段の態度を崩そうとせずにはつきりとそう言いきった。

「ほう、…何故そう思う」

「勘」

『勘』

それだけで他人の言葉を嘘と断言するのは普通なら馬鹿馬鹿しいにも程があるだろう。

だがこの巫女の場合、その勘が百発百中と言えるので馬鹿に出来ないのである。

「直感に頼るような人間はいつか自滅するぞ？」

「あら、私にそれを言うのかしら？」

そうして互いを睨みつける二人。

時間にしてどれくらい経っただろうか、ため息と共に霊夢が口を開いた。

「…まあいいわ。さつさと紫の所に案内して頂戴。あいつに用事があるの」

「案内する義理が無いな。大体何故そんなに食らいついて――」

「結界に異常がある…って言っても？」

その言葉を聞いた途端、藍は口を閉じた。

「結界をちよつといじつてた時にね、その結界がおかしくなってる事に気付いたのよ……紫が管理してる筈の結界まで、ね……」

「紫が結界の管理をさぼるとは思えないし、……まあ大抵はあんたにやらせてるんでしょうけど。」

「……私はしっかりと結界の管理を行っているぞ？結界に異常があるというのは見間違いじゃないのか？」

藍は優秀な式である。

その彼女が結界の管理で手元を狂う筈は無いのだろう。

しかし――

「ええ、あんたはちゃんと仕事をしてるんでしょうね。……でも、異常があつたのは結界の奥底。それこそ紫しか直せないようなところにあつたのよ……今はまだ大丈夫そうだけどね……」

霊夢が見つけた異常というのは結界の奥深くに存在していた。

その異常は霊夢や藍では見つける事は出来ても、直すことは出来なかった。

「あんた何か知ってるんですよ。もしかしたら紫に何かあつたんじやないの。ねえ――」

「……お前に話す事は何もない」

そう言つて藍は背中を返してこの場を去ろうとしていた。

「ちよつ、ちよつと待ちなさい！まだ話は――」

霊夢が藍を追いかけようとした瞬間――

「……」

「っ！」

藍の弾幕が霊夢の視界を遮った。

反応が一瞬遅れた霊夢はすぐさま自分の弾幕を形成し、藍の放った弾幕を相殺していったものの、弾幕が晴れた頃には藍の姿は無かった。

「……逃げられたか。逃げるのに弾幕使うなんて何考えてるのよ全く」
そう愚痴りながら霊夢は思考を巡らせていく。

――紫が出てこない上に、藍があそこまで頑になるなんて――
「……また厄介なことが起きるんじゃないでしょうね……」

空を見上げながら、霊夢は身の内から出てくる嫌な予感をうつとうしく思った。

「……眠い」

守矢神社。疲れが出てきた巧は少し横になろうとしたが――

「こんにちはー！清く正しい射命丸ですー！」
「……今度は何だよ」

新たな来訪者により、その眠りは遮られることになった。

やって来たのは黒い髪の少女。鴉のような黒い翼を羽ばたかせ、メモ帳らしきものを携えていた。

「あやや、ご紹介が遅れました！私、鴉天狗の新聞記者、射命丸文と申します！」

これどうぞ。と少女——文が差しだしてきたのは『文々。新聞』と題の着いた新聞だった。

日付を見るに恐らく先日の発刊物なのだろう。

「…で、そのブン屋が何の用だよ。ここ人間なら今中に居るぞ」

「いえいえ、今日は貴方に用があまりまして。えーと…」

「乾巧だ。…言つとくが俺はお前に話す事なんてねえぞ」

巧は文の事を知らず、幻想郷に来たのもここ最近の事なのだ。

自分が彼女に——ましてや新聞記者に関わる事など無かった筈だが

「ふっふっふ、巧さん。これを見てください」

そう言つて文が渡して来たのは一枚の写真。

そこに写っていたのは——

「……」

「先程、山の麓あたりでその場の近くに出くわしましてね。一部始終を撮らせていただきました」

ディアーオルフェノクを斬りつけるフェイス——自分が写っていた。一部始終、ということとは自分が変身を解除したところも撮られているのだろう。文の手には他にも何枚かの写真があった。

「隠し撮りとは趣味が悪いな。近くに居たのなら手え貸せよ」

「いやー、記者としてはこんな美味しそうなネタを逃すなんてできるわけ無いじゃないですか」

「お前な……」

悪びれる様子もなくそう言う文。

さっきのにとりといい、ここの連中は自分の事を優先する奴ばっかなのか。と思わずにはいられなかった。

「……で、何が聞きたいんだ」

大体予想付くけどな。とため息交じりに言う巧。

「それではですねー！ズバリ！巧さんが変身した紅い戦士と、あの妖怪らしきものについて！」

よろしいですか、勿論よろしいですよ。と目を輝かせて詰め寄ってくる文。

それに対して巧は暫く考えた後――

「……俺の名前を出さないなら答えてやってもいい」と返した。

普段ならファイズやオルフェノクの事を新聞にするなど、巧からしてみればふざけている事この上ない事になど付き合うつもりは無かったのだが、今回ばかりは事情が違った。

ファイズの事はともかく、オルフェノクの事は新聞を通して幻想郷に広める事で警戒くらいは呼びかけられるだろうと考えたのだった。……とは言っても全てを――元々人間だった事などについて伝える気は無いが。

名前を出さないようにしたのは元々ファイズである事を名乗る気などなかったし、名乗ったら名乗ってたで面倒なことになると思ったからである。

「うーん……名前を出せないのは残念ですが、記事の為には仕方ない……ですね」

残念そうにそう呟く文。

もしそのまま取材に応じていればそのまま巧の名前を新聞に載せる気だったのだろう。

念のために言っておいて良かった。と安堵する巧だった。

「では気を取り直して！巧さん、まずはあの妖怪らしきものについて教えていただきますか？」

「わかった。あいつは……いや、あいつらは——」

そして、巧にとって人生初となる取材が始まった。

「——といった具合だが、こんなところでいいかな？」

「はい、ご協力感謝いたします」

所変わって守矢神社、とある一室。

阿求、そして早苗が傍らに座るもう一人の女性が話を終えたところだった。

阿求のちょうど向かい側に座っている女性は山の神、八坂神奈子。早苗が仕えている神の一人であり、約2年前に早苗ともう一人の神

と共に神社ごと幻想郷に引越してきたのである。

そして今日は神奈子が河童たちと行っている山の産業革命について幻想郷縁起に書き取るため、こうして話を聞きに来たのである。

「さて、もうそろそろ日が暮れる頃だろうし。稗田よ、今日は一晚泊っていくとよい」

見れば外はもう夕方になっており、今から出ては例えオートバジンに乗っても途中で日が完全に落ちてしまうのがオチだろう。

夜の幻想郷——博麗神社や人里の外では妖怪たちが活発になるので人間にとっては非常に危険な環境となってしまう。……一部例外はいるが。

「お気づかいありがとうございます。では一晚、お邪魔させていただきます」

「ああ、ゆっくりしていくといい。……ああ、それと早苗」

「はい、どうかしましたか？」

神奈子は今から夕食の支度をしようとしていた早苗を呼び止めた。

「諏訪子の姿が見えないんだが……どこに行ったか知らないか？」

「……あれ？そういえばどこに行って仕舞われたんでしょう？」

先程までこの場に居た筈のもう一人の神、洩矢諏訪子の姿がどこにも見当たらなかったのだった。

「いやあ貴重なお話ありがとうございますー！私はこれから記事にしますのでこれでー！」

取材を終え、そう言つて瞬く間に飛び去っていく文を見送る巧。

——疲れた。とっても疲れた。

改めて解つたが、やっぱり自分はこんな風に取材を受けるようなタイプではないのだ。

口下手な自分がああ怒涛の質問攻めの中、真実を隠し通せたのはある意味奇跡だったかもしれない。

——もっとも、あの探究力と洞察力の事だ。いつかは真実に辿り着いてしまつかもしれない。

もし真実を——オルフェノクは元々人間だった事を知ったらアイツはどうするのだろう。

オルフェノクが妖怪にも仇をなす事はこの目で見たし、既に言つてある。

ひよつとしたら真理や啓太郎のようにその存在を受け入れるかもしれない。

もしかしたら自分の世界に居た大多数の人間のようにその存在を認めず、排除するのかもしれない。

最悪——オルフェノクに覚醒しないように人間を根絶やしようと考えるかもしれない。

そこまで考えて巧はその考えを振り払つた。

所詮自分は彼女とは違ふのだ。こんな事を考えていたって彼女の気持ちや考え方がわかるわけでもない。

それに信じてみたいということもある。——この世界の住人の、心を。

幻想郷の住人は里に住んでるような人間を除けばほとんどが力を持つ人間や妖怪たちである。

そんな彼らが死んでしまったことで偶々力を持った人間——オルフェノクを表立って迫害するとは考えなくなかった。

里の人間たちだってそうだ。

彼らは昔から妖怪の危険に晒されながらも生きてきたが、今では里に買い物に来る妖怪たちが居るほど妖怪との距離が縮まっているのだ。

きっと彼らなら人に危害を加えようとせず、ひっそりと生きたいと願うオルフェノクを受け入れてくれるかもしれない。

——それでも人間の中にも妖怪の中にも、オルフェノク存在を認めない者が出てくるだろう。

それは仕方のない事である。

未知のモノに対する警戒心も恐怖心も、その存在を認めたくないという拒絶心も、生き物には備わって当然なのだから。

「おーい、巧い？」

そこまで考えを巡らせてると突如声を掛けられ、我に返った巧が顔を上げた先には所々煤やオイルで汚れたにとりが立っていた。

「…ああ、何だ？」

「うん、オートバジンを見せてくれたお礼言おうと思って。ありがとう」

見るとにとりの身体は汚れたらけだが何か得るモノがあったのか、その顔は生き活きと輝いていた。

「そつか……で？分解したりしてねえだろうな」
「や、やだなあ。そんな事してないよ」

私ってそんなに信用ない？と苦笑いを浮かべるにとり。
あの暴走っぷりを見て不安になっていたがどうやらその一線は超えなかったようである。

「あ、そうそう！もし調子が悪くなったりしたら私のところに来てよ。直してあげるからさ」

「…いいのか？」

「あんな凄いの見せてもらったんだもん。それに機械の修理って楽しいからさ」

じゃ、まったねー！と言つて自らの家に帰っていくにとり。

彼女を見送った途端、今まで溜まっていた疲れがどつと出てきた。

考えてみれば今日一日は山を登り、オルフェノクと闘い、騒がしい二人の相手をした上に片方からは人生初の取材を受けたのだ。口下手な自分が、である。

ここまで来ると流石に疲労が限界になっていた。

——もう駄目だ。寝る。誰が来ようが寝る。絶対に寝てやる。

そう脳裏に浮かべながら巧の意識は薄れていった。

「…あらら、寝ちゃってる？」

巧が束の間の眠りについた直後、彼の目の前で蛙のような帽子を被った金髪の少女がしゃがみこんで巧の顔を覗き込んでいた。

「うー。せっかく早苗を助けたっていう本人から話を聞こうと思ったのに」

つまんなーい。と言う少女の顔は不満を口にする子どもそのものであった。

——彼女の名は『洩矢諏訪子』。

土着神の頂点に立ち、早苗が仕えるもう一人の神である。

さて、その彼女が何故こんな所に居るのかと言うと——

話は彼女が早苗たちが居た部屋に居た時まで遡る。

『へえー、じゃあその一緒に来た乾って男がそのオルフェノクつてのに襲われた二人を助けたって言うの？』

『はい。弾幕も余り効きませんでしたし、乾さんが居なかったらどうなっていたか…』

『乾さんは私たちを助けようとして紅い戦士に変身して飛び出していったんです』

『ほう…興味深いな、一度話してみたいが…彼は？』

『そう言えば居ないねー。どこに居るの？』

『それが、“自分が居たって仕方無いから外で待ってる”と…』

——と、このように巧に興味を持った彼女はこっそりと部屋を抜け出し、こうして巧の下に来たのだが…

「肝心の本人が寝ちゃってるんじゃないあー」

当の巧は体力の限界が来て、眠ってしまったばかりであった。いつそのこと起こしてしまおうか。とも考えたがその考えはすぐに消えることになった。

「…こんな顔で寝てたら起こすに起こせないよ」
眠っている巧の表情は普段の無愛想なそれと違ってとても穏やかな表情をしていた。

何もすることが無くなってしまったので、とりあえず巧の寝顔を眺めていると――

「あら、洩矢様。ここにいらっしゃったのですか」
巧を迎えに来た阿求が諏訪子の存在に気付きながらやって来た。

「おー、阿求じゃん。話はもう終わったの？」
「ええ、それで乾さんを呼びに来たのですけど…」

そこで言葉を区切るとちらっと巧の方を見た。

「…寝ちゃってますね」
「私が来た時には既にねー」

そうして互いに苦笑いをする二人。
そこでふと、諏訪子が阿求に尋ねた。

「ねえねえ、この男がここに来る途中で二人を守ったんだよね？」
「はい。一緒に居た乾さんがオルフェノクに襲われた私たちを助けてくれたんです」

「じゃあさじゃあさ、この男ってどんな奴なの？」

「え、ええ？そう…ですね…」

そう諏訪子に問われ、しばらく考える阿球。
しばらくたった後、その口が開いた。

「慧音さんから聞いた話と私の主観ですけど…」

そこで一旦言葉を区切り、続けた。

「…乾さんは普段ぶっきらぼうな顔をしてて、口数もそんなに多くなくて、口を開けば善くも悪くも率直な物言いが出てきて余りいい人の様には見えませんけど……」

（わあ、ぼろつくぞだあ）

…おそらく、巧がこの話を聞いていたら阿求を思いつきり睨んでいただろう。

「…でも、本当は優しい人なんだと思います。オルフェノクに襲われた時も、率先して前に出て私や早苗さんを守っていました。…里に巴という女の子がいるんですけど、先日その子が森に迷ってしまったのでその子の兄が慧音さんに助けを求めた所、その場に居合わせた乾さんが誰よりも真っ先に飛び出していったそうです。」

阿求の脳裏に浮かぶのはその時の事を話す慧音。

その時の彼女は『里の守護者であるのに、外来人の彼に一步先を取られたよ』と苦笑いをしていた。

「きっと、乾さんは誰よりも人の命を守りたいんだと思います。だから会って間もない私たちや、見たことも会った事のない人たちのためにあそこまで頑張っているんだと思います」

「こんなところでしょうか」と諏訪子に朗らかな笑顔を向ける阿求。
それを見た諏訪子はなんとなく巧の事がわかった気がした。

——少なくとも、自分たちの大切な早苗を傷つけるような男ではないという事が。

「…うるっせえなあ……」

と、話し声に気付いてしまったのか、それまで寝ていた巧がのっそりと起き上がった。

寝ていた所を起こされたせいかな、その顔にははっきりと不機嫌さが表れていた。

「あ、すいません。起こしちゃいましたか」

「ん…？ああ、阿求か。話は終わったのか？」

阿求が声を掛けたことにより、彼女の存在に気付いた巧。

まだ眠いのか、その顔は若干ぼーっとしていた。

「はい。それで、今夜はこちらで一泊させていただくことになりましたので、それを知らせようと思って…」

阿求の言葉を聞き、辺りを見回して諏訪子の存在に気付いた巧はこう言った。言ってしまった。

「そうか。…で、そっちのガキは誰だ？また山の妖怪か？」

一瞬、その場の空気が凍った。

いくら知らないとはいえ、神を“ガキ”呼ばわりである。

「い、乾さん…」

阿求が顔を青ざめながら震えた声でそう言った。

「あ？なんだよ」

「なんだよ、じゃありません！こちらの方は土着神の頂点に立たれる洩矢諏訪子様なんですよ！？それを…その…こ、『子ども』だなどど、罰当たりにも程があります！謝ってください！ほら、今すぐ！」

いきり立って叫んだかと思うと土下座させようとして巧を引つ張る阿求。

当然と言えば当然である。諏訪子は土着神の頂点に立つ上、強力な祟り神であるのだから。

「おいつ、こら、引つ張るな！おい！」

そして巧といえば突然の事態に困惑していた。

阿求はそんな巧の言葉が耳に入ってないのか、とにかく彼を謝らせようとして必死になって引つ張り続けていた。

結果、その場には突然の事に不機嫌さを募らせる青年とそれを引つ張り続ける少女という何とも奇妙な図が出来上がった。

「…ぷつ……」

そんな巧と阿求の様子を見て、蚊帳の外に置かれそうになった諏訪子が吹き出した次の瞬間。

「あつはははははは！いやー面白いねー二人とも」

盛大な笑い声をあげ、その声で我に返った二人は呆然と諏訪子の方を見た。

「そんなに畏まらなくても大丈夫だよ。それにしても、神様をガキ呼ばわりする人間は初めて見たよ」

よつぽど可笑しかったのか、「あつはっは」と笑い続ける諏訪子。

霊夢や魔理沙のように普通のペースを崩さずに自分たちに接してくる人間は居たものの、巧のように開口一番に『ガキ』と呼んでくる人間は初めて見たため、新鮮だったのだろう。

「…さて、君が早苗が言ってた乾くんだね。私は洩矢諏訪子。この神社に住んでる神様だよ」

ひとしきり笑い終えた諏訪子が改めて自己紹介をしてえっへんと言わんばかりに胸を張った。

…無駄な努力、とか思っではいけない。何が、とも言わない。

「…乾巧だ。…神サマとか本当に居たんだな」

「おー？もしかして信じていなかったのかなー？」

「見たことも無い存在を信じるつもりはねえからな」

対して巧といえば、相手が神だと知っても己の口調を全く改めようとしなかった。

巧曰く、『口が悪いのは生まれつきなんだよ』という事なのだろうが。

「それにしてはすんなりと受け止めたみたいだね？」

「自分の目で見た事はしっかりと受け止めるつもりだからな」

これは巧が己の人生にて得た経験論だった。

子どもの頃オルフェノクに覚醒した時も、初めてファイズに変身した時も、始めは困惑したものの、すぐにその存在を受け入れて生きてきたのだから。

…だからと言って、悩みが消えたわけではないが。

「順応力高いんだねえ。…ところで、そんな君に聞きたい事がある

んだけど」

「…なんだよ」

「君がここに来る途中オルフェノクとかいう奴らから早苗たちを守ったんだよね」

「…別に俺一人でやったわけじゃないけどな」

諏訪子の問いに答えながら巧は嫌な予感がしていた。

どこかで見た事がある、この流れに――

「それでね、是非ともその時の事を教えてほしいな――」

「嫌だね」

――空気が再び凍った。

諏訪子の言葉を遮り、巧はぱつさりとそう言った。

「同じ事を何度も説明するの面倒くさいんだよ。射命丸の奴に同じこと教えたからそいつの新聞読めばいいだろ」

あー… かつたりー…。と縁側に座り込む巧。

巧からしてみれば、慣れない取材を受けてくたくたになっているのに何でまた同じことを説明しなきゃならないんだ、ということである。

とは言っても、そんな言い方で納得するはずがなく…

「いゝぬゝいゝさゝん…。貴方って人はーっ！」

案の定、無礼にも程がある言い方をした巧に対してまた阿求が怒り出した。

そして夕食の準備が出来た早苗が呼びに来た頃には、叫びながら巧を土下座させようと引っ張り続ける阿求と、大人気も無く文句を垂

らしながら抵抗する巧、そんな二人を見て無礼を言われた事をそっちのけにして笑い転がる諏訪子という奇妙な図が出来上がっていた。ちなみに、それを見た早苗の感想は「何やってるんですかこの人たち……」とのことである。

「眠れねえな……」

あれから時間がたち、すっかり夜中となつて皆が寝静まつてる今、寝付けなかった巧は昼間自分が居た縁側にて夜風に当たつていように考えていた。

9月の終わりごろの風に当たりながら縁側にたどり着いた時、

「ん……？」

——先客が居たことに気付いた。

「おや……乾か」

「アンタは……確か、八坂だったか」

先客——八坂神奈子は普段の服装ではなく、白い寝間着を身につけ、手に杯を持っていた。

「こんな夜中にどうした？」

「その言葉そっくりそのまま返す。……単に寝付けなかったただけだ」

「そうか……私も似たような理由だ」

神奈子に言葉を返しながら彼女に隣に座りこむ巧。

神奈子が「飲むかい？」と酒を出してきたが、巧は「いらねえ」と返した。

「…ここに来る途中、早苗が世話になったそうだな」

互いの間に沈黙が流れていた時、ふいに神奈子がそう切り出した。またそれか。と巧は思ったが、一々反発するのも気が引けるのできつちり答えることにした。

「…別にそんなんじゃないよ。道だってアイツがいなけりゃわからなかったし、俺自身アイツに助けられたしな」

巧の言う事は間違っていない。

神社への道も早苗がいなければ全くわからなかったし、ディアーオルフェノクと闘った時も不意を突かれた自分を助けたのも彼女だったのだから。

「それでも、早苗の保護者として礼を言わせてもらう。感謝するよ」

「おいおい、神サマが人間に頭なんか下げていいのかよ」

「何、神であつても礼儀を忘れるわけにはいかないからな。それに割と身近な感覚の方が信仰を得やすかったりするからな」

「…抜け目ねえな」

褒め言葉として受け取っておくよ。と笑いながら返す神奈子。

杯に盛った酒をぐいっと呷った後、こう切り出した。

「…今から言う事は、ただの独り言だ」

「……？」

普段なら人前でこんな事を言う気は無かった。

しかし出会って間もない筈のこの男の前で言うのは何故か。

酒が回って口が軽くなったか、もしくは関わりの薄いこの男なら良い愚痴り相手になると思ったか。
そんな事を思いながら神奈子は言葉を続けた。

「幻想郷に来てから二年…この地での暮らしにすっかり慣れたものの、時々考えてしまう事がある」

そこで一旦言葉を区切り、続けた。

「…早苗のことだ。あの子にはあの子なりの外での暮らしがあった。それを私たちの都合でこっちに連れてきて…壊してしまった」

巧は相槌も打たず、ただ目を閉じて彼女の話を聞いていた。

「早苗は気にしてない、私と共に行くと言っていたが…本当は外の世界に居たかったんじゃないか、本当は帰りたいんじゃないかと…時々、考えてしまう」

そこまで話して神奈子は口を閉じた。

神と言っても何でも出来るわけではない。

彼女は全知全能の神ではない。

人間や妖怪と同じ様に悩みもする、苦しみもする、後悔もする。

他者の気持ちを完全に理解できるわけでもない。

だから——こんな風に悩んでしまう。

「…俺も独り言を言うけどな」

二人の間に沈黙が続いた時、巧はそう言いだして、続けた。

「あいつは…早苗は、ここでの生活が楽しい、あんだ達二人が好きだからこっちに來た事を後悔してない、一緒に居るのが楽しいって言ってたぜ」

巧の脳裏に浮かぶのはその事を話していた時の早苗。あの時の彼女の顔は――

「少なくとも、それを話してたあいつの顔は――嘘をついてる顔じゃなかったな」

そこまで話して、巧は「よつと」と言いながら立ちあがった。

「寝るのか？」

「ああ、流石にそろそろ眠くなった」

「そうか、…また明日」

「ああ」

そう告げて、巧は自らの寝室に戻っていった。

その姿が見えなくなった時、神奈子は小さな声で呟いた。

「…ありがとう」

翌日

「――ただいま」

「おお巧、おかえり」

人里、慧音宅

早朝にオートバジンで守矢神社を出発し、阿求を送り届けた巧は慧音の家に帰っていた。

「しかし…外に停めてあるあの…ばいく…というのか？あれは何だ

？」

慧音が言ってるのはオートバジンの事である。

巧は慧音の家の前までオートバジンを引いてきていたのだった。それを見た住人達は

「な…なんじゃありやあ…」

「う、馬…じゃないわよね…？」

「なんだか…かつちよいい…」

と、驚きを隠せずにいる。

「帰って来たただの相棒だ。気にすんな」

そして巧は慧音の問いに対してそれだけ答えてそれ以上話そうしなかった。

それだけでは納得できなかったが、その顔が余りにも嬉しそうだったので慧音はそれ以上追及するのをやめた。

（…まあ、またの機会に聞けばいいか）

「…そういえば巧、お前の事が新聞に載ってたぞ」

そう言いながら今日の新聞を差し出してくる慧音。

それを受け取る時、何故か慧音が哀れみを帯びた目でこちらを見ているのに気づいた。

「…何だよ」

「いや…お前、文の取材を受けてしまったのだな…」

見出しの最後の方をしてみる。と哀れみの表情で告げてくる慧音。そう言われながらフェイスとオルフェノクの事が載っている見出しに目を向ける巧。

見出しの内容は自分が話したファイズとオルフェノクについての説明が載っていた。

そこまではまだ良かったが、その最後のあたりで我が目を疑った。そこには――

「――また、取材に応じたファイズ氏を記者が初めて目撃した際、稗田氏と東風谷氏が傍に居たのを目撃した。このことから、ファイズ氏と彼女たち二人は人気のない森林にて落ち合う程の仲であるという線も考えられ――」
…と、記されていた。

「文の新聞はこうやって色々と脚色したりするからな…」
慧音が言ってくるが巧の耳には入っていなかった。

そしてそれを見た巧は只でさえ愛想の悪い顔が更に悪くなっていき、終いには新聞を丸めて床に叩きつけた。

「あの女……！」
もう二度と取材なんか受けるか。と心に誓った巧だった。

同じ頃、とある鴉天狗の家に弾幕を出しながら突っ込んでいった風祝の姿が目撃されたとかされなかったとか。
それはまた、別のお話。

第6話 束の間の休息（後書き）

えー…どうも皆さん、コラッタです。

…一ヶ月半ですよ。

前回から一ヶ月半かけての投稿ですよ。

しかも話的にはほとんど進んでない上に文章は汚いという始末。

…何なの？馬鹿なの？死ぬの？（作者が）
穴があつたら本当に入りたい気分です。

今後は話がちゃんと進んでいくように努力したいと思います。
では今回はこのへんで、それでは。ノシ

第7話 吸血鬼の姉妹

——霧の湖、紅魔館

その館の一室では今——

「……暇だわー……」

……紅魔館の主、レミリア・スカーレットが暇を持て余していた。

「ねえ咲夜、暇だわ。何か無いかしら」

所在なさに蝙蝠のような羽をパタパタといわせながら傍に控えていたメイド——十六夜咲夜にそう尋ねた。

「そうですね……天狗の置いていった新聞ならありますが」

「なら、それでいいわ。持ってきて頂戴」

畏まりました。と言った瞬間、忽然と姿を消した咲夜。

レミリアはそれに動じることなく、カップの紅茶に口をつけた瞬間、新聞を携えた咲夜が何事も無かったかのように現れていた。

「お持ちいたしました」

「……苦労さま」

今日の日付が入った『文々。新聞』を咲夜はレミリアに渡した。

レミリアはその新聞を『何か面白そうな事は無いか』と言いたげな目で広げた所——

「……『衝撃！幻想郷に現れた灰色の異形と紅き閃光』？」

その目は見出しの部分で早速止まることになった。

読み進めていくと、その記事は外からやって来て、人間や妖怪を襲う怪人『オルフェノク』と、それを倒す戦士『ファイズ』について書かれていた。

……最後の部分はあの天狗の悪ふざけなのだろうが。

そしてレミリアが一番興味を持ったのはオルフェノクではなく——ファイズだった。

記事を見ればファイズとはある外来人が紅い閃光に包まれて変身した戦士だとか、紅い剣でオルフェノクを斬り伏せたとか、その姿から紅き閃光の名がぴったりだとか、とにかくファイズを取り巻く“紅”という字に目が行った。

（私以外に“紅き”を名乗る者がいるなんて…面白そうね）

『永遠に紅い幼き月』——レミリアが名乗っている二つ名である。新聞に載っていたファイズの『紅き閃光』というフレーズに自分に何か近いものを感じ取ったのか定かではないが、今彼女の興味は間違いなくファイズに向けられていた。

「咲夜」

「何でしょうかお嬢様」

「このファイズという男を探してきて頂戴」

だから——

「同じ“紅”を名乗る者として一度会ってみたいの」

彼女がこの退屈を殺すためにファイズを求めたのはある意味当然だったのかもしれない。

咲夜がファイズの搜索を命じられてから一週間――

「……はあ、どうしようかしら」

結論から言えば、彼女は行き詰っていた。

まず当然といえば当然だが、彼女はファイズの正体を知らない。故にどこを探せばいいのか皆目見当がつかない。

次に、これが一番の理由となるのだが、紅魔館での仕事が忙しく、中々探しに行く余裕が見つからない。

紅魔館では数多くの妖精メイドを雇っているが、そのほとんどが真面目に仕事をする事がなく、紅魔館での仕事は実質的に彼女一人がほとんど切り盛りしているのが現状である。

このように多忙の身ではあるものの、敬愛する主の為に可能な限り早く見つけてあげたいというのが咲夜の心境だった。その思いが、彼女を焦らせていた。

そこで今、人里で買い出しの際に聞き込みを試みたものの成果は乏しく、ファイズの正体を知ることとは出来なかった。

今日も成果はなしか。と思いつつ、紅魔館への帰路を取っている最中――

「……？」

何者かが、自分の後をつけてる事に気付いた。

相手は上手く隠れてるようだが、殺気の制御が余りにもお粗末であ

る。…どうやら自分に向けてるらしいが、その殺気は隠そうという努力が余りにも見られなかった。

大方知性の低い妖怪だろうと思いつつ、ナイフを出しながら振り向き、こう言った。

「出てきなさい。隠れてても気配でバレバレよ」

相手からの返事無く、辺りは静まり返ったままだった。

知性の低い妖怪なら気に触れてすぐに襲いかかってくるだろうと思っていたため、咲夜は若干拍子抜けしていた。

次の瞬間――

「…っ！」

凄まじい速さで『何か』が飛んできた。

回避が間に合わないと感じた咲夜は自らの能力で時間を止め、その

『何か』を確認した。

「…泥玉？」

それは玉子くらいの大きさの泥玉だった。

何故こんな物が、と思ったが隠れてる相手が飛ばしてきたのだということにすぐに思い至った。

そうと分かっただけでも黙ってるわけにもいかず、泥玉の軌道から外れ、飛んできた方に向かってナイフを飛ばしてから能力を解除した。

――ドゴンッ！

するとその泥玉は後ろにあった樹に当たり、その樹に風穴を作った。

「なっ……！」

咲夜は泥玉の威力は精々樹に大きなへこみを作る程度だろうと考えていた。

しかしその威力は咲夜の予想を超えており、今相対してるのが少なくとも弱い妖怪程度の実力ではないということを確認した。

「いつてえなあ……何てことしてくれんだよ。アンタ」

すると、泥玉が飛んできた所から腕にナイフが刺さった灰色の異形——ムツゴロウの特性を持つマッドスキッパーオルフェノクが姿を現した。

「レディに向かって泥を投げるような輩に言われたくは無いわね」

「うるっせえなあ。アンタの都合なんか知ったこっちゃねえんだよ」

マッドスキッパーオルフェノクのその言葉から、彼がレミリアとは違う意味で自己中心的な性格である事が読み取れた。

「あらあら、オルフェノクってのはこんな森の中で女性を襲う様な変質者なのかしら？」

「ああ？舐めてんじゃねえぞ人間風情が！」

咲夜の挑発に乗り、腕を振り上げながらこちらに迫って来るマッドスキッパーオルフェノク。

それに応戦しようとナイフを構える咲夜。

その時——

——ブオオオオオオオンッ！！

「ぐあああっ！」

外の雑誌で見た——バイクという乗り物だったか、に乗った男がマッドスキーパーオルフェノクを撥ね飛ばした。

「…誰？」

そう咲夜に問われた男は彼女をちらつと見てからすぐにマッドスキーパーオルフェノクに鋭い視線を向けた。

「くっ…何すんだよ、この野郎…！」

「こんな森の中で女を襲うなんてな。趣味が悪いにも程があるぜ」

そう言いながら男は手元で何かの機械を操作していく。

（あれは……確か、携帯電話とか言う機械だったかしら？）

何故そんなものを？と咲夜の疑問をよそに携帯電話を操作していく男。

やがて——

Standing by

携帯電話から音声が聞こえたかと思うと男はそれを掲げ——

「変身！」

Complete

腰のベルトに差し込み紅い光に包まれた次の瞬間、男——乾巧の姿は仮面の戦士、ファイズになっていた。

「お、お前は…！」

「…ファイズ…！」

二人の驚きの声を尻目にファイズは手首を軽くスナップし、マッド

スキッパールフェノクに向かって駆けだした。

「！……くっ！」

やや遅れてそれに反応したマッドスキッパールフェノクが魚のように開いた口から泥玉を発射したが、ファイズはそれを少し身をよじって回避。

隙だらけになったマッドスキッパールフェノクに接近し、拳を何発も打ちつけていった。

拳を打ちつけられるマッドスキッパールフェノクは反撃しなければと思い、苦し紛れながらもファイズを爪で斬り裂こうとしたが――
「うわああっ！」

その爪が届く前に足払いを掛けられ、仰向けに倒れた所でファイズによって思いっきり蹴り飛ばされた。

（や……やばい！このままじゃ、やられる！）
自分が非常に不利な状況にあることを知ったマッドスキッパールフェノクの行動は早かった。

倒れた姿勢のまま口から何かしらの液体を出し、その液体が垂れた地面が泥のように柔らかくなっていった。
するとマッドスキッパールフェノクは水に潜るのと同じ様な軽やかさで柔らかくなった地面に潜っていった。
恐らく逃走する気なのだろう。

「っ、待てっ！」

それに気付いたファイズが慌てて駆け寄るも、マッドスキッパールフェノクの姿はあっという間に地面に隠れ、逃走を許してしまっ

た。

「…くそっ」

マッドスキーパーオルフェノクを逃がしてしまったファイズは悔しそうにしながら変身を解き、乾巧の姿に戻った。

そこで改めて咲夜の存在を思い出し、彼女の身を確認しようと振り返った。

「おい、大丈夫か」

「…ええ、平気よ」

咲夜はナイフを仕舞いながら巧の問いに答えた。
すると巧は訝しげな表情でこう尋ねてきた。

「アンタ、里の人間じゃあ……ないよな」

人里に来てまだ二週間と少ししか経ってない巧だが、咲夜が里の人間でないことはわかった。

里の人間たちは基本的に和服を着ているが咲夜が着ているのは誰がどう見ても立派なメイド服である。こんな服を着ている者を里で見かけた事はまずなかった。と言うより、居たら居たで忘れられそうにない。

そして何よりもこれが大きな理由だが、一人でこんな森の中に居たことである。

オートバジンが戻って来た事により、見回りの範囲を少し広げた巧だが、今いる場所は里から多少離れた場所である。

こんな場所で少女が一人でいた事、しかも見つけた時にはオルフェノクと対峙していたことから巧は咲夜が里に住まずに力を持った人間、もしくは妖怪ではないかと考えていた。

「…紅魔館にてメイド長を務めております、十六夜咲夜と申します。以後お見知りおきを」

そして咲夜は巧の問いに対して自己紹介をしながら、スカートの裾をつかんでぺこりとお辞儀をした。

（紅魔館っていうのは……確か、吸血鬼が住む館だったか）

巧は以前慧音から聞いた話を思い出していた。

紅魔館とは吸血鬼の姉妹を中心に強力な魔女、人間、妖怪が住む館で、幻想郷のパワーバランスの一つとなっている、というのが巧が聞いた話だった。

「貴方がファイズですね？お嬢様が貴方に会いたがっております。

紅魔館へご招待いたしましょう」

考えを巡らせる巧をよそに、巧を紅魔館へ招待しようと言葉を投げかける咲夜。

それに対する巧の返答は――

「…悪いけど、俺にも色々都合があるからな」

巧からすれば、表立った用も無いのに会ったことも無い相手に会いに行くのは余り…と言うより全く気が進まなかったし、何より人里から余り離れるような事はしたくなかった。

里には慧音がいるものの、万が一オルフェノクに襲われるような事があつた場合、彼女たちを余り危険に晒したくなかった。

「…どうしても？」

「まあな」

「…そう」

巧はそのまま「じゃあな。気をつけるよ」と言いながら里に戻ろうと踵を返した。

次の瞬間――

「……何のつもりだ」

「私にも色々と都合があるから。ここで帰られるとちょっと困るのよ」

歩を進めようとした巧の首筋にナイフを当て、口調をラフな物にして告げてくる咲夜。

その視線は『絶対に帰さない』と物語っていた。

とは言ってもこのまま黙っている巧ではなく、首筋に当てているナイフを叩き落そうと振り返りつつ右腕を振りかざした。
しかし――

「……!？」

巧は我が目を疑った。

つい一瞬前まで首筋に当てられていたナイフは消え、代わりに無数のナイフが宙に浮き、自分に狙いを定めていた。

油断していたわけではない。かと言って目を瞑ったわけでもない。

一瞬だった。ほんの一瞬の間に巧は無数のナイフに囲まれてしまったのだ。

「私もね、余り力ずくなんてことはしたくないのよ」

どの口が言いやがる、と巧は咲夜の言葉にそう思わざるを得なかった。

といっても、例えば口にしたところでこの状況が変わるわけでもない

ので黙っていた。

——そうしてどれくらい時間が経っただろうか、巧がハア、と観念したような溜息をついた。

「……わーっ たよ。行つてやる」

こうなつたら呼び出した本人に文句の一つや二つでも言つてさっさと歸つてやろう。

そんな巧の思いをよそに、その返答に満足したのか咲夜は巧を囲んでいたナイフを一瞬のうちに仕舞いこんだ。

そしてそのまま自分の後ろ——人里とは正反対の方向に手をかざした。

「じゃ、着いてきて頂戴。紅魔館へ案内するわ」

こうして巧は急遽、『悪魔の住まう館』紅魔館へ向かうこととなった。

霧の湖、紅魔館のある孤島

十六夜咲夜は上機嫌だった。

何せ手詰まりと感じてた矢先に目標——ファイズが向こうからやつて来た上、紅魔館へ招待することに成功したのだから。

（それにしても、こんな男がファイズだったなんてね）

そう頭の中で呟く咲夜の後ろにはムスツとした表情をしながら彼女の後ろをついてくる巧の姿があった。

そしてファイズ——乾巧という男について考えを巡らせていく。
新聞ではファイズは人間や妖怪を襲うオルフェノクを倒していると
あったが、その人間性については書かれていなかった。…まあ、正
体が書かれなかったのだから当然だが。

そして当のファイズ——巧といえば、いかにも不機嫌な顔で碌に口
をきこうとしなかった。

メイドという立場上、咲夜から口を開く事は殆どしなかったが、外
来人である巧も殆ど口を開こうとしなかった。

先程時間を止めたことに関して、「あれは何だ」とか、「一体何を
した」などを聞いてくると思っていたが、巧はムスツとした顔で一
切聞いてこようとしなかったため、表には出さないものの、咲夜は
若干拍子抜けしていた。

——そういえば霧の湖に差し掛かった時、ようやく巧の方から声
を掛けてきた気がするわね。

『おい、橋が無いぞ。どうやって渡るんだよ』

『勿論、飛んで行くのよ』

『…俺は飛べないぞ』

『なら抱えて行こうかしら？変な所触ったら刺すけど』

そう言えばあの時には奇妙な物を見たものだった。

その言葉を聞いた巧は眉を更に寄せながらバイクを降りた次の瞬間、
『ばとるもーど』という声をバイクが上げたかと思った途端、その
形は2メートルほどもある人形へと変形していた。

『…こいつに運んでもらう』

そう言いながら巧は人形——オートバジンの肩の部分を押いていた。

そうして巧がオートバジンに抱えられて咲夜と共に霧の湖を渡っている最中、氷精が「アタイの縄張りに入って来たなー！」と勝負をひっかけてきた。

しかし相手をするのが面倒だった咲夜は――

『…入口は一つで、出口が三つのモノは？』

『え？う、うーんと…』

『行くわよ』

『……おっ』

『うーん…』

適当なナゾナゾを出し、悩んでる隙にその場を後にしたのだった。そんなことを思い返してるうちに二人は紅魔館の前に辿り着いていた。

「ただいま、美鈴」

咲夜は門番をしている女性――紅美鈴に声をかけるが――反応がない。

まさか、と思いながら彼女に近づいていくと――

「……………ぐう」

案の定、彼女は昼寝をしていた。

美鈴が仕事の最中に昼寝をすることは今に始まった事ではないが、一応客を招いている時に昼寝をするのは正直やめてほしかった。

「うーん……まってくださいよお…咲夜さぁん…」

何が待って下さいだ。一体どんな夢を見てるんだこのサボリ魔は。沸き上がってくる怒りの中、咲夜はそう思った。

「門番が寝るなんて、よっぽど警備に自信があるんだな？」
巧が言うが、その声質と表情から嫌味を言ってる事が十分理解できた。

腹立たしいので起こすついでにお仕置きしようと思った咲夜は刃の潰したナイフを数本、美鈴の頭に向かって全力で投げたのだった。

「ここで暫く待っていて頂戴。お嬢様の準備が済んだら呼びに来るわ」
そう言われ、巧は通された一室の中で一人取り残された。

乾巧は不機嫌だった。

日課となっている見回りの最中に咲夜と名乗ったメイドを助けたかと思ったら、その咲夜にナイフを突き付けられ、ほとんど強制的にここ紅魔館へ連れてこられたのだから。

——何がお嬢様が会いたがってるだ。こっちは知らない奴になんか会いたくも無いんだよ。

おまけにそのお嬢様とやらは「今はお休みになってるから暫く待っていて頂戴」ときやがった。
これじゃさっさと帰ろうにも帰れねえじゃねえか。

大体何だよこの屋敷。

『紅魔館』とは言っけどいくらなんでも紅すぎるだろ。
外壁は殆ど紅一色だし、中も家具とか除けば紅だらけで目が痛えし、住んでるやつのがしれねえ。

まさに愚痴のオンパレード。

頭の奥から沸々と沸いてくる愚痴を呟きながら、巧は出された紅茶を冷ましていた。

—— そうだ、大体紅茶も気に入らねえ。

そして巧の愚痴の対象は今日の前にある紅茶にも向けられた。

俺は熱いのは苦手なんだよ。どうせなら冷たいお茶出せよ全く。

… そっぴいや本当なら今頃は阿求の奢りで美味いって評判の羊羹を食ってた筈なんだよな。

それがなんで熱い紅茶を冷ます羽目になっちまうんだよ。納得いかねえ。

咲夜からしてみれば、客人にお茶を出すのはメイドとして当然の対応だったのだが、不機嫌さが募っている巧の頭からはその事は転げ落ちていた。

「……おい、そこに居る奴。なんか用か」

—— やがて、紅茶を冷ましていた巧は入口のドアに向かってそう言葉を発した。

実際は数分前から気付いていたのだが、わざわざ声をかけるのも面倒くさいと思った巧はそのまま無視していた。しかし、いつまでもこちらの様子を窺っていたため、いい加減適当に相手をしてやろうと思ったのだった。

「……あはっ、すごいすごい！どうして気付いたの？ 気配消してたのに」

その言葉と共に部屋に入って来たのは幼い少女だった。金髪をサイドポニーに纏め、赤と白を基調にした洋服に身を包んでいた。

ここまで言えば人間の少女と見間違えるかもしれない。だが、この少女の背中には人外の証拠となる羽が生えていた。

しかもその羽の翼があるべき部分には宝石がぶら下がっていた。青、赤、黄、緑と様々な色の宝石だった。

「……ちよつと鼻が利くからな」

そんな少女の言葉に、巧はぶっきらぼうながらも言葉を返している。

巧が少女の存在に気付いた理由は一つ、——血の臭いを感じたからだ。

目の前の少女——いや、紅魔館に足を踏み入れた瞬間から巧は血の臭いを感じていた。

無論、今まで幻想郷で血の臭いを感じなかったという事は無かった。知能の低い獣のような妖怪からはむせかえるような血の臭いがしたし、慧音からも、文やにとりのような妖怪からも、若干ではあるものの血の臭いを感じた。

だが彼女たちと接した巧は、彼女たちが決して好き好んで血を浴びてきたわけではないとわかっていた。

しかし、目の前に居る少女からはその外見には似つかない程の血の臭いを感じていた。

そこで巧は慧音の話を思い出していた。紅魔館に住むのは吸血鬼の姉妹である、と。

吸血鬼——西洋の妖怪では最もポピュラーな存在である。

とすれば口にするのはその名の通り——『血』。

するとこの少女は吸血鬼で、この血の臭いは彼女が今まで吸ってた血なのではないか？巧はそう思い至った。

「お鼻が利くの？お犬さんみたい！」

そんな少女は巧の考えをよそに、純粹そうな目を向けてきた。

こんな純粹そうな少女が吸血鬼なのか、と巧は思わずにはいられなかった。

「私フラン！フランドール・スカーレットっていうの。貴方の名前は？」

そして少女——フランドールは自分の名前を言いながら巧の手を握ってきた。

「……乾巧だ」

それに対し、自分の名前も名乗る巧。

が、フランドールは物珍しそうに巧の手をつついていた。

「……おい、何してんだ」

「え？だって紅魔館に霊夢や魔理沙以外の人間が来るなんて珍しいんだもん」

巧の問いにきょとんとした顔で答えるフランドール。

そう答えたかと思うと彼女は再び表情を明るくしていった。

落ち着きのない奴だ、と巧は思った。

「ねえねえ！巧はどうして紅魔館に来たの？」

フランドールははしゃぎながら巧に尋ねてきた。

巧はそれに答えようと思い、ここに来た経緯を思い返していくと——
——段々イライラしてきた。

思えばあのいけすかないメイドに殆ど強制的に連れてこられたのではないか。

その事を思い出していくごとに巧の顔は不機嫌さの詰まった、険しいものになっていった。

それに応じるように、巧を見つめていたフランドールの顔も訝しげな物へなっていた。

「どうしたの？」

「…ここに来た事を思い出したら腹が立ってきた」

そうして巧は紅魔館に来た経緯をぼつぽつと口にしていった。

時は遡り、巧と咲夜が紅魔館に向かい始めてから数分後――

森のとある場所で、地面が波打ったかと思うとその場からファイズから逃げ延びたマッドスキパーオルフェノクが現れ、その身体を二十代前半の茶髪の青年の姿へと変えていった。

「はあっ、はあっ。――くそっ、ファイズめ…！」

そう言いながら、青年はその顔を怒りに歪ませながら地面に拳を何度も打ちつけていった。

今日は運が悪い日だ、と彼は思った。

ターゲットをつけていたらターゲットに気付かれた。ターゲットを襲ったらファイズに邪魔された。そしてファイズには殺されかけた。何をしてもし上手いかなかった。ファイズさえ、あいつさえ居なければ…！

青年がファイズに対して憎しみと八つ当たりの感情を抱いていた時

「たつく…お前は人の話をちゃんと聞いてなかったのかね」

その言葉と共に、森の奥から一人の男性が現れた。

サメのようなネックレスを着け、黒髪をオールバックに纏め、サングラスをかけた男だった。

「さ、鮫嶋さん……。お、俺は上手くやってみましたよ！あそこでファイズの邪魔が入らなけりや——」

青年のその言葉を遮るように、サングラスの男——鮫嶋と呼ばれた男は青年の頭を鷲掴みにした。

「馬鹿やろお…そこじゃねえだろ？」

青年の顔を自分に近付け、サングラスの下でぎらりと睨むように鮫嶋は言った。

「俺がお前に命じたのは『十六夜咲夜を紅魔館まで追跡し、紅魔館の詳しい戦力を調査しろ』だったろ？それがなんだ、あんなにあっさり気付かれた上に追跡対象を殺そうとしやがって…お前は調査つてもんをなめてんのか、ああ？」

ドスを効かせた声で頭を掴む力を強め、それに対して青年は「ひいっ」と小さな悲鳴を上げていた。

「…もういい、お前は帰れ。この仕事は別の奴にやってもらっ」

やがて、その言葉と共に鮫嶋はこの場から立ち去ろうとした。その目からはもはや青年に対する感情は消え失せていた。

「そ、そんな……！ま、待って下さい、鮫嶋さん！」
しかし青年はそんな鮫嶋の足にしがみつき、懇願した。

「お願いします！お、俺にもう一度チャンスを！今度はしっかりとやり遂げます、見捨てないでください！」

青年の言葉は所々涙声になり、見捨てられたくないという必死さが表れていた。

「……………」

それに対して鮫嶋はしばらく考え込み、やがてその口元をほんの少し、ほんの僅かに緩めた。

「…そうだな、ならもう一度お前にチャンスをやろう」

時は戻り、紅魔館――

「へえ…巧って新聞に載ってたあのファイズなんだ」

「…まあ、一応な」

巧は自分が紅魔館に来た経歴をフランドールに話し終えていた。
森の中で咲夜を襲おうとしたオルフェノクと闘った事。その咲夜にほとんど無理やり連れてこられたことを話していた。

「じゃあ巧って強いの？」

「…さあな。俺はそうは思わねえけどな」

巧は自分が強いのかは微妙だと思っていた。

確かに、数年間における戦いから並みのオルフェノクにはそう簡単に負けないだろうと思っっているが、いつやられてしまうか、若しくは仲間を守れなくなるのかわからないのだ。

フランドールに対する言い方も、結局は巧が自分に自信が持てないところから来ていたからだ。

「…そうだ！ねえ巧、私と遊ばない？勝負しようよ！」

そう思っていると、不意に、はつきりとした声でフランドールはそう言った。

「…はあ？何でだよ、俺はいやだ——」

「私に勝てたらお姉様に早く帰してあげるように言っただけだよ？」

フランドールの言葉が巧の言葉を遮り、そう告げた。

さっさと帰ったかった巧にとってこの条件は魅力的ではあった。

何より、フランドールの遊びたそうにうずうずしている目が断るに断れない雰囲気にしたため、『まあ子供の遊びに付き合っただけでいいか』と己を納得させることにした。

「…仕方ねえな。何するんだよ」

巧のその言葉に、「うーんと、うーんとね」と考えながら窓際に歩いていくフランドール。

やがて窓際に辿り着くと振り向き、こう言った。

「…やっぱり、遊びと言ったら弾幕ごっこだよね！」

次の瞬間、巧の目の前に色とりどりの弾幕が放たれた——

（さて、お嬢様の方も準備が済んだし、巧を呼ばないね）

咲夜は今、巧を待たせている部屋に向かって歩いていった。

仮眠をとっていたレミリアはファイズを連れてきたと知った途端、
「すぐにお茶の用意をしなさい」と言い、身嗜みを整えていた。

ちなみにレミリアの『身嗜み』は最近では『どう見せる事で如何に
カリスマっぷりを発揮できるか』ということになっており、本人は
ここ最近薄くなりつつある自分のカリスマ度（？）のことを大変気
にしているようだった。

しかし、咲夜にとってはそんな主の姿を見るのが不満どころか秘か
な楽しみになっている………というのは彼女だけの秘密である。

（……やっぱり、一言くらいは謝っておくべきかしら？）

彼女が思ったのは、巧を誘う際、ナイフで彼を囲んだ事。

後になって来ると流石にアレはやりすぎだったか、と思ってしまう。
咲夜からしてみれば、いくらレミリアの命令の方が優先的であると
言っても、仮にも自分を助けてくれた相手に対してアレは無かった
かもしれない。

とりあえず一言くらいは謝っておこう。そう思いながら巧のいる部
屋へ近づいた時。

——バンッ——！！

派手な音を立てながら、巧がドアを蹴破ってきた。——必死の形

相で。

「ちょっと、どうしたの!？」

何があったのか、と思ったがその答えはすぐに分かった。

——巧を追うように部屋から出てきた、見覚えのありすぎる弾幕によつて。

「ちょっとー！勝負にならないじゃない！」

そして咲夜の予想通り、部屋から続けて不満そうな顔をしたフラン
ドールが飛び出してきた。

彼女の言葉とこの状況、二人が弾幕ごっこをしているのは明白だった。
とは言え、このままでは巻き添えを食らうので咲夜も巧の横を併走
して逃げる事にした。

そしてそのまま、咲夜は巧に声をかけた。

「何で貴方と妹様が弾幕ごっこをしているの？」

「知るか！あいつが遊んでほしいって言ったら何故かこうなったん
だよ！」

その言葉で咲夜は理解した。

フランドールが好きな遊びといえば一番最初に弾幕ごっこが出てく
る。以前魔理沙がやって来た時も彼女と弾幕ごっこをしている姿を
見た事がある。

そして、その事を全く知らなかった巧に「遊ぼう」と言って、彼が
それを了承した結果がこれなのだろう。

とは言え、このまま逃げていても埒が明かない、そう思っていると

「ねーっ！何で弾幕出さないのー？」

フランドールが、今しがた咲夜が巧に尋ねようとした事とほぼ同じ内容の問いを彼に投げかけた。

「俺はそんな万。ビ。リシ。ーみたいな真似出来ねえよ！」

「え、そうなの？」

巧の返答にフランドールは『え、嘘、マジ？』みたいな顔をして弾幕を一旦出すのをやめた。

巧と咲夜が辺りを見回すと、三人はいつの間にか小広いホールの中まで来ていた。

フランドールの手が止まったこの隙に、咲夜は彼女に呼び掛けた。

「妹様、彼は弾幕が出せないようですし、一旦お止めになりませんか？」

「うー……でも、このまま終わるのもつまないし……そうだ！」

少し悩んだかと思っただけ何かをひらめいたような表情をするフランドール。

巧はそれに対して嫌な予感をし、咲夜もまた同様だった。

フランドールの顔は……そう、まるでレミリアが無茶を思いついた時と同じものだった。

「私の弾幕から三分間避け切れたら巧の勝ちってことでいいよね！」その言葉と共に、フランドールの弾幕が再び放たれた。

巧はそれを防ぐために近くにあった柱に身を隠し、咲夜も弾幕を避けつつ同じ様に柱に身を隠した。

しかし、二人が身を隠した柱は弾幕によってどんどん削られていき、盾としての役割を果たせなくなるまで時間はそう掛かりそうになかった。

「おい、何とかなんねえのか!？」

「……さつきから思ってたのだけれど、貴方がファイズに変身すれば少しくらいは対抗できるんじゃないの？」

咲夜はここで自分の中にあつた疑問を口にした。

部屋から出てきた時もそうだが、ファイズに変身していればわざわざ逃げる必要も無かったのではないかと思っていた。

しかし今の巧はファイズに変身せずにこうして不利な状況にある。

咲夜はそれが疑問に思っていたのだが――

「あいつがやってんのはただの“遊び”だろ。そんなことにファイズの力を使つてられっかよ」

巧は慧音たちから聞いていた。幻想郷で行われる『弹幕ごっこ』はあくまで遊びなのだ。

弹幕ごっここの弹幕は相手を余り傷つけないようにされたものだ。巧自身、逃げる最中に流れ弾が当たった時痛みは感じたものの、致命傷と言うには程遠かったのでそれが良くわかっていた。

ファイズはあくまで命を、夢を守るための戦士である。巧はそう考えていたため、弹幕ごっこでファイズに変身する気は毛頭なかった。

――とはいえ、どうやってこの状況を乗り切るか。

オルフェノクになるなど論外であるし、自分は弹幕など出せない。

三分という制限時間にくれたのはありがたいが、盾にしている柱はそろそろ限界が来そうであるし、出ていった所で弹幕の集中砲火を喰らうのがオチだろう。死にはしないだろうが、喰らってみると結構痛いのだ。

そこまで考えていると――

「…仕方ないわね。手を貸してあげるから三分持ちこたえなさい」
咲夜が声をかけてきた。

「…何のつもりだ？」

「別に。ただ貴方が妹様を傷つけたくないというのはわかったし、お嬢様の下へ貴方を連れていかなければならないからね」

その為にまず妹様を止めないと。そう続けながら咲夜は柱の陰からフランドールを見やった。

当のフランドールは「早く出てきてよー！もう柱持たないよー！？」と不満げな顔で二人に呼び掛けながら弾幕を放っていた。

咲夜はそれを見て、巧に呼び掛けた。

「いい？タイミングを合わせてね」

残り時間、二分。

「むー…出てきてくれなきゃつまんなーい」

一方、フランドールは二人が柱に隠れたまま何もアクションを起こしてこないため、不満が積もっていた。

段々痺れがきてきたのか、いつそのこと柱を一気に壊してしまおうかと思った時――

「…あつ！」

柱の両脇から咲夜が使ってるナイフが数本、フランドールに向かって放たれた。

それを確認したフランドールは嬉しそうな表情をしながらナイフを撃ち落としていった。

「あははっ、咲夜も一緒に遊んでくれるの？」

その言葉に応じるように柱の右側から咲夜が飛び出し、その反対側から巧が出てきた。

咲夜のナイフを撃ち落としていたことにより、少々薄くなったフランドールの弾幕を掻い潜りながら巧は近くの柱から柱へとフランドールの目を攪乱させるかのように駆けていった。

そしてそんな巧をフランドールに追わせないかのように、咲夜はナイフの弾幕を放ち続けた。

「きゃははっ！面白いね！それじゃあ…私もちよっと本気だそっかな？」

——禁忌『フォーオブアカインド』

そのスペルカードを宣言した途端、フランドールが四人に分身した。しかもそれぞれが全く違う動きをしているため、傍目にはどれが本物なのか見分けがつかなかった。

「残り時間はあと一分」

「このまま負けるのはつまらないから」

「おっきいのをドカンといくよ」

「二人はこれが」

「……よけられる？」「……」

四人のフランドールは言葉を紡ぎ終わると四方を向いて片手を掲げ、魔力を集中していった。

するとその魔力は次第に剣の形になっていった。

咲夜はマズイ、と思った。

妹様があのスペルを発動されたら瓦礫の撤去に追われることになってしまうし、巧が無事で済むかわからなくなってしまう。

弾幕ごっこ用に威力を合わせているだろうから多分死にはしない…とは思うが。

(…全く、早くしなさいよ。無事では済まなくなるわよ)

咲夜が心の中で呟いた時、完成された炎の魔剣を四人のフランドールが振りかざそうとしていた。

「……いっくよー！禁忌『レーヴァテイン』——」「……」
「させるかっ！」

振りかざそうとした瞬間、フランドールの目の前の柱から巧が勢いよく飛び出してきた。

それに気付いたフランドールは一瞬動きが止まったものの、その顔はすぐさま笑みへと変わった。

「すごいね！真正面から来るなんて！」

「弾幕が出せないって言うからずっと隠れてると思ってたのに！」

「巧みたいな人間、初めて！」

「そんなに度胸があるなら受けてみて！禁忌『レーヴァテイン』！」

その言葉と同時に四人のフランドールの魔剣は一つになり、巨大な魔剣となったそれは巧に向かって放たれた。

巧は向かって魔剣に対して避けるような動きを取らず、走るスピードを緩めようとしなかった。

そして魔剣が数メートルまで迫ったところで、巧は新たな動きを見せた。

「……っ！」

魔剣を飛び越えようとするかの勢いでジャンプした。

とは言っても当然のように飛び越えるには高さが足りず、このままでは魔剣の直撃を喰らうだろう。

その瞬間――

「メイド秘技『操りドール』」

魔剣の目の前、その射線上に無数のナイフが現れた。魔剣を向かい撃つかのように。

「咲夜!？」

「申し訳ありません妹様。このまま壁に当たったりでもしたら仕事が増えてしまいますので」

咲夜がそう言って頭を下げた瞬間、無数のナイフと魔剣は衝突し、凄まじい魔力の爆風が生じた。

そして巧はその爆風に上手く乗り、先程とは比べ物にならないスピードでフランドールに接近していった。

それにフランドールが黙ってるわけもなく、巧に対して弾幕を放ち、空中で身動きの取れない巧は腕を盾にして弾幕を防ぎつつ、段々とフランドールに近づいていった。

そして四人のフランドールと巧の距離が間近まで迫った時、巧は懐からある物を取り出した。

それは――

「……咲夜のナイフ？」

咲夜が普段使用している、銀製のナイフだった。

巧はその三本のナイフを四人の内三人のフランドールに対して投げた。至近距離で放たれたそれはフランドールたちに避ける暇を与えず、ナイフに刺された三人のフランドールは霧のように消えていった。

「っ！」

フランドールは咄嗟に巧に魔力を籠めた腕を突き出し、巧は持っていたもう一本のナイフをフランドールの目前で止めた。

静寂が辺りを包み、先に口を開いたのはフランドールだった。

「……どうして私が本物だってわかったの？」

「言っただろ、鼻が利くんだよ」

巧はナイフを投げる際、どれが偽物なのか悩む素振りを全く見せなかった。こんなことは本物がどれなのか確証がなければ不可能だったろう。

しかし巧は彼女が分身した時点でどれが本物なのかはっきりと認識した。

偽物の三人の匂いはまるで生きているのかいないのかわからない様な、酷く希薄な匂いだった。そのため、巧にはどれが本物のフランドールなのかはっきりと認識できたのである。

「……そう、そこまでお鼻がいいなんて思わなかったなあ……でも、」

——勝負は私の勝ちだね。

「……らしいな」

その言葉と同時に、巧が持っていたナイフは切っ先からボロボロと崩れていった。

二人の腕が交差する瞬間、フランドールは極小さな弾をナイフに命中させていた。その効果が今になって現れた、と言うことだろう。今の巧は丸腰、対してフランドールは突き出している手からいつでも弾幕を発する事が出来る。勝敗の結果は目に見えて明らかだった。

「……わーったよ。降参だ」

「えへへー。もうちょつと凌げたら勝てたのにねー」

その言葉と共に、巧はやれやれと言いたげな顔でその場に座り込んだ。

——結局、骨折り損のくたびれ儲けだったか。

遊び——弾幕ごっこに自分は負けたのだからフランドールが姉に自分を早く帰してくれるように掛けあう話は無しになった。——もともと、彼女の様子から本気だったのかどうかはわからないが。

巧がフランドールの方を見ると、彼女は楽しい遊びを終えた直後の子供のような達成感のある表情をしていた。その外見に良く似合う、無邪気な笑顔を。

（……ま、別にいいか）

そう思い、立ち上がるうとした時——

「……さて、話は終わったのかしら？」

二人の後ろから怒りを堪えるような声が聞こえ、振り返るとそこに

は蝙蝠のような羽を生やし、フランドールと同じくらいの背丈の少女が顔を引き攣らせながら仁王立ちしていた。

「あ、お姉様。どうしたの？」

少女——レミリアに対してフランドールが呑気な声で答えた。それに対してレミリアは青筋を浮かべながら口を開いた。

「……ファイズが来たって言うから身嗜みをして待っていたのに、大きな音が聞こえてきてそこに向かったらボロボロのホールに妹とメイドと見知らぬ男が居たのよね……」

引き攣ったような声のレミリアの言葉を受け、辺りを見回した巧の目に入ったのは来た直後の綺麗なホールとは違い、瓦礫があちこちらにある“ホールだった”空間だった。どう見ても原因は間違いなく弾幕ごっこをしていた自分たちである。

フランドールもその事に気付いたのか、「あ、あはははは……」と力なく笑った。

そして見回してる最中、出口に向かってそーっと移動する咲夜の姿が目に入った。

逃げる気かあの女。

「……さて、家を散らかすような悪い子にはしっかりと“お説教”しないといけないわね？」

レミリアは目が全く笑っていない、俗に言う『黒い笑顔』をしながらそう言った。

と言うより瞳孔がとんでもなく細くなっている。

——はつきり言って、怖い。

巧とフランドールは同時にそう思った。

——紅魔館敷地内、裏口付近。

地面が波打った次の瞬間、マッドスキッパーオルフェノクが地面から這い出てきた。

「へへ…侵入成功つ、と」

マッドスキッパーオルフェノクは辺りを警戒しながら、数時間前に鯨嶋に言われた事を思い出していた。

『紅魔館に侵入して好きなだけ暴れる…ですか？』

『そうだ。侵入したら後は何やってもいい。とにかく暴れまくるんだ』

『そ、それだけでいいんすか？』

『ああ、これはお前にしか出来ないことだ。まかせたぞ』

『はっ、はい！！』

——この仕事ができれば、俺は鯨嶋さんに認めてもらえる。あの人の口添えでもつと良い所に行ける…！

“仕事”に対する意気込み、未来に期待しながら辺りを見回していた彼の目に入ったのは、仕事をサボっていた複数の妖精メイドだった。彼女たちはマッドスキッパーオルフェノク存在に気付いていないようである。

「くくく…さて、仕事を始めるか」

歪んだ笑みをこぼしながら、マッドスキッパーオルフェノクは彼女

たちに向かって歩を進めていった。

第7話 吸血鬼の姉妹（後書き）

皆さんこんにちは、コラッタです。

第7話、如何だったでしょうか？こうして書いていると自分の文章の下手さ（特に戦闘シーン）に軽く鬱になってしまったりもします。こうした方がいい、ああすると良くなるんじゃないかと思いましたら、アドバイスいただけるとコラッタは嬉しさのあまりラッタに進化するかもしれません。

また、今回からオリジナルオルフェノクの解説をしていこうかと思っています。

といっても都合が合わずに解説なしになることもありうるので予めご了承ください。

マッドスキッパーオルフェノク

茶髪の青年が変化する、ムツゴロウの特性を持つオルフェノク。常時開いている魚のような口からは、厚さ50センチの鉄板を砕く威力の泥玉を発射することができる。さらにこの口から出る液体は地面を底なし沼のような泥に変質させる事ができ、ここから地面に潜って地面の中を自由に移動する事ができる。

こんな感じでしていこうかと思います。

今回はこの辺で、それでは。ノシ

第8話 前門の鮫、後門の鯨（前書き）

やっとできた……

実はリアルの方でテストなどがあり、更新がここまで遅れてしまいました。

その辺に關しての報告を怠ったことを、この場を借りて謝罪させていただきます。

それでは第8話、どうぞ。

第8話 前門の鮫、後門の鯨

——紅魔館、正門。

「ふわあ〜っ……………眠い…」

門番、紅美鈴が眠たそうにしながら大きく背延びをしていた。

…この門番、先程お仕置きされたばかりであるのにまだ懲りてないようである。最も、このような光景は紅魔館を知る者にとっては日常茶飯事であるのだが。

そして美鈴は眠たげな眼で門の傍に停めてあるバイク——オートバジンに目を向けた。

これは咲夜が連れてきた青年——巧が置いていったものだった。

美鈴が咲夜のお仕置きを喰らって悶絶している際、痛みに堪えていた彼女の目に入っただのは呆れたような目をしていた巧だった。

美鈴は巧の事を知らなかったが、「咲夜さんが連れてきた人だからそんなに危険な人物じゃないだろう。敵意も感じなかったし」と思っていたため、さほど気にしていなかった。

そうして美鈴が自らの眠気と戦ったり戦わなかったりしていると――

「……………!!」

——何者かの気配を感じ、さっきまで襲っていた眠気はすぐに消え去った。

美鈴は気配を感じた方向——門の正面の林に警戒心を向けた。

彼女が感じたモノは迷い込んだ人間の気配でも、知能の低い低級妖怪の気配でもなかった。

破壊衝動をその身に抑え込んだような…獲物を仕留めるために波を立てずにゆっくりと迫って来る獰猛な鮫のような気配だった。

——やがて、その気配の持ち主が彼女の視界に入った。

「ようお嬢さん、ここは紅魔館で間違いないかな？」

それは黒髪をオールバックに纏め、サングラスをかけた男だった。男と相對したことで、先程の気配の持ち主は間違はなくこの男だと美鈴は確信した。

「…ええそうですよ。ここは吸血鬼が住まう館、紅魔館。アポも取っていないようなただの人間にはお引き取り願いたいのですが」

男の質問に答えつつ、腰を落として警戒する美鈴。

彼女は男の事を『ただの人間』と言ったが、内心では人間であると全く思っていないかった。

姿かたちは人間そのものだが、人間はこんな禍々しい気配は出さない。そう思っていたからである。

そして男は美鈴の言葉に小さく笑い、口を開いた。

「ククク…何、心配するな。用があるのはあんたなんだよ『紅美鈴』」

「…私？」

美鈴の疑問に「ああそうだ」と返した男の身体に紋様が浮かび上が

り

「——悪魔の館の門番の実力とやらをこの目で確かめておきたくてな」

男——鮫嶋の姿は鮫の特性を持つ、シャークオルフェノクに変化した。

「どうかしら？咲夜のお茶の味は」

「熱くて飲めたもんじゃねえな」

——紅魔館、応接間。そこには三つの人影があつた。

一人は館の主、レミリア・スカーレット。彼女は客人にメイド長が入れた茶の味の是非を尋ねていた。

もう一人はメイド長こと十六夜咲夜。こちらはレミリアの傍で静かに佇んでいた。

最後の一人は客人こと乾巧。彼はお茶の味について何も言わず、『熱い』とだけ返した。

理由は簡単、彼が重度の猫舌だからである。

「あらそう？…なら咲夜、フーフーしてあげなさい」

「畏まりました」

その言葉と共に、巧の手の中にあつた紅茶はいつの間にか咲夜の手の中に渡り、彼女は息を吹きかけるべくその若々しく程良い艶のある小さな唇をカップに近付けていき——

「それくらい自分でできるっての。余計なお世話だ」

息を吹きかける直前で巧はカップを奪い返し、自分でフーフーして

いった。

「せっかく美人メイドがフーフーしたお茶を飲めるところだったのに、勿体ない事したわね」

「…お前、楽しんでるだろ」

「当然よ。何事も楽しまなければつまらないもの」

そう語るレミリアの表情は良いからかい相手を見つけた子供のような顔だった。

フランドールとの弾幕ごっこ（仮）を終えた巧は彼女と共にレミリアから説教を喰らった。その後巧がファイズだと知ったレミリアは彼をお茶に誘い、フランドールは遊び疲れて満足したため自らの部屋へと帰っていったのである。

「『また一緒に遊ぼうね！』ですって。よかったわね、可愛い妹に気に入られて」

「…弾幕ごっこは勘弁だけどな」

「つれないわね、レディのお誘いには応えてあげるべきじゃなくって？」

「俺はそんなガラじゃねえからな」

残念ね、と言いながら紅茶を啜っていくレミリア。

巧はそんな彼女を眺めながらようやく飲める程度まで冷めた紅茶を口につけ、あることを尋ねた。

「…おい」

「何かしら？」

「…お前が飲んでるそれ、血が入ってるのか？」

巧は紅茶を出された時点で、自分の茶とレミリアの茶の間にある決

定的な違いに気付いていた。

自分の紅茶に無く、レミリアの紅茶にあったモノ、それは血の匂いだった。

そこで巧は自分の目の前に居る少女が吸血鬼である事を思い出していた。

「よくわかったわね。流石はファイズと言ったところなのかしら？」
「茶化すな。…聞きたい事がある」

そう言う巧の表情は視線を鋭くした真面目なものだだった。
それを察したレミリアは楽しげだった顔を控え、口を開いた。

「何かしら？」

「…お前にとつて、人間って何だ？…ただの食料に過ぎないのか？」

幻想郷の妖怪は人間を食料にするものが多いと聞いていた。吸血鬼もその例に洩れず人間の血を食料にしているのだらう。

そうしなければ生きていけないというのもわかってる。しかし、だからと言って無暗に命を奪っていいとは考えてなかった。

もし、この少女が自分が生きるために何の罪もない人々の命を、夢を奪っているのだとしたら。

それは、巧にとって何物にも許され難い事だった。

「……………そうね——」

一拍置き、レミリアがその問いの答えを口にしようとした時——

「失礼いたしますっ!!」

一人の妖精メイドが、緊迫した顔持ちで部屋になだれ込んできた。

その場に居た全員が彼女の方を向き、代表して咲夜が口を開いた。

「どうしたの。何かあったのかしら？」

「侵入者です！灰色の怪人が…オルフェノクが！メイドたちを手当たり次第に襲っています！」

その言葉にこの場に居た者たちの顔が険しくなり、咲夜が促しを促した。

「…それで、被害と状況は？」

「は、はい！敵は裏庭に突如現れ、現在は館内裏口付近でパチュリ様が迎撃しています！…それで…被害の方は…」

メイドは顔を青くしながら口ごもっていた。

巧はその様子に不吉な予感をし、彼女は続きを発した。

「……メイドが数人、胸を貫かれて…灰になりました…」

その言葉を聞いた途端、巧はファイズギアを手に部屋を飛び出した。後ろの方で咲夜が何か言っていたが巧はそれを無視した。

——彼女たちは人間を喰らっているのかもしれない。

ひょっとしたら、罪もない人間の命を奪っているのかもしれない。

それなのに、自分は彼女たちを助けようとしている。——何故？

答えはすぐに分かった。彼女たちはただ『日常を送っている』だけなのだ。

人間を食べるというのは納得できるわけがない。しかし、それを除けば彼女たちは何てことの無い、普通の日常を送っているだけなのだ。

…それに、被害を口にした時のメイドの顔。

あれは仲間が死んだ事による悲しみ、戸惑い、怒り、そして恐怖に満ちた顔だった。

巧は、そんな顔を見るのが嫌だった。

自分が倒してきたオルフェノクの仲間もあのような顔をしてきたのかも知れないが、それでも見ていい気分になる顔ではない事に間違いは無かった。

だから巧は戦う。例えオルフェノクを倒し、彼女たちを守る事が罪だとしても。

必要な時に戦わなければ、多くの命が、夢が奪われていくから。気付いた時には、巧の脳裏には5、6年前に誓った、あの言葉が浮かんでいた。

戦う事が罪なら、俺が背負ってやる――

「まったく…先に行ってしまうなんて…」

巧が走り去った後の応接間。

そこには呆れた顔の咲夜、突然の事に戸惑いを見せるメイド、そして何か考えてこんでいる表情のレミリアが取り残されていた。

巧の行動に感心と呆れの感情を抱いていた咲夜だが、すぐに自らの役割を果たすため、現場に向かおうとした。

「お嬢様、私も現場の方に行つてまいりま――」

「失礼いたします!!」

——そう、現場に向かおうとした矢先に別の妖精メイドが飛び込んでくるまでは。

新しく来たメイドは美鈴の部下の、門番隊のメイドだった。

「…貴方は門番隊の者ね？何があつたの？」

この状況下でまだ何かあるのかとうんざりせずにはいらなかったが、状況を把握しなければと思った咲夜は息を切らせた門番隊のメイドを落ち着かせ、話を聞こうとした。

「敵襲です！正門前に現れたオルフェノクが現在美鈴さんと交戦中です！」

「…何ですって？」

彼女の報告が正しければ、現在この紅魔館は二体のオルフェノクに挟みうちに遭うかのように襲撃を受けている事になる。

それに美鈴と『弾幕ごっこ中』ではなく、『交戦中』となると正門に現れたオルフェノクはそれなりの実力を持っているのかもしれない。

巧が勝手に向かった裏口付近のオルフェノクと、美鈴が交戦している実力者と考えられるオルフェノク。

どちらに向かおうかと考えていると——

「咲夜、貴方は正門の方に向かいなさい」

今までこの場を静観していたレミリアがそう発した。

「お嬢様？」

「貴方は美鈴と共に正門の敵を片付けなさい」

そう言いながら、部屋のドアに歩いていくレミリア。
その顔は――

「私は――可愛い従者たちに手を出した愚か者を片づけに行くわ」

――獰猛さと、怒りが混じり合った顔だった。

――紅魔館内、裏口付近

「…どう？」

「大丈夫です。見失っています」

普段は主に咲夜によって清潔に保たれているそこは、今や瓦礫などによってその元の姿とは遠くかけ離れていた。

そうなった原因を七曜の魔女、パチュリー・ノーレッジは小悪魔と共に曲がり角の影から窺う。

そこにはこの騒ぎの原因――マッドスキッパーオルフェノクが居た。

「ちい…あの紫女、どこに隠れやがった」

――この状況に至るまでの経緯を説明しよう。

紅魔館に侵入したマッドスキッパーオルフェノクは迎撃、もしくは逃げ出す妖精メイドたちを次々と殺していた。
すると偶々通りすがったパチュリーと小悪魔がその場を目撃し、マッドスキッパーオルフェノクに攻撃を仕掛けていった。

しかし弾幕ごっこ用の弾幕ではほとんど効かず、殺傷力を高めた弾幕でも中々効果が薄く、スペルカードを使おうにも廊下と言う空間の為その性能を十分に発揮できずにいた。

加えて、パチュリーは身体が弱いいため肉弾戦など出来る筈がなく、もしオルフェノクの攻撃を直に受けてしまえばそれだけでアウトなのである。

小悪魔もそれほど身体が強いわけでもなく、肉弾戦というモノが苦手なため八方ふさがり気味になり、近くに居た妖精メイドに応援を呼んでくるように頼んだのである。

そして現在、二人はマッドスキッパーオルフェノクの視界から逃れ、応援を待ちつつこうして息を潜めていた。

「コホツコホツ。…全く、埃っぽいのは苦手なのに」
軽く咳き込みながらパチュリーが言う。

喘息気味の彼女にとって瓦礫が散乱し、塵や灰が漂っているこの環境は厳しいものであるだろう。

しかし、彼女はここから身を引こうとは考えていなかった。

見てしまったからだ。——怯えきった表情で助けを求め、マッドスキッパーオルフェノクに胸を貫かれて灰になった妖精メイドを。

彼女は別にそのメイドと親しかったわけではない。むしろ顔さえも覚えているか怪しかつたくらいである。

それでも、パチュリーにとって紅魔館の一員である事には変わりは無かった。

時間をおけば復活するとはいえ、館の一員を惨たらしく殺したオルフェノク。

そんな存在を、彼女は許すつもりはなかった。

「……パチュリー様、あそこを！」

ふと、パチュリーに小声で促し、一点を指差す小悪魔。何事かと思い、視線を向けてみると――

「ひっ、ひいっ……！」

――逃げ遅れた一人の妖精メイドが、マッドスキッパーオルフェノクに見つかっていた。

よく見ると足が瓦礫に挟まれている。それで逃げ遅れたのだろう。

「……っ！」

マッドスキッパーオルフェノクがそのメイドに歩を進めたことを確認するや否や、その背中に向けて弾幕を発したパチュリー。

応援を待つべきだと考えていたが、仲間の命が危険に晒されている以上、そんな事はどうでもよくなっていた。

そして弾幕がマッドスキッパーオルフェノクの背中に命中し、前のめりになった後、その顔をゆっくりとこちらに向けた。

「……そこに居たか女あ！」

パチュリーの位置を把握したや否や、襲おうとしていたメイドを無視して真っ直ぐと彼女の方に駆け出して来た。

それを確認したパチュリーと小悪魔は後退しつつ、牽制の弾幕を發した。

しかしマッドスキッパーオルフェノクは弾幕が当たっても中々仰け反らず、時には泥砲弾で相殺しながら彼女達との距離を段々詰めていった。

——そして、ここで更に悪い事態が発生する。

「——っ！ゴホッ、ゴホッゴホッ！」

「パチユリー様！」

パチユリーの喘息が激しくなり、移動と弾幕の発射に集中できなくなったのだ。

小悪魔が悲痛な声を上げ、それを好機と捉えたマッドスキッパーオルフェノク。

——せめて自分が盾にならなければ。

そう思い至った小悪魔はパチユリーの前に立ち、彼女を守るように両手を広げた。

そうしてマッドスキッパーオルフェノクとの距離が間近に迫った時

B u r s t m o d e

彼女たちの後ろから電子音声が届く——

「ぐあああっ!？」

紅い弾丸が、マッドスキッパーオルフェノクに撃ちこまれた。

それも一発では終わらず、続けて二発、三発と撃ちこまれていった。

「がはあっ！」

数発もの銃撃を喰らい、火花を散らしながら大きく仰け反ったマッドスキッパーオルフェノク。

そんな光景を呆然と見ていた小悪魔は、自分たちを助けた存在に気

付いた。

「…大丈夫か？」

そこには、光線銃フォンブラスターを構えた男——乾巧が居た。

「あ、貴方は…？」

「…味方だ。一応な」

小悪魔の問いに短く答えながらフォンブラスターをファイズフォンに戻していく巧。

その視線は立ち上がろうとするマッドスキッパーオルフェノクに鋭く向けられていた。

「ぐっ…て、てめえ…！」

「…お前か。今度は逃がさねえぞ」

静かに言いながら変身コードを入力していく巧。
そして——

Standing by

「変身！」

Complete

腰のファイズドライバーに差し込み、ファイズへと変身した。

小悪魔とパチュリーの驚愕の視線を浴びながら右手を軽くスナップしたファイズはマッドスキッパーオルフェノクに歩を進めていった。

「はあっ!!」

「じゃあっ!!」

——一方、紅魔館正門。

そこでは今、美鈴とシャークオルフェノクが互いの拳を打ちつけていた。

打ちつけられた拳はぎりぎりど均衡を保っていたが、やがて両者とも弾かれるように後ろに飛び退き、その足が地面に着いたと同時に地面を蹴りだして今度は鋭い蹴りによる鰐迫り合いとなった。

——やがて、その鰐迫り合いも拳の時と同じ様に後ろに飛び退く事で幕を閉める事になった。

「流石は紅魔館の門番。一筋縄じゃいかねえな」

「…それはどうも」

シャークオルフェノクの言葉に不敵に笑うように返事をする美鈴。二人の技、パワーは今のところ互角に保っていた。しかし、今不利な状態にあるのは美鈴だった。

何故なら、彼女の拳、脚、その他シャークオルフェノクに触れた部分はまるで削られたかのように血が吹き出していたからだ。

——鯨肌というものをご存じだろうか？

鯨の肌は頭から尾にかけて撫でると滑らかな感触があるのだが、逆に尾から頭にかけて撫でるとザラザラしている。この特徴から、鯨の肌はヤスリの材料としても使われるのである。

鯨の特性を持つシャークオルフェノクも例外ではなく、その肌はヤスリ状になっていた。

普通の鯨と違う所と言えば、どの方向に向けて触ろうとしても相手

を無条件で削り、その削り具合は鋸で削られたようになっていた所である。

「お強い門番さんはどんな削り心地か…楽しみだな」
そう言いながら拳を鳴らすシャークオルフェノク。

そう、もし相手に捕まってしまう様な事があれば美鈴の身体は無残に削ぎ落とされてしまうだろう。

しかし、美鈴はその事がわかっていても恐れることなく、シャークオルフェノクを睨みつけていた。

何故なら、美鈴はこの門番である事に誇りを持っているから。例えば相手がどんな敵であろうと彼女のやる事は変わらない。

『門を守る事』これだけである。

だから、彼女はどんなことになるうとも、全身を削ぎ落とされようと門を死守するつもりでいた。——例え話ではなく、本気で。そのために、今は出来る限りの力を持って目の前の敵を打ち倒す。そう決めた。

「…すうー……。いきます！」

深呼吸の後、掛け声とともに美鈴が駆けだし、接近すると同時に首目掛けて蹴りを放った。

それを腕で防いだシャークオルフェノクはある違和感に気付いた。

（…ほう？削れて無いとは…“気”とやらでも使ったか？）

美鈴の脚——いや、全身がぼんやりと薄く発光していた。

彼女は削られるのを防ぐため全身を気で覆うという手段を使い、その結果先程まで深く削られていたのに対し擦り傷程度しか削られていなかった。

そしてこれを機に美鈴は反撃に出た。

蹴りの勢いを殺さずに、回し蹴り、掌底、肘打ちと流れるような一連の動作にシャークオルフェノクは防戦一方となっていた。

「はあああつ！」

「ちっ……！」

——やがて、シャークオルフェノクが美鈴の肘打ちを腕で防ぎ、がら空きになった腹部に彼女がそこに気に乗せたもう片方の拳を打ちこもった時、変化が起きた。
シャークオルフェノクの両腕の肘から下が隆起し、やがて鮫のヒレのような刃となったのだ。

「しゃああつ！」

「つつ……！」

そして美鈴の肘を受け止めていた腕を大きく振り上げ、彼女の腕に削ったような大きな切り傷を作り、どくどくと血が噴き出してきた。

——美鈴が纏った気のオーラはあくまで『自分が攻撃する時傷つくのを防ぐ』ためであって、今のように相手からの攻撃を防ぐ面では余り特化していないのである。それが斬撃ならば尚更。

シャークオルフェノクの反撃を受けたことで攻撃の勢いを一瞬でも失った美鈴に対し、追いうちをかけようと迫りくるシャークオルフェノク。

美鈴がそれに対して急いで体勢を直そうとしたその時——

B a t t l e m o d e

「ぐああつ！」

バトルモードとなったオートバジンの不意打ちを受け、シャークオルフェノクは大きく殴り飛ばされた。

それを見た美鈴は何者かと一瞬疑ったが、先程停めてあった場所にオートバジンが無かったこと、その胸にビークルモード時と同じエンジンブレイムがあったことですぐにオートバジンであった事がわかった。

（…バイクってひとりで動く機械だったんですね…）

——何やら妙な勘違いをしてるようではあったが。

「…ちっ！オートバジンか——！」

——ぞくっ！

シャークオルフェノクが体勢を直そうとした時彼の背筋が冷たくなり、ほぼ条件反射でその場から飛び退いた。

その直後、彼が居た場所に無数のナイフが突き刺さった。もし避けるのが一瞬遅かったらシャークオルフェノクは針鼠と化していただろう。

「あら、今のを避けるなんていい反射神経してるのね」

その言葉と共にふわりと降り立ったのは紅魔館のメイド長、十六夜咲夜であった。

「咲夜さん！」

「美鈴、こいつが襲撃者ね？」

美鈴とオートバジンが咲夜の横に並び立ち、それを見ながら立ちあがったシャークオルフェノクの影が人間の——鮫嶋の形になり、その顔が不敵な笑みに変わった。

「…メイド長まで相手をしてくれるとは、光栄極まるなあ！」

その言葉と共に、戦闘が再び行われた。

「ぎえっ！」

——紅魔館、裏口付近。

ファイズのカウンターパンチを顔面に受け、吹き飛ばされるマッドスキッパールフェノクの姿があった。

状況は一言で言うなら、ファイズが圧倒的に有利だった。

マッドスキッパールフェノクの戦い方は素人の一言に尽きるようなものだった。

動きは大ぶりで単調、頼りの泥の砲弾も軌道が直線かつ読みやすいので余裕で回避が可能であった。

それもそのはず、彼はこれまでまともに敵と戦った事がなかった。

数ヶ月前幻想郷に迷い込んだ彼は鮫嶋の手によりオルフェノクに覚醒、その力に溺れて自分よりも弱い妖精や妖怪ばかりを襲い、自らを鍛えると言う事を全くしなかったのだ。

そして鍛錬を怠った結果が今、こうして彼を追い詰める形で現れていた。

殴り飛ばされたマッドスキッパールフェノクにファイズが近付くとその首根っこを掴み——

「らあっ！！」

「ぐああっ！」

近くの壁に叩きつけ、大穴をあけた。

ファイズの腕力と壁に挟まれたマッドスキッパーオルフェノクはその衝撃で出来た穴から外にころころと転がり、悶絶した。

そうしてファイズが追い打ちをかけようとした時、マッドスキッパーオルフェノクの身体がずぶずぶと地面に沈み始めた。

「ちっ…またか…！」

そしてファイズが近付いた時にはその身体は完全に沈み、姿を見る事は出来なくなっていた。

（さ、鮫嶋さんの言う通りにすれば気配を消すことくらい…！）

鮫嶋から教わったやり方で気配を消そうとしながら、素早い動きでファイズの背後に回ったマッドスキッパーオルフェノク。

そして一瞬地面から顔を出し、その背中に奇襲の泥砲弾を撃ち込み

「ぐああっ！」

その泥砲弾は寸分違わずファイズの背中に命中した。

（や、やった！あいつ本当に気付かなかったぞ！）

——いくら鮫嶋から気配の消し方を学んだとはいえ、ここまで気配を消せる事は普通ならまずないだろう。

しかし、マッドスキッパーオルフェノクはこの短時間、この戦闘中で本人も気づかぬうちに埋もれていた才能——気配を消すことに関して爆発的な成長を遂げていた。

ファイズから受けた分のダメージによる経験値が経った今、それがようやく花を開いたのだった。

そしてそのままファイズの周りを回りながら次々と泥砲弾を撃ちつけていくマッドスキッパーオルフェノク。状況はつい数分前とは真逆になっていた。

（…くそっ、こいつ…成長してやが…ぐあっ！）

あらゆる方角から泥砲弾を受け、打開策を巡らせるファイズ。しかし、気配を隠しきった奇襲を前に徐々に追い詰められていった。

（こいつで止めだ…俺の実力を思い知ったか、ファイズ！）

これまでよりも一回り大きな泥砲弾を溜め込み、初激と同じ背後に回ったマッドスキッパーオルフェノク。

それをファイズに撃とうと地面から顔を出した瞬間――

「火水符『フロギスティックピラー』」

「あゝあゝあゝあゝあゝっ！！」

地面から立ち上る火柱がマッドスキッパーオルフェノクを打ち上げた。

「なっ…！」

その火柱を見たファイズが凄まじい速さで迫りくる火柱から逃れようとした時、一瞬の浮遊感を味わった後に目の前を通り過ぎる火柱を目にし、背中にしがみつく妙な感覚に気付いた。

「大丈夫ですか？」

何かと思い振り向くとそこにはファイズの両脇を抱えた小悪魔の姿があった。

火柱の射線から逃れた小悪魔はファイズを抱えたまま、火柱——スperlカードを放ったパチュリー——の傍に着陸した。

「お前……」

「……別に貴方を助けたくてやったわけじゃないわ。あいつが許せないだけよ」

「……なんだっていい、礼を言っぜ」

降り立ったファイズがパチュリーに駆け寄り、言葉を交わす二人。二人の視線の先には、体中から煙を上げながらも立ち上がるマッドスキッパーオルフェノクの姿があった。

「ふ……ざ、けるなよ……下等生物の分際でええ!!」

——ただ、余りのダメージと怒りで理性のタガが外れていた。

「もう許さねえ! てめえら全員なぶり殺しにしてや——! ?」

その言葉を言い終わることなく、マッドスキッパーオルフェノクの両足に地面に縫い付けるかのように紅い槍が突き刺さっていた。

「——貴方ね? うちの可愛いメイドたちを随分と虐めてくれたのは」

その言葉と共に舞い降りてきたのはここ紅魔館の主、レミリア・スカレットだった。

ただ、その表情は酷く冷たい物だった。

「貴方みたいな愚か者を本当は見たくも無かったのだけど——」

そう言いながらマッドスキッパーオルフェノクの背後に回っていく
レミリア。

マッドスキッパーオルフェノクはレミリアの覇気から来る恐怖に口
を開けずにいた。

「来てしまったものは仕方ないから——」

その掌に紅い魔力を溜めながら言葉を続ける。

「——私からの持て成しを受けなさいな」

言い終わると同時にその腕をマッドスキッパーオルフェノクの背中
目掛けて振りかぶった。

——必殺『ハートブレイク』

掌から飛び出した紅い槍がマッドスキッパーオルフェノクの背中に
突き刺さり、その身体を突き刺しながら押し飛ばした。

そしてマッドスキッパーオルフェノクがその身を押しされながら前を
見ると——

E x c e e d c h a r g e

ファイズショットを構えたファイズの姿があった。

「う…嘘だあーっ！俺が…こんな…嘘だ、嘘だあああ！」

自分の意志とは逆に、槍の力もありファイズへとどんどん接近して
いくマッドスキッパーオルフェノク。

やがて、その距離が間近に迫った時——

「やあああああ!!」

ファイズの拳がマッドスキッパーオルフェノクの身体に突き刺さった。

——グランインパクト。

ファイズの紅き怒りの鉄拳はマッドスキッパーオルフェノクの身体を青い炎と共に灰に帰した——

——紅魔館、正門

「はあっ!」

「くっ!」

美鈴が目にも止まらぬ速さで拳、蹴りを繰り出していく、シャークオルフェノクはそれらを必死で防いでいた。

その最中、美鈴の視界にバスターホイルを構えたオートバジンが映り、飛び退いたと同時にシャークオルフェノクはその銃弾を全身に浴びた。

「ぐおおっ……!!」

「咲夜さん、今です!」

美鈴の言葉と同時に、咲夜以外全てのものの時間が止まり、シャークオルフェノクに向かってナイフを数本投げたと同時に時間が再び動き出した。

「——舐めるなよっ!」

それと同時にシャークオルフェノクは腕の刃を振るうことで何本か腕に刺さったものの、ナイフを弾き飛ばした。

その直後――

「はあっ！」

金色に輝くオーラに包まれた美鈴がシャークオルフェノクの懷に飛び込み、掌底を繰り出した。

咄嗟に両腕でそれをガードしたシャークオルフェノクだが、余りの高威力に衝撃を受け止めきれず吹き飛ばされていった。

――気符『猛虎内剋』

攻撃的な気を全身に纏い、一時的に攻撃力を上げる美鈴のスペルカードである。

美鈴の重い一撃を受け、腕のナイフを抜きながらシャークオルフェノクは体勢を直した。

「ちい……流石は門番にメイド長。一筋縄じゃいかねえな」

シャークオルフェノクは戦闘力と経験、共に確かな物を持ついわゆる『上の中のオルフェノク』であるのだからいかんせん相手が悪かった。

遠距離には乏しいが、接近戦でその真価を発揮する紅美鈴。中距離、遠距離どちらも得手であり、時間を操る事ができる十六夜咲夜。そして痛みを感じない身体を持ち、ノーマルフォームのファイズを上回るパワーを持つオートバジン。

彼ほどの実力者でなければこの二人と一体には手も足も出なかっただろう。

「さて、どうします？尻尾を巻いて逃げるか、このまま私たちに倒

されるか」

「私としては是非とも後者をお勧めするのだけれど」

互いに構えながらシャークオルフェノクに投げかける美鈴と咲夜。

「さあて、どっちになるかな」

そう言いながら二人と一体の挙動に目を光らせるシャークオルフェノク。

——実を言うと、彼の『仕事』は既に終わっていると言ってもいい。それを知らせる『信号』もついさっきに届いたのだ。後は逃げるための一瞬の隙。それが彼には必要だった。

そうして互いが相手の動きを窺っていると——

「……無事か!？」

門の内側からファイズが姿を現した。レミリアから正門で起きている事を聞いて駆けつけてきたのだ。

咲夜と美鈴が一瞬そちらに気を取られた時、シャークオルフェノクは動き出した。

「しゃあっ!」

「——しまった!」

地面を力一杯殴り、土埃を上げた。

それにいち早く気付いた美鈴がシャークオルフェノクに駆けだし——

「——きゃあっ!？」

——巨大な尾に薙ぎ飛ばされ、オートバジンに受け止められた。

「…さてと、俺はこの辺で帰らせてもらうとするか」

土埃が晴れると、そこに居たのは先程までのシャークオルフェノクではなかった。

体長5メートルはあるような、鱗の一つ一つが鋭い突起になっている宙に浮かんだ巨大な灰色の鯨だった。

——シャークオルフェノク・遊泳態

格闘態に次ぐ、もう一つの形態となったシャークオルフェノクは身体を翻し、その巨体に似つかない俊敏さで瞬く間に森の中へと消えていってしまった。

——霧の湖

紅魔館のある孤島から対岸となっているその場所で、激しい水飛沫を上げながらシャークオルフェノクが飛び出してきた。

陸に上がるとその身体は遊泳態から格闘態へ、そして人間の——鯨嶋の姿に戻っていた。

「ふう……こんな所か」

そう言いながら懷から煙草を取り出し、それを吸い始めた。そうして煙草を吹かしていると——

「ふう、お疲れ様。鯨嶋くん」

森の奥から妖艶な雰囲気を纏う女性——影山冴子が姿を現した。

「お、影山さん。いやあ今日も一段と美しいっすねえ」

「あら、お上手ね。…それで、仕事の方はどうだったかしら？」

その言葉に鮫嶋は煙を一旦吐き、口を開いた。

「……ええ、『紅魔館の戦力を分析する』。この身をもってよく調べられましたよ」

「そう。あの若いコは使えたかしら？」

「使えましたよ。……『捨て駒』として」

——マッドスキッパーオルフェノク。

彼の仕事の達成率が低い事を前々から知っていた鮫嶋は、この仕事で捨て駒にする事を決めていた。そして実際、彼は紅魔館の戦力を分散させ、ファイズに倒された。

「あら、折角可愛いコだったのに勿体ないわね」

「使えない奴がいても困りますからね。それで報告ですが——」

そして、鮫嶋による報告が始まった。

「お疲れ様」

戦いが終わり、庭の一角で座りこんでいた巧にレミリアが声を掛けてきた。

現在、今回の襲撃で館の損傷の後片付けが行われており、その中には咲夜の指示の下、妖精メイドたちと一緒に動きまわる美鈴と黙々

と瓦礫を運ぶオートバジン、そして何を思ったのか彼女たちを手伝おうとするフランドールの姿があった。ちなみにパチュリーは身体に障るこのことで地下に戻っていった。

「…お前か。あいつらにまかせつきりでいいのかよ」

「咲夜たちは有能なもの。少しくらい平気よ」

そう言いながら巧の隣に佇むレミリア。

暫くそうしていると不意に口を開いた。

「…そういえばさっきの答え、まだだったわね」

「……？」

何事かと思い、首を傾げているとレミリアが続けて口を開いた。

「確かに、昔は人間の事を食料としか見ていなかったわ」

巧はその言葉で、自分が先程彼女に投げかけた問いである事に気付いた。

「でも、咲夜を部下にして、霊夢たちに会ってからはその考えが変わってきたの」

彼女が浮かべるのは、自分に忠誠を誓うメイド、箒を手自由に飛び回る魔法使い、そして人間だろうと妖怪だろうと対等に接する巫女。

どれもこれも、自分と面を向かって接してくる人間だった。

「…人間と共に生きていくのも悪くないなって」

そう語るレミリアの顔は、嘘をついている様には見えなかった。

「…そうか」

そう呟く巧は少しながら安堵していた。

些か樂觀的かも知れないがレミリアの言葉から、彼女が無暗に罪もない人の命を奪う様な事はしないだろうと思ったからである。

そうして一息ついていると――

「お嬢様、巧をお借りしてもよろしいでしょうか」

目の前にすうっと咲夜が現れた。

「ええ良いわよ。持っていきなさい」

レミリアの返事を聞いた咲夜は巧の腕を掴み、「ほら、行くわよ」と言つて巧を引き上げた。

――俺は物扱いかよ。

そう思った巧だったが実際それほど気に障る事でもなかったのについて行くことにした。

そうして歩いていると咲夜が口を開いた。

「見ての通り今復旧作業をしてるのだけど、それぞれが主に自分の戦闘で壊れた所に当たっているのよ」

例えば美鈴なら正門の辺りとかね。

そう言いながら咲夜は説明を続けていく。

「で、貴方も例外じゃないから――」

そこまで言つて咲夜はある場所で立ち止まった。

そこは――

「……おい、もしかして」

「ここ、直して頂戴ね」

戦闘中、自分が壁にあけた大穴だった。

近くを見回すと、身体の弱い主に代わってスペルカードで盛り上がった地面を馴らしている小悪魔の姿があった。

「言っておくけど、直すまでは帰さないからそのつもりでね」

そう語る咲夜の顔は若干スッ気が混ざった笑顔だった。

（この女っ……！）

——結局、巧が里に帰れたのはその明後日となり羊羹は当然ながら食えず仕舞い、一言も言わずに二日間留守にした事で慧音から頭突きを喰らう羽目になった。

「——とまあ、こんな所ですね」

影山への報告を一通り終えた鮫嶋は煙草を深く吸い、その煙をゆつたりと吐いた。

その傍らで影山は思案を巡らせていく。

「…接近戦にほとんど隙のない紅美鈴、時間を操る十六夜咲夜、高威力の魔法を操るパチュリー・ノーレッジ、強大な吸血鬼のレミリア・スカーレット、そして今回は出てこなかった『あらゆるものを破壊する程度の能力』をもつフランドール・スカーレット…」

眩きながら分析していく。『計画』の為に誰が、どのようにしてあの館を墜とすのかを。

「俺から言わせてもらいますと、やはり『あの人』が適任かと」
「奇遇ね、私も同じ事を考えていたのよ」

そう語る二人の脳裏には共通してある一人の人物が浮かび上がっていた。

オルフェノクの中でも、トップクラスの実力を持つ彼が――

「あの館のことは――北崎クンにでもまかせましょ」

その言葉とともに、鮫嶋と影山の姿は森の中の闇へと消えていった。

第8話 前門の鯨、後門の鯨（後書き）

…あれ？紅魔館のキャラってこんなだったけ…？

どうも、コラッタです。

見る人にとっては違和感ありまくりかもしれませんが、紅魔館のキャラはこのように基本仲間想いで通っていきたいと思います。

…あれ？紅魔館のキャラってこんn（ry

それはそうと、今回もオリジナルオルフェノク・キャラの解説をしていきたいと思います。第2回はこの人です。

鯨嶋

シャークオルフェノクに変化する男性。

オールバックの髪型にサングラスといった、如何にも『その道』の人のようなりをしている。愛煙家でもあり、彼曰く仕事の後の一服が特にウマイとのこと。

実は陰で『影山冴子ファンクラブ』なるものを運営しているとの噂があるが真意の程は定かではない。

シャークオルフェノク

鯨嶋が変化する、鯨の特性を持つオルフェノク。

全身の表面が鋸の刃のように非常にトゲトゲしており、触った相手を削り落とす役割を果たしている。

また両腕からヒレのような刃を生やし、これで相手を斬ると同時にその傷口を削ることでダメージが増す。

上記の格闘態に加え、5メートル程の大きさの鯨になる遊泳態になれる。

空中と水中を自由に動ける以外にこれといった能力は無いが、その巨大な口と強靱な顎で対象を一気に引き千切る。

こんなところでしょうか。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第9話 オルフェノク（前書き）

みなさんこんばんわ、もしくはこんにちは。

今回はリアルの方で若干余裕があり、いつもより早めに仕上がりました。

とは言っても、次回からまた亀更新になると思いますのでご了承ください。

さて今回の話ですが、オリキャラがメインになっている（と思う）ので、ご注意ください。

それではどうぞ。

第9話 オルフェノク

——人里周辺の森林。

そこに一人の少々ふくよかな——俗に言う『ぽっちゃり系』の青年が木々の間から里の様子を窺っていた。

彼の服装は質素な和服という、里に住む一般男性の物だった。それもそのはず、彼はこの人里で生まれ、育ってきたのだから。

しかし、里を見るその視線は故郷を懐かしむようなものではなく、——その顔は恐怖に怯え、憔悴しきったように青白くなっていた。

「おやおや、怖気づいてしまったのですか？」

そんな青年に対して、森の奥から現れた眼鏡を掛けた男性——琢磨逸郎が声を掛けた。

「だ、だって……あそこには友達や里の皆が……それに先生だっているし……」

琢磨に対し、怯えたような表情で反論する青年。

ただ、その怯えの感情は琢磨に対して向けられたものではなく、

——自分がこれからやらされることに対して向けられたものだった。

「……わかっていませんね」

そんな青年に対し、やれやれといった感じで首を振る琢磨。そしてそのまま続けて口を開いた。

「貴方は今日人間を捨て、完全なオルフェノクになるのです。そのためには人間だった頃の過去の自分と決別しなければなりません。そう、里の人間を、貴方と親しかった者たちを殺すことで！」

両手を広げ、まるで演説するかのように話す琢磨。
そんな琢磨に対し、青年は静かながらも反論した。

「で、でも…それに、僕はなりたくてオルフェノクになったわけじゃ…」
「…いいですか」

青年の言葉を遮るように、肩に手を置いて諭すように話しかける琢磨。

「貴方がここで我々の仲間にならなかったら、ご両親がどうなるかお分かりですか？」

「……！！」

琢磨の言葉に、目を見開かせる青年。
そんな彼を無視するかのように、琢磨は続きを發した。

「可哀想なご両親ですね。自分勝手な息子の為にその命を落とすことになるとは——」

「……やります」

琢磨の言葉を遮るかのように、静かに言葉を發した青年。
その顔は——涙に濡れていた。

「やりますから、父ちゃんと母ちゃんには手を出さないでください

…！」

その言葉を聞いた琢磨はその顔をニイ、と愉快そうに歪めた。

「そう、それでいいのです」

「……どうだ、見つかったか？」

「……いや、見つからなかった」

「……こっちもダメっす」

「里の皆さんに聞いても、皆さん見かけなかったそうです」

——人里、とある定食屋。

昼食時となりそれなりに賑わってきた店内の一角に、四人の人影があった。

乾巧、上白沢慧音、稗田阿求、そして田宮耕一の四人だった。

そのうち、耕一が顔を鬱向かせながら絞り出すように口を開いた。

「……どこに行っちゃったんだよ。良平……！」

人里とある一家の一人息子、斎藤良平。

耕一の幼馴染である彼は三日前、両親とともに山菜取りに出かけたきり、両親もろとも行方知れずになってしまったのだ。

妖怪に加え、オルフェノクという脅威がある現状で彼らを救うべく

慧音と耕一は巧と阿求の協力の下、彼らを探し続けていた。しかし、彼らを見つけるどころか目撃情報すらも得られてないのが現状であつた。

「あの野郎、昔っから心配掛けさせやがって……！」

「……耕一、気持ちはわかるが焦っていても彼らを見つける事は出来ないぞ」

遮るような慧音の言葉に、口を詰まらせる耕一。

——そうだ。良平が居なくなつて辛いのは自分だけじゃないんだ。慧音先生だって、昔の教え子の良平の事が心配なんだ。

「……ま、慌てても仕方ねえし。メシ食つたらまた探してみようぜ」

「そうですね、私は文さんにも聞いてみようと思います。今日は新聞を配りに来る筈なので」

「……あいつに貸しを作るつてのは気が進まねえが……。俺はもう少し遠くまで探してみる」

運ばれてきた料理をフーフーしながらこれからのことを言う巧に、同じ様に聞きこみの範囲を広げようとする阿求。

それを見ていた耕一の隣で慧音が彼の顔をのぞき、呟いた。

「二人とも良平の事を案じているからここに居る。彼らを助けたい気持ちは一緒だぞ、耕一」

「……はい！」

ほとんど面識がない筈なのに、一家を助けようと率先する巧。身体が強い代わりに、自分にできる事で協力する阿求。

そんな彼らを見て、耕一は嬉しくなった。自分の親友の為に手を貸してくれることが。

（待ってるよ……良平……！）

「……………」

料理をフーフーしながら難しい顔をしていく巧。

実のところ、この中で一番暗い未来を考えていたのは巧だった。

さつきは前向きらしいことを言ったが、ある一つの未来がどうしても頭から離れないのだ。

それは数多くある未来のうちの一つ、それも現実となる可能性が一番低い未来である。

しかしそんな理屈とは裏腹に、巧の頭はその『最悪の事態』をどうしても想定してしまうのだ。

「乾さん、どうかしました？」

「……いや、何でも無い」

隣に居た阿求が巧の様子を窺った。

それほど今の自分は難しい顔をしていたのだろうか。

（……決めつけるには、まだ早すぎだろ）

その未来を頭から振り払いながら、巧は冷めた料理を口に運んでいた。

それは――

――斎藤良平が、オルフェノクに覚醒してしまうという未来だった。

「……………」

――人里、外れの畑。

農作業をしている中年男性の背中を見るように、ぼつちやりとした一人の青年が佇んでいた。――追い詰められたような表情で。

「ん…？そこに居んのは……斎藤さん家の良平くんじゃねえか！？」
「……………」

そしてふと後ろを振り向いた男性が青年――良平の存在に気付き、近寄ってきた。

「いやあ心配したぞ？三日前に出かけたつきり帰ってこなかったんだからな。慧音先生や耕一くんがずっと探しておったぞ？」

「その…すい…ません。ご心配かけて」

「なになに、気にすることだねえ。無事だったんだからな。ところで、親御さんはどうしたんだ？」

男性が何気なく発したその言葉に、良平の脳裏にある言葉がよぎっ

た。

——我々の仲間にならなければ、ご両親の命は——
——そのためには里の人間を——

「……………さい……………」

「ん？どうした？」

「…ごめんなさい……………」

そう言いながら、ゆつくりと顔を上げる良平。
涙で濡れるその顔には——いや、全身には、

淡く光る紋様が浮かんでいた。

「こうしないと、父ちゃんと母ちゃんは——！—」

——数分後、

男性が立っていたその場所には、灰の山が積もっていた。

「おや、貴女は……………」

「こんにちは。上白沢さん」

昼食を食べ終え定食屋を出た途端、巧たちはまるで入れ違いになる

かのようにある一行と出くわした。

慧音と会話している一行のリーダーと思わしき人物は、黒と白のひらひらしたような服を纏い、天辺がやや紫がかった栗色の長髪を持つ、おっとりとした雰囲気似合いそうな女性だった。

その一行も、全員が少女であり。中には鼠の耳を持つ、どこからどう見ても妖怪にしか見えない者も居た。

目立つ連中だなど、巧が思ったのは秘密である。

「…誰だ？」

とは言っても、話に置いていかれるのは御免被るので慧音に尋ねる形になった。

「ああ巧、紹介しよう。こちらは近くの寺に住んでいる尼さんで、聖白蓮という方だ。聖殿、彼は一ヶ月程前に幻想郷にやってきた乾巧だ」

「聖白蓮よ。乾さん…だったかしら？よろしくね」

慧音の紹介に乗るように手を差し出してきた白蓮。

それに対し、巧は普段のぶっきらぼうな表情を崩さないまま白蓮の手を握り返した。

「…乾巧だ」

ぶっきらぼうにそう言う巧に対しても、白蓮はその柔らかな笑みを崩そうとしなかった。

鈍いのか懐が広いのか……多分後者だなど巧は思った。

彼女の笑顔にはあらゆるものを受け入れるような、慈悲深い心が現

れているように見えたからである。

そんな白蓮は再び慧音と話しており、耳を傾けるとどうやら美味いと評判のこの定食屋の食事を寺の皆で食べに来たといった旨の会話が聞こえてきた。

ふと横を見ると、巧の表情は珍妙なものを見るかのように変化した。巧の横では何故か耕一が顔を赤くしながら白蓮を凝視していたのである。…耳を澄ますと息が荒くなっているようにも聞こえる。

「おい、どうした？え？」

「……………はっ！？い、いや。な、何でもねえよ」

声を掛けてみると明らかに動揺してる上、視線は白蓮から全く動いてはいなかった。

巧はそんな耕一の様子に見覚えがあった。

啓太郎が昔、長田結花に向けていた目と同じだったのである。それはずばり、恋をしている目だった。

だから巧はすぐに耕一が白蓮に恋をしている事がわかった。

そんな耕一の肩を、巧はポンと叩いた。

「…ま、がんばれよ」

「え？ナ、ナにガダ？」

「別に」

連れが妖怪ばかりである事と、白蓮本人の気配が人間とは異なっていたことから、彼女が人間ではない事は巧にもわかっていた。

もし数年前までの自分だったら耕一にこんな応援するようなことは言わなかったかもしれない。

自分も変わってきてるのか、それとも幻想郷のどこかのんびりとし

たような空気がそうさせるのか、巧にはわからなかった。
ただ、耕一にはその感情が揺らぐような事がないことを願った。

「……………ん？」

そう思っていると、誰かが自分の背中をつついていていることに気付いた。

誰かと思い、振り向くと――

「なっ……………お前は！」

巧の顔は驚愕一色になり、すぐに睨みつけるようなものへと変化した。

そこに居たのは、かつてその強大な力で巧たちを幾度となく苦しめ、五年前に突如『行方不明』になったスマートブレインの社長――

村上峽児こと、ローズオルフェノクが静かに佇んでいた。

「生きてやがったのか……………村上！！！」

ローズオルフェノクの姿を確認した巧はすぐさまファイズドライバ―を身につけ、ファイズフォンを操作していった。

周囲の皆はそんな巧の行動にどこか呆気にとられたような表情をしていたが、巧はそれを無視した。

Standing by

「変し――！！」

「ちよっ、ちよっと待って下さい乾さん！」

ファイズフォンをドライバーに装着しようとした巧を、傍に居た阿求が慌てて抑えた。

「どうしたんですかいきなり！ファイズになろうとするなんて！？」

「何言ってやがる！目の前にオルフェノクが居るんだぞ！離れてろ！」

「……いや、オルフェノクなんてどこにもいないが……？」

「……………は！？」

阿求と慧音の言葉に困惑した巧が辺りを見回すと、目の前には確かにいるローズオルフェノク、ポカンとしたような表情を見せる慧音たちがいた。ただ、白蓮の連れの、彼女以外の面子は何が起きたのかを理解したのか『ああ……またか』みたいな表情をしていた。ちなみに白蓮は『あらあら』と笑みを絶やさずにいた。

「……あ……ちよつと待ってね」

すると突然ローズオルフェノクが村上のものとは全く違う少女の言葉を発したと思うと、その身体が黒い靄のような物に変化し、驚く巧をよそにミニスカートタイプの黒いワンピースを着た少女に変わっていった。

「いやあ……どもども」

「……やっぱり君だったか、ぬえ」

鼠耳の少女——ナズーリンに呆れたように呼ばれた少女——封獣ぬえは舌をちろつと出していた。

「ダメでしょぬえ。こんな里の真ん中で能力使って人を驚かしちゃ」

「いやあ、幻想郷新参者が居るって聞いたらつい驚かしくなっちゃった。てへ」

「…てへ、じゃないでしょ」

水兵服の少女——村紗水蜜がぬえを咎めるも、彼女自身に反省するような様子はほとんど見受けられず、村紗は頭を抱えていた。そんな彼女たちを見て、巧は近くに居た阿求に尋ねた。

「…おい、一体何がどうなってるんだ？」

「ええと…簡単に言くと、ぬえさんの『正体を分からなくする程度の能力』で、乾さんにはぬえさんのことが別の何かに見えるようになってたんですけど……オルフェノクに見えていたのですか？」

「…ああ。とびきり最悪の奴にな」

阿求の説明で、巧は大体の事情を把握できた。

要するに、自分はぬえに幻の類を見せられ、まんまと嵌められたのだ。

ファイズプラスターもファイズアクセルも無しに一人で村上と戦うなど、勝機がほとんどないものに思えたため、先程のような光景は悪夢にしか思えなかった。

今、巧の中のぬえは文と同じ、『関わりたくない奴』という立ち位置になった。

「全く……罰としてぬえには今日のお昼には2割…いや、3割を払ってもらおうかな」

「いいわね、ナズーリン」

そう呟くナズーリンに、それに賛同する頭巾を被った少女——雲居一輪。

それを聞いたぬえは顔を青くし、口を開いた。

「ちょ、ちよつと待って！今私持ち合わせ少ないんだけど…」

そう言いながら助けを求めるように白蓮に視線を向けるぬえ。
その視線に気づいた白蓮はにっこりと笑い、言葉を発した。

「大丈夫ですよ。ぬえ」

その言葉を聞いたぬえはまるで仏の救いにあつたかのように顔を輝かせた。……まあ、白蓮は尼なのであながち間違いではないかもしれないが。

が、それも束の間。

「足りない分は来月のお小遣いから引いておきますから」

柔らかな笑顔で死刑宣告を言い放たれ、その場に崩れ落ちた。

「では、私たちはこれで」

「…え、ええ。斎藤一家のこと、よろしく願います」

「わかりました。こちらでも可能な限り協力します」

そして慧音と軽く会話を交わした白蓮たちは定食屋の中へと入っていった。

ちなみにぬえは意気消沈したまま村紗に引きずられていった。

「…さ、さて。それじゃあ私たちも行くか——」

気を取り直し、慧音が巧たちに向かってそう言った直後。

『う、うわあああああああ！—！』

人里の中に、悲鳴が鳴り響いた。

「なっ、何だ!？」

「……こっちだ!」

辺りを見回した直後、ある方向に向かって走っていく巧。

慧音たちが追いかけると前方から人々が走って逃げてきたため、慧音はそこから自分の近くに居た男性を捕まえ、事情を聞きだした。

「どうした!何があつた!？」

「付けけ慧音先生!里の中におおおオルフェノクが」

「何だつて!？」

その答えに慧音は愕然とし、同時に自分を恥じた。

（良平たちの搜索に気を取られて守りを疎かにしてしまつとは…里の守護者が聞いて飽きれる!）

だが、後悔などしている暇はない。後悔など後で幾らでも出来る。先ずはこの先に居るであろう脅威を退けなければならない。

「わかつた、君は早く逃げてくれ。私たちが何とかする」

「は、はい!先生、お氣をつけて!」

そう告げると、男性は他の人々と一緒に逃げていった。

それを見届けた慧音は巧たちと共に男性が逃げてきた方向へ走っていった。

自らの役目を果たすために。

「——いた!!」

巧たちが駆け付けた先では、亀の特性を持つタートルオルフェノクが逃げ遅れた若い夫婦にじりじりと迫っていた。それを見た巧と慧音は同時に駆けだし——

「らあっ!!」

「こっちだ!!」

巧がタートルオルフェノクを蹴り飛ばし、慧音はその隙に夫婦を救いだした。

「大丈夫か!? 早く逃げ——!!?」

夫婦に話しかけた慧音の言葉は驚愕の余り途中で途切れた。何故なら、慧音の目の前で彼らの身体は崩れ落ち、灰になったからである。

その現実はいえ慧音から正常な思考を奪った。

「な……!!? そ、そんな……!!」

「…先生!!」

そんな慧音に、耕一が大声で呼びかける。

慧音が見た耕一の顔は、恐怖を必死に抑え込むような顔つきだった。

「立って下さい!! 一緒に皆を逃がしましょう!!」

——私は何をしている?

教え子が必死で恐怖を抑えているのに、何を呆然としている? 彼らを守れなかった自分を責める事など、後で幾らでも出来るだろ

う。

しかし今は、生きている者たちを守らねば――！

「……ああ、すまない!!」

耕一の必死の叫びは、慧音に正常な思考を取り戻させた。

「巧、すまないが奴の相手を頼む。私たちはその間に皆を避難させる」

「……ああ」

慧音に返事をしながら、巧はタートルオルフェノクを睨みつける。タートルオルフェノクはたどしくも起き上がり、こちらに襲いかかろうとしていた。

慧音たちや避難している人たちを巻き込まぬよう、巧はタートルオルフェノクに歩を進めながらファイズフォンを操作していく。

S t a n d i n g b y

「――変身!!」

C o m p l e t e

紅いフォトンブラッドの光に包まれ、巧の姿は仮面の戦士・ファイズへと変化する。

避難する人間たちの中でファイズを初めて見た者たちは、それを見て驚愕していた。

「――ガアッ!!」

ファイズの存在を認めたタートルオルフェノクは一声吠えると同時に駆け出し、その剛腕を振りかぶってきた。しかし。

「おらあつ!!」

ファイズはそれを身体を少しよじることで回避、タートルオルフェノクの顔面に拳を叩きこんだ。

そこからもファイズは攻撃の手を休める事はなく、後ろによろけたタートルオルフェノクの胴体に拳を何発も打ちつけていき、最後には鳩尾に拳を捻じ込ませ、蹲ろうとしたところで力の限り蹴り飛ばした。

「ガッ!」

地面を何度も転がったタートルオルフェノクにファイズが追い打ちを掛けようとした時。

「——ぐああつ!?!」

背後から攻撃を受け、前方にたたらを踏んだ。
ファイズを攻撃したのは無数の棘が生えた鞭、それを操るのは——

「お久しぶりですね、ファイズ。いや、乾巧!!」

ラッキークローバーの一人、琢磨逸郎ことセンチピードオルフェノクだった。

「お前……ラッキークローバーの琢磨か!」

「ええ。彼は今人間の心を捨て、真のオルフェノクへなろうとしているのです。邪魔しないでいただきたい!」

そう言うや否や、ファイズに向かって鞭を走らせるセンチピードオ

ルフェノク。

その言葉を聞いて、ファイズの脳裏に先程定食屋で浮かんだ『最悪の事態』が過った。

(…このオルフェノク…まさか…！)

思考がそちらに傾いた隙を狙って、センチピードオルフェノクの鞭がファイズの腕に絡みついた。

「っ！しまった！」

「さあ、さっきの仕返しをしてあげなさい」

見やると腕を振りかぶってこちらに迫って来るタートルオルフェノク。

それを見たファイズは急いでファイズフォンにコード『106』を入力し、フォンブラスター・バーストモードに変化させた。

B u r s t m o d e

「はっ！！」

そしてタートルオルフェノクに狙いを定め、フォトンブラッドの弾丸を発射したが――

「何だと！？」

タートルオルフェノクの全身にせり上がった亀の甲羅を模したような装甲によって阻まれてしまった。

そしてそのままタートルオルフェノクの接近を許してしまい、その剛腕が防御もままならないファイズに振り上げられたその時。

「ガアッ!？」

不意にタートルオルフェノクに弾幕が浴びせられ――

「はあっ!！」

一閃の槍が、ファイズの動きを封じていたセンチピードオルフェノクの鞭を斬り裂いた。

その槍を持つのは、朱色を基調とした服に虎柄の腰巻と髪を持つ少女――

「お前……確か聖の連れの?」

「寅丸星です。その声……ひよっとして乾さんですか?」

『毘沙門天の弟子』、寅丸星であった。

「まあな。他の奴らはどうした」

「聖たちは避難した人々を守っています。私は上白沢さんに頼まれ、ナズーリンと共に貴方の援護に来ました」

その言葉に周囲を見回すと、物陰からちらつと鼠の耳が見えた。先程の弾幕を発したのも彼女なのだろう。

「それで、彼らが新聞に載っていた……」

「……ああ、オルフェノクだ。鞭を持ってるやつは一筋縄じゃいかねえぞ」

そう言いながら視線を前に向けるファイズと星。

そこには鞭を新しく生成し直すセンチピードオルフェノクと、立ちあがって獣のような唸り声を上げるタートルオルフェノクの姿があ

った。

「おや、命蓮寺の虎じゃないですか。妖怪如きが我々の邪魔をしないでいただきたいものです」

「…貴方がたは、何故このような事を…！」

星がここに駆けつける前、避難した者たちの中には里の人間だけでなく、里に遊びに来ていた妖怪や妖精が混じっていた。そして彼らの仲間も、オルフェノクに殺されてしまったと言っただ。

星はオルフェノクの事を一種の妖怪と考えていた。

彼らも人を襲わなければ存在できないような存在じゃないかと考えていた。だから、じっくりと話し合えば少なくとも自分たちのように、人間や妖怪と共存できるだろうと考えていた。

しかし、その考えは今この里で起きている出来事と、センチピードオルフェノクの一言によって否定されることになった。

「愚問ですね。オルフェノクでない者など、死んだ方が幸せだからですよっ…！」

そう言い終わるとともに、鞭を振るうセンチピードオルフェノク。その鞭はファイズと星の間に打ちつけられ、彼らは分断されてしまった。

「っ！乾さん！」

「気をつける！こいつら相手に気を緩めると殺られちまうぞ！」

ファイズの前に立ちふさがるセンチピードオルフェノク。星に襲いかかるターゲットオルフェノク。

それを見て、星は覚悟を決めた。

少なくとも、目の前に居るオルフェノクは共存を考えていない。そもそも人間や妖怪を下等な存在として見ているため、話し合いをする気も到底見受けられない。

だから、今里に居る人間と妖怪たちを守るため、目の前のオルフェノクを斃すことを決めた。

「…やるしかないそうですね。ナズーリン！援護をお願いします！」
「了解だよ。ご主人」

星の声に、近くの物陰に潜んでいるナズーリンが応答する。
そして、星は迫りくるタートルオルフェノクを迎え撃った。

ファイズとセンチピードオルフェノク、二人の戦いは熾烈を極めていた。

センチピードオルフェノクが振るう鞭をファイズは僅かな隙間を縫ってかわしていき、やがて間近まで迫るとセンチピードオルフェノクは鞭を手放し、ファイズの拳を腕で防いだ。

「お前ら、一体何を企んでやがる！」

そう言いながらも攻撃の手を休めようとせず、次々と拳を繰り出していくファイズ。

センチピードオルフェノクはそれらを一つ一つ防いでいき、やがて攻撃の合間の隙を狙ってファイズに拳を突き出し、ファイズはそれを腕を交差させて防いだ。

「さっきも言ったでしょう。彼が真のオルフェノクになるために――

「――」
「違う！俺が聞いてんのはお前らがこの世界で何をしようとしてるのかってことだ！」

さつきまでとは逆に、センチピードオルフェノクの攻撃一つ一つを防いでいくファイズ。

そして最後にはセンチピードオルフェノクの攻撃を弾き、両者は取り組みあう形になった。

「お前らが何の目的もなしにこの世界に来ると思えねえからな！答えろ。五年前に姿を消してから一体何をしてやがった！」

「ふん、僕が貴方にそれを教えると思っっているのですか？」

――ガガガガガガガッ！！

互いに一步も引かないその時、バトルモードとなったオートバジンがセンチピードオルフェノクにバスターホイルを乱射し、その弾丸の雨をぎりぎり避けたセンチピードオルフェノクは再び鞭を構え、ファイズは自分の隣に降り立ったオートバジンからファイズエッジを抜き取った。

R e a d y

「……だったら、お前をぶちのめして無理やりにも吐かせてやる！」
「いいでしょう。やれるものならね！」

そして、鞭とファイズエッジ、互いの武器が正面からぶつかり合った。

「ガアアッ!!」

「——はっ!」

一方、タツクルを仕掛けるタートルオルフェノクと、それをかわして槍を振るう星。

しかし、その槍はタートルオルフェノクの装甲に弾かれてしまった。

「くっ…硬すぎる…!」

タートルオルフェノクの攻撃はほとんどが直線的な物で大振りになっており、星が回避するのは造作もなかった。

そしてそこから攻撃を繰り返すのも、ナズーリンの弾幕を浴びせる事もまた、容易だった。

にもかかわらず、タートルオルフェノクに傷ついた様子は無い。その答えは一目ですぐに分かった。タートルオルフェノクの装甲である。

その装甲の硬さはかなりのものがあるため、ダメージを与えられずにいたのだ。

「ご主人、どうするんだい?」

「…ナズーリン、頼みがあります」

近くの物陰から尋ねてくるナズーリン。

タートルオルフェノクを警戒しながら、星は彼女にある頼みごとをした。

「ガアアッ!!」

一声、痺れを切らしたかのように咆哮を上げるとタートルオルフェノクは再び星に襲いかかってきた。

装甲に覆われたことで大きさも破壊力も増した剛腕で星に殴りかかり、彼女はそれを易々とかわした。

タートルオルフェノクはそこからも次々とタツクルなどを織り交ぜて攻撃を仕掛けていったが、星はそれら全てを反撃することもなく避け続けていた。

やがて――

「……………見つけたぞご主人！奴の胴体の中心、鳩尾の部分だ！」

ナズーリンが星に呼び掛け、それを聞いた彼女はタートルオルフェノクの剛腕を後ろに避け――

「――はあっ！！」

タートルオルフェノクの装甲に包まれた腹部――人体の鳩尾の部分に槍を一突きした。

――ピシ

装甲の槍が突き刺さった部分から少しずつひびが入り。

――ガラガラガラッ！！

ひびはあっという間に大きく広がり、胴体の部分の装甲は一気に崩れ落ちた。

星に頼まれたナズーリンが見つけたもの。

それはタートルオルフェノクの装甲の『継ぎ目』だった。

タートルオルフェノクの装甲は文字通り『全身を包むもの』だ。となれば当然全身の関節の部分には装甲同士を繋ぐ『継ぎ目』があることは間違いない。

ナズーリンが見つつけ、星が突いたのはそんな胴体と腰の部分の装甲を繋ぐ『継ぎ目』だった。

そして星は曝け出されたタートルオルフェノクの鳩尾に掌を当て――

「――はっ！」

「ガアッ！」

零距离で、弾幕を発射した。

避けることも儘ならないタートルオルフェノクは鳩尾を抑えながら後ろに吹き飛ばされ――

「ガアッ！？」

「なっ！？」

――突如、横から出てきた爆風に巻き込まれた。

――タートルオルフェノクが爆風に巻き込まれる少し前。

ファイズの剣捌きとセンチピードオルフェノクの鞭捌き。それは相手に致命傷を負わせるためのものであると同時に、互いに決定打を与えられずにいた。

センチピードオルフェノクが鞭を振るえばファイズはそれを弾き、ファイズがファイズエッジを振るえばセンチピードオルフェノクは

それを絡みとり、ファイズごと投げ飛ばす。

互いに一步も引かない、そんな戦いは大詰めを迎えようとしていた。

「はあああ……！」

ファイズから距離を取ったセンチピードオルフェノクが力を溜める事で自らの鞭を青白く発光させ――

E x c e e d c h a r g e

ファイズがファイズフォンの E n t e r キーを押すことでファイズエッジに凝縮されたフォトンブラッドを送り込み――

「――しゃあっ！！」

「――やあっ！！」

二人はそれらを同時に放った。

力の籠められた鞭とフォトンウェーブ。互いに高エネルギーのそれらは二人の間でぶつかり合い、小規模な爆発を起こした。

小規模ではあるものの、高エネルギーから生まれたその爆発はそれなりの衝撃を有しており、ファイズとセンチピードオルフェノクの二人は身を守るために身構え――

「ガアッ！？」

爆発の近くに居たタートルオルフェノクがその爆風に巻き込まれた。爆風の影響でボロボロとなったタートルオルフェノクは二度三度地面を転がり、光に包まれて人間態――青年の姿となった。それを見て、星は啞然となった。

「……………え？」

タートルオルフェノクだった青年に星は見覚えがあった。
巧と一緒に居た青年——耕一と一緒に以前よく命蓮寺に説法を聴きに
来ていた青年だった。

慧音から聞いた話では、現在家族とともに行方不明になっている青
年。

その名は——斎藤良平。

「仕方ありませんね」

良平を見たセンチピードオルフェノクがそう呟いた瞬間、辺りを暴
風が包んだ。

余りの風力に身動きが出来ないファイズや星たちが見たものは、扇
を構え、良平を抱えた鴉の特性を持つオルフェノク——レイヴンオ
ルフェノクだった。

「今回の所はこの辺で引き上げましょう。乾巧、決着はまたいずれ」
「くっ…待て……！」

ファイズはそう言うも、一層強くなる風に身動きが取れず、センチ
ピードオルフェノクたちは悠々と立ち去っていった。

「くそっ……………やっぱりか…」

そう呟きながら変身を解く巧。そこに——

「…どういうことだよ、おい……………」

耕一の感情を押し殺したような声が巧の背中に掛かった。

振り返ると、そこには避難誘導をあらかた終えて巧の援護に来た慧音と、何を思ったのか彼女についてきた阿求と耕一が呆然とした目で巧を見ていた。

「あんた…さっきのはどういうことなんだ、おい！！」

巧に近づき、語気を荒げながら巧に掴みかかる耕一。

その顔は、目の前で起きた現実を認めたくないかのようだった。

「オルフェノクってのは『人間の姿になれる怪人』じゃなかったのかよ！！なんで良平がオルフェノクになってんだよ、おい！！」

「…落ち着け、耕一」

何も話さない巧に耕一が掴みかかっていると、慧音がその肩をたたいて止めた。

慧音に止められたことで少し落ち着いたのか、耕一が巧から手を離すと慧音は巧を真っ直ぐに見つめた。

「……………どういう事なのか話してくれ、巧」

見回すと、阿求、耕一、ナズーリン、星、そして慧音のここに居る全員が巧を見つめていた。

それを見た巧は悟った。

もう隠す事は出来ない。

そして巧は重々しく口を開いていく。

「……………オルフェノクってのは——」

——「一度死んだ人間だ」

第9話 オルフェノク（後書き）

今回も見てくれてありがとうございます、コラッタです。

今回の話でとうとうラキクロの一人、琢磨くんと戦わせました。

実を言うと、最初のころはこの時点で琢磨くんと戦わせる気がありませんでした。

でも最初に戦うラキクロが北崎くんってのはちょっとアレだなと思い、TV版でも最初に戦ったラキクロ（ジェイ以外）である琢磨くんを抜擢しました。

オリキャラの良平くんですが、途中でキャラ変わりすぎじゃね？と思うかもしれませんが、その辺の理由については次回で明らかにしたいと思いますのでどうかお待ちください。

さて第3回の紹介はオルフェノクのみでお送りします。

タートルオルフェノク

斎藤良平が変化する、亀の特性を持つオルフェノク。

動きは鈍重であるものの、最大の特徴は文字通り全身を包む亀の甲羅のような模様の装甲である。

その硬さは凄まじいの一言に尽きるものであり、場合によってはルナメタルに次ぐ硬さとなる。

しかし、関節の部分には装甲同士を繋ぐ継ぎ目が存在し、そこを突かれると脆い。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第10話 友（前書き）

どうも皆さん、コラッタです。

また早めに仕上がりました。と言ってもいつ亀更新になるかわからないので更新速度にはあまり期待しないほうがいいかもしれません。

あと今回は今まで一番長くなったと思います。

それではどうぞ。

第10話 友

——幻想郷、人里。

いつもならば人々や遊びに来た妖怪で賑わっている時間帯のそこは、暗い雰囲気包まれていた。

理由は言わずもがな、オルフェノクの突然の襲撃。その死者は確認できただけでも8人、妖怪も含めれば二桁に達していた。

里に来ていた聖白蓮によって明日に葬儀が行われることになり、今はその準備と襲撃でできた傷の復興が行われていた。

ただ、それを行う者たちの表情は恐怖、悲しみ、怒りに統一されていた。

その中に周囲には隠そうとしているものの、より一層暗い空気を持つ者たちが居た。

上白沢慧音、稗田阿求、田宮耕一、そしてこの場にはいないが命蓮寺の面々である。

その原因は、探していた斎藤良平がオルフェノクになっていた事。そして巧から聞いた話だった。

——オルフェノク。

それは『オルフェノクになる資質』を持った人間が一度死ぬことで覚醒し、蘇った存在である。

オルフェノクに覚醒するパターンは大きく分けて二つある。

一つは、一度死亡して誰の手も借りずに自然とオルフェノクに覚醒するパターンである。

このオルフェノクは『オリジナル』と呼ばれる。

もう一つは、オルフェノクに殺されることで覚醒するパターンである。

オルフェノクは人の心臓にエネルギーを送ることでその人間を一度殺し、エネルギーを送られた人間はオルフェノクとして覚醒する。

この方法を『使徒再生』と言う。

ただ、この方法でオルフェノクに覚醒するのは僅かな人間だけであり、それ以外の人間はエネルギーに耐えられずに少しの間だけ動くようになるも、すぐに灰化してしまうのである。

復興を行う慧音に耕一、それを手伝う阿求の表情は――重い。

彼女たちは、巧が話したことをほかの里人たちには話していなかった。いや、言える筈がなかった。

オルフェノクの正体が実は一度死んだ人間で、里を襲ったオルフェノクは良平だったなど、言えなかった。

「あの…慧音さん」

ふと、作業の手を止め、阿求が呟いた。

「…何かな？」

それに対して慧音は作業の手を止めずに、そう返した。

「…乾さん、オルフェノクの事を『元人間の怪人』じゃなくて『一度死んだ人間』って言うてましたよね…」

その言葉を聞いた慧音は復興作業に動かしていた手をピタリと止めた。

近くに居た耕一も同様だった。

「それって……ひょっとして、乾さんはオルフェノクのことを『怪人』として見てるんじゃないかって——」

「…それ以上は言わない方がいいですよ」

阿求の言葉を遮ったのは耕一だった。
その顔は隠れ、表情は窺えなかった。

「あ……あの、私……」

「…稗田殿。耕一の言う通り、その事は口にしない方がいい。貴方の心が持つかどうか……」

「……ごめんなさい」

うろたえる阿求の肩に手を置き、諭すように言う慧音。

慧音も耕一も、阿求が言おうとしていることがわかっていた。だからこそ、彼女の口を塞いだ。

——もしかすると、もしかするとである。巧はオルフェノクのことを『人間』として見ているのではないか？

そうになると、巧にとってオルフェノクを倒すと言う事は『人間を殺す』ということになるのではないか？

想像上の話の上、真意の程は定かではないが、あり得ない事ではなかった。

仮にこの考えが当たっていたとしても、巧はそのことを人に打ち明けることは無いだろう。

乾巧はそういう男だ。

まだ幻想郷に来て一ヶ月ほどしか経っていない巧ではあるが、慧音たちにはそれがわかっていた。

巧は、これまで数え切れない数のオルフェノクを倒してきた。その数だけ命を奪ってきた。

そして、もしも巧自身がオルフェノクのことを『人間』として見ていたら……彼に掛かる重責はどれほどのものになるのか。

そのことを口に出してその考えを認めてしまったら、彼女は平常心を保っていられるかわからなかった。

「…さあ、まずは目の前の事から始めよう。やることはまだたくさんある」

「…はい」

そう、慧音たちはまずやらなければならない事があった。里の復興。犠牲者の葬儀。遺族のケア。

良平のこと。

「あやや…皆さん気が沈んでいますね…」

その言葉とともに、慧音たちの下に鴉天狗の少女——射命丸文が降り立った。

ペンとメモ帳を携えたその顔は、営業スマイルではあるもののどこか気まずそうだった。

「ああ…文か、悪いが今忙しいんだ。用件なら後に——」

「…オルフェノク、元々は人間だったんですね」

文のその言葉に、慧音の手が再び止まった。それを尻目に、阿求は文に尋ねた。

「……どこから、見ていたんですか？」

「……オルフェノクが里の人間に変わったところから」

新聞を配りに里にやってきた文が見たものは、何かから避難する里の人間や妖怪だった。

適当な者を捕まえてオルフェノクが里を襲ってきたことを聞いた文は特ダネの匂いを感じ、現場に急行。そこで見たものはオルフェノクの姿から人間の姿になる青年——良平だった。

「そこからは巧さんの話すことに耳を傾けていました。……オルフェノクの正体、その生まれ方について」

「……それで？まさかその事をそのまま記事にする気じゃないだろうな」

文にそう問いかける慧音の目は、鋭い物だった。

それに一瞬気圧されそうになる文だが、すぐに気を取り直した。

「……ええ。記者たる者、真実を明かさなければならぬという義務が——」

「ふざけんなっ！！」

文の言葉を遮り、彼女の胸ぐらを掴んだのは耕一だった。

その目は怒りに染まっていた。

「アンタ……良平がオルフェノクになったってばら撒くつもりかよ！あいつから居場所を奪おうって言うのかよ、おい！！」

耕一にとって、良平はオルフェノクになってしまっても、例え人を殺してしまっても親友である事には変わりなかった。

そんな彼にとって、親友がオルフェノクになって人妖を殺した事を

新聞で明かされて、親友の居場所がなくなってしまうというのはどうしても我慢できなかった。

「…残念ですが、それが真実ですから」

「真実だろ？何が何だろ？！あいつから居場所を奪おうつてんなら、あんたをぶちのめしてでも止めさせてやる！」

「よさないか！耕一！」

彼を抑えつけようとする慧音の言葉にも耳を傾けず、文を睨みつける耕一。

そんな彼を見て暫く経った文は仕方ないと言わんばかりに溜息を吐いた。

「…わかりましたわかりました。その良平さんとやらがオルフェノクになった事は伏せておきます」

観念したように文がそう言うのと、耕一は渋々ながらも彼女から手を離れた。

そして耕一を彼女から引き剥がした慧音は文に視線を向けた。

「…すまない、文」

「…まったく……この借りはいつか返してもらいますからね」

やれやれといった感じに首を振る文。その時何かに気付いたのか、顔を上げて慧音に尋ねた。

「…あや？そう言えば巧さんは？」

「はっ、はっ、はっ、はっ——っ！」

「上出来、でしたよ。斎藤さん」

——人里より少し離れた林の中。

荒く息を吐く良平と、拍手しながらそう言う琢磨の姿があった。

良平を連れてきたレイヴンオルフェノクは、琢磨と少し会話をした後、何処かへ飛び去っていた。

「初めてであればほど殺せるとは…貴方はオルフェノクとして素晴らしい才能をお持ちのようだ」

「ぼ、僕……僕は…」

嬉しそうに話す琢磨と、自分がやった事が信じられないかのように頭を抱える良平。

彼らの様子は、正に対照的だった。

「…さて、本当なら君の面倒を見ていたのですが僕は別件があるのでお先に失礼します。何かわからない事があれば彼に聞くと良いでしょう」

その言葉と共に現れたのは、ジャケットを着た男だった。

彼は良平の事を世話しがいがあるような目で見て、口を開いた。

「琢磨さん、こいつのことは俺に任せてください。立派なオルフェノクにしてみせます」

「頼みましたよ。それでは、僕はこれで」

その言葉とともに、森の中に消えていく琢磨。

それを見届けた男は先程までのものとはまるで違つ、邪魔者を見るような目で良平を見つめた。

「けつ、将来有望な新人つてか？ テメエ、ちよつと優秀だからつてあんまり調子こくんじゃねえぞ」

ドスを効かせたような声で良平を睨みつける男。
対して良平は真つ青な顔を上げて、言った。

「あ…あの、聞きたい事が……」

「あ？ 何だよ」

「と、父ちゃんと母ちゃんは無事なんですよね？」

そう、良平は元々両親を人質に取られたため、琢磨に従っていたのだ。

そして結果として彼に従つたため、両親は無事の筈である。

そう思っていた。

「くつくつく………だっはっはっはっはっはっ！！」

それを聞いた男はまるで可笑しくて堪らないかのように大笑いした。
男の様子を見た良平は啞然となった。

そしてそのまま、男は笑いながら言った。

「お前なんにも知らねえんだな！ 無事？ 生きてる？ んなワケねえだろ！」

「…………え…………？」

「まだわかんねえか？お前の大好きな父ちゃん母ちゃんはオルフェノクになれずに死んだんだよ！ぎやははははっ！」

その言葉を聞いて、良平の頭の中は凍りついた。

——そんな。いやだつて、え？あれ？

それじゃあ僕は…僕は…一体何のために…みんなヲ…コロシテシマッタノ？

「う、うわ、あああああああ！！！」

叫びながら良平はその場から走り去った。

自分のやったことを恐れるように。辛い現実から逃れるかのように。そんな良平を、男は笑いながら見ていた。

「……くくく……困るんだよ。お前みたいに実力のある奴が居ると俺の出世の妨害になるからなあ…かかかか……！」

男の歪んだ笑いが、虫の鳴き声に混じって辺りを包んでいた。

——夕暮れ時。

——人里、集会場。

今この場所には明日葬儀が行われる犠牲者の遺体と、通夜のために集まった犠牲者の遺族や仲間の妖怪、そして、

「はあ……」

「…聖、大丈夫ですか？」

「…ありがとう星。大丈夫よ」

外で深くため息をする聖白蓮と、彼女に付き添う寅丸星の姿があった。他の命蓮寺の面々は各自復興の手伝いや寺に必要な物を取りに行っていた。

溜息をすると幸せが逃げるとかよく言われているが、今の彼女にはどうでもよかった。

オルフェノクに殺された犠牲者を見て、聖は惨いと思った。

何故ならその遺体は元の形など留めておらず、灰になっているからだ。

原形を留めない遺体というのは初めてではないが、ここまで生前の名残を全く残さない殺し方というのは見た事がなかった。

それに灰になってしまっただけは、その遺体の一部は風に飛ばされてしまい、見つからなくなってしまう。

中でも夫婦の遺体など互いの灰が混じり合ってしまった、どの灰がどちらの遺体なのかわからなくなってしまうていた。

それに、里を襲ったオルフェノクの一人の考えは白蓮には受け入れ難いものだった。

『オルフェノク以外に存在する価値など無い』

星から聞いた、センチピードオルフェノクが放ったという言葉だった。

これは人間と妖怪の共存を夢見ている白蓮にとって、何よりも辛い言葉だった。

白蓮は妖怪の不憫な境遇に同情し、人と妖怪の共存を夢見るようになった。そんな彼女にとって、妖怪に近い存在であるオルフェノ

クのその言葉は彼女の夢を否定するかのようだった。

そうして彼女たちが集会場の中に戻ろうとした時――

「あ」

「乾……さん？」

「……星に、聖か」

入れ違うように中から出てきた、巧と出くわした。

巧は二人に気付いたものの、すぐに視線をそらして立ち去ろうとした。

しかし、

「ちょっと待ってくださいませんか？ 乾さん」

白蓮に引きとめられることになった。

「何だよ」

「……貴方は、何故彼らと戦うの？」

白蓮は、疑問に思っていた。

元々人間であるというオルフェノクと、巧は何故『戦う』という手段を選んだのか。

白蓮は人間と妖怪の共存を望んでいる。そのためには両者が争わず、互いを理解して手を取り合っていかなければならないと思っている。それ故に彼女は『戦い』を好まない。だからこそ、疑問だった。

「……別に。何だっていいだろ」

「っ。乾さ……！」

相手の顔を見ず、答えになっていない物言いに星が思わず突っつか

りそうになるが、白蓮がそれを制した。
その視線は巧にまっすぐと向けられていた。

「…何だよ、悪いけど俺にはやる事があるんだ。じゃあ——」
「あのオルフェノクを…倒しに、行くの？」

歩きだそうとした巧の足を、白蓮の言葉が止めた。

巧はゆっくりと視線を白蓮に向け、それを見た彼女は言葉を紡いだ。

「…上白沢さんや星から聞いたの。里を襲ったオルフェノクの一人は元々この里の子だったと」

「…だから何だよ」
「…私には、彼が好き好んで殺害を行うとは思えない」

タートルオルフェノク——斎藤良平のことは、白蓮も覚えていた。
友人と共に寺によく訪れていた彼は白蓮の話——人間と妖怪の共存について熱心に聞き入り、彼女の夢に強く共感していた。……その友人は何故か終始顔を赤くしてガチガチになっていたがここでは省いておく。

そんな彼が、オルフェノクになったからとは言え自分から殺戮を行うなど、彼女にはどうしても思えなかった。

「あいつは完全に正気を失っていた。…多分、オルフェノクの本能に飲み込まれているぞ」

「それでも……いえ、だからこそ！彼をその本能から救い出さなければならぬと思います！確かに彼は人妖を殺めるという罪を犯してしまった。だからこそ、彼は正気に戻って、罪と向き合って生きていかなければならないと思います！

……殺してしまつたら、彼は反省することも手を取り合うことも、

できなくなるのよ…？」

悲しげな顔でそう語る白蓮を見て、巧は彼女の事を強いと思った。かつて自分は人を殺したオルフェノクの中にも人の心を持った者と会った時、人を襲うオルフェノクの中にも更生できる者がいるかもしれないと悩んだ事があった。

でもそうして悩んでる間にもオルフェノクは人を襲い、殺していく。だから自分は相手が更生できるかもしれないオルフェノクであったとしても、人を殺すというのなら倒す。そう決めた。

——いや、オルフェノクを説得するという道を諦めただけなのかもしれない。

しかし白蓮は違った。彼女はまだオルフェノクの説得を諦めていない。

それどころか、人を殺してしまったオルフェノクがどうするべきかも考えている。

そこで巧は、里の人間たちが話していた彼女の事を思い出した。

人間と妖怪が平等に暮らして共存する世界という、彼女の夢を。

その事を聞いた時、巧は彼女のことを胡散臭い、何か裏があるんじゃないかと思っていた。

今までの経験上、大っぴらにそういうことを掲げる者を信用できなかったのだ。

しかし面と向かって話してみれば、彼女は本気で共存を望んでいる事がわかった。そうでなければ人間と妖怪、そしてオルフェノクのことまで深く考える事はしないだろう。

巧はそんな白蓮に友の影を重ねた。

人間とオルフェノクの共存を夢見て、優しく、真面目すぎたが故に

道を誤ってしまったかけがえのない友を。

「……仕方ねえな」

軽く息を吐いてそう言う巧に、はっとしたような視線を向ける白蓮と星。

その視線を受けて、巧は続きを口にした。

「……一回だ。あいつともう一度出くわしたら説得してみる」

「乾さん……！ ありが——」

「ただし」

白蓮の言葉を遮るように、巧は静かに言葉を紡いでいく。

「もしあいつが人の心を完全に失っていて、身も心も怪物になっていたら……倒す」

巧の言葉には有無を言わさない圧力があつた。

こればかりはどうしても譲ることは出来なかった。

もし良平の心が完全に怪物と化していたら、多くの人間や妖怪の命が危険に晒されてしまうのだから。

「……わかったわ。でもそんな事にはさせない。その前に必ず彼を救ってみせる」

そう言つて白蓮は力強く頷いた。

これ以上犠牲は出さないと誓いながら。

そんな彼女を見て、巧は物思いに耽っていた。

白蓮の言っていることは——いや、自分も甘いかもしれない。そ

れでも、彼女の良平を救いたいという気持ちを、夢を信じて、協力したいと思ったのかもしれない。

それが白蓮と同じ様な夢を持った友——木場勇治の夢に繋がることを信じて。

「…おや。巧、ここに居たのか。それに聖殿に寅丸殿も」

その言葉と共に現れたのは慧音だった。

彼女も通夜を越すつもりだったのか、その腕の中には着替えらしき物があった。

「上白沢さん、復興の方はどうなりました？」

「ええ、被害を受けたのが一部のみだったので早ければ明日にでも終わりそうです。他の寺の方々ももうじきこちらに来ると思いますよ」

白蓮の問いにそう答える慧音。

タートルオルフェノクが暴れたのは里の極一角だった。その上、完全に倒壊したような建物もなかった。

人命以外での被害がその程度で済んだのは不幸中の幸いだったのかもしれない。

復興の現状を白蓮に教えると、慧音は神妙な目で巧を見つめ、口を開いた。

「…ところで、巧。良平のことなんだが……お前は、どうするつもりだ？」

「…ああ、それなら——」

そして慧音の問いに巧が答えようとした時

——ド、オオオオオオオ……ン……——

「何だ……！？」

「爆発……！？」

大きくは無い、しかし決して無視はできない爆音が里の近くの丘から響いた。

そしてその爆音を聞きつけたのか、里人や妖怪たちが集会場の中から顔を出してきた。

「け、慧音先生……今の音は何でございましょうか……？」

「まさか……またオルフェノクが来たんじゃない……？」

一人の里人と妖怪の喧きにより、段々と場がざわめいていく。このままでは次第にパニックに陥ってしまうだろう。

「皆、落ち着いてくれ！何もそうと決まったわけではない！」

それを防ぐために、慧音が率先して人々を落ち着かせようとしていく。

その際、ちらりと巧の方を向いた。

（……すまないが、様子を見てきてくれないか。私も後から向かう）
（……任せろ）

二人は視線でそう会話し、巧は慧音に手を貸そうとしていた白蓮の腕を掴んだ。

「…一緒に来い。もしかしたら、ってこともあり得る」
「!……………わかりました」

二人は人々に聞こえないように小声で会話し、その旨を理解した白蓮は星に向き直して口を開いた。

「星、上白沢さんと一緒にここの方たちをお願い。ムラサたちにもここ以外の里の人たちをお願いするように伝えて頂戴」
「聖…わかりました…!」

二人の会話を聞いていた星はそう頷いて慧音の下に行き、それを見届けた白蓮は巧と共に駆け出した。
その先には主を待つかのようにエンジンを吹かすオートバジンが鎮座していた。

「乗れ!」
素早くオートバジンに跨った巧に習うように、白蓮もまた巧の後ろに跨った。

「飛ばすぞ! 掴まってる!」
「ええ!」

そうして二人は爆発の起きた場所へ駆けていった。

——時間は遡り、

「良平……お前、これからどうすんだよ……」

復興作業があらかた終わった帰り道。

耕一は親友の事を案じていた。

オルフェノクになつてしまい、里の人妖を殺してしまった親友を。

耕一はオルフェノクの姿から人間の姿になつた良平を見た時、目の前の光景を——いや、里で起きている事を認めたくなくなった。

耕一の知る限り、斎藤良平という人間は穏やかで、他者の事を思いやる心優しい青年だった。

そんな良平が獣のような雄叫びを上げて人々を殺すなど、信じられなかった。信じたくなかった。

（まずは……そうだ、あいつから話を聞いて……えと、それから——）

そう考えていると——

（え……？おい、なんだよこの腕）

自分の両腕が、震えていることに気付いた。

それを必死に抑えようとしても震えは止まる事がなく、それどころか悪化するだけだった。

「なんだよ！止まれよ！俺が……俺が良平のことを恐がつてるって言うのかよ……！」

耕一の震えは、無理のないことだった。

いくら親友と言えど、異形の怪人に恐怖を抱くのは普通のことなのだから。

いくら心でそれを否定しても、身体は己の身を守ることに忠実なの

だ。

そうして耕一が己の恐怖心と戦っている――

（……ん？…あれって…）

丘の上で座り込む人影を見つけた。

その辺の妖怪かと思い目を凝らして見ると――それは、非常に見覚えのある人物だった。

「……なつ、良平っ!？」

オルフェノクになってしまった親友、斎藤良平だった。

それを確かめた耕一はすぐさま丘の上まで駆け登り、その背中に声を掛けようとして…止まった。

口から、言葉が出てこないのだ。

（何やってんだよ俺！この期に及んでまだ恐がってんのかよ！

…良平が本当に心まで怪物になってたら、こんなところで座り込んでるわけねえだろ！）

そう葛藤しても、耕一の身体は言う事を聞こうとしなかった。

そんな耕一の物音に気付いたのか、良平が恐る恐る耕一に振り向いた。

「え…こ、耕一くん……!？」

「……りよ、良平…」

親友同士が三日ぶりに面と向かった瞬間だった。

ただし、一人は人間、もう一人はオルフェノクとなって。

「…良平、お前……」

そう言つて、耕一が一步踏み出そうとした時。

「こ、来ないで！」

「！」

良平が、耕一から逃げるように後ずさつた。
その顔は恐怖の色に塗りがためられていた。

「ぼ、僕は里の皆を…殺しちゃつた……僕の近くに居たら、いつか
耕一くんも…

…だから、来ないで！！！」

そう言い終わるや否や、この場から逃げ去ろうと背を向ける良平。
それを耕一は――

「……待てよ！この馬鹿！」

すかさず良平に追いつき、その腕を掴んだ。

良平は振り解こうと耕一を見て、彼の腕が震えていることに気付いた。

「…耕一くん、離しなよ。僕が恐いんでしょ？手が震えてるもん」
「馬鹿野郎、んなワケあるかよ。今はもう10月になるだろ？肌寒
いだけなんだよ」

そう言う耕一の顔は、無理に作つたような笑顔だつた。
そんな彼はそれに、と言葉を続けた。

「お前がこうして俺の心配をするってことは、お前はどう見ても俺が良く知ってるお人好しの斎藤良平だ。恐がる理由がどこにあるってんだよ」

その言葉を聞いた良平は耕一を振り解こうとするのを止め、その場に座り込んだ。

その横で耕一もどっこらしよと言いながら胡坐をかいて座り込んだ。

「……話せよ。この三日間、なにがあったんだ？」

耕一のその言葉に暫く黙りこんでいた良平だったが、やがてポツリポツリと少しずつ話していった。

山菜狩りの最中にオルフェノクに捕まったこと。

彼らのアジトラしきところに連れていかれ、オルフェノクにされたこと。

両親の命と引き換えに里の人間や妖怪を殺すように脅されたこと。

しかし、両親は既に殺されていたこと。

そして――

「…声が、聞こえたんだ」

「……声？」

「…里の外れの畑のおじさんを……殺す…時に……すごく低い声で、身体の奥から響いてくるような感じで…」

そこで良平は一旦言葉を切り、その『声』の内容を発した。

「…『殺せ、殺せ。人間を殺せ、妖怪を殺せ、神を殺せ。殺せ、殺せ、殺せ――』……って」

そこからは意識が飛んで、自分が自分じゃなくなったみたいだった。そう締めくくって良平は再び黙り込んだ。

「……そうか」

そう呟いた耕一は立ち上がり、口を開いていった。

「……とりあえず、お前がどうしてあんな事をしでかしちまったのかはわかった」

良平は責められると思い、ぐっと目を閉じた。

当然だ。自分はそれほどの事をしてしまったのだ。

脅迫されていたとか、意識が飛んでいたとか、そんなものは許しを請う理由にも免罪符にもならないのだ。

「ほら」

「………?」

しかし、いつまで経っても責め立てるような言葉は無く、代わりに良平の前にあつたのは差し出された耕一の手だった。

「な……何？ 僕のこと、責めないの？ あんな酷い事したんだよ？」

「バカ、確かにお前は許されないようなことをやっちゃったよ。……けど」

そこで耕一は一旦言葉を切り、続けた。

「お前も被害者だからな。お前だけを責めるなんて、少なくとも俺にはできねえよ」

耕一には、良平を責める事はできなかった。

親友であるからというのもあるが、そんな出来事にあつた良平のことを考えると、責める気にはなれなかった。

同情しただけだろうと言われたとしても、耕一はそれを否定する気も、恥じる気にもならなかった。

「で、でも僕は……」

そんな耕一の言葉に、良平がたどたどしくも口を開こうとした時

「「うわあぁっ!?!」」

二人の近くで突然小さな爆発が起きた。

その衝撃で地面を転がった二人が見たものは――

「はっはぁ！人間と手を組んだっていう、裏切りの明確な証拠を見せてもらったぜえ！」

大笑いする、良平に両親の死を告げたジャケットの男だった。

「な、なんだてめえ！」

「こ、耕一くん逃げて……！この人は……」

立ち上がりながらそう言う耕一を庇うように前に出る良平。

耕一にそう言われた男は笑うのを一旦止め、咳払いをして言った。

「俺か？俺はな、そっちのガキに危うく出世コースを妨害されそうになった……」

その言葉とともに、男の身体に紋様が走り、その身体は灰色の異形

に変化していった。

その姿は――

「…可哀想なオルフェノクだよ！この糞ガキが！！」

ダンゴムシの特性を持つ、アルマジリデイウムオルフェノクに変化した。

そして姿が変わると同時に、腰に付けられた丸まったダンゴムシのようなボールを二人に向かって投げた。

「っ！耕一くん、危ない！！」

その言葉と共に良平が耕一の前に立った瞬間、そのボールは強烈な破裂音と共に爆発した。

アルマジリデイウムオルフェノクが投げたボールは手榴弾だったのだ。

「良平！！」

耕一の叫びと共に煙が晴れ始め、そこに居たのは装甲に身を包んだタートルオルフェノクに変化した良平だった。

「耕一くんは下がって！」

そう言いながら駆け出していくタートルオルフェノクに、耕一は頷いた。

耕一にだってわかっているのだ。戦う力を持たない、普通の人間である自分が出しゃばっても良平の足手まといになるだけだと。

この時、耕一は力を持たない自分をひどく恨んだ。

「死ぬなよ……良平……！」

「貴方の部下も困ったものねえ、琢磨クン」

「……ええ、全くですよ。あのような勝手な真似をして僕の顔に泥を塗るとは」

——ラッキークローバー率いる、オルフェノクのアジト。

その一角にある『BAR CLOVER』と銘うたれたそこに、ラッキークローバーの琢磨逸郎と影山冴子が居た。

「あの良平っていう可愛いコ、私たちの力になると思ったのに……」

「……あの男を指導につかせた僕のミスです。すいません」

斎藤良平は使徒再生によって生まれたオルフェノクには珍しく、強い力を持ったオルフェノクだった。

そんな将来有望なオルフェノクを育てるために琢磨の部下をつかせたのだが、その部下の男は彼らが脅しの為に使った両親が既に死んでいた事をばらしてしまったのだ。

しかもその理由は『自分の出世に邪魔になるから』と、ふざけた事この上なかった。

その結果、良平は彼らを裏切る形となり、その原因を作った男は最早用済みとなっていた。

「いいのよ。でも、あのコたちの処刑には北崎クンが行ったから後で彼の望みを聞いてあげなさい」

「ちょ、冴子さん……余計な事しないでください……」

影山の言葉を聞いて、琢磨は深く頂垂れた。

琢磨にとって、北崎は正に『天敵』なのだ。そんな北崎が琢磨に望む事など、自らの力で琢磨が怯える様を楽しむことに決まっていた。

そんなことを琢磨が考えていた時、影山がふと思い出したように言った。

「…そういえば。ついさっき修復が終わった『アレ』の力を確かめに行くって言ってたわ」

「うわあああああつ！」

「ぐおおおお！？」

——場所は戻り、人里外れの丘。

アルマジリディウムオルフェノクは、タートルオルフェノクのタツクルに押し込まれて後ろにあった木との間に挟み打ちされた状態にあった。

無論、アルマジリディウムオルフェノクがタートルオルフェノクの接近を只許した筈もなく、彼が接近する間に手榴弾を次々と投げ、接近を阻もうとしていた。

しかし、タートルオルフェノクの装甲はそんな手榴弾のダメージを悉く防ぎ、結果としてタツクルをそのまま許してしまったのだ。

「つつ、このっ！このっ！このっ！」

そしてタートルオルフェノクは自分と木の間に挟まれたままのアルマジリディウムオルフェノクに我武者羅に腕を振るっていき、その衝撃で相手を挟んでいる木が折れかかったところでアップーの要領で相手の腹を殴り飛ばした。

その時のタートルオルフェノクは、涙声になっていた。

「ぐはあっ！……くつくつくく…そろそろ、だな…！」

殴り倒されたアルマジリディウムオルフェノクが不意に不気味に笑いだし、その異様な雰囲気には圧されたタートルオルフェノクはびくりと立ち止まった。
何故やられている筈のアルマジリディウムオルフェノクが笑っているのか？その答えはこの一言に尽きるだろう。

——彼の『仕込み』は、タックルを喰らった時点で終わっていたからである。

「腹を見てみな」

「？……………！」

アルマジリディウムオルフェノクの言葉に、恐る恐る自分の腹部を見たタートルオルフェノクの目——外見上の変化は無いが、は見開かれた。

そこには少なくとも10センチはありそうな、巨大な灰色のダンゴムシがいた。

それがタートルオルフェノクの視界に入った瞬間——

「うわあああああああ！！！」

ダンゴムシが爆発し、タートルオルフェノクの身体は大きく吹き飛ばされた。その上、ダンゴムシが居た場所は丁度胴体の装甲の継ぎ目だったため、その周辺の装甲も諸共吹き飛ばされていた。惜しくもその場所は、昼に星に破られた場所と同じだった。

「かつつか！どうだ？俺様自慢の時限爆弾の味は？」

仰向けに倒れたタートルオルフェノクに笑いながら近づいていくアルマジリディウムオルフェノク。

彼は先程タックルを喰らった時に、タートルオルフェノクの腹部にダンゴムシ——時限爆弾を忍ばせていた。

そして殴り飛ばされた時にその時間が来た、というところである。

「う…う…う…」

「さて、さっきのテメエのタックル、あれは結構痛かったぜ」

そう言いながら、タートルオルフェノクから数歩離れたところで足を止め、腰から手榴弾を外していく。

そしてそれを——

「お返した。たっぷり味わいな」

仰向けになったままのタートルオルフェノクの、装甲が破れた腹部の上に、投げた。

「あああああああああ！！」

手榴弾の爆発と共にタートルオルフェノクの絶叫が辺りに響き渡り、爆発が止んだ頃には腹部から黒煙を上げて痙攣するタートルオルフェノクの姿があった。

次第にその姿も、オルフェノクの姿から良平の姿に戻っていった。

「あ……あう、あ………」

「さあて、トドメだ。盛大に木っ端微塵になりな」

呻く良平を見下ろしながら、アルマジリディウムオルフェノクが手榴弾を手にした時、

「良平から離れやがれ！この野郎！！」

耕一が、両手でやっと持てるほどの石でアルマジリディウムオルフェノクの後頭部に殴りかかった。

しかし――

「ああ？何かしたか、人間風情が」

「がつ！？」

アルマジリディウムオルフェノクには僅かなダメージにもならず、それどころか石が割れたことで不意を突かれた耕一は首を掴まれ、持ち上げられてしまった。

「こ、耕一くんを……は、はな……して……！！」

「りよ、りよう、へ……に、げろ……！！」

一方は爆弾で死にかけ、もう一方は首を絞められてるというのに互いを心配する二人を見て、アルマジリディウムオルフェノクの脳裏にある事が浮かんた。

それは誰でも思いつくものであり、同時に何よりも残酷な考えであった。

「そうだ… テメエを始末する前にこの人間のガキの首をへし折ってやるか」

「な……や……やめ、て……」

「誰が… てめえ、なんかに……」

「うるせえな。さつさと死ね」

「が、あ、あ、あ、ああ………！」

そう言いながら耕一の首をぎりぎり絞めていくアルマジリディウムオルフェノク。

首を絞められていく耕一の顔は段々と青くなっていき、目の焦点も次第に合わなくなってきた。

それを見ることしかできない良平は、耕一を助けようと必死に身体を動かそうとしても身体は全く言う事を聞こうとしなかった。

（誰か……僕はどうなっても、どんな目にあっても構わないから……）

良平は、心の中で助けを求め始めた。他力本願と言われるかもしれないが、彼にはもうこうするより他になかった。

——誰か、耕一くんを助けて……！——

そして、その願いは——

——超人『聖白蓮』

B a t t l e m o d e

——確かに届いた。

「じはあっ!？」

風を切る音と共に、アルマジリディウムオルフェノクの横顔に『彼女』の飛び膝蹴りがめり込み、その衝撃で宙に投げ出された耕一の身体は機械の人形——オートバジン・バトルモードが受け止めた。

「な、なん——がああっ!？」

何が起こったのか困惑するアルマジリディウムオルフェノクに追い打ちをかけるかのように、紅い光弾——フォンブラスター・バーストモードの弾丸が炸裂し、その身を吹き飛ばした。

耕一を抱えて降り立ったオートバジンの横に並ぶ無愛想な青年と、優しい笑みで良平を抱える女性、それは——

「…生きてるか？」

「間に合って、よかった…」

乾巧と、聖白蓮だった。

巧はファイズドライバーを巻いて前に、白蓮は耕一と良平を治療するためにその手に魔力を集中させていく。

「ひじ、りさん……ぼく、なんかをちりょう、したって……」

「ばか、お前の、ゴホッ、方が重傷、だろ」

「喋っちゃだめよ、じっとしてて」

そう言いながら、白蓮の魔力が二人の身体を淡い光で包んでいく。光に包まれた二人は少しだけ身体がましになった感じがして、まともな会話を行えるようになった。

「…耕一くんはともかく、僕はあんなことをしてしまったんですよ。助けてもらう価値なんて…」

「お前、まだそんなことを…」

己を乏しめるような良平に耕一が突っかかるも、その言葉は途中で途切れて啞然とした顔になった。横に居る良平も同様だった。何故なら…彼ら二人を抱える白蓮の顔は……涙に濡れていたからである。

「…そんなこと言わなくていいの。貴方が自分の心を取り戻せたのなら、それで」

白蓮は嬉しかった。

耕一と良平を死なせずに済み、良平が人の心を取り戻したことを。それに、二人の様子を見て彼女はある事を確信した。

人間と妖怪、そしてオルフェノクが共存する事は不可能ではないことを。

「ぐっ…き、貴様、らあ……！」

そう言いながら、吹き飛ばされていたアルマジリウムオルフェノクが立ち上がった。

それを見てフェイスフォンを開いて前に歩きだす巧。その背中に二人の治療を続ける白蓮が声を掛けた。

「…戦うのですか？」

「ああ。止めても聞かねえぞ」

瞳の中に怒りを込めてそう言う巧に、白蓮はふるふると首を振った。白蓮にもわかつている。巧が目の前にいるオルフェノクを倒す——いや、殺そうとしている事を。

あのオルフェノクは昼間の良平とは違い、正気である事がわかる。…正気であるような事を…耕一を殺し、良平の心を絶望に染めようとする事が出来るのだ。

確かに白蓮は人間、妖怪、オルフェノクの共存を望んでおり、救いたいと思っている。しかし、その過程ではどうにもならない事が、救えない者がいることも知っている。

そう、例えば——

「この屑どもがっ！ テメエら全員粉々のバラバラに吹き飛ばしてやる！！」

巧たちに殺意を向けて呪詛を吐く、アルマジリディウムオルフェノクのように。

あのような者がいれば、人妖問わず多くの命が散っていつてしまうだろう。

それは白蓮にとっても、巧にとっても見過ごすことは出来ない事だった。

「やれるもんならやってみろ。返り討ちにしてやる」

Standing by

そう言いながら巧はファイズフォンを掲げ、あの言葉を口にする。命を守るために命を奪う、罪を背負い続けていく決意を籠めた、あ

の言葉を。

「変身!!」

Complete

巧の姿はフォトンブラッドの光に包まれ、ファイズへと変わっていく。

命を、夢を守る戦士へと。

「…かかってこい」

スナップしながらそう言うファイズの言葉が合図になったかのように、アルマジリディウムオルフェノクが襲いかかってきた。

「はっ!」

距離を詰めて腕を振り上げるアルマジリディウムオルフェノクをファイズは身を少し振ってかわし、その背中に肘を打ちつけた。

その衝撃で前によろけたアルマジリディウムオルフェノクの後ろ首根っこをむんと掴んで無理やり自分の方に向かせたファイズは、体勢が崩れたところに幾度となく拳を打ちつけていき、最後には拳骨の要領で頭を殴って地面に伏せさせた。

「うっ!……うっ、この…!」

地面に倒れ伏したアルマジリディウムオルフェノクはファイズの足元に手榴弾を転がし、地面を転がってそこから離れ始めた。それに気付いたファイズもバックステップでそこから離れた。

一瞬おいて手榴弾が爆発し、その煙が両者の視界を遮る。

そして煙が晴れた頃には、屍餅をつきながらファイズを指差して笑

うアルマジリディウムオルフェノクの姿があった。

「は、ははっ！俺の勝ちだな！腹を見てみな！」

ファイズが自分の腹部に視線をちらつと向けると、そこにはダンゴムシ——時限爆弾がへばり付いていた。

ファイズはそれを引き剥がそうとするが、全く剥がれる気配がない。

「無駄だ！そいつは一度付いたら簡単に剥がす事なんざ出来ねえぞ！」

「ちっ…！」

そうしてる間にも、爆弾の制限時間は刻一刻と迫っていく。

その時——

「乾さん…！」

耕一と良平の治療を続ける白蓮が、ファイズに向かって呪文を唱える。

その直後、ファイズは自らの腕力が——いや、身体全身の力が飛躍的に増したことを感じた。

「これは…！」

白蓮が得意とする魔法。それは主に身体能力を上昇させる魔法である。

それは自分以外にも他者に使う事が可能であり、耕一と良平に施している治療はその応用である。

白蓮の助けを得たファイズは自らにへばり付いた時限爆弾を易々と引き剥がし——

ファイズの足から発した紅いポインティングマークにその身を拘束された。

そして――

「やあああああああ――!!」

キックの姿勢になったファイズがマークに飛び込み、必殺技クリムゾンスマッシュがアルマジリディウムオルフェノクに突き刺さっていく。

やがてファイズの姿がその背後に現れた時

「ぎゃあああああああ――!!」

――断末魔と共に、紅いφの紋章を刻まれたアルマジリディウムオルフェノクの身体は灰に還っていった――

「……本当に、すみませんでした……!!」

戦いから数分後。

遅れてやってきた慧音に、巧や耕一たちはこれまでの出来事を説明していた。

この三日間で良平の身に起きた事、良平が自らの心を取り戻した事、耕一と良平を殺そうとしていたオルフェノクと戦っていた事。

それらを説明し終えた良平は慧音に深く頭を下げた。

彼を見つめる慧音は、無言だった。

「け、慧音先生。良平は好きであんなことをしたわけじゃ――」

何も喋ろつとしない慧音に、耕一が良平を庇おうとしたが、

「よせ」

巧に肩を掴まれ、止められた。

確かに良平はこの三日間理不尽な目に遭い、里を襲ったのも彼の本意ではなかった。

しかし、だからと言って彼が十人以上の人妖を殺したことはないのである。

故に彼はこの件に関するけじめをつけなければならない。

巧も白蓮も、良平にもそのことが分かっていた。

「どんな罰だつて受けます。ここで自害しろというのなら、従います」

「…良平」

そう言つて正座して黙り込んだ良平の頭を掴み、顔を近づけていく慧音。

そして、

「ふんっ！！」

「っ……………！」

力の限り頭突きをした。

その余りの痛みに良平は頭を抱えて声を上げそうになったが、必死に思いとどまった。

そうして痛みを堪える良平に、慧音は再び口を開いていく。

「…この馬鹿者。確かにお前は許されざることをした」

そこで一旦言葉を切り、しかし、と続けて口を開いた。

「お前が過ちに気付いているというのなら、生きて罪を償っていくべきだろう？……自分の命を捨てて、罪から逃げるようなことは言うべきではない」

「……でも……僕にできることなんて……」

「だったら、私の手伝いをしてくれない？」

そう言つて会話に入つて来たのは、白蓮だった。

「人間と妖怪、そしてオルフェノクが共存できる未来の為に人の心を持ったオルフェノクである貴方が必要なの。…力を、貸してくれない？」

白蓮の言葉に、良平の心は揺らいだ。

自分は生きていいのだろうか？この場で死んで閻魔様の裁きを受けるべきではないのだろうか？

——本当に生きて、罪を償つてもいいのだろうか？

「いいんじゃないのか。生きて」

良平の心を見透かしたようにそう言ったのは巧だった。

「お前は自分の罪を自覚している。そして聖はお前を必要としている。だったらお前は罪を忘れないように生きていけばいいじゃないか」

巧は、罪を忘れないという事はその罪を償うことに繋がると考えて

いる。自らの罪を忘れた者に罪を償える筈がないのだ。
だから良平も罪を忘れずに生きていけば、やがてそれが罪を償うこ
とに繋がるのではないかと考えていた。

「…良平」

そう言つて、慧音は良平と同じ高さの視線で言葉を紡いでいく。

「私にも、里の皆を守れなかった罪がある。だから――」

一緒に償つていこう。

そう言つて良平に手を差し伸べた。

「……………はい……………！」

泣きながら、良平はその手を取った。

そして慧音の力を借りて起き上がり、前を見据えた。

自らの犯した罪を絶対に忘れないと誓いながら。

「あの…一つお願いが…」

「何だ？」

「…里を襲つたのが僕だつてこと、僕から皆に言わせて下さい」

良平の言葉に、その場に居た者たちの目が見開かれた。

良平は、自分がした事を告白しなければ前に進めないと思っていた。
自分がやった事を里の皆に隠したままでは、本当に罪を償うつもり
になれないと考えていたからだ。

「お前…いいのか…？」

そう言う耕一に、良平は力強く頷いた。
彼に迷いはなかった。

「……わかった。戻ったら場を設けよう」

「ありがとうございます。先生」

そう言つて良平は巧たちと里への道を歩んでいった。

慧音は、内心驚いていた。

自分が犯した罪を、その犠牲者遺族に自ら告白しようなど、並大抵の心では出来ないからだ。

（…強くなつたな、良平）

かつての教え子の背中を見て、そう思った慧音は彼らに追いついて共に歩いていった。

「Fire」

Burst mode

「っ！危ない！」

「きゃっ！？」

「うおっ！？」

突然、良平が自分の前を歩いていた白蓮と耕一を突き飛ばした。突き飛ばされて困惑した二人が見たものは――

「…………え…？」

「りよ、りよう、へ…………？」

自分たちの頭上を通った薄紫色の光弾に――

「良へええええええい！！！」

腹部に、胸に、多数の風穴を開けられた――斎藤良平の姿だった。余りに突然の出来事に、巧はファイズドライバーを付けて辺りを警戒し、慧音、耕一、白蓮は倒れ伏した良平に詰め寄った。

「良平！」

「良平！おい、嘘だろ！おい！」

「しっかりして！今治療を…！」

「ふふ…………ゲームクリア…………だね」

その言葉と共に、茂みから人影が現れた。

その人影を見た巧たちの目は驚愕に見開かれた。

「な…………ファイズ…………！？」

「…………いや、違う…………！」

それは巧が変身したファイズに似た姿をしていた。

巧はその存在に見覚えがあった。……いや、忘れる筈がなかった。

黒い装甲とスーツの上を走る、ベルトから伸びた白いフォトンストリーム。

逆三角形を描く白いアンテナに、オレンジ色の複眼。

その手に持つは、ビデオカメラとしての機能を備える光線銃。

それは、帝王のベルトを除いて最も初期に開発され、最も強い力を持つベルトの戦士。

その名は――

「…デルタ…！」

「やあ……きみは…ファイズだったわけ…？」

白き魔人、デルタ。

敵としては出会いたくなかった戦士が今、巧たちの前に立ちふさがった。

「良平！しっかりしろ！良平！」

「お願い…戻ってきて…！」

巧が視線を横にずらすと、そこには血を流して意識の無い良平に呼び掛ける耕一と必死に治療を続ける白蓮の姿があった。

無防備となっている彼らに付いていられるのは…慧音のみ。

「…慧音、あいつらを頼む」

「…ああ。……しかし、お前一人で――」

ファイズフォンを操作しながら、慧音にそう言う巧。

明らかに今までの敵とは雰囲気が違う相手に、巧一人で大丈夫なのか疑問に思った慧音だったが――

「いいから下がってろ！こいつはマジでやばいんだよ！」

巧はそう怒鳴り返し、走り抜けながらファイズフォンをドライバーに叩きつけた。

「変身！」

Complete

ファイズに変身した巧を見て、デルタは掌を合わせながら言った。

「へえ…遊んでくれるの？いいよ……」

そして距離を詰めたファイズが繰り出したパンチを片腕で防ぎ、

「相手になってやる」

同一人物とは思えないような低い声でそう言うと同時にファイズの腕を弾き、その顔面を殴りつけた。

「くっ…！」

後ろによるめいたものの、急いで体勢を立て直したファイズはデルタの追い打ちの攻撃を必死に防いでいき、攻撃の僅かな隙を縫って拳を繰り出すなどの反撃を仕掛けていくものの、デルタもそれらを確実に防いでいった。

傍目から見れば互いの攻撃を防いでいく両者は互角に見えるだろう。しかし、押されているのはファイズだった。

答えは簡単。ファイズがデルタにパワー負けしているのである。先程も挙げた通り、デルタは三本のベルトの中で最も強いパワーを誇っている。それに反してファイズのパワーは三本の中で最も低いのだ。

デルタの攻撃の直撃は防いでいるファイズだがその衝撃は殺しきれず、徐々にファイズの体力を蝕んでいった。

やがて――

「ぐあつ……！」

少しふらついたところを突かれてデルタに首根っこを掴まされ、そのまま近くにあった木に叩きつけられた。その上、その衝撃で木が折れてしまった。

さらにデルタの攻撃はこれだけでは終わらず、ファイズを掴んだままその顔面を何度も何度も地面に叩きつけた。

「ふふ……弱い弱い……」

「ぐあつ……！」

そして叩きつける事に飽きたのかファイズの身体を蹴り飛ばし、仰向けに倒れたところに光線銃――デルタムーバーを向けた。

「じゃあね……バイバイ」

「く……そつ……！」

ファイズにその引き金が引かれようとした瞬間――

「巧から……離れろ……！」

――国符『三種の神器 剣』

慧音のスペルカード、小振りの剣を形作った弾幕がファイズを避けるように全弾デルタに命中した。

しかし――

「痛いなあ……」

「何……！？」

デルタにダメージが伝わってる様子は全くなかった。

彼女が出した弾幕は弾幕ごっこ用ではなく、殺傷力を高めた弾幕で尚且つスペルカードで威力を底上げしたものだった。

これまでに会ってきたオルフェノクならばダメージを与えられたのだが、デルタには殆どと言っていいほど通じていなかった。

「馬鹿野郎……三人連れて、逃げろ……！」

「いいよ……そっちがその気になら、君からかたづけてあげるよ」

苦し紛れに言うファイズに、慧音にターゲットを変えたデルタ。

それを見た慧音は白蓮たちから離れ、いつでもスペルカードを放てるように構えた。

「……ああ、私が相手だ。来い……！」

彼女には巧を見捨てるつもりはなかった。

そして、慧音に向かってゆっくりと歩いてくるデルタがファイズからある程度離れた時、彼女はスペルカードを発動した。

――始符『エフェメラリティ137』

デルタの両側に放たれた弾幕から更に赤青の弾幕が発生し、デルタ

に被弾していく。

それを確かめながら、慧音はもう一枚スペルカードを発動した。

——国符『三種の神器 鏡』

デルタの両側だけでなく、前から緑色の弾幕が迫り、デルタの姿が見えなくなっていく状態で彼女は更にもう一枚発動した。

——野符『GHQクライシス』

先の二枚よりも密度の高い赤い弾幕がデルタの姿を完全に隠し、向こうからもこちらが見えない状態になった時、慧音はファイズに駆け寄って彼に肩を貸した。

「慧音……お前……！」

「大丈夫か、巧！今のうちに聖殿たちを連れて……！」

慧音は巧を見捨てるつもりはなかった。しかしデルタと正面から戦う気もなかった。

弾幕でデルタの視界を潰し、その隙に巧を回収して白蓮たちとここから退くつもりだった。

しかしそれも、不可能となった。

何故なら——

「Check」

Exceed charge

慧音の弾幕の中から出て来た、デルタの薄紫色のポインティングマーカーが二人を拘束したのだから。

やがてその弾幕の中からゆったりと、デルタが現れてきた。

「しまっ——！！」

「やあ……さっきのはそれなりに痛かったよ……？」

スperlカード三枚分の弾幕を浴びる中で動けるとは思っていなかった慧音は、完全に虚を突かれる形になった。

逃げようとしてもマーカーの拘束力はとてつもなく、慧音もファイズも身動きが取れずにいた。

「じゃあ…ね…」

そう言つて二人の命を奪うべく、マーカーに向かって飛び上がるデルタ。

その時——

「うわっ！？」

「お前！？」

バトルモードとなったオートバジンがファイズと慧音を突き飛ばし、自らがマーカーの拘束対象となつて二人を庇つたのだ。

「何！？」

驚いたのはデルタも同様であつたがそのままマーカーに突入し、必殺技『ルシファーズハンマー』がオートバジンに突き刺さつた。

しかしオートバジンは、デルタが自らに突き刺さる寸前にバスターホイールを構えて防御の形をとつていたため、両者は拮抗する形となった。

最終的にはオートバジンがバスターホイールを乱射してデルタを弾き飛ばしたことで、ルシファーズハンマーを防ぎきることに成功し

た。

「うわあああ！」

V e e c l e m o d e

拮抗していた反動もあり、デルタは林の中に大きく弾き飛ばされ、オートバジンはビークルモードに変形した。

その時、ルシファーズハンマーとせめぎ合ったことで前輪の中心には挟られたような穴が開き、車体から黒い煙を上げていた。

「…ありがとな。助かった…」

ファイズがオートバジンにそう言うのと、オートバジンは弱々しくもライトをチカチカツと鳴らしていた。

「ととつ、痛いなあ…」

一方、林の中に弾き飛ばされたデルタ。

何とか無事に着地できた彼は立ち上がり、先程の場所に再び行こうとした時、

E r r o r

「あれ？」

電子音声と共にデルタの変身が解除され、その姿はラッキークローバーの一人——北崎となった。

「あれえ……こわれちゃったのかなあ？」

そう言いながら不満げにデルタギアを持ちあげる北崎。
ルシファーズハンマーを防がれたことによる反動に、修復されたばかりのデルタギアは耐えられなかったようである。

「なんか…つまんないなあ……また直してもうおうつと」

そう言う北崎はまるでファイズには興味を無くしたかのように森の奥に消えていった。

「……………う…うつ…」

「良平！」

「耕一…くん…？」

呻き声をあげて意識が戻った良平に詰め寄る耕一に、心配そうな目で見つめる白蓮、そしてそんな三人に駆け寄る慧音と巧。

良平の身体にできた風穴は白蓮の必死の治療により殆ど塞がっていた。……しかし、その顔は非常に青白くなっていた。

「ごめん…僕、もうダメ…みたい…」

「な…何言ってんだよ！」

「そつだ、怪我だって塞がって——！」

「わか…る、よ…自分の……身体、だもん…」

慧音の言葉を弱々しくも遮り、良平はそう言った。

良平にはわかっていた、自分の命が尽きようとしている事が。

白蓮に寄りかかっている背中の感覚が殆どなくなり、ザラザラと灰

になりかけていることが脳に伝わっていたから。

「死なせない…貴方は、死なせない……！」

そう言つて、白蓮は魔力を籠めて良平を治療しようとする。

…しかし――

「やめて…ください…」

「……………」

良平が彼女の手を掴み、それをやめさせようとした。

彼のその手からは青い炎が燃え始め、灰になって崩れ始めていた。

「そんなこと言わないで！！貴方は絶対に…！」

そう言いながら良平に治療の魔法を掛けていく白蓮。

しかし、助けたいという彼女の心境とは裏腹に、青い炎は収まる事は無く、灰化も止まる事はなかった。

「お願い…止まって！お願い……！」

「…………やめろ」

それでも尚治療を行おうとする白蓮を巧が彼女の肩を引っ張り、良平から彼女の手を引き剥がして治療を強引に止めさせた。

白蓮はそんな巧を思わず睨みつけようとしたが、巧を見て思い止まった。

彼の目は――どうにもならないことに直面したような、どこか悲しげな目をしていた。

「…完全な消滅。それがオルフェノクの…死だ」

巧の言葉に、白蓮も慧音も力なく座り込んだ。

敵味方関係なく、多くのオルフェノクの死に立ち会った巧の言葉には深い重みがあったからだ。

そんな中、巧を見据えた良平は炎に包まれながらも口を開いた。

「あなたが…ファイズ、ですよね…伝えたい事が…あるんです…」
「…何だ…？」

巧は良平の傍により、彼の言葉に耳を傾け始めた。

良平が何かを伝えたいのなら、きちんとそれを受け取らなければならないと思ったからだ。

「…一昨日…琢磨さんが…言ってたんです…」

意識が無くなりかけている中で、良平は琢磨が言っていたことを思い出していく。

あの時はオルフェノクになった自分に戸惑って碌にその意味を考えていなかったが、何故かはわからないがこの状況で疑問に思い、ファイズである巧に伝えなければならなかったのだ。

「……『王』の…目覚めは近い…って…」
「『王』……？」

王と聞いて巧が思い出すのは、サイガとオーガといった帝王のベルト。

しかしあの二本のベルトは巧自身が完全に破壊した筈である。ならば一体何のことを指しているのか…？

巧がそう考えていると、伝えたい事を伝えた良平は目を閉じ、先程よりも弱々しく口を開いていった。

「……せんせい…ひじりさん…こついちくん…ごめん、なさい…」
「良平……」

「馬鹿野郎……そんなこと、言うなよ……!」

慧音はどこか力なく答え、耕一にいたっては涙を流していた。

「できることなら……ぼく…みんなに…ちゃんと、あやまりたか—

——」

良平の言葉は最後まで言い切る事は無かった。

言いきる前に、良平の全身は一気に灰となり、彼の身体は白蓮の膝元で灰の山になったのだから。

「りょう…へ、い……?」

それを見た慧音は呆然とした顔で崩れ落ち、白蓮は膝の上に落ちた良平だった灰を涙を流して拾い上げ、耕一はその灰を握りしめ——

「りょうへえええええええええい!!」

友の死を目の当たりにした青年の悲痛な叫びが、すっかり暗くなつた辺りを包んだ——

——翌日

里の集会場にて、今回の件での犠牲者の葬儀が行われた。
供養されていく犠牲者の中には——

斎藤良平の名前が加えられていた。

第10話 友（後書き）

第10話、如何だったでしょうか？

描いて思ったんですが、今回は話の流れがちょっと強引だった気がします……

世界中のみんなー、オラに文才をわけてくれー

あと今回はキャラに加え、設定の紹介をしていこうかと思います。

良平が聞いた『声』

オルフェノクになった者に必ず聞こえてくる声。

この声はオルフェノクになったばかりの者に苦痛を与え、声に従って人を殺すことを楽しむオルフェノクには快楽と優越感を与える。逆に乾巧や木場勇治のように声に逆らって人を殺す事を拒むオルフェノクには苦痛を与え続け、この声に耐えられなくなった者は人を殺すようになるか、もしくは意識を奪われて獣のように暴れることになる。

かつてのスマートブレインの社長、村上峽児や花形はこの声の主を知っていたそうであるが、その事を知る者はいない。

彼らの信用を得た者ならば話は別だが。

アルマジリディウムオルフェノク

ジャケットの男が変化する、ダンゴムシの特性を持つオルフェノク。身体能力はオルフェノクの中でも低い部類に入るが、彼の最大の武器は丸まったダンゴムシ状の手榴弾と、ダンゴムシその物の形をした時限爆弾である。

特に時限爆弾は非常に強い接着力を有しており、それを引き剥がすのは鬼の腕力でも時間を要する。

斎藤良平

タートルオルフェノクに変化する人里の青年。耕一の幼馴染でもある。

温厚で他者を思いやる、少し気弱な性格であり、白蓮の夢にいたく共感している。

そんな性格である反動なのか、一度本気でキレると慧音の頭突き以外手に負えなくなる。

実は最近ぼつちやり気味な自らの体系にコンプレックスを抱き、外から流れてきた雑誌のダイエット方法などを実践していた。

好物はワラビ餅とワラビのおひたし。

ちなみに『声』の元ネタは異形の花々です。

草加さんがすごいことをやらかしたりすごいことになるので、グ○耐性のある方は一度読んでみるといいかもしれません。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第11話 鴉天狗の涙

—— あれ……？ここは……

どこか夢心地のような感覚に、目を開けた『彼女』が見たものは――

「わあ……きれい……」

「な？すごいだろ。こないだおれが見つけたんだぜ！」

とある山の中腹、下の世界が一望できるような開けた崖の上にいる少年と少女だった。

幼い二人の視線の先では夕日が沈みかかっており、一種の美しさを表していた。

—— ああなんだ、小さい頃の私と『あいつ』じゃない。
そういえばこんな場所もあったなあ……ここ数年行ってないけど。

「……………あ、そうだ！ねえねえ、これ見て！」

「ん？」

まどろみの意識の中、そんなことを『彼女』が思っていると少女は少年に向かって大きな紙を広げていた。

それは今の『彼女』にとってとても馴染み深い物だった。

「…なんだこれ？」

「新聞だよ！新聞！」

「……ああ、この間から作られたっていうアレか」

——懐かしいなあ、新聞第一号じゃない

………そういえばあの頃の新聞紙ってこんな色してたっけ………

そう思っている『彼女』をよそに、少年と少女は茶色気な新聞紙を地面に広げてその細かい字を読み進めていく。

途中複雑な漢字に戸惑いそうになったが、なんとか記事の内容は把握できたようである。

「……不倫かあ………あの大天狗のおっさん、こんなことしてたのか」

「ふりんってなあに？」

「お前はまだ知らなくていいんだよ」

「むー………でも、こういうのってどうやって知ったのかなあ……？」

不満げに頬を膨らませていた少女がそう言うと、少年は腕を組んでうーんと唸り始めた。

やがて答えに行きついたのか、腕を開いて顔を上げた。

「きつと色んな人から話を聞いたり、その情報から相手をつけ回して確認して奴を得たんじゃないか？本人から直接聞いたってことも………内容が内容だからこれはないか」

「へー………じゃあ、この写真はどやって撮ったのかな？撮らせてもらったとか？」

少女が指差したのは、件の大天狗が不倫相手と思わしき天狗と腕を組んでいるところだった。

それを見た少年は呆れたような顔で言った。

「あのな……いいか。こういうのは相手に気付かれたら撮れないもんなんだ。そのためには相手に気付かれないように着かず離れず息を潜めて、チャンスが来るその時までひたすら待ち続け……！」

少年の言葉には次第に熱が入り始め、それに影響されたのか少女も息を飲んで少年の話を熱心に聞いていた。

いつの間にか少女が正座になっていることには二人とも気付いていない。

——うわあ、恥ずかしいなあ……この時の私……

それに気付いていたのは『彼女』だけだった。

「そしてチャンスが来たその時！カメラを素早く相手に向け、ピントを合わせ、写真に収める！しかも一枚だけではなく、相手が言い逃れできないようにあらゆる角度からその姿を撮っていくんだ……！さながら、風のように舞い、蜂のように撮るってどこだな……！」
「おおー！！かつこいいー！！」

『決まった……！』といったような表情の少年に、はしゃぐように拍手をする少女。

そして少女は拍手の手を止め、満面の笑顔で言った。

「じゃあ私も、大きくなったら新聞作る！」

「……は？お前が？」

少女の言葉に、少年はその動きをピタリと止めて少女を見つめた。数秒間その状態が続き、少年の顔はぷつと吹き出したようになった。

「む！何よそれ！」

「いやお前の取り得ってさ、速く飛べるだけじゃん。お前が新聞作るとこなんて想像できねえよ」

「そんなことないもん！大きくなったら一人で写真撮ったり記事書いたり出来るようになるもん！」

少女の反論に、少年はにやけたような視線を向けて口を開いていく。

「ほーう？出来るのか？お前に」

「出来るもん！それで、この山だけじゃなくて世界中のみんなが読んでくれるような新聞にしてみせるもん！」

——…そういえば、こんなこと言ってたんだっけ。この時の私。

頬を膨らませていきり立つ少女を見た『彼女』は懐かしむような気持ちになった。

そんな『彼女』をよそに二人の会話は進んでいき、次第に少女が作りたいと言った新聞の内容について話していた。

「まあお前の事だから内容がどんな風になるかは大体予想できるとして、新聞の名前はどうすんだ？」

「うーんと……『からす新聞』とか——」

「ダメだな。つまんねえ」

少女が考えた名前は少年によって即否定され、不満げに頬を膨らませる少女を尻目に腕を組んで考えていく少年。

そして何か閃いたのか「そうだ」と言っ、顔を少女に向けて口を開いた。

「お前の名前から取ってさ——」

——『文々。新聞』、てのはどうだ？」

「……………ん」

朝の日光に当てられ、気の抜けたような声をあげて彼女——射命丸文は目を覚ました。

自宅のデスクで眠りこけていた彼女の目の前には愛用しているカメラ、ペン、手帳、そして一昨日人里で起きた事件を記した昨日の新聞を始めとした様々な物が散らばっていた。

「……………あんな昔の事を夢で見るなんて…」

眠たげな目で彼女はそこから昨日の新聞を取り出した。

オルフェノクになってしまった里の人間が、里を襲ったあの事件の意識が覚醒していく中、その記事を眺める文の心に言い知れぬ不安が過った。

理由は彼女が先程見ていた夢にあった。

夢に出てきたのは、小さい頃の文自身と彼女の幼馴染だった。

しかし、その幼馴染は約二ヶ月前から行方不明となっている。

そして一昨日知ったオルフェノクは元々人間だったという真実。これらのことから文の中に一つの、どうしても認めたくないある仮説

が生まれる。

(…そんなこと、きつと……ないよね……)

そんな事を思いながら、文は近くにあったもう一枚の紙を手にした。それは二か月前、幼馴染が行方不明になってから山中に撒かれた物だった。

そこに載せられているのは幼馴染である鴉天狗の青年の写真と、彼の名前だった。

「……京……」

そう呟いた文は、『行方不明者、四方院京』と記されたその紙を静かに抱きしめ、蹲った。

その背中では彼女を知るものが見れば、射命丸文とはとても思えないほど弱々しいものだった。

「にとり、居る？」

「あれ、雛？どうしたの」

——早朝、妖怪の山、にとりの家

様々な機械が置かれ、機械油の香りがほのかに漂うその家の入口に、家主である河城にとりと彼女の友人である厄神、鍵山雛の姿があった。

「貴女に用事があるっていう人間が居たから連れて来たの」

「用事？……誰だろ……」

雛の言葉に疑問符を浮かべながら、にとりは背を伸ばして雛の後ろに視線を向けた。

そこには見知った顔が居た。

「巧？」

「よう。こいつを診てやってくれ」

「うん？どれど……れ……」

オートバジンを引いた、乾巧だった。

巧の言葉に従ってオートバジンに目を向けた時、にとりの動きがピシリと岩のように止まり、その表情はあっという間に青くなっていた。

彼女が見たものは——前輪の中心に穴が開いたオートバジンだった。

「ぎゃああああ！！私のバジンちゃんがあああ！！」

「いや、お前のじゃねえから」

「じゃあ二人ともそこで待っててね。……ああ可哀想に、こんなボロボロになって……」

あれから落ち着きを取り戻したにとりは巧と雛を居間へ通し、オートバジンを慰めるように涙目で自らの工房へ連れていった。それを見送った巧は出された緑茶をフーフーしていき、雛は緑茶に手を出さずに巧をじっと見つめていた。

「……………なんだよ」

その視線に気づいた巧は訝しげな表情で雛に尋ねた。
それに対して雛は緑茶を一口飲み、神妙な顔で口を開いた。

「…貴方、人間よね？」

「……一応な。それがどうした」

雛の問いに一瞬どきりとした巧の返事に、彼女は「そう…」と呟いて言葉を紡いでいった。

「…貴方が抱えている厄、人間が持つには大きすぎるもの」

雛は厄を司る八百万の神である。その役目は人々から厄を受け取り、神々に渡すことにある。

それ故に彼女は厄を目視する事が出来る。それこそ、彼女以外にも見えるほどの大きな厄から彼女にしか見えない小さな厄までと様々である。

二年前山を訪れた霊夢や魔理沙と会った時、雛から見た彼女らの厄は普通の人間が抱えるような量だった。

それ以降も早苗を始めとした様々な人間と出会ったが、個人差はあれど誰しも人間が抱えてもおかしくないような量の厄を持っていた。

しかし巧は違った。彼が抱える厄は人間が持つには余りにも大きすぎた。

にとりの家を尋ねた巧と初めて出会ったとき、一瞬本当に人間なのかと疑ったほどだった。

「出来る事ならその厄を受け取ってあげたいのだけど…余りに多くて一度じゃ受け取れきれなかったの。ごめんなさい」

厄神である雛がそんな巧を見て黙っている筈がなく、ここに連れてくる間に巧から厄を受け取ろうとした。

しかし彼女が元々蓄えていた厄に巧の厄を加えるには、彼の厄は余りにも多すぎたのだ。

人々を厄から守る雛にとって巧の厄を受け取れなかったのは辛い事であり、申し訳なく思っていた。

「別に気にすんな。あんたが言う程俺は自分が不幸だとは思ってねえよ」

頭を下げる雛に対し、巧は冷めた緑茶を口につけながらそう答えた。確かに巧の人生は普通に比べたら厄に見舞われたものだろう。

子供のころに死んで人間ではなくなり、同胞である数え切れないオルフェノクを斃し、オルフェノクからも人間からも恨まれ、狙われ、拒絶されてきたのだから。

それでも巧は挫けず、自分が不幸だとは思わなかった。

何故なら巧には仲間が居たからだ。

共に戦い、共に泣き、共に笑った心から信頼できる仲間が。

「本当に不幸だったら……仲間なんて出来なかったからな」

園田真理、菊地啓太郎、長田結花、海堂直也、向こうはどう思っているか怪しいが草加雅人、三原修二、この五年間共に戦った人間とオルフェノク、そして——木場勇治。

誰も彼も、巧にとって大事な仲間である。

本当に不幸だったら、仲間など出来る筈がないのだ。

「貴方は……友に恵まれたようね」

巧の話と表情から顔が柔らかになった雛がそう言つと巧は「かもな」と言い、続けて言葉を発した。

「特に、口うるさい女と究極のお人好しがな」

BAR CLOVER

「聞きましたよ。北崎さんがデルタギアを壊したそうじゃないですか」

店内の掃除をする影山冴子に、手伝いながら詰め寄る琢磨逸郎の姿があつた。

「仕方がないじゃない、まだ直つたばかりだったんですもの。耐久性が甘くても不思議じゃないわ」

「だったら尚更、北崎さんよりもこの僕が使つた方が良かったじゃないですか。大体あの人はいつも物使いが荒く……」

カウンターテーブルを拭きながらそう答える影山に、北崎への愚痴をこぼしながらデルタギアの使用を要求する琢磨。

その時――

「だめだよ琢磨くん……人の悪口をいつちゃ……」

「ひっ、ひえええ！」

琢磨の背後にすつと北崎が唐突に現れ、琢磨の髪をむんずと掴んだ。

琢磨が慌ててその腕を振り落とすと、彼の髪と腕から灰が少しこぼれた。

「大体……あのベルトはぼくのおもちゃなんだから……琢磨くんが使ったいいわけないじゃない……」

「ず、ずるいですよ……北崎さんばかり……」

「わからない人だなあ……」

そう言つて、怯える琢磨に手を伸ばす北崎。

その表情は明らかに琢磨の反応を楽しんでいた。

「ダメよ北崎くん、今掃除しているからゴミを増やさないでちょうだい」

「はあい……」

影山に咎められ、つまらなそうに店内を見回す北崎。その横では琢磨が安堵の息を吐いていた。

その時、北崎がある事に気付いた。最近ラッキークローバーに加入した最後の一人がこの場にいないのだ。

「ねえ……そういえば『あの人』はどうしたの……?」

「彼なら妖怪の山に向かったわよ」

北崎の問いに答えた影山は、テーブル拭きをカウンター下のロッカーに仕舞って再び口を開いていった。

「何でも、やっておく事があるらしいわ」

——人里、墓地

「……………」

「…霊夢……………」

「昨日の犠牲者の墓石の前で両手を合わせる霊夢と、彼女に付き添う慧音の姿があった。

霊夢の表情は慧音から見て影になっていて窺えない。

そんな霊夢は最後の犠牲者の墓前で両手を合わせながら口を開いた。

「……………慧音。私ね…自分が許せないの」

「……………」

その言葉を慧音は静かに受けとめ、霊夢は続けて言葉を発していく。

「博麗の巫女は幻想郷の結界を、そこに住む住人を守る。スペルカードによって人妖の殺し合いを封じ、ルールを破る奴にはきついお仕置きを喰らわせる。……私はこの『楽園』の皆を守らなきゃいけないんだって……そう、思ってたの」

そこで言葉を区切った霊夢は両拳を地面に叩きつけた。

その表情は悔しさや怒りで歪んでおり、地面に叩きつけた拳からは僅かながらも血がにじみ出していた。

「…何が博麗の巫女よ！何が楽園の素敵な巫女よ！！こんな事件が起きたことも知らずに！外来人の巧一人に任せっぱなしで！私は…

私は……………」

「…霊夢……………」

そう叫ぶ霊夢に、慧音は何も言えなかった。

慧音が里の守護者である自分の立場に責任を感じているように、霊夢もまた博麗の巫女である自分の立場に彼女なりに責任を感じているのだろう。

霊夢は許せなかった。幻想郷を蹂躪するオルフェノクが、何も出来なかった自分が。

「…ごめん。里であんな事があって一番辛いのはあんたかもしれないのに…」

「…いや、お前の気持ちもわかる。何か叫びたい時は無理に溜め込むよりも素直に吐き出した方がいい」

「……ありがとう」

幾らか落ち着きを取り戻した霊夢がそう言つと彼女はスツと立ち上がり、振り向きざまに慧音にある事を尋ねた。

「そう言えば慧音、里で藍を見かけなかった？ 橙でもいいんだけど」

「…いや、そう言えばここ最近買い物に来てる様子もないが…どうかしたのか？」

「…あんたには話しておこうと思う」

そう言つと霊夢は静かに目を閉じ、口を開いていった。

「幻想郷の結界の普段紫が管理している部分にね、ちょっとしたところびができてたのよ。………2、3週間も前から、今もそのままで、ね」

「何だと……！？」

霊夢の言葉に慧音は驚きを隠せなかった。

八雲紫は愛していると言つても過言でないほどのこの幻想郷という世

界を大事にしている。

そんな彼女が、幾ら小さい物とは言え結界にできたほころびを何週間も放置するなど考えられなかった。

いや、それ以前にオルフェノクが幻想郷を蹂躪しつつあるこの状況で彼女が行動しないこと自体に大きな違和感がある。

そこまで考えて、慧音はふと思った。

ひよっとしたら、八雲紫は動かないんじゃないかと――

「…慧音。ひよっとして紫は動きたくても動けないんじゃないかって思うの」

「……彼女に、一体何が……？」

そう呟く慧音に、霊夢はやれやれと言いたげな顔で「さあね」と呟いた。

「それを知るためにここ数週間紫を探してるんだけど、全く見つからないのよね。藍もこないだ会ったきりで見つからないし」

霊夢は「それでね」と一旦言葉を区切り、続きを発していった。

「紫や藍が見つからないんだったら、居場所がはっきりして且つあの二人と親しい奴……幽々子から話を聞こうと思ったわけよ。仮に幽々子が知らなかったとしても、紫に話を通してもらえばいいしね」

将を射んと欲すれば、まず馬を射よ。

この言葉があるように、霊夢は八雲家という『将』が見つからないのなら、幽々子という『馬』から押さえようとしているのだろっ。

「で、慧音にはもし紫たちのうち誰かを見かけたら教えてほしいの。

これ貸すから」

そう言つて霊夢が慧音に渡したのは手のひらサイズの陰陽玉。
一年ほど前、彼女が地底に潜る時に持つて行つた通信可能の物だつた。

「それは構わないが…お前は一人で行く気か？」

「何、心配なの？大丈夫よ。もしオルフェノクが出ても無茶しないから」

「じゃ、またね」と言つて神社へと歸つていく霊夢。

その背中を見て、慧音はどこか不安を覚えた。

彼女の脳裏には、先程の感情を露にした霊夢の姿が色濃く残つていた。

「……杞憂であればいいが…」

霊夢の姿が見えなくなるまで、慧音は彼女の背中を心配そうに見つめていた。

「ぐううつ！」

——妖怪の山、中腹

呻き声を上げながら立ち上がる白狼天狗——犬走椋は身体中傷だらけになりながらもその鋭い視線を相対する相手に向けていた。

その視線の先には鉄扇をゆつたりと構えるレイヴンオルフェノクが佇んでいた。

時は少し遡る。

椛が通常業務である山の巡回を行っている最中、彼女の目の前に突如レイヴンオルフェノクが降り立ったのだ。

上司の新聞などでオルフェノクがこれまで何をしてきたか知っていた彼女は山から立ち去るように警告したのだが従わなかったため、力づくで追い返そうとした。

しかしレイヴンオルフェノクのパワー、スピード、戦闘センスは椛を上回っており、その証拠として彼女が全身傷だらけでいるのに対し、レイヴンオルフェノクはほぼ無傷であった。

（ここは……一旦引いて報告した方が無難かな……）

椛の仕事はあくまで警備である。侵入者が弱ければ自分一人で追い返せるのだろうが、今相対しているレイヴンオルフェノクは明らかに自分よりも格上の實力を持っている。

ならば自分は一旦引き、上司に報告してその指示を仰ぐと考えていた。

その為には迅速に退き、迅速に報告しなければならない。

「……はあっ！！」

そうと決めた椛の行動は早かった。

『の』の字の弾幕を一つだけではなく二重にも三重にも形成し、その濃密度な弾幕でレイヴンオルフェノクの視界を塞いだ。それを確かめた椛は急いでこの場から退こうとした。

「……よし。今のうち………につ？！」

そうして飛び立とうとした瞬間、彼女の周りを暴風が包んだ。

かなり強い台風と言っても過言ではない暴風が彼女の身体を自由を奪い、同時に展開していた弾幕を晴らしてしまった。

「なっ……！？」

次の瞬間、椀の視界一杯にレイヴンオルフェノクの掌が現れて彼女の首を掴み、首を絞められて持ち上げられてしまった。

「あ……ぐうっ……！！」

「……答える。射命丸文は今どこに居る」

レイヴンオルフェノクから出てきたのはよく仕事をサボって幻想郷中を飛び回る上司の名だった。

そこで椀はレイヴンオルフェノクの狙いが文である事がわかった。

「誰が……あなたなんかにつ……！！」

椀はよく仕事をサボったり自分を振り回す文のことが嫌いである。しかし同じ山で育った者である事と、彼女のことを何だかんだで本気で憎めないため、文を侵入者に差し出す気など彼女には毛頭なかった。

「……そうか……」

「あああああ……！！」

そんな椀にレイヴンオルフェノクは彼女の首を絞める力を強めていく。

ぎりぎりと言がするような力で首を絞められていく椀の意識が失いかけた時――

「……む？」

レイヴンオルフェノクの肩に一羽の灰色の鴉が止まり、首を絞める力が弱まった。

カアカアと普通の鴉とは違って若干低い鳴き声でレイヴンオルフェノクに何かを伝えていく。

「…見つかったか」

「あぐうつ!!」

その言葉と共に、レイヴンオルフェノクは椀を近くにあった木に投げ飛ばした。

背中から木に叩きつけられた椀は崩れ落ちていく身体で飛び去っていくレイヴンオルフェノクの姿を見つめていた。

（あ…や…さん…に、げ…）

その後ろ姿に椀は必死に手を伸ばそうとしても身体が思うように動かず、パタリと地面に落ちた。

（…そう、いえば…あの…オルフェノクの、声…どこかで…聞いた…よう、な…）

その疑問に答える者はいないまま、椀の意識は闇に落ちていった。

—— 昼下がりに、にとりの家の前。

—— 5 5 5 Enter
Standing by

ファイズフォンにコードを入力した『彼女』は感慨深そうにそれを折たたみ、満面の笑顔でそれを鋭く天にかかげた。

「……変、身!!」

力が籠ったその言葉と共に、『彼女』はファイズフォンを腰に巻いたファイズドライバーに装填した。
その直後——

Error

「ひゅいひゅい!!」

ドライバーから装着者を拒絶する音声が流れたと同時に、紅い光に弾かれるように『彼女』——河城にとりの身体は大きく投げ出された。

その上後頭部が近くにあった機械に激突したため、彼女は痛みで悶絶して地面を転がり回る羽目になった。

「だから言っただろ。お前には無理だつて」

呆れたような声でファイズギアを拾い上げたのは乾巧だった。

その視線の先には心配そうな雛の手を借り、後頭部を抑えながら涙目で立ち上がるにとりが居た。

「ううう……で、でもやっぱり変身するとどんな感じになるのか知りたかったんだよ……」

オートバジンの修理が終わり、今度は壊さないようにと巧にしつこく言ったにとりはファイズギアに興味を持ち、一回だけでいいから変身させて欲しいと巧にせがんできたのだ。

最初は嫌な顔をした巧だったがオートバジンを直してもらったことと、確かめておきたい事があったため一回だけ彼女にファイズギアを貸したのだった。

それは『妖怪はファイズに変身できるか否か』ということ。
結局、妖怪であるにとりは変身できなかった訳だが。

「しっかし…何で巧は変身できて私は変身できなかったのかなあ…？」

「さあな」

「知らないの？」

「使っているからって全部知ってる訳じゃねえよ」

にとりと雛の疑問の声に対して巧が言ったのは嘘だった。

ファイズに変身できるのはオルフェノクか、オルフェノクの記号の影響が強い人間だけである。

しかしその事を口にすることは自分がオルフェノクである事を告白するのと同じであるため、言うつもりはなかったが。

「あやや？何やら盛り上がっていますね」

その言葉と共に巧たちの前に降り立ったのは文だった。
その姿を見た瞬間、巧の眉が嫌そうに寄せられた。

「え、えーと……何か？」

「……………」

「もしかして…まだあの記事の事根に持ってます？そんな小さい事に気にしてたらやってられませんよ？」

「……お前な……」

ひらひらと手を振る文に、より強い睨みをきかせる巧。

そんな微妙な雰囲気になった二人に、場を取り直そうとにとりが声を掛けた。

「そ、そう言えば文は何しに来たの？」

「そうそう忘れるところでした！実は巧さんに聞きたい事が――」

「断る。お前の取材なんて二度と御免だ」

「違います違います！取材じゃないですって」

文の言葉を遮って不機嫌そうに言う巧に、弁明するかのように両手を振る文。

そんな彼女に巧は訝しげな視線を向けて口を開いた。

「じゃあ何だよ」

「えーっと…ちょっと個人的なことなので……」

その言葉と共に、巧の腕をがっしりと掴む文。

それに対して「は？」と言いたげな表情の巧を尻目に彼女は言った。

「場所を移しましょう！」

「お、おい！待てええええ………！」

巧を掴んだまま、翼を広げて飛び去っていった。

そして黒い羽根が舞い落ちるその場所に二人が去っていった空を見上げたまま、ポカンとしたような顔のにとりと雛が残された。

「…行っちゃったね」
「…そうね」

そんな彼女たちの声に応えるように、傍に止められていたオートバジンがエンジンを鳴らしていた。

「このへんでいいですかね」
「うおおっと！」

にとりの家から少し離れた林の中。

そこに文と、彼女に手を引かれた巧が降り立った。前者はふわりと、後者は前のめりになりながら。

「お前な……こんな所に連れて来て、一体何の用だよ」
「……………巧さん」

不機嫌そうな顔でそう言う巧に対して文は今までの営業スマイルとは違う、どこか神妙そうな表情で口を開いた。

少なくとも巧はこのような顔をする文を初めて見たため、口に出さうとしていた愚痴を引っ込めた。

「…オルフェノクは一度死んだ人間が蘇った存在………なんですよね」
「……………それがどうした」
「…教えてください」

そして文の口から出てきたのがオルフェノクに関する事だったため、巧は先程までの愚痴交じりの気持ちるを完全に切り替えて彼女に向き

あった。

文はそう言つと一旦口籠つたような表情になり、やがて意を決したように口を開いた。

「妖怪がオルフェノクになるという事は……有り得ますか？」

「……お前……」

巧はこれまで妖怪がオルフェノクに襲われるところを見てきた。

しかしこれらの妖怪は全てオルフェノクになることなく灰化したため、実際に妖怪がオルフェノクになるかどうかは巧にはわからなかった。

「いや、そもそも何故文がこのような事を聞いてくるのか。新聞のネタにする気は——ないだろう。彼女の視線は余りに真っ直ぐで、同時にどこか不安げに揺れていた。

「……さあな。俺には——」

「それには俺が答えよう」

巧が口を開こうとした瞬間、上空から声が聞こえた。

咄嗟に振り向いた二人の視線の先には黒い長髪を後ろで一括りに纏め、巧と同じくらいの背丈の鴉天狗の青年が降り立った。

その姿を見た瞬間、文の目は大きく開かれ、口を震えさせながら言葉を発した。

「う、うそ………京……？」

「……久しぶりだな、文」

青年——京が文にそう言つと、彼女はふらつと京に向かって駆け出しそうになったが、巧が手でそれを制した。

何を、と思つて文が巧に視線を向けると彼は京に鋭い視線を向けて

いた。

「巧さん……？」

「…お前、さっきの言葉はどういう意味だ」

巧の言葉に文がはつとしたような顔を京に向けると、彼は一旦息を吐き、口を開いた。

「簡単なことだ。………こういう事だからだ」

その言葉と共に京の身体に紋様が浮かび上がり、彼の姿は鴉の特性を持つレイヴンオルフェノクに変化した。

一昨日の事件の時、琢磨と共に居たあのオルフェノクに。

それを見た文の顔が驚愕の色で染められ、首を横に振った。

目の前で起きた事が現実だと認めたくないかのように。

「そ、そんな…嘘でしょ………ねえ京!!」

「残念だが本当だ。…俺がここに来たのは…」

そう言うと、レイヴンオルフェノクは鉄扇を文に向け、振るった。

その瞬間、狼としての危機本能が働いたとしても言うべきか、巧が文を抱えて素早く伏せた。

直後、二人の後ろにあった木が切断され、ざわざわと葉が擦れる音を上げながら倒れた。

それを見て、文は顔を青ざめて口を開いた。

「きよ………京………」

「お前を殺すためだ。文」

冷たい声でレイヴンオルフェノクはそう言った。

それを聞いた巧は立ち上がり、ファイズドライバーを腰に巻いた。

「た、巧さん…?」

「…お前とあいつがどういう仲なのか俺にはわからない。でもな…」

—— 5 5 5 Enter

Standing by

「ここで戦わなかったら、二人とも殺されちまうぞ!」

「ま、待つて……」

その言葉と共に、巧は駆け出していく。

文はその背中に手を伸ばそうとしたものの、届かなかった。

「変身!」

Complete

走りながらファイズへと変身する巧。

相対するレイヴンオルフェノクの影が京の姿になり、口を開いた。

「……ラッキークローバーが一人、四方院京」

彼の目の前には、詰め寄って拳を振り上げるファイズの姿があった。

「らあああっ!」

「いざ……参るっ!」

その言葉と共に、ファイズとレイヴンオルフェノク、両者の拳がぶつかり合った。

「……………京…巧さん…やめて……………」

それを見る文は俯き、片手で地面を、もう片手で自らの扇を握りしめた。

そうしている間に、ファイズがレイヴンオルフェノクを投げ飛ばした。

投げ飛ばされたレイヴンオルフェノクは空中で体勢を整え、鉄扇を振るってファイズの周囲に暴風を起こす。身動きができず、防御の体勢になったファイズにレイヴンオルフェノクが鉄扇で斬りかかった。

ファイズはぎりぎりで鉄扇を持つ腕を掴み、頭突きをして両者は睨みあう形になった。

それを見ていた文がふらふらと覚束ない足取りで歩きだし、口を開いた。

「……………お願いだから、やめてええええ!!」

「なっ?!」

「くっ!!」

文の悲痛な叫びと共に、二人に向かって色とりどりの弾幕が放たれた。

その弾幕を放つ彼女の顔は——涙に濡れていた。

第11話 鴉天狗の涙（後書き）

みなさんこんばんは、コラッタです。

…はい、というわけでまたもやオリキャラ登場の回でした！。

お気づきの人もいるかもしれませんが、今回正式に登場した京ですが第1話と第9話にちよこつと出ております。

また、拙作においてストーリーを通して登場するオリキャラは、彼が最後の一人になると思います。

これ以降は名前ありでもテレビ版におけるゲストキャラ的な扱い…というよりモブ系になると思います。

ちなみに冒頭の過去の文ですが、身体&精神年齢はだいたい園児クラスをイメージしています。妖怪にだってああいう時期があったはずだ。異論は認める。

さて、今回もオリフェノクの紹介に入りたいと思います。

レイヴンオルフェノク

四方院京が変化する、鴉の特性を持ったオルフェノク。

使徒再生により覚醒したオルフェノクであるが元々天狗だった事もあり、オリジナルに引けを取らない実力を誇っていたためラッキークローバーの一員となった。

その手に持つ鉄扇を振るうことであらゆる種類の風を自在に起こす事ができ、かまいたちの他、その気になれば竜巻を起こすことも可能である。ぶつちやけ文の能力と余り変わらないが、その代わり身体能力はこちらの方が上。

こんなところでしょうか。
今回はこのへんで、それでは。ノシ

第12話 二人の鴉天狗（前書き）

ヒャッハー！早めに更新できたぜー！
ヒャッハー！でもいつもより短めだぜー！

……はい、のっけからすいませんでした。

第12話 二人の鴉天狗

——『文々。新聞』？

——おう、『。』が入った新聞なんて珍しいぞ。……多分。

——『文々。』かあ……

——…なんだ、もしかして気に入らなかったか？

——そんなことないよ！私、大きくなったらこの名前で新聞作るよ！……そうだ！京も一緒にやろうよ！

——あー……悪い、俺読む専門に回るわ。（めんどいし）

——えー！？私京と一緒に作りたいー！

——お前は少し俺から独り立ちしろ。……心配すんな、たまに様子見てやるから。

——ほんと！？ほんとだよね！？

——ホントだって。……ほら、何だっけ？お前がさっき言ってた……夢？

——えーと……世界中の皆が読んでくれそうな新聞を作る事……
だったような……

——そうそう。お前のその『夢』が叶うまでちゃんと見ててやるから。

——ほんと？じゃあ約束、ゆびきりしようよ！

——わかったわかった。…ほれ。

——ゆーびきーりげんまん、うそついたらはりせんぼんのーます。

——ゆーびきった！

——妖怪の山、中腹

「うおっと！……あいつ、何処に行った…？」

ローリングなどで文の弾幕を何とか避けたファイズは、自分と同じく弾幕に晒されたレイヴンオルフェノクの姿を探していたがその姿は周囲に見えなかった。

そうして警戒しながら周囲を見回していた時——

「っ！くっ！」

突如レイヴンオルフェノクが目の前に現れ、鉄扇でファイズに斬りかかってきた。

ファイズは紙一重でそれをかわし、そこから次々と振るわれるレイヴンオルフェノクの斬撃をかわしていった。

やがてファイズは鉄扇を持つレイヴンオルフェノクの腕を掴みとり、

自分の方に引き寄せた。

「お前！なんであいつを狙った！」

「貴様に言う筋合いは……ないっ！」

「ぐあっ……！」

その言葉と共にレイヴンオルフェノクはファイズの鳩尾を蹴り飛ばし、後ろにたたたらを踏んだファイズの隙を狙うかのようにフルメタルラングを鉄扇で斬りつけていった。

その衝撃で後ろによろけたファイズに更なる追い打ちを仕掛けようとした時――

「京！お願い……やめて……！」

文がレイヴンオルフェノクの背中に抱きつき、彼の動きを封じたのだ。

攻撃を止められたレイヴンオルフェノクは文に視線を向けた瞬間――

「離せ！文！」

「あうっ……！」

腕を振るい、彼女を振り落とした。

その時腕が顔に当たったことで脳が揺れたのか、彼女はいとも容易く地面に崩れ落ちた。

そんな文にレイヴンオルフェノクが足を向けた時

「やめろおお……！」

ファイズがレイヴンオルフェノクの背中を蹴りつけ、前方にたたたら

を踏んだ彼を強引に自分の方に振り向かせて顔面に拳を入れ、先程自分がやられたようにレイヴンオルフェノクの鳩尾を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされて木にぶつかったレイヴンオルフェノクを視界に入れないながら、ファイズは文に駆け寄った。

「おい、大丈夫か?!」

「……………」

ファイズの声に答えぬまま、文は呆然といったような表情でレイヴンオルフェノクの腕が当たったことで赤く腫れた自身の頬に触れていた。

ファイズはそんな文の肩を掴んで呼び掛けるも、彼女は呆然としたままだった。

「……………京……」

「お前……………ぐっ!?!」

文に呼び掛けるファイズの言葉を遮るようにその首元にレイヴンオルフェノクのラリアットが入ったことで、ファイズとレイヴンオルフェノクはもつれ合いながら地面に転がった。

そしてすぐさま立ち上がった二人のうち、体勢を直すのが僅かに速かったファイズはレイヴンオルフェノクの顔面を数発殴り、よろめいたところで後ろから羽交い絞めにしようとしたのだがレイヴンオルフェノクはそれを逆手にとって背負い投げの要領でファイズを投げ、仰向けになったところでファイズの首を締め始めた。

「う、おおおお……………!」

ファイズはその腕を解こうとするが仰向けになっていることもあり、上手く力を入れられずにいた。

そうしてファイズの意識が薄くなりかけた時――

――風符『天狗道の開風』

「ぐおっ!!」

つむじ状の突風がレイヴンオルフェノクを吹き飛ばした。
身体が自由になったファイズの傍に降り立ったのは――

「……巧さん。先程は見苦しいところを見せてしまつてすみません」
「お前……」

扇を構えた射命丸文だった。

その視線は力強くレイヴンオルフェノクに向けられているが、ファイズにはそれがどこか不安げに揺れているように見えた。

ひょっとしたら、彼女はまだレイヴンオルフェノクと戦うことに迷っているのかもしれない。

……いや、迷つて当然なのだ。

突然親しい者と殺し合うことになって迷わない者などいない。それは人間だろうと妖怪であろうと同じ事なのだ。

そして存在を精神面に頼っている妖怪だからこそ、その迷いは根強い物になっていた。

「……ようやくその気になったか、文」

「……京、なんでこんなことを……」

体勢を直したレイヴンオルフェノクに文がそう問いかけるも、彼はその問いに答えることなく鉄扇を振るつた。

文はそれに対してすかさず自らの扇を振るい、次の瞬間ファイズと

文の目の前で爆発するかのような凄まじい風圧が起きた。

レイヴンオルフェノクの生み出した突風が文の突風とぶつかり合い、爆発のような風圧を生み出したのだ。

「巧さん！私……戦います！」

そんな光景を目にするファイズに、文が扇を構えながらそう言った。そんな彼女にファイズは尋ねた。

「……大丈夫なのか」

「………はい。京が私を殺そうというなら、私は……京を倒します！」

その言葉と共に、文は勢いよく飛び出した。

彼女の視線の先には同じ様に飛び出てきたレイヴンオルフェノクが居た。

「はっ！」

レイヴンオルフェノクが鉄扇で斬りかかり、文は彼の頭上に回ることとで素早く回避して、そこからレイヴンオルフェノク目掛けて弾幕を發した。

レイヴンオルフェノクはその弾幕の幾つかを鉄扇で斬り払い、何発か被弾しながらも文目掛けて腕を伸ばそうとした。

「らあっ……！」

それをファイズがレイヴンオルフェノクの背中を蹴りつけて阻止し、そのまま拳を何発もレイヴンオルフェノクに打ちつけていく。レイヴンオルフェノクはファイズの拳のラッシュに晒されながらも無理矢理ファイズの腕を掴みとり、文目掛けて投げ飛ばした。

「うおっ！」

「きゃっ！」

ぶつかつたファイズと文はもつれ合いながら地面に転がり、最終的にファイズが文の下敷きになった。

「重っ……早くどけ！」

「ちよっ、乙女に対して重いとか言いますか！？」

「悪かつたな！口が悪くて！」

そんな軽口を叩きあいながら立ち上がるファイズと文。

その瞬間――

「っ！避ける！！」

ファイズの言葉と共に互いに逆の方向に飛び込むファイズと文。

次の瞬間、二人が居た場所にレイヴンオルフェノクが放つたかまいたちが通り、落ち葉がみじん切りになった。

避けるのが一瞬遅れていたら二人の身体は八つ裂きにされていただろう。

そしてファイズと文は林の陰に隠れ、レイヴンオルフェノクの視界から逃れていく。

相対するレイヴンオルフェノクは周囲を警戒し――

Ready

「くっ！！」

背後からファイズショットを装備したファイズが殴りかかってきた。

レイヴンオルフェノクは振り向くと同時に鉄扇でファイズの鉄拳を受け止めた。

——しかし、ファイズの攻撃はここで終わりではなかった。

Exceed charge

拳を受け止められたままファイズフォンを操作し、ファイズショットに凝縮されたフォトンブラッドが送られていく。

それに気付いたレイヴンオルフェノクがファイズに空いている拳で殴りかかるより僅かに早く。

「うらあっ!!」

「ぐおおっ!!」

ファイズの咆哮と共に力強く振るわれた鉄拳、グランインパクトがレイヴンオルフェノクの鉄扇を粉碎した。

その拳圧で吹き飛ばされたレイヴンオルフェノクが翼を羽ばたかせて空中で静止した瞬間、彼の背筋に冷たいものが走った。

——風神『二百十日』

文の周囲で何重にも重なって展開されていた輪の弾幕が、レイヴンオルフェノクに向かって一斉に降り注いだ。

「ちっ……!!」

鉄扇を失ったレイヴンオルフェノクは幾らか被弾しながらもその弾幕の雨を掻い潜っていく。

そこで文は追い打ちをかけるべく、もう一枚スペルカードを取りだした。

——風符『天狗報即日限』

宣言すると同時に文の身体は風に包まれ、普段よりも素早い速さで弾幕に囲まれているレイヴンオルフェノク目掛けて飛び込んでいく。弾幕を避け、時には腕をふるって弾幕を打ち消すレイヴンオルフェノクに瞬く間に詰め寄り、彼の首目掛けて手刀を振りかぶった。

「はあああつ!!」

「文………!!」

——そして防御もままならないレイヴンオルフェノクの首に文の手刀が

「………つ!!」

——入らなかった。

レイヴンオルフェノクの首の寸前で、文の手刀は止められていた。その手は汗に濡れて震えており、彼女の唇は噛みしめられ、その瞳は涙混じりに揺らいでいた。

……文には出来なかった。

幼馴染を倒そうとする事が、手にかける事が、彼女には出来なかったのだ。

「あいつ………」

そしてそれは地上に居たファイズも見ていた。

かつて自分も迷いが故にオルフェノクと戦えなかった時期があった。だから彼女が攻撃できなかった気持ちもわかった。

……いや、相手が親しい者である分、彼女の迷いの意味もその深さも

自分より重いのだろう。

ファイズがそう思っていると――

「……………ふんっ!!」

「ううっ!」

至近距離で放たれたレイヴンオルフェノクの拳が、震える文の腹に突き刺さった。

鳩尾にピンポイントで拳が入った文は地面に落ち、レイヴンオルフェノクは降り立つとそんな彼女に無言で歩み寄っていった。

「射命丸!……………うおっ!!」

ファイズが文に急いで駆け寄ろうとしたものの、新たに鉄扇を生成したレイヴンオルフェノクが放った暴風により、近づく事が儘ならなくなった。

余りの暴風に立つ事さえ困難になり、フォンブラスターを取り出すこともできなかった。

そんなファイズを尻目に、レイヴンオルフェノクは文の目の前まで辿り着いた。

「きよ……………京……………」

「…あそこで情けを掛けたのがお前の敗因だ。文」

顔面蒼白で腹を抱えて蹲る文を見下ろすレイヴンオルフェノクはそう言いつと鉄扇を振りかざした。

「せめて、苦しまないようにしてやるっ」

「や……………嫌っ……………」

「やめ、ろおお……………!!」

座り込んだままの文はしどろもどろになりながらにとりに尋ね、にとりは顔を青くしながら口を押さえて黙り込んだ。

そしてそこにレイヴンオルフェノクの風から逃れたファイズが駆け寄り、雛に尋ねた。

「お前ら……どうした？」

「そ、それが……この子がいきなり動き出して……それでにとりが止めようとしがみついて……うう……」

そこまで言った雛は顔を青くして深く項垂れた。

ファイズが見回すと雛と同じ様に項垂れるにとりと、苦しげに腹を押さえる文が居た。

オルフェノクの剛腕を至近距離で且つ鳩尾に無抵抗で食らってしまったのだ。

如何に妖怪と言えどすぐに復帰するのは困難だろう。

「……お前らは下がってろ。後は俺がやる」

R e a d y

ファイズはそう言うと、ミッションメモリーをオートバジンのハンドルに装填し、ファイズエッジを抜き取った。

「ま、待つて下さい巧さん……私はまだ……うっ！」

「……無理すんな」

立ち上がるうとしたものの、腹部に走る激痛に再び座り込んだ文にファイズはそれだけ言ってレイヴンオルフェノクに駆け出していった。

その後ろ姿を見て文は俯き、その顔を悔しげに歪めた。

「なんで……私は……！」

「ちっ………！」

一方、跳ね飛ばされたレイヴンオルフェノク。
オートバジンの突進をともに喰らって痛む身体に鞭を打って立ち
上がると。

「はっ！！」

「くっ！！」

目の前にファイズエッジを振りかぶったファイズが現れ、鉄扇です
かさずその刃を受け止めた。

両者はそのまま拮抗し、やがて弾かれるように後ろに飛び退いた。
じりじりと互いの武器を構えながら二人は距離を一定に保ち、やが
て二人の間に一枚の木の葉が地面に舞い落ちた瞬間――

「はっ！！」

相手に向かって同時に駆け出した。

距離を詰めたファイズはレイヴンオルフェノクに横一文字に斬りか
かり、レイヴンオルフェノクは素早くしゃがんでその刃から逃れた。
レイヴンオルフェノクはその体勢から飛び跳ねるかのように鉄扇で
斬り上がり、それをファイズは身体を少し後ろにずらして回避した。
それから互いの武器が時には打ちあい、時には回避するという戦

いが繰り広げられた。

そんな二人の様子を、互いの身体を支える文にとりの雛の三人が少し離れたところから眺めていた。

「……巧さん……京……」

——やがて、二人の戦いに変化が起きた。

「うおっ……！」

足元にあった大きめの石に、ファイズがかかとから躓いて姿勢を崩してしまったのだ。

膝をついてしまったファイズにレイヴンオルフェノクの凶刃が迫ってきた。

この姿勢では回避はおろか、ファイズエッジで受け止めきることも難しいだろう。

（しまった………！）

「「巧……」」

「京……やめて！」

にとりと雛、そして文の叫びが辺りに響き渡った。

その時ふと、ファイズの頭にある事が閃いた。

成功するかどうかはわからないが、この窮地を脱するにはこれしかないだろう。

そしてファイズは身を乗り出しながらファイズエッジで鉄扇を受け止めた——その瞬間。

「何………！？」

レイヴンオルフェノクは驚愕した。

自身の鉄扇を受け止めた筈のファイズエッジがファイズと共に突然消え、力の行き所がなくなつて空回りになつてしまつた自分の身体が前のめりになつてしまつたのだ。

体勢を直そうとしながら、何があつたのかと後ろを振り向くと――

――そこには、ミッションメモリーを抜き取つたことで刃が消えたファイズエッジ――オートバジンのハンドルを持つファイズが居た。

「しまつ……！」

R e a d y

E x c e e d c h a r g e

そしてファイズはミッションメモリーをすかさずハンドルに装填してフォトンブラッドの刃を生み出し――

「らああああああ！！！」

「ぐはあっ！！！」

紅く輝くファイズエッジでレイヴンオルフェノクの右脇腹を横一文字に斬り裂いた。

レイヴンオルフェノクは斬られた脇腹を押え、その手の隙間からは灰が漏れ出していた。

「京……！」

「うわぁ！文！？！」

それを見た文がにとりと雛を振りほどき、よろめきながらもレイヴ

ンオルフェノクに駆け出した。

しかし、そんな彼女をレイヴンオルフェノクは脇腹を押えていない手で制した。

思わず立ち止った文を視界に入れながら、レイヴンオルフェノクの影が京の姿になり、口を開いた。

「…どうやら、ここまでの…よう、だな。今日のところは…退かせてもら、おう」

そう言うと、レイヴンオルフェノクは翼を羽ばたかせ始めた。

「待てっ！………うおおっ！」

「巧！大丈夫！？」

それを止めようとしたファイズはレイヴンオルフェノクが生み出した突風により、にとりたちのところまで吹き飛ばされてしまった。そして飛び立とうとするレイヴンオルフェノクは文に向き直り、口を開いた。

「わかっただろう、文。…俺はお前の、敵だ」

「…京………どうして………」

文のその問いに答えぬまま、レイヴンオルフェノクこと四方院京は瞬く間に山から飛び去っていった。

「…大丈夫なのかな、文」

「さあな………」

にとりと雛、そして変身を解いた巧の三人はレイヴンオルフェノクが去ってからずっと黙り込んだままの文の背中を見つめていた。立ちすくむ彼女の背中からは感情が読みとれなかった。

「思い詰めなければいいのだけれど…」

「うん……詳しい事はわからないけど、あんな沈んだ文見たくないもんね…」

文に背を向け、心配そうな表情で話すにとりと雛。
そんな彼女たちの背中に――

「誰が沈んでいますって？にとりさあ〜ん？」

「ひゅいつ！？」

突然文が、にとりの耳元で囁いた。

驚きの余り慌てて後ろを振り向いたにとりと雛が見たものは、普段通りのどこかニヤニヤしたような表情を浮かべる文だった。

そんな彼女を見て、にとりはたどたどしくも声を掛けた。

「あ、文？もう大丈夫なの？」

「嫌ですねえ。大丈夫も何も私は最初っから元気バリバリですって！」

「で、でもさつきは落ち込んでるように見えたけど…」

「ああ、先程はちょっと情けないところを見せてしまいましたですが気にする程ではありませんよ。今度またあのオルフェノクが出たら華麗にスパパーっと倒して見せますから！」

にとりと雛の問いに普段のマシングントークばりに答えていく文。
そんな彼女の勢いに気圧された二人は不思議そうに顔を見合わせた。

「ああそうそう、このことを一応上に報告しておかないといけませんね。というわけで、それではっ！」

「ああっ！ちよ、文！？」

そして文は早口にそう言うつ、にとりが止める暇もなくあっという間に飛び去ってしまった。

文が飛び去ったところを見つめ続けるにとりの耳に、突如エンジンを鳴らす音が入った。

何かと思い振り向くと、そこにはオートバジンに跨ってエンジンを噴かす巧が居た。

「こいつを直してくれてありがとよ。お前らもさっさと帰っておけ」
「ちよつと、巧！？」

巧はそれだけ言うつと雛の静止の声も聞かずに、オートバジンを駆つて山を下つていった。

そうして山の木々を掻い潜りながらオートバジンを駆る巧はその顔を僅かに陰しくし、ぽつりと呟いた。

「……無理しやがつて」

——天狗の里、事務室

「……あ、文！あんたどこ行つてたのよ！」

「あら、はたてじゃない。どうしたの」

普段使用している事務室に辿り着いた文を迎えたのは栗色の髪を長いツインテールにした鴉天狗、姫海棠はたてであった。

『花果子念報』なる新聞で文と競っている彼女は今、若干険しい顔つきで文に詰め寄った。

「ほら、あんたのこの……椀とか言っただけ？ そいつが巡回中にオルフェノクに襲われたらしいのよ」

「……へえ…それで？」

「で、そのオルフェノク、あんたのことを狙っているっていう話だから探してたのよ？ あんまり見つからないもんだからとづくに襲われたんじゃないかって思ってたところなんだから」

その後、椀の同僚の白狼天狗が倒れた彼女を発見し、意識を取り戻した彼女からオルフェノクが山に侵入した事、文を狙っている事を聞きだし、その知らせがはたてまで回って来たのだ。
ちなみに椀は現在自宅にて療養中である。

「ああ、そのオルフェノクだったらさっき私の所に来たわよ。…まあちゃちゃっと追っ払ったけどね」

「……ま、あんたの事だから心配するほどじゃないって思ってたけど………ど…！？」

呆れたように言うはたてだったが、その途中で彼女の表情は驚愕の色に染まった。

文はそんなはたてに疑問符を浮かべたが、彼女は文の顔を指差して口を開いた。

「文…あんたどうしたの…それ……？」

「？…え………？」

はたての言葉に従い、自分の頬のあたりを触る文。
その指には水滴――涙が付いていた。

「え、そんな。あれ、なんで……？」

はたてに背を向け、涙を止めようとする文だが止む気配は一向にない。

それどころか涙の存在に気付いたせいなのか次々と溢れ出してきた。そんな文の背中に、はたてが声を掛けた。

「……文」

「…な、何よ」

「…私は、ライバルのことをネタにして引きずり落とすような真似はしないから…」

そう言うと、はたては愛用している携帯型のカメラを近くの机に置いて文に背を向け、再び口を開いた。

「…今は、気が済むまで泣いておきなさい」

その言葉を聞いた途端、文の脳裏に様々なことが駆け巡った。

遠い昔の思い出。自分の声に応えず、殺意を向け、殺そうとした京。疑問、怒り、悲しみ、様々な感情が彼女の中をぐるぐると駆け巡り

――もう、抑える事はできなかった。

「……………」

——うわあああああああん……………

ぺたりと座りこみ、ぼろぼろと涙を流しながら文は泣き続けた。
その泣き声を聞く者は、一人の鴉天狗の少女以外誰もいなかった。

第12話 二人の鴉天狗（後書き）

どうも皆様、前書きでモヒカン化しかけたコラッタです。今回も読んでくれてありがとうございます。

…さて、今回の話のメインとなった文ですが…
おそらく、作者と読んでくれた皆様が胸に抱いたことは同じかもしれません。

ズバリ、
「誰だこいつ」

公式や他の皆様方が描かれてる射命丸文と言ったら

「強か」

「腹黒」

「悲しむとか泣くとかが殆どない（他の東方キャラにも言えるけど）

」
などが出てくると思います。

で、自分が描いた文と言ったら……まあ、見ての通りで

…いや、こういうか弱いところがある性格も文のジャンルの中に加われば……それはないか、流石に。

さて、次回ですが第6話みたいな幕間的な話を挟もうと思います。
でも次の話の伏線的なものを入れる予定なのでどうかお待ちください。

あと「強気な文ちゃん俺の嫁！」という方々。

批判は受け付けます。でもコラッタはチキンなのでオブラートに包んでくれると嬉しいです。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第13話 森の魔法使い（前書き）

皆様、遅れましたが新年あけましておめでとうございます。

今年もコラッタと東方紅蓮閃光をよろしくお願いいたします。

第13話 森の魔法使い

——幻想郷、魔法の森

「…はあ。何だか今日の里はちょっと暗かったわね、上海」

そこに、一人の少女が歩いていた。

鮮やかなブロンドの金髪、宝石のように澄んだ青い瞳、そして透き通るような白い肌を持つ正に人形のような儚さと美しさを持つ少女だった。

彼女の名は、アリス・マーガトロイド。

この森に居を構える魔法使いである。

そんな彼女の横には、一体の少女型の人形がふわふわと浮かんでいた。

アリスが作った人形の一体であるその名は、上海人形。

アリスの身の回りの手伝いや弾幕ごっこでは砲台の役割を担ってくれる、彼女にとっては大切な家族の一員でもある。

そして当のアリスは人里に買い出しに出た帰りの最中であつたが、その表情はややげんなりとしていた。

里の雰囲気がいつもと比べてどんよりとしていたのである。

話を聞くと一昨日オルフェノクとかいう妖怪モドキが里を襲ったらしく、その際に里の人間や偶々里に来ていた妖怪が数人殺されたらしいのだ。

アリスは騒がしい場よりも静かな場を好む。

しかし、静かを通り越してどんよりとした空気や沈んだ空気は好きではない。

そんな空気に包まれた人里にいて、彼女の気が滅入るのは無理もなかった。

（…でも、人里を襲うなんて……八雲紫が怖くないのかしら。そのオルフェノクってのは）

彼女の疑問は当然のことだった。

幻想郷では里の人間を襲ってはいけない事になっているのだ。里そのものを襲う事など以ての外である。

そんなことをすれば、ルールを敷いた八雲紫や博麗の巫女が黙っていないからだ。

この二人に目をつけられてしまえば、オルフェノクに最早逃げ場はないだろう。

そう、普通ならば。

「……………あら？人間？」

そんなアリスの視界に、魔法の森では珍しいある光景が入った。

それは人間だった。ぱつと見て男と分かる外見に、銀色の馬…のようには見えなくもない機械に跨っていた。

きよろきよろと辺りを見回しているところを見ると、大方道に迷ったのだろう。

アリスのように普段から森に住んでいる者以外にとって、魔法の森は天然の迷宮と同じなのだ。迷いやすさでは永遠亭のある竹林といふ勝負だろう。

（…全く、仕方ないわね）

そうため息をつきながら、アリスはその人間に向かって歩き出した。別に見捨ててもいいのだが、それで野垂れ死にでもされたら何となく寝覚めが悪い気がした。

それに道に迷った人間を招くのは始めてではないので今更抵抗はなかった。

万が一、危害を加えるようだったら返り討ちにしてやろうと考えながら、アリスはその人間に声を掛けた。

「その貴方、道に迷ったの？」

数分前、魔法の森

「……どこだ、ここ」

オートバジンを駆る乾巧は、道に迷っていた。

妖怪の山からの帰り道、夕方になったところで巧は近道しようと思いい、近くにあった森を通ろうとしたのだ。

そこが魔法の森であると知らずに。

妖怪が近付かない原因にもなっている、森中に漂うキノコの胞子。それが巧から狼張りの嗅覚と方向感覚を奪い、道に迷わせていた。

「…鼻が曲がりそうだな」

しかめっ面をしながら適当な方向にオートバジンを進める巧。日が暮れるまで森を抜けられなかったら野宿するしかない。そう考

えながら進んでいるといつの間にか本当に日が暮れかけてきた。
これは巧にとってまずい事態である。

（やばいな……また慧音の頭突きを喰らっちゃまう。ていうかいい加減鼻が腐りそうだ）

帰った後の事を考えてげんなりとした表情で辺りを見回していると、後ろから声がかかって来た。

「そこの貴方、道に迷ったの？」

その声に巧が振り向くと、そこには一人の少女が居た。
ブロンドの金髪に青い瞳、そして透き通るような白い肌といったまるで人形のような出で立ちの少女だった。

その隣で本物の人形がふわふわと浮かんでいたが、巧は『幻想郷では何があっても不思議じゃない』と考えてあえて気にしないようにした。

「……まあな、そういうお前はどうかんだよ」

「私はこの森に住んでるの。今は帰宅中よ」

自分の現状を見事的中されたことで巧が拗ねたような声色でそう言うのと、少女は何事もないかのようにそう返した。

しかし、その言葉は巧にとって有力な情報だった。

森に住んでいるという事は森の出口も知っているということだ。これを活用しない手はない。

「……だったら、人里に行くには何処を進めばいい？」

「この道を真っ直ぐ進めば里の近くに出るけど……今からじゃ無理よ、途中で完全に日が暮れるわ」

少女が示した道を進もうとした巧に彼女が再び声を掛け、振り向いた巧の顔は不満の色に染まっていた。

その顔は「じゃあどうしろってんだよ」と物語っていた。

「…近くに私の家があるから、今日はそこで泊っていきなさい」

そう言った少女は仕方ないとも言いたげな表情で歩きだし、巧はその背中に声を掛けた。

「何のつもりだ」

「別に、ただの気紛れから来たおせっかいよ。貴方みたいに道に迷った人間を泊めることも偶にあるしね」

少女は歩みを止めずにそう返し、巧はその背中をしばらく見つめた後、オートバジンを引いて追いかけた。

最初は敵の罠かとも考えたが、少女からは自分が戦ってきたオルフエノクのような嫌な感じはしなかったからだ。

それに実際、いつまでも迷ったままではいけないし、明日の朝に改めて出発しようと考えていた。

……慧音の頭突きは…最早覚悟を決めるしかないだろう。

そうして並んで歩いていると、ふと少女が何か思いだしたかのような顔になり、口を開いた。

「そういえば名乗ってなかったわね。私はアリス、アリス・マーガトロイド。この子は上海よ。よろしくね」

少女——アリスがそう言うと、彼女の横に居た上海人形がしゅたっ！と片手を上げた。挨拶のつもりなのだろうか。

そして巧も、自分の名を名乗っていった。

「…乾巧だ」

——そんな二人の様子を、後ろから見つめる影があった。

——魔法の森、アリス邸

「はい、どうぞ」

「おう、悪いな。……フー、フー」

「あら、猫舌？冷ましておいた方がよかったかしら」

「…ふん」

二人がアリスの家に着いた頃にちょうど日が完全に暮れ、二人は現在夕食を食べていた。

「いやー、アリスの作るメシって何気に美味しいよなー」

——いや、二人ではなかった。正確にはもう一人いたのだ。それは黒い上着とスカートの上に白いエプロンを羽織り、黒い三角帽子を被って…今は脱いでいるが、という如何にも『魔女』という

見てくれをした金髪金目の少女だった。

その少女は今、満面の笑みでアリスが作ったスープを頬張っていた。

「……で、なんで貴女が居るのかしら、魔理沙？」

「いやあ、腹が減って途方に暮れてた魔理沙さんは偶然良い匂いにつられてやって来たのだ。つまり私は悪くないわけだ。……あむ」

「晩御飯くらい自分の家で食べなさいよ」

「生憎と私の家の食料庫は今絶滅の危機を迎えてるんだぜ。……スープのおかわり、もらってもいいかな？」

「……勝手によそつてなさい」

「やりい」と小さく言っただけの少女――霧雨魔理沙は空になったスープの皿を持って厨房に向かっていた。ちなみに巧はやっとスープに口をつけ始めたところである。

魔理沙がやってきたのは、ちょうどアリスが夕食の盛り付けをしている最中であつた。

ドアを大きく開けて入って来るなり、「アリス！メシくれ！」と言ひ、呆れるアリスやポカンとする巧をよそにそのまま崩し的に夕食にありついていた。

「……あいつはいつもあんななのか？」

「まあね。魔理沙は弾幕でも力づくで押し通す事が多いから……」

「そりゃそうだ。弾幕はパワー！なのが私の信条だからな」

訝しげな表情で尋ねる巧とそれに答えるアリスの間に、スープのおかわりを手にした魔理沙が割り込んできた。

そしてそのままスープを美味しそうに頬張っていくと、ふと巧の方を向き、口を開いた。

「えーと……巧、だっけか？外に停めてあるその、バイクだっけ？」

てお前のか？」

「…ああ、それがどうした」

「ちよつと貸してくれよ。ああいうのって珍しいからさ」

「やだね」

魔理沙の頼みをその一言でばつさりと断り、巧はスープを啜っていた。

……確かに美味い。魔理沙がわざわざここに来たのもわかる気がする。

「そうね、貸さない方がいいわね。魔理沙に貸すとそのまま返ってこないから」

「失礼な、返さないわけじゃないぞ。死ぬまで借りるだけだぜ」

「私やパチュリーにはそれでいいかもしれないけど、巧は人間よ？ 貴女が死ぬ頃には彼も死んでるわ」

「おっと、魔理沙さんとしてはこれは盲点だったぜ」

「てへ」とても言いたげな表情で自分の頭を小突く魔理沙に、それを見て呆れるような表情をするアリス。

端から見ればどこか奇妙なやりとりに見えるかもしれないが、二人にとってはこれが普通なのだろう。二人ともごく自然体だった。

そんな二人、特に魔理沙を見て巧は海堂直也の事を思い出していた。思えば海堂もいつも飄々として、時に子どもの様な行動を取って木場に寝められ、啓太郎と一緒にバ力をやっていたところを何度か見た事があった。

魔理沙が海堂なら、アリスはさしずめ木場と言ったところか。

そんな彼女たち二人を見つめる巧の表情は、本人も気づかなかったが柔らかな表情になっていた。

そのまま三人の夕食は魔理沙が騒ぎ、巧が魔理沙のノリに巻き込まれ、アリスが窘めるといふ賑やかな空気で過ぎていった。

「何やってんだ？」

「見てわからない？人形を作ってるの」

夕食が過ぎ、魔理沙が帰って二人きりになった巧とアリス。

裁縫道具を出して作業するアリスに巧が尋ねるとそのような返事が返ってきた。

確かによく見ると彼女の手の中にあるのは作りかけの人形に見えなくもない。

そこで巧は自分たち二人以外にこの家にいるのが人形だけだということ进行出した。

人形たちは皆バラバラに動いているが、アリスが操っているような様子は見られない。一体どういう事なのか、と思っているとアリスが巧の思考を読み取ったかのような口調で言葉を発した。

「上海たちには魔法で簡単な自我を持たせているの。まあ自我と言ってもそこまで複雑な思考をするわけじゃないけどね」

「……そうか」

アリスの答えに、巧は要するに人形たちはオートバジンのようなものかと思った。

オートバジンに搭載された高性能なAIは最早簡単な自我を持っていると言っても過言ではない。

本来はファイズにのみ従うようにプログラムされている筈なのに、敵にファイズギアを奪われた時自分を庇って、敵が変身したファイズに攻撃を仕掛けた事があったからだ。

……最初の頃は敵オルフェノクと一緒にバスターホイルの雨に晒されたこともあったが。

「でもそれじゃまだ足りないの。私の夢はいつか完全な自我を、それこそ『私に従わない』ような完全自立型の人形を作る事なの」

「……夢か……。いや、『従わない』ってお前それって……」

「当たり前じゃない。私の言うことに何でもかんでも従っていたら完全自立型とは言えないもの」

確かに、自分で思考し、時には生みの親にも逆らうようではなければ『完全な自我』を持つていたとは言えないだろう。

しかしそれは、彼女の夢は一つの命を生み出すということになる。今まで聞いた夢の中である意味一番スケールの大きな内容に、巧は暫く目を閉ざし、静かに口を開いた。

「……そうか。ま、悪くない夢だな」

「あら、貴方は人の事を褒めるタイプじゃないと思ってたけど……早ちとりだったかしら？」

「ほっとけ」

そう言つてそつぽを向いた巧だったが、「悪くない」と言つたのは本心からだつた。

裁縫作業をする、夢を語るアリスの瞳が真剣で、曇りなく澄んでいたので。

巧は人の夢を守りたいと思っている。その夢に人間も妖怪もオルフ

エノクも関係ない。

だから、アリスの夢が叶うように思っていた。

きつと彼女も夢の為に時々切なくなったり、時々熱くなったりしてるのだろう。

そう思っていると、アリスの下に一体の人形がふわふわと近づいてきた。

その人形は身振り手振りでアリスに何かを伝えていき、彼女の顔が訝しげな物になっていき、立ち上がった。

「おい、どうした」

「今の子にお風呂焚きを頼んでいたのだけど…何かあったらしいの」

そう言つて外の風呂窯に向かうアリスに、ついていく巧。

そうして風呂窯に辿り着いた時、二人の視界に入ったのは。

「……………」

「……………何やってんだ、お前」

うろたえる様子を見せる人形たちをよそに、テキパキと窯に薪をくべていくオートバジン・バトルモードだった。

オートバジンは巧たちに眼部センサーを向けたかと思うとピコピコと鳴らし、再び作業に入っていた。

そんなオートバジンを指差し、巧に疑問の視線を向けるアリスに、巧はどこか面倒臭そうに口を開いた。

「……………俺がここに来る時に引いていたバイクだよ」

巧がそう言つと、突如アリスに力強く両手を握られた。

巧の手を握るアリスの瞳は、今まで見た事がないくらい活き活きと

輝いていた。

「この子の事、もっと詳しく教えて頂戴！」

その表情と言葉で、巧は確信した。

こいつは、にとりと同じだ。自分の夢の事になると何が何でも押し通そうとするタイプだ。

結果、それから数時間、巧はオートバジンの説明に追われることになった。

幻想郷、三途の川

「私が何を言いたいかわかりますか？小町」

「はい。ワカッテオリマス」

三途の川の現世側の河原。そこに珍妙な光景があつた。

緑色の髪の小柄な少女の前に、豊満な身体を持つ赤毛の女性が冷や汗をダラダラと流し、青い顔で正座していた。

少女の名は四季映季・ヤマザナドゥ。ここ幻想郷で閻魔をしており、死者を裁くなどの仕事をしている。

…ちなみに、説教が趣味であるとかないとか。

そんな映季の前で正座する女性の名は小野塚小町。死神である。

主に死者を乗せる渡し船の船頭などをしているがよくサボる癖があり、その度に映季の説教を喰らっていた。

そして今回もその例に漏れず、小町のサボりが原因となっていた。

「なら、言ってみなさい」

「……あたいが昼寝している間に、『あいつら』が姿を消した事です」

ただ、普段と違うところといえば説教の原因に彼女たち二人以外の他に第三者が関係しているという点である。

小町の答えに映季はハア、と溜息を吐き、口を開いていった。

「……『彼ら』は今、かろうじて存在を保っている状態です。そんな時にもし何かの拍子で存在を保てなくなったらどうなるかわかりますね？」

「……霊体の『あいつら』は輪廻の輪に戻れなくなつて、完全に消滅してしまいます」

そう言う小町の顔は、青い。

映季の説教を喰らっているということもあるが、彼女自身が言ったことが有り得ない事ではないからだ。

霊体——幽霊や亡霊は西行寺幽々子という例外が居るものの、遅かれ早かれ成仏し輪廻の輪に戻るのである。

しかし、とある事情で普通の幽霊などよりも不安定な存在である『彼ら』は彼女たちが危惧する事——力の使い過ぎや消耗などがあつたら輪廻の輪に戻れずに消滅してしまう危険性があつた。

「だったら、今貴女がやるべきことは？」

「全力で探してきまつす！」

そう言った小町は現世に向かって大急ぎで走つていった。

それを見届けた映季はまたも溜息をつき、空へ視線を向けた。

その顔は呆れと言うよりも、まるで心配しているような顔つきだった。

——いや、事実、彼女は心配していた。『彼ら』のことを。

「……余り、心配させないでください」

映季のその呟きは、誰の耳にも入ることなく消えていった。

「もう行くの？」

「ああ、世話になったな」

——翌日、早朝

アリスの目の前には、オートバジンに跨ってエンジンを噴かす巧の姿があった。

日がようやく出てきた頃に出発する理由は巧曰く「慧音の頭突きを最小限に抑えるため」だとか。

「貴方からは色々と貴重な話を聞けたからね。礼を言うのはこちらの方よ」

「……なあ」

「何？」

巧の言葉に疑問符を浮かべるアリス。

巧はしばらく黙った後、再び口を開いていった。

「お前の夢、捨てるなよ」

「…当り前じゃない。簡単に捨てるようだったら最初から夢見ないわ」

「…そうだな。……じゃあな」

そう言った巧はオートバジンを駆り、森の中に消えていった。
それを見届けたアリスは傍らに浮かんでいた上海人形に「じゃ、朝
御飯にしましょうか」と言って家の中に戻っていった。

そんな彼女の様子を、木の陰から見つめ続ける存在があった。
カエルの特性を持つ灰色の異形、フロツグオルフェノクだった。
その影が男の形となり言葉を発していった。

「くく……邪魔な男はいなくなったようだな。これでたつぷりとあ
の女を楽しむ事ができる」

昨日、暇潰しの為の獲物を求めて森の中をふらついていたこの男は
巧と歩くアリスを発見し、それからアリスを――正確には彼女の身
体を狙って後をつけていた。

アリスの人形のように美しい容姿は男の好みだったのだろう。だが、
彼女に告白するとかそういう気持ちは微塵もなく、ただ彼女の身体
を堪能できればいいだけ思っていた。

「さあて……。まずはどうやって楽しもうとするかな……」

まずアリスを無力化し、そこからどのように彼女の身体を辱め、堪
能していくか。

そんな歪んだ想像を浮かべながらアリスの家に歩を進めていた、そ
の時。

「ぶふえ！？」

突如横つ面に深く鋭い衝撃が入り、何かに掴まれて身体を持ち上げられた。

痛みに堪えて自分を掴むものを見ると、そこにあつたのは銀色の機械の腕、

オートバジンだった。

「ぶほっ!!」

やがてアリスの家から暫く離れると、オートバジンはフロッグオルフェノクを叩きつけるように地面に落とした。

突然の事に混乱するフロッグオルフェノクが起き上がった時、視界に入ったのは――

フロッグオルフェノクに鋭い視線を向ける、乾巧が佇んでいた。

「な、何だ……貴様」

巧はその問いには何も答えず、無言でファイズドライバーを腰に巻いた。

それを見たフロッグオルフェノクは慌てたような口調で言葉を發した。

「き、貴様ファイズか！このおおっ!!」

そう吠えたフロッグオルフェノクは巧に近づいて腕を振りかぶっていったが、巧はそれを余裕で回避してお返しとばかりに力の限り、フロッグオルフェノクの腹を蹴り飛ばした。

その衝撃で後ろにたたらを踏むフロッグオルフェノクを見ながら、巧はファイズフォンを開いて言葉を發した。

「…知ってるか？夢を持つとな、時々すっごく切なくなっ
て時々すっごく熱くなる。らしいぜ」

— 5

「俺には夢がない。でもな…」

— 5

「夢を守る事はできる」

— 5

「何をゴチャゴチャア！」

そう吠えたフロッグオルフェノクは再び巧に向かっていったが、途中でオートバジンが立ち塞がり、その剛腕で殴り飛ばされて地面を転がった。

昨日、巧はこのオルフェノクがアリスを狙って自分たちをつけていたことに気が付いていた。そして今朝、このオルフェノクを待ち伏せするためにオートバジンに見張らせていた。

巧は誰かの命を守ることで、その命が持つ夢を守りたいと考えている。

だから、アリスという命を奪ってその夢を奪おうとするフロッグオルフェノクの所業を見過ごす訳にはいかなかった。

Standing by

「変身!!」

Complete

ファイズフォンをドライバーに装填し、巧の姿は紅い閃光に包まれてファイズに変わっていく。

軽くスナップをして、ファイズはフロッグオルフェノクに駆け出していき、立ち上がろうとしたところを上から殴りつけた。

倒れ伏せるフロッグオルフェノクを掴んで無理やり立ち上がらせたファイズは、体勢を整わせる前にフロッグオルフェノクの鳩尾に拳を何発も入れていき、最後に顔面に拳を入れて殴り飛ばした。

「ぐぬおっ…！き、貴様！」

地面を何度も転がり、腹を押さえながら立ち上がったフロッグオルフェノクはウオーターガンを取り出し、ファイズに向けて発砲した。

「つと。……危ねえな」

ファイズはそれを軽々と避け、弾丸が着弾した木を見て仮面の下で顔を顰めた。

弾丸が着弾した木は、白い煙を上げながらどろどろと溶けていた。

その弾丸は、強力な溶解液の弾丸だった。

それからフロッグオルフェノクは溶解液の弾丸をファイズに向けて何発も放ったが、ファイズはそれらを全て避けながらフロッグオルフェノクとの距離を縮めていった。

5、6年にも渡って戦い続けてきたファイズにとって、フロッグオルフェノクの銃撃は軌道が読みやすく、避けるのが容易であった。

「ち、ちくしょ……！がはっ！」

やがて、フロッグオルフェノクの目の前まで辿り着いたファイズに慌てて引き金を引こうとしたが、ファイズはウォーターガンを叩き落とし、怯んだフロッグオルフェノクの横っ面に回し蹴りで蹴り飛ばした。

そして木に叩きつけられたフロッグオルフェノクに止めを刺すべく、ファイズポインターを装着し、ファイズフォンのEnterキーを押した。

Exceed charge

右足にフォトンブラッドが送られるのを身体を落として確かめると、フロッグオルフェノクに駆け出して空高く飛びあがり、ポインティングマーカーを発して相手の身体を拘束した。

そして――

「やああああああ!!」

「グアアアアアアーーーーッ!!」

必殺キック、クリムゾンスマッシュがフロッグオルフェノクの身体に突き刺さり、ファイズがその背後に現れた瞬間に紅いφの紋章が刻まれ、灰となって崩れ落ちていった――

――同じ頃、博麗神社

「あんた……誰？」

白玉楼に出かけようとした霊夢の目の前に、一人の青年が佇んでいた。

やや短めの茶髪に、ワイシャツにスラックスと言った一目で外来人と分かるような服装。そしてその表情は穏やかで、しかしどこか儚げなものを感ずる笑みを浮かんでいた。

「君が……博麗霊夢だよな？」

「だったら、何？」

「君に、頼みがあるんだ」

そう言う青年は霊夢に何かを投げ渡した。

霊夢がそれを受け取ると、青年は続けて口を開いた。

「ファイズに……彼に、それを渡してほしい」

「……何で？ あんた、巧とどういう関係？ それに渡したいなら私に頼むんじゃないかって直接渡せばいいじゃない」

青年の言葉に霊夢は目つきを若干鋭くし、語気を強めてそう返した。その言葉を受けた青年はどこか哀愁を感じさせる表情で口を開いていく。

「俺は……今更彼に会う訳にはいかないし、だから渡す時も俺のことは伏せておいてほしいんだ」

「……私がこれをあいつに渡すとは限らないんだけど」

昨日から霊夢は巧の事を余り考えなくなかった。

巧の事を考えると頭の中がもやもやし、次第に嫌な気分になっていたのだ。

青年にそう言ったのも、巧に関することどこか嫌な気分になった

からだ。

要するに八つ当たりである。しかも彼女自身それを自覚しているのですます嫌な気分陥っていった。

「渡すかどうかは君にまかせるよ。もし渡したくなかったらそれでも構わない」

「……そう。……って、え？」

霊夢の顔は驚愕に染まった。

目の前で青年の姿が溶けるように消えていき、それに比例するようにその存在も段々と感じられなくなってきた。

そして完全に消える間際、青年は最後に一言だけ言って消えていった。

「後は君に任せる。でも、出来る事なら、彼の力になってほしい」

そう言い終わると同時に、青年の姿は霊夢の前から完全に消えた。

「…何よあいつ。言うだけ言って勝手に消えて…」

それを見届けて取り残された霊夢はそう呟き、顔を顰めた。

むかむかとした感情が浮かんできたが首を振ってそれを振り払い、青年から渡された物を見つめた。

見たところ腕輪のようにも見えるが、中心に丸い画面らしきものがある。

（…そういえば、霖之助さんの所にあった外の腕時計ってこんな感じだったような…）

確かに、よく見るとそれは香霖堂にあった外の世界の腕時計に似て

いた。

しかしあれは『これ』と違ってもっとシンプルな感じだった。少なくともこれのようにエンブレムのような物は付いてなかった筈だ。いや、それ以前にあの青年は何故これを巧に渡したいのか。そもそも、あの青年は何者なのか？

頭の中で様々な推測が飛び交う中、霊夢はぽつりと呟いた。

「…ま、気にしても仕方がないか」

そう呟いた霊夢は、これ以上巧の事や『それ』——腕時計のことを考えるのをやめて宙に浮かび始めた。

それと同時に、すっかり全身を見せた太陽の朝日が博麗神社の中に射し込む。

——霊夢の手の中の腕時計に付いている、『φを模した赤いエンブレム』が、朝日をきらりと反射していた。

第13話 森の魔法使い（後書き）

どうも皆様、コラッタです。

今回出てきたカエルフェノクですが、外見や能力はテレビ版と同一のもの、アリスに何をしようとしたのかは、これだけ言っておきます。

「異形の花々で草加さんが真理にしたこと」

知らない人は読んでみようね！おもしろいぞ！（棒読み）

あと途中で出てきた幽霊諸々のお話は、大半がコラッタの妄想できています。

知識不足なところもあると思いますが、どうかご容赦ください。

あと今回も、オリキャラ、オリフェノクの紹介はお休みにさせていただきます。

申し訳ございません。このような内容で。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第14話 少女の叫び

——BAR CLOVER

「…突然呼び出して、何の用だ」

「今日はお客が来るのよ。貴方はまだ彼女に会ってなかったでしょう?」

そこに影山冴子、琢磨逸郎、北崎、そして四方院京といったラッキークローバー全員がそろっていた。

ただ京と琢磨は気が滅入るような顔をしていた。

「顔合わせが必要なのか?」

「我慢してください。本当は僕だって嫌なんですから」

「そうかなあ……。僕は別に平気だけど…?」

「北崎さんはマイペースだから気にならないんですよ」

その言葉に反応したのか、琢磨の髪をむんずと掴む北崎と、それによつて「ひえええ」と慌てる琢磨。

もう何度か見たその光景に、京は呆れたような溜息をついた。

「…三文芝居を見せるだけなら帰らせてもらうが」

「ふふ、そう言わないの。……あら、来たわね」

影山がそう言うと、店の入り口からコツ、コツとヒールのような足音が響いてきた。

やがて四人の前に姿を見せると、その人物は口を開いた。

「ハイイ ラッキークローバーの皆さん、お久しぶりでーす」

——人里、慧音の家

「……………」

恐る恐ると、家の中を見回しながらそろりと極力音を立てないように巧が入って来た。

何故巧はここまで恐る恐るとしているのか？答えは一つ、慧音の頭突きが怖いのだ。

以前、紅魔館の件で二日間何も言わずに帰らなかった際、彼女から渾身の頭突きを喰らった事があった。今回も日帰りで帰ると言ってしまった為、このままでは頭突きは確実に喰らうだろう。

慧音の頭は固い。考え方、というのもあるが何より物理的に物凄く硬いのだ。

並みのオルフェノクくらいなら怯ませることもできるんじゃないか。頭突きを喰らった時の痛さを思い出しながら身ぶるいしていると――

「……………帰ってきたら…」

巧の背後から、地の底から響くような声がかかった。

声を聞いて、蛇に睨まれた蛙のように固まった巧を『彼女』は自分の方に振り向かせ――

「『ただいま』と言えと、いつも言ってるだろうがああ……！」
「……………っつっ！……！」

巧の額に、『彼女』——慧音の頭突きが直撃した。
ごちん、と岩がぶつかるような音が響き、巧は額を抑えて声にならない悲鳴を上げて地面を転がった。
やがて痛みが引いてきたのか、額を抑えたままの巧が慧音を睨みつけた。

「こ……のっ！お前な！毎度毎度殺す気か！」

「安心しろ、峰打ちだ。第一喰らいたくなかったら約束ぐらい守れ。心配したんだぞ」

頭突きに峰打ちもくそも無いだろ。そう呟きながら立ち上がる巧はまだ額を抑えていた。

慧音はそんな巧の前に、おにぎりに味噌汁といった簡単な朝食を持ってきた。

「朝御飯はまだだろう？味噌汁は冷ましてあるから安心しろ」

「……おう」

むすつとしながらも、おにぎりを口に運んでいく巧。

そんな巧の様子を眺めながら、慧音は物思いに耽っていた。

—— 霊夢の事だ。

昨日訪れた霊夢の様子がまだ彼女の脳裏に残っていた。

普段だったら、大抵の異変は霊夢に任せておけば大丈夫だろうと何も心配することはなかっただろう。

しかし、今回ばかりはあの自らの思いを叫ぶ霊夢の姿が慧音の脳裏に色濃く残り——

彼女に、言い知れぬ不安を与えていた。

「……おい、どうした？」

その声に慧音がはつとすると、巧が訝しげな顔で見ている。そんな巧を見て、慧音は逡巡した。話すべきか、否か。悩みに悩み抜いて——やがて、決意した。

「……巧。帰ったばかりで悪いが頼みがある」

「よ、何処行くんだ霊夢？」

「……なんだ、魔理沙か」

——幻想郷、森林の上

冥界に向かって飛んでいた霊夢の目の前に現れたのは、箒に跨る霧雨魔理沙だった。

霊夢の言葉を受けた魔理沙はわざとらしく悲しそうな顔をして、帽子の縁をくいと上げた。

「つれないなあ、私とお前の仲じゃなか。そう冷たくするなよ」

「あんたとはただの腐れ縁でしょ。悪いけど私用事があるから」

魔理沙と極力言葉を交わそうとせずに飛んでいく霊夢。その背中を魔理沙は付かず離れずにすいーっと追いかけて行った。そして距離を保ったまま、霊夢に話しかけていく。

「こっちって確か冥界だよな。幽々子にでも会いに行くのか？」

「……うん」

「てことは何か異変の匂いでも感じたか？お得意の勘で」

「うん」

「…幽々子つていえば最近紫の奴見ないよな。最後に会ったのは…
…二ヶ月くらい前だっけ？」

「…そうね」

魔理沙に視線を合わせようとせず、険しい顔つきながらも生返事をする霊夢。それでも答えてるだけ割と律儀なのかもしれない。
そんな霊夢の様子を見た魔理沙は、彼女の横に並んだ。
霊夢は未だ顔を合わせようとせず、前を向いたままだった。

「…霊夢、お前おかしいぜ」

「…何が？」

まだ、魔理沙に視線を向けない。向けようとしなない。

「なんちゅーか……今のお前には普段あるはずの心の余裕が全くない。今のお前になら被弾0で勝てる気がするぜ」

その言葉を聞いてようやく魔理沙の方を向いた霊夢。その顔は険しい物だった。

「何がお前をそこまで……いや待て、当ててみせる」

口を開こうとした霊夢を遮り、むむむと顔を顰める魔理沙。
やがて得心を得たような顔になり、口を開いた。

「……オルフェノク、だろ？」

その言葉を聞いた途端、ぴくりと反応した霊夢。魔理沙はそれを見逃さなかった。

「こないだの事件、ありや酷かったよなあ。あいつらは郷に入れば郷に従えって言葉を知らんのかね。聞いた話じゃ紅魔館の方にも出たらしいし」

「…………魔理沙は、悔しくないの…………？」

顔を俯かせていた霊夢はそう言う顔を上げ、キツと魔理沙を睨みつけた。

「あいつらはまるで嘲笑うかのように皆を無惨に殺して！…殺された人の中には結婚したばかりの夫婦が居た！いつも野菜をお裾分けしてくれたおじさんも居た！皆、原形を留めずに灰になって殺された！」

つい最近に行われた夫婦の結婚式では慧音に頼まれて祝詞を詠んだ。その時の二人はこれから待っていたであろう明るい未来に思いを馳せ、喜び、霊夢にお礼を言っていた。

男性はよく「若い子は沢山食べ！」と言って霊夢や魔理沙、果てには咲夜や妖夢、藍などにも野菜をお裾分けしてくれた。その豪快そうな笑顔で野菜を手渡されると、それだけでお腹一杯になるような気がした。

—— 彼らは、もうこの世にいない。殺されてしまった。

—— 誰に？オルフェノクにだ。

「でも私は何も出来なかった！気付きもしなかった！外来人一人に頼りっぱなしで何が博麗の巫女よ！…………私は、自分が許せない……！」

そこまで言った霊夢は、荒くなつた息を整えていった。

そんな彼女の叫びを最後まで聞いた魔理沙は、静かに口を開いてい

った。

「…靈夢。お前さっき悔しくないのかって言ってたけど、…悔しいに決まってるだろ。正直、はらわたが煮え躁りかえってるぜ」

「でも」と一拍置き、続きを話していった。

「それで心を張り詰めていたら勝てるモンにも勝てなくなっちゃう、見えるモンも見えなくなっちゃう。…だから、心に余裕を持て。いつもみたいに、な」

そう言つて靈夢の肩を叩く魔理沙。

靈夢はそんな魔理沙に戸惑う様な視線を向けた後、頭に手を当てて顔を顰めた。

「…まさか魔理沙に説教されるなんてね。あんた、そういうキャラだっけ？」

「おうともよ。魔理沙さんは慈愛の心溢れる素敵な魔法使いだからな」

「へへっ」と笑う魔理沙に、靈夢は呆れに似た感情を覚えると同時に安らぎを感じていた。

魔理沙だつて憤りを感じているはずなのだ。それなのにその感情を抑え、いつも通りに振舞い、他人を励まそうとする。

そんな彼女の優しさが、靈夢には眩しく見えた。

そんな時――

「……………！」

二人の目つきがほぼ同時に鋭くなり、同じ方向に視線が向けられた。

「…気付いた？」

「…ああ、こんなに嫌な雰囲気を持つ奴なんて始めてだぜ」

二人の目の前には、一羽の青い蝶が居た。

青い蝶くらい、幻想郷では珍しくも無いだろう。

しかし、その蝶は二人と同じ高度——森の木々よりも上の宙空でひらひらと漂っていた。

いくら幻想郷と言えどそんな高さを飛べる蝶など妖怪くらいしか考えられない。

何より、その蝶から漂う雰囲気は余りにも掴み所がなく、不安定で不気味だった。

その不安定さはこいしや嘗てのフランドールが持っていたものとは一線を画していた。

『…ワオ 流石は異変解決のプロね』察しが良くてお姉さん驚いちやった』

すると蝶から声が聞こえ、やがてそこから半透明の女の姿が浮かび上がった。

その女の姿は……一言で言えば奇抜だった。

個性的な格好が多い幻想郷と言えど、ここまで目立つ格好はそうそう無いだろう。

——まず青い。

服はミニスカートタイプのワンピースで、特殊な素材を使っているのか艶がある。その色は氷のように青く、黒い髪にも青いメッシュが一房入っている。

表情は笑顔。しかしその笑みからは底知れぬ不気味さが感じられる。胸とスカートの裾には英語のロゴが入っている。そこにはこう記さ

れていた。

—— S M A R T B R A I N ——

『始めまして、博麗霊夢ちゃんに霧雨魔理沙ちゃん、会いたかったわん』

「……あんだ、何？」

霊夢は針を、魔理沙は八卦炉を構えて女を睨みつける。

気を緩んだら一瞬のうちにやられてしまうのではないかという意識が二人の頭を支配していた。

『ゴメンなさい、紹介が遅れちゃった、私はオルフェノクちゃんたちのサポートをしている“スマートレディ”です。これから仲良くしてね、キャハッ』

言い終わるや否や、霊夢は女——スマートレディに向かって針を投げつけた。しかし針はスマートレディの身体を何事も無かったかのようにすり抜けた。

その時の霊夢の表情は——無表情だった。それもただの無表情ではない。彼女は今、怒りの余り表情が作れなかったのだ。付き合いの長い魔理沙には、それがわかっていた。

『お、コワッ。でもあなた達の前に居る私は立体映像なので攻撃してもなぐんの意味ありません、ざーんねん』

「……お前、何しに来たんだ？」

コロコロと表情を変えるスマートレディに魔理沙が尋ねた。

これ以上彼女の好きに喋らせたら霊夢の怒りが爆発するんじゃないかと思ったからだ。現にさっき、霊夢は何も言わずにスマートレデ

イを攻撃した。御丁寧に眉間を狙って、である。そんな霊夢の姿は今まで見た事がなかった。

このままだと霊夢は間違いなくキレル。魔理沙はそう確信していた。それにスマートレディの話し方が一々癪に障るのは魔理沙も一緒だった。

『ごめんなさい。お姉さんカワイイ子と話すの大好きだからすっかり忘れちゃった』

……あんまり、ウロチヨロしないでくれるかな？お姉さん、カワイイ子が死ぬ所見たくないの』

わざとらしい悲しげな顔で、スマートレディはそう言った。

——『ウロチヨロするな？』『死ぬ所は見たくない？』

何？あいつらオルフェノクにとって私たちはその程度の存在ってこと？

死ぬ所は見たくないって……。皆をあんなに無惨に殺しておいて、よくも、よくもそんな口を——

…ふざけるな…

ふざけるな！

「……ふざけんじゃないわよ！この青女！！どの面下げてそんな事言えると思ってるのよ！ウロチヨロするな？上等じゃない！あんた達は何考えてるか知らないけど、私はあんた達の事徹底的に邪魔してやるわ！あんたもオルフェノクも、いつか私が全員退治してやるわ！覚悟してなさい！！」

息を荒げながら、霊夢は一気にそう叫んだ。

そんな霊夢を見て、魔理沙は「やっぱキレたか」と小さく呟き、すぐさまスマートレディに向かって八卦炉を構えなおした。

スマートレディの言葉に怒り心頭なのは魔理沙も一緒だった。

「……だそうだぜ？悪いけどその頼みは聞けないな」

そんな二人を見て、スマートレディは——笑った。不気味な、爬虫類のような冷たい笑みで。

『フフツ、おバカさんたちね。……それじゃああなた達と会った記念に……』

苦痛をプレゼントしちゃいまーす♪ゴー

——ガシッ

「えっ……………！？」

「霊夢——！」

そう言い終わるや否や、霊夢の足に何かが巻き付いて眼下の地面に引っ張られていく。

それを追いかける魔理沙を見下ろしながら、スマートレディの姿は蝶の中に消えていった。

『今日は霊夢ちゃんの事が大好きな子を連れてきたの　殺しはしないからた〜っぷりと楽しんできてね、キャハッ♪』

「——痛っ！何よ一体……！」

足に巻き付いた何かに引つ張られた霊夢の身体は、木の太い枝の上で何かにぶつかる形で止まった。しかし、目の前には何も無い。身体を動かそうとしたが——動かない。何かに絞めつけられるように、身動きが全く出来なかった。

「何よ……これ……!？」

「ふ、ふふ。やっと捕まえたよ霊夢ちゃん」

そんな霊夢の目の前に、突然異形の姿がゆらりと浮かんできた。それは灰色の両手で霊夢の身体をがっしりと抱きしめていた。霊夢を捕えた灰色の異形。それはカメレオンの特性を持つ、カメレオンオルフェノクだった。

「お、オルフェノク……!!」

「い、いいよその睨みつける顔。たまらないなあ」

逃れようと必死にもがくがびくともしない。人間である霊夢にオルフェノクの剛腕を振りほどく力などなかったのだ。

だからと言っても抵抗することはやめない。カメレオンオルフェノクの話し方は生理的に受け付けられない。聞いていると肌が粟立つのだ。

「い、良い香りがするなあ。髪でこれだから霊夢ちゃんの唇はもつと良い香り……いや味がするんだろっなあ」

「はあ!? 何言ってるんのよこの変態!」

とても生理的に受け付けられないような言葉に霊夢が驚いていると、カメレオンオルフェノクは本当に霊夢の顔にそのカメレオンを模し

たような顔を近づけてきた。

そういった経験がない霊夢は必死に抵抗した。相手がオルフェノクである事を差し引いても、である。

しかし、いくら暴れても力の差は歴然でカメレオンオルフェノクの両腕はびくともしない。

せめてもの抵抗で顔を限界まで背ける霊夢。しかしカメレオンオルフェノクの顔はすぐそこまで迫っている。

その時――

「霊夢から離れる！」

――恋符『ノンディレクショナルレーザー』

「あづつ、あづつ、あづううう！？」

空からやって来た魔理沙が放った5本のレーザーが、カメレオンオルフェノクを直撃した。

本来なら様々な方向に拡散するそのレーザーは全て霊夢を避け、カメレオンオルフェノクのみを狙っていた。

その衝撃で腕の力が緩んだ隙を逃さずに、霊夢はカメレオンオルフェノクの腹を蹴りつけて地面に蹴り落とし、魔理沙の隣まで逃れた。

「大丈夫か霊夢？特に唇」

「ありがと魔理沙。あとそれは言わないで、思い出したくないから」

魔理沙の横に並び立ち、埃を払い落す霊夢。

二人の視線の先には、立ち上がるカメレオンオルフェノクが居た。

「痛た……ダメだよ魔理沙ちゃん。ボクと霊夢ちゃんのラブラブシ

「ーンを邪魔しちゃ」

「誰がラブラブよ！勝手に決めるな変態！」

「冗談は顔だけにしとくもんだぜ」

一つだけ、このオルフェノクについてわかった。

こいつは、変態だ。

霊夢と魔理沙はそう確信した。

「全く、こいつの嬢ちゃんへの熱愛ぶりは困ったもんだぜ」

「「——っ！？」」

——ぞくり

背後に突如現れた氷のような冷たい気配を感じ、二人は反射的にその場を離れた。

その直後、二人が居た場所を巨大な口がガチリと空を切った。

そこに浮かんでいたのは巨大な灰色の鯨——

シャークオルフェノク・遊泳態だった。

「鯨嶋さーん！霊夢ちゃんはお嫁さんになるんだから殺しちや駄目ですよー！」

「安心しろ、殺しはしねえよ。……五体満足かどうかは別だがな」

そう答えると、シャークオルフェノクはその巨体を使って霊夢と魔理沙に踊りかかって来た。

「あぶなっ！」

「速い……！」

その巨体に似つかない俊敏さに驚きつつも辛うじて避けた二人だが、シャークオルフェノクはこれまた体軀に似つかない小回りの良さで

すぐさま方向転換し、突撃してきた。

その距離の近さ故に、避けるのは困難と瞬時に悟った霊夢は一枚のスペルカードを取りだした。

—— 結界『拡散結界』

「ぬおっ!？」

「くっ……!」

レーザー状の弾幕によって構成された結界が、二人の直前でシャークオルフェノクの突進を防いだ。

しかしシャークオルフェノクはその結界を突破しようと力を込め、霊夢も突破されまいと力を籠めて踏ん張っていく。

しかし——

「ぬうおらああああ!」

「きゃあっ!？」

「うおわっ!」

その罅迫り合いはシャークオルフェノクに軍配が上がり、結界が破られてしまった。

その衝撃で地面に吹き飛ばされた霊夢と魔理沙は地面にぶつかる直前に体勢を立て直し、何とか無事に着地した。

その瞬間。

「きゃっ!？」

「も、もう離さないよ霊夢ちゃん」

カメレオンオルフェノクの舌が霊夢の身体に何重にも重なって巻き付き、霊夢はカメレオンオルフェノクに引きずられ始めた。

それを見た魔理沙は霊夢に駆け寄ろうとしたが――

「待ちな、お嬢ちゃん」

「ちっ……どけよ!」

目の前に格闘態となったシャークオルフェノクが降り立ち、彼女の行く手を阻んだ。

――こうなりや吹き飛ばしてやる。

そう思った魔理沙は八卦炉を取り出し、魔力を注ごうとした。
そのとき――

「ぎゃああああああ!!」

カメレオンオルフェノクの絶叫が響き渡り、魔理沙とシャークオルフェノクがそちらを向くと、霊夢を絡め取っていたカメレオンオルフェノクの舌がぶつりと切断されていた。

その舌を切り裂いたのは紅く輝く剣――ファイズエッジ。
それを持つのは――

「巧……!?!」

「ちっ、ファイズか!」

ファイズ――乾巧だった。

「……はっ!」

ファイズは舌から解放された霊夢を一瞥するとカメレオンオルフェノクに素早く詰め寄り、痛みに悶える隙をついてファイズエッジで一閃、また一閃と次々と斬りつけていった。

「やらせるか!!」

そこにシャークオルフェノクがファイズに距離を詰めて腕にヒレの刃を生み出し、斬りかかった。

それを視界に入れたファイズはカメレオンオルフェノクを蹴り飛ばし、ファイズエッジを構えてシャークオルフェノクの刃を受け止めた。

「霊夢！大丈夫か!？」

「魔理沙……」

その隙に魔理沙は霊夢の傍に駆け寄り、彼女の無事を確かめた。霊夢はそう言っているとシャークオルフェノクと打ち合うファイズを見つめ始めた。

魔理沙から見た彼女の顔は——安堵と焦躁、そして——

わずかな、怒りが感じられた。

「ちっ……!」

腕を構えたままファイズから飛び退いたシャークオルフェノクは背後に倒れるカメレオンオルフェノクを確かめると、その身体を担いだ。

「……一旦引くぞ、乗れ」

「は……はい……」

シャークオルフェノクが小声で呟いた次の瞬間、シャークオルフェノクは遊泳態へと変化し、カメレオンオルフェノクをその背に乗せた。

ファイズはそれで逃げる気なのだということがわかった。

「おいこら！……ちっ……！」

止めるために駆け出そうとしたが、シャークオルフェノクが振るった尾の一撃を咄嗟に防いだことで隙が生まれ、そのまま逃がしてしまった。

追いかけるのは無理だと判断したファイズ——巧は変身を解除して霊夢と魔理沙に駆け寄った。

「……大丈夫か？」

「た、巧だったのか？……何はともあれ助かったぜ」

巧がファイズだったことに驚いた様子の魔理沙だったが、すぐにかつと笑ってそう言った。

そしてすぐさま、疑問そうな顔をして巧に尋ねた。

「……にしても、何でこんなところに？」

「……慧音に頼まれたんだよ。『霊夢を助けてやってくれ』って」

そう言った巧は霊夢の方に顔を向けた。

彼女は、顔を俯かせていた。

「お前の事、相当心配してたぞ」

「………だから、何よ……」

そう呟くと、霊夢はゆらりと立ち上がった。そして——

——涙混じりの目で、巧を睨みつけた。

「……あなたは元々幻想郷とは関係ないじゃない！オルフェノクだってそうよ！よそ者の癖に幻想郷を好き勝手に荒らして！それを退治するあんたは何？オルフェノクから幻想郷を守るヒーローになったつもり？馬鹿にしないでよ！オルフェノクが幻想郷にいる以上、そいつらへの対処はこの住人である私たちの役目なのよ！よそから来たあんたやオルフェノクに好き勝手にさせるつもりなんてないんだから！」

「おい、霊夢……」

魔理沙が止めようとするものの、霊夢は叫びを止めようとしなかった。

霊夢からすれば、巧もオルフェノクも幻想郷の都合を無視して戦う連中にしか見えなかった。

無論最初からそう思っていた訳ではなく、最初はオルフェノクの事をちよつと変わった妖怪モドキだと思っていた。

しかし、その考えを変えるきっかけになったのがあの人里襲撃事件だった。人間も妖怪も見境なく殺し、幻想郷には到底似つかない悲しみや痛みを撒き散らすオルフェノクの事を憎く思うようになった。

ファイズとしてオルフェノクと戦う巧だってそうだ。

幻想郷で問題が起きたのなら、その問題を解決するのは自分達の役目の筈だ。

しかし、実際はその役目を外来人である巧に奪われるような形になっており、横から出てきた赤の他人を————んで、自分達の役目を取られた状況にどうしても我慢できなくなった。

「あんたなんか……」

「あんななんか！ただの外来人なんだから！！」

冥界

「おい、大丈夫か？」

「はっ……はいいい……」

冥界のどこか。

そこに、カメレオンオルフェノクに変化していた青年とそれを担ぐ
鮫嶋の姿があった。

鮫嶋は青年を適当な木の根元に降ろすと、懐から青色の液体が入った注射を取り出した。

「使え、数分で回復するだろう」

その言葉に従って青年が注射を腕に刺すと、オルフェノク態の舌を切断された事によるダメージが徐々に引いていき、数分後には青年の体力はすっかり回復していた。

今ならファイズに斬られた舌も再生しているだろう。

「……流石、残党とはいえスマートブレインの技術は桁違いだな」

「そうでーす」スマートブレインのオルフェノクちゃん達へのサポートは日常生活から戦闘まで完璧になってまーす　ワーオ」

鮫嶋がその薬の効果に驚いていると背後から耳障りな声が聞こえ、げんなりした顔で振り向くと、鮫嶋の肩に手を乗せたスマートレイが居た。

「お前か……何の用だ？」

「ああん、そんな冷たい振りをしなくてもいいのよ。お仕事が難しくなった二人に良いアドバイスを持って来たのよ？」

振りじゃねえよ、お前と話していると疲れるんだよ。そう思いながら鮫嶋はその言葉に首を傾げた。

元々今回の仕事は『博麗霊夢を捕獲せよ』というものだった。本来なら始末するのが一番手っ取り早いのだが、幻想郷を包む結界を『まだ』壊す訳にはいかなかったため、捕える事になった。しかしその結果はファイズの妨害で青年が負傷し、失敗となった。

「ファイズが邪魔をするというのなら、私たちの物にすればいいんです。そっちの子の力を使えば簡単でしょ？」

「……ああ、そういうことか」

——成程、実にわかりやすい。

実に、実にシンプルな内容だ。……だからこそ、効果がある。

「それに今度はお姉さんとラッキークローバーのお二人が協力しちやいまーす」まさに百人力ね、ウフッ」

——白玉楼

う、うん……

……今日は、身体を起こせた。
最近は寝てばかりだったから、何だか少し変な感じね。紫の眠り癖がうつったみたい。

……あら、妖夢ったらわざわざ御飯を作ってくれていたなんて。ホント、気が利く子ね。

……ふー、ふー……うん、美味しい♪80点かしら♪

——ちよつと待って下さいよ！幽々子様は今……！

——こっちは急ぎなのよ！文句なら後で聞くわ！

……障子の向こうから近付いてくる声は……妖夢と……霊夢かしら？
妖夢ったら、簡単に通しちゃダメじゃない。後できつく言っておかないと。

……それにしても、霊夢は今の私を見たらどう思うのかしら？

……考えるまでも無かったわね。

だって……あの子は優しい子だもの。

「幽々子！邪魔するわ……よ……！？」

ふふ、驚いてる驚いてる♪

……そうよね、驚くわよね。こんな姿を見たらね。
さて、笑顔で迎えてあげましょうか♪

「…いらつしゃい、霊夢」

(……何よ、これ…どういうこと…?)

白玉楼の主、西行寺幽々子の姿を見て、霊夢は愕然とした。彼女が良く知る幽々子と、目の前にいる幽々子が余りにも違いすぎていたからだ。

——肩の辺りでふんわりと切り揃えられていた桜のようなピンク色の髪は色褪せ、亡霊とは思えないほど生気があった肌は本来の亡霊のように青白くなっており、服越しても身体がやつれているのがわかる。

床に敷かれた布団から上半身だけを起こし、痩せこけた顔でにこりと微笑むその姿からは以前感じられた朗らかさは感じられず、弱々しさがより強く伝わってくるようだった。

…そういうことか。

道理で白玉楼に着いた時、妖夢がいつも以上に鋭い剣幕で弾幕ごっこを挑んできて、勝った後も真面目な彼女にしてはしつこく突っかって来たわけだ。

こんな弱り切った主の姿を、人に見せたくはなかったのだろう。

「……色々聞きたかった事があったけど、まずあなたに何が起きたのか教えて頂戴」

「…そうね、話さなければならぬことでしょうしね」

そうして、幽々子はぽつりぽつりと話していった。

—— あれは……一ヶ月？いや、三か月前だったかしら？

—— 二か月前ですよ、幽々子様。

—— そうそう、そうだったわね。…二か月前のあの日、いつも通りに妖夢は庭の仕事をしていた、私はそれをお団子片手に眺めながら暇潰しに蝶を集めていたの。

… 黒、桃、そして青といろんな色の蝶をね。

黒も桃も青も、冥界の蝶ではありふれた色だったから私も妖夢も気にしなかったのよね。

…… そのうちの一羽、青い蝶が私の肩に停まった直後、私は気を失ってた。

—— つ……………！

—— そして気がついた時にはこの部屋にいて、妖夢が心配そうに見てて、……そして、私は力が使えなくなってた。弾幕も、『死を操る程度の能力』も……ね。

いえ、あの感覚は使えなくなったと言うより奪われたという方が正しいかしら。御丁寧に体力までね。

今の私は……弾幕を出すための力も、能力も奪われたただの亡霊に過ぎないわ。

「何よ……それ……」

幽々子の話を聞いた霊夢は愕然とした表情でそう呟いた。

悪い冗談にしか聞こえなかった。

力を——体力も弾幕を出すための力も、能力も奪われたなど嘘だと信じたかった。

しかし、今の幽々子と悔しそうに下唇を噛む妖夢の姿が、先程の話が真実だと裏付ける何よりの証拠だった。

「……そうだ幽々子！紫は！？紫には話したの！？」

ここに来た本来の目的を思い出した霊夢がそう言つと、幽々子はふるふると首を振り、代わりに妖夢が答えた。

「それが……紫様には連絡がつかなくて……。幽々子様が倒れた頃から、全く……」

「ちよつと待ってよ……。それじゃあ何？ひよつとして紫も……？」

「それは……わからないわ」

三人の脳裏に、最悪の事態が浮かぶ。

もし、もしも紫が幽々子と同じ状態に——能力を奪われていたとしたら……

——今、幻想郷は針のムシロに立たされている状況となるのではないのだろうか……？

(……………ん……？『青い蝶』？それって確か……………)

ふと、霊夢は幽々子の話の中に出てきた単語に引つかかった。

……そう、自分はさっき、それを見たのではないか……？

「……………妖夢、幽々子。あんた達、オルフェノクって知ってる？」

「……はい。新聞に載ってましたけど……………まさか……………？」

妖夢の言葉に、霊夢はこくりと頷いた。

それから霊夢は自分が知っている事を話していった。

外の世界からやって来て幻想郷の各地で猛威を振るうオルフェノクと、それを支援するスマートレディと名乗った女。彼女が持っていた青い蝶。

そして、オルフェノクと戦う外来人。ファイズこと乾巧の事を。

霊夢の話聞き終えた幽々子は暫く目を閉ざし、やがて口を開いていった。

「……霊夢。貴女……………」

——白玉楼、縁側

「……………」

そこに、屋敷の中をふよふよと漂う幽霊を見つめて座り込む巧の姿があった。

あれから霊夢に避けられるも、オルフェノクに襲われていたことが

ら放っておく事ができなかったため、白玉楼まで付いてきていた。そして今、彼女の用事が終わるまでこうして縁側で待っていた。

「よ、巧。借りてきたけど食べるか？」

そうしていると、魔理沙が話しかけてきた。その手には饅頭が二つあった。

大方、魔理沙の事だから勝手に持ってきたのだろう。

巧はそれを無言で受け取って食べ始め、魔理沙も巧の隣に腰掛けて饅頭を一口かじった。

饅頭独特の薄い皮とこしあんが、二人の口の中で広がっていく。

「…巧。さっきの霊夢のこと、謝らせてくれ」

そう言ったのは魔理沙だった。

巧が訝しげな顔で彼女に向くと、魔理沙は口を開いていった。

「あいつ…普段はグータラで責任感なんかなさそうに見えるけど、本当は誰よりも責任を感じやすいんだ。……オルフェノクに対して何も出来なかった自分に責任を感じて、それでオルフェノクと対等に戦うあんたにあんな八つ当たりみたいな事言っちゃったんだ！霊夢のこと、誤解しないでやってくれ。あいつだって、巧の事を本当は心のどこかで頼りにしてる筈なんだ！」

そう叫ぶ魔理沙の顔は真剣で、少し不安げだった。

彼女は本気で霊夢の事を心配しているのだろう。

…ここまで、友の事を気にかける者はそうそういないだろう。

「……別に気にしちゃいねえよ。それに、よそ者つてもあながち間違いじゃないしな」

—— そうだ。

いくらオルフェノクからこの住人たちを守ろうとしても、彼女がらしたら自分のやっていることはよそ者が他人の家で出しゃばっている事と同じなのだ。

誰だって、自分達の場所で赤の他人が出しゃばるような真似をされたら嫌だろう。

初めて会ったばかりの流星塾生たちが、自分にそう思ったように。

「だからそんなことは——」

「そうだな。だったらよそ者同士仲良くしようや」

突如、魔理沙の声を遮る形で第三者の声が響き渡り、咄嗟に身構えた二人が辺りを見回すと、庭の真ん中に屋敷の者ではない男がいた。煙草を片手に、オールバックにしてサングラスを掛けた男—— 鯨嶋だった。

「……誰だ、お前？」

「あ？……あー、そっぴやこの姿では初対面だったな」

その言葉と共に鯨嶋の身体に紋様が浮かび上がり、シャークオルフェノクへと変化した。

紅魔館、そして先程霊夢と魔理沙を襲っていたあのオルフェノクに。

「お前……あのオルフェノクか！」

そう言いながら八卦炉を構える魔理沙とファイズギアを取り出した巧。

そしてドライバーを巻こうとしたその時——

「えっ……!？」
「何っ!」

ファイズギアが何かに引つ張られるように巧の手から離れ、シャー
クオルフェノクの横で急に止まった。

そこに、ファイズギアを手にしたカメレオンオルフェノクがゆらりとその姿を現した。

その姿を見た魔理沙は嫌そうな顔をしてカメレオンオルフェノクを指差し、言った。

「あっ!あの変態!」

「や、やりましたよ鮫嶋さん!」

そう言いながらシャークオルフェノクにファイズギアを手渡そうとするカメレオンオルフェノク。

ファイズギアを取り戻すために巧が駆け出そうとした、次の瞬間。

「なっ……!？」
「うおっ!？」

巧と魔理沙の足元に、オルフェノクの紋章が中心にある魔法陣が現れた。

このまま駆け出せば自分は助かるだろうが、足踏みした魔理沙が巻き込まれてしまう。

そう判断した巧の行動は——速かった。

「うわっ!」

魔理沙を魔法陣の外に力の限り押し出し、魔法陣の外で尻餅をついた魔理沙が呆然と巧を見た直後。

「——うあああああつ!!」
「た、巧iiiiiiiっ!!」

——巧の姿は、魔法陣の中へと消えていった。

「何かあったのですか!？」

「っ! あいつは……!」

そして音を聞きつけたのか妖夢と霊夢がその場に現れ、霊夢は二体のオルフェノクをきつと睨みつけた。

そんな霊夢の視線を受けながら、シャークオルフェノクは鮫嶋の姿に戻り、ファイズドライバーを腰に巻きつけた。
それを見て、三人に動揺が走った。

「え……!!？」

「…おい、まさか……!」

—— 5 5 5

Standing by

鮫嶋はファイズフォンにコードを打ち込み、そして——

「変身」

Complete

ファイズドライバーに装填し、鮫嶋の身体に紅いフォトンストリームの光が走った。

光が止んだ時、そこにいたのは——

超合金の仮面の戦士、ファイズだった。

「…これがファイズか…！」

「…ここは…？」

一方、魔法陣に飲み込まれた巧は一人、薄暗い空間に佇んでいた。警戒しながら辺りを見回していると――

「ハーイ♪お久しぶりね乾巧くん 会いたかったわ♪」

聞き覚えのある耳障りな声が響き、声がした方を向くとそこには何やら灰色の模様がある青い蝶を指先に停めたスマートレディが居た。

「お前！スマートブレインの…！」

「あら、お姉さんの事覚えててくれたの？カンシャカンゲキー！」

スマートレディのそのわざとらしい動きを視界に入れながらファイズギアを取り出そうとした巧だが、カメレオンオルフェノクに奪われてしまった事を思い出す。

―― やばい、あいつらが危ねえ……！！

「おい！ここから出せ！」

「残念だけど、そうはいかないのよボウヤ」

「貴方は、ここで死ぬのだから！」

その言葉と共に、スマートレディの横から現れたのは影山と琢磨だった。

その二人をみて、巧は更に顔を顰めた。

「……ラッキークローバーの影山に琢磨か……！」

「ええ、久しぶりで悪いけど貴方にはここで朽ち果ててもらわ」

「貴方のような裏切り者を生かしてはおけません。覚悟しなさい」

言い終わるや否や、影山はロブスターオルフェノクに、琢磨はセンチピードオルフェノクに変化した。

どうやら、有無を言わせる気はないようである。

……ファイズギアはない。ここには霊夢たちも居ない。そして目の前にはラッキークローバーが二人。生身でどうこう出来る状況ではない。

……やるしか……ないだろう。

「……ウウウウウ……アアアアアアアッ……！」

獣のような雄叫びと共に、巧の全身に紋様が浮かび上がり、巧の肉体は変化していった。

全身は剃刀の刃のように刺々しく、それに相反するようにふさふさの毛に覆われた後ろ髪と尾。

拳に装備されたのはメリケンサック。足は四足動物のような逆関節に変化。

そして、その顔は狼を模っていた。

これこそ、乾巧の真の姿——

——ウルフルフェノクであつた。

第14話 少女の叫び（後書き）

どうも皆さん、コラッタです。

実は最近星蓮船を買ったのですがEasyすらクリアできない自分のへたつぷりに涙が出そうです。ぐすん。

そのせいか一緒に買ったガンダム無双3に熱が入ってる始末です。ダメダコリヤ。

ユニコーンガンダムのデストロイモードにファイズを彷彿したのは私だけではないはず。

それはさておき、久しぶりのオリフェノク紹介となります。どうぞ

カメレオンオルフェノク

鯨嶋の部下が変化する、カメレオンの特性を持ったオルフェノク。

舌を自由自在に伸縮する事が可能であり、また、自身の姿を周囲に溶け込ませることで姿を消すことが可能になる。そのため、主に隠密任務などで真価を発する。

ちなみに、変化する本人は三度の飯より霊夢が好き。趣味は霊夢の動向をチェックする事、ぶっちゃけストーカー。

夢は霊夢を自分のモノにすること。言うまでも無く変態である。霊夢ちゃんハアハア。

モチーフは異形の花々の序盤に出てくる中曽根さん。こちらも中々の変態である。

こんなところでしょうか。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第15話 夢の守り人（前書き）

本編の前に一言

けい・わいさん。

感想への返事が送れず終いになってしまい、申し訳ありませんでした。

今後は出来る限り早めに返事を送るようにしたいと思います。

第15話 夢の守り人

——白玉楼

「どういうことよ！何でオルフェノクがファイズに変身するのよ！」
「んなこと私を知るわけないぜ！」

霊夢たちは混乱していた。

無理はないだろう。オルフェノクと戦う戦士であるファイズに、他ならぬオルフェノクが変身したのだから。

——そう、彼女たちは知らなかった。

ファイズギアは『オルフェノク専用の武器』だと言う事を。

「二人とも！来ますよ！」

そんな二人に妖夢が叱責すると、気が戻った霊夢たちの目の前にファイズがその拳を振りかぶって迫りきっていた。

「……………っ！」

まんまと接近を許してしまった自分に悪態を吐きつつも、霊夢と魔理沙はファイズの拳を咄嗟に避け、その動きを狙い澄ましたかのように霊夢に向かって放たれたカメレオンオルフェノクの舌を妖夢が長い刀——楼観剣で受け止め、そのまま斬り払った。

しかし舌は切断されることなく、切り傷を残した状態でカメレオンオルフェノクへと戻っていった。

「いたた……女の子がそんな物振りまわしちゃ駄目だよ」

——— どうか、何をしたのか知らないがこの短時間で強化したようだ。

楼観剣で切り傷程度なんて、どれだけ硬くなってるんだ。……でも舌を噛み切る心配はなさそうだ。
カメレオンオルフェノクの様子を見て、魔理沙はそう思った。

「……魔理沙、妖夢。やるわよ」

前に出ながら二人に呼び掛けたのは霊夢だった。

——— 何故オルフェノクがファイズに変身できるのかは私にはわからない。

巧がどうなったのかもわからない。
でも、そんな事は後でいくらでも調べればいい。あいつらから吐かせればいい。

少なくとも、今私たちがやる事は戸惑う事じゃない———！

「あいつらをぶっ潰して、そしてベルトを奪い返す！」

「了解だぜ！」

「承知しました！」

それと同時に八卦炉、楼観剣、そして針を構える魔理沙、妖夢、そして霊夢。

対峙するのは巧の手を離れて敵の手に渡ったファイズと舌を出し入れるカメレオンオルフェノク。

そして——— 彼らはほぼ同時に動き出した。

妖夢が楼観剣を構えて駆け出し、カメレオンオルフェノクが姿を周

罅に溶け込ませ、魔理沙が星の弾幕をばら撒き、ファイズがファイズショットを手に駆け出し、

——そして霊夢は針と札を同時に投げつけた。

謎の空間

「らあああああつ!!」

「くつ……!!」

猛スピードで駆け出したウルフォルフェノクは瞬く間にロブスターオルフェノクに詰め寄ると、その目で小さく跳ねて一回転しながら爪と背中中の剃刀で斬りつけた。

しかしロブスターオルフェノクは咄嗟に防御の構えを取ったことで、後ろに仰け反りつつそのダメージを可能な限り抑えた。

ウルフォルフェノクが着地した瞬間を狙ったセンチピードオルフェノクが指先から青いエネルギー弾を数発放ち、ウルフォルフェノクはそのエネルギー弾を腕を振るって打ち消しつつセンチピードオルフェノクとの距離を詰めていった。

センチピードオルフェノクとの距離を縮めたウルフォルフェノクは拳のメリケンサックでセンチピードオルフェノクの顔面を殴って仰け反らせ、追い打ちを掛けようとした。

「ぐあつ!!」

その時、ウルフォルフェノクの背中をロブスターオルフェノクのレ

イピアが斬りつけ、前にたたらを踏んだ。

その隙を見逃さなかったセンチピードオルフェノクは仕返しと言わんばかりにウルフォルフェノクの顔面を殴りつけ、僅かによるめいた所でウルフォルフェノクの足を鞭で絡め取り、その身体を大きく投げ飛ばした。

その身を投げ出されたウルフォルフェノクは空中で身体を強引に捻って体勢を持ち直して着地した。

人間の姿やファイズの時では到底出来ない動きだった。

「…流石はオリジナル。一筋縄ではいかないわね」

「お前らに誉められたって嬉しくとも何ともねえよ」

そう吐き捨てるウルフォルフェノク——巧は如何にこの空間を抜け出すか思考を巡らせていた。

例えラッキークローバーを退けたとしても、この空間を抜け出さなければ意味がないのだ。

白玉楼にはファイズギアを奪った二人のオルフェノクが居る。霊夢たちの実力を信用してないと言うわけではないのだが、ファイズとオルフェノクを相手に彼女たちが無事であると言う保証は何処にもないのだ。

幾ら霊夢たちが強くても、人間の身体を引き裂く事はオルフェノクにとって容易な事なのだから。

「よそ見をするとは随分余裕ですね！」

センチピードオルフェノクはそう言うと共に、思考を巡らせていたウルフォルフェノクに鞭を振るった。

咄嗟にそれに気付いたウルフォルフェノクは鞭を避け、そこから連続的に振るわれていくセンチピードオルフェノクの鞭を時には避け、

時には蹴りで弾くなど次々と防いでいった。

「ハッ！！」

更に、ロブスターオルフェノクがレイピアの突きを繰り出してきた。センチピードオルフェノクの鞭は彼女のみを避けるように動き、波状攻撃となつてウルフォルフェノクに襲いかかる。

ウルフォルフェノクはそれらの攻撃を紙一重で避け続けていたが、次第に鞭がウルフォルフェノクを捉えるようになった。

そして――

「ぐあっ！！」

ロブスターオルフェノクのレイピアが遂にウルフォルフェノクの腹に突き刺さり、灰をこぼしながら突き飛ばされていた。

腹を抑えながら立ち上がるうとするウルフォルフェノクの前に、レイピアを構えたロブスターオルフェノクが迫っていた。

動きの鈍くなったウルフォルフェノクにトドメを刺す気のようにである。

（しまっ……………！くそっ、動け！）

ウルフォルフェノクは自分にそう言い聞かせるが、先程のダメージが思いの外重く、すぐに動けそうにはなかった。

「さようなら。乾巧くん」

――そして

ロブスターオルフェノクのレイピアの突きが、身動きの出来ないウルフォルフェノクに放たれた。

——白玉楼

「たあああつ!!」

妖夢が雄叫びと共にファイズに斬りかかっていくと、ファイズはそれを紙一重でかわし、カウンターの拳を繰り出していく。

妖夢はその拳を咄嗟にしゃがむことで回避し、楼観剣の刃を上に向け、跳び上がるとともに斬り上げていく。しかしその刃は瞬時に飛び退いたファイズに切っ先を掠めることしかできず、ファイズは飛び退きながらフォンブラスター・シングルモードの弾丸を妖夢に向けて放った。

「させるか!!」

その紅い弾丸は妖夢の前に現れた霊夢の簡易結界によって阻まれ、霧散していった。

それと同時に霊夢は無数の針と札をファイズに向かって放ち、ファイズはそれらをフォンブラスターで次々と撃ち落としていった。

針と札に気を取られたファイズの隙を突いた妖夢が彼の目前まで迫り、楼観剣を振るおうとした——その時。

「きゃあつ!!」

「悪い子だなあ、もう」

彼女の足首にカメレオンオルフェノクの舌が巻き付き、自由を奪われた妖夢の身体はその舌によって大きく地面に叩きつけられた。

こみ上がる嘔吐感に耐えつつも舌の拘束を解こうとする妖夢の身体は再び持ち上がられ、ファイズのフォンブラスターの照準が彼女に向けられた。

それに気付いた霊夢が妖夢を救うために、スペルカードを取り出すより僅かに速く――

「乙女をぶら下げる変態にはキツイお仕置きだぜ！」

――光符『ルミナスストライク』

「ぶふえっ!？」

「…ちっ」

魔理沙から放たれた巨大な光球が星を撒き散らしながらカメレオンオルフェノクの身体を吹き飛ばし、その衝撃で舌の拘束から解放された妖夢は魔理沙と共に霊夢の横に降り立った。

「助かりました。…けど巻き添えにされるところでしたよ」

「まあまあ、助かったってことでいいじゃないか」

そんな軽口を叩きながら彼女たちは痙攣するカメレオンオルフェノクと、呆れたような動作でそれを担ぎあげるファイズを見据えた。巧に比べるとやや動きに精彩さが欠けるものの、ファイズが敵に回ってしまつと厄介極まりなかった。

ファイズの器用さと運動性の良さに、霊夢たちは中々決定打を入れられずにいた。と言うより先程からまともに攻撃を喰らっているのはカメレオンオルフェノクくらいである。

変身した鮫嶋はまだ完全に使い慣れていないようだがそれも時間の問題だろう。そうなつてしまつたら霊夢たちの状況は悪くなる一方である。

「で、どうやって奴の変身を解く？」

「とりあえず斬りましょうか？」

「斬るんなら綺麗に斬ってくれよ。切り口が綺麗だと接着剤が無くてもくっ付くって聞いた事があるぜ」

そんな事を言う妖夢と魔理沙。真面目に考える気があるのかどうか疑問だがこれが彼女たちなりのやり取りなのだろう。

「……ベルトを剥ぎ取るってのは？」

ふとそう呟いた霊夢に魔理沙と妖夢が視線を向け、口を開いた。

「根拠はあるんですか？」

「無いわ。そんな気がしただけ」

「よし、それで行くぜ」

霊夢の言葉に、魔理沙と妖夢は得心を得たような表情になった。

彼女たちにとっては下手な理屈よりも、霊夢の勘の方が何倍も頼りになるのだ。

事実、霊夢の勘は的を得ていた。

ファイズドライバーは変身者が一定以上の衝撃を受けると外れ飛び、変身が強制解除されてしまうのだ。

問題は、その一定以上の衝撃を如何に与えるかということである。

本来、ファイズドライバーはちょっとやそっとの衝撃では外れないように、使用者の身体にきつく固定されるのだ。

それを引き剥がすにはオルフェノク、もしくはベルトの戦士のパワーが必要となる。

つまり、霊夢たちはそれ並みのパワーで攻撃しなければならないのだが、難しい所である。

まず、腕力などの身体能力だが、これは論外である。
人間と半人半霊である霊夢たちにオルフェノク並みの腕力など出せる筈がない。

次に、弾幕を使うことだが、これにはまだ望みがある。
弾幕ごっこ用の弾幕ではダメージが全く通らないので、牽制くらいにしか使い道がない。

殺傷力を高めた方では曲がりなりにもダメージを与える事が可能で、
スペルカードを使えば威力はより底上げされる。

そして、この三人の中で弾幕のパワーが最も強いのは――

「じゃ、ここは私の魔法で派手に剥ぎ取ってやるぜ」

――魔理沙だった。

こちらの様子を注意深く窺うファイズとカメレオンオルフェノクを
見据えながら、彼女は八卦炉に魔力を注ごうとした。

その時――

――ブオオオオオオオオオオオオオオオオ……

屋敷内に響き渡るエンジン音にその場にいる者たちが振り向くと、
そこには猛スピードで霊夢たちに向かって突っ走るオートバジンの
姿があった。

それを見た霊夢たちは驚愕し、ファイズ――鯨嶋は内心でほくそ笑
んだ。

オートバジンはファイズに従って行動し、ファイズの敵に討ち向か
うスーパーマシンである。だから、現在のファイズの敵である霊夢
たちに向かって攻撃を仕掛けるのは当然のことだった。

——そう、そう思っていた。

「……え？」

「あ、あれ？」

——オートバジンが霊夢たちの目前で急旋回し、ファイズに向かってくるまでは。

「なつ、何だとおっ!？」

B a t t l e m o d e

驚くファイズをよそに、オートバジンはその猛スピードのままバトルモードへと変形し、ファイズを殴り飛ばした。

「さ、鮫嶋さ——」

「さっきのお返しです」

地面を転がるファイズに駆け寄ろうとしたカメレオンオルフェノクの目の前を、妖夢の楼観剣が阻んだ。

それで一瞬怯んだ隙を突いた妖夢は袈裟斬りでカメレオンオルフェノクを斬りつけ、地面を転がった事を視界に収めつつ立ち上がったファイズに接近し、刀を振るった。

無論それでやられるほどファイズも甘くはなく、妖夢の太刀筋を捌きつつ時たま見られる僅かな隙を狙ってカウンターを繰り返そうと

したがそれより一瞬早く、妖夢が突然飛び退いた。
次の瞬間――

「ぐあああああつ!!」

オートバジンのガトリングホイールの雨がファイズに浴びせられてその身を弾き飛ばされ、体勢を立て直そうとした――その時。

「……!？」

ファイズの足元に陰陽陣が現れ、そこから生まれた結界が彼の動きを封じた。

睨みつけるファイズの先には、その結界を作った張本人――発光する札をかざした霊夢の姿があった。

「頼むわよ、魔理沙!」

「おうっ!いくぜ!」

そう言うとともに、ファイズの背後に回った魔理沙は魔力が充填された八卦炉を自分の後ろにかざし、宣言した。

――符の壺『スターダストレヴァリエ』

箒に跨った魔理沙が八卦炉から放出される魔力によって星屑のような弾幕を撒き散らしつつ、身体をきりもみ回転させながらロケットの如き勢いで身動きの取れないファイズに突き刺さった。

その攻撃によってファイズの身体が大きく跳ね飛ばされたことでファイズドライバーが腰から外れ、地面を数回転がるとその姿は鮫嶋の姿に戻った。

「つつ………やはり、慣れないものを使えば手痛いしつぺ返しを喰らう、か…」

そう呟きながらシャークオルフェノクへと変化する鮫嶋。
どうやら今の攻撃でダメージを与え、ファイズの変身を強制解除できても致命傷にまでは至らなかったようである。

——そして、
弾き飛ばされたファイズギアは、霊夢の足元に転がった。

「……………!!」

霊夢を見た魔理沙はぎよつとした。
なんと霊夢はそのファイズギアを拾い——腰に巻いたのだ。

「霊夢！お前……！」
「無いよりはマシよ！私だってやってみせるわ！」

——そうだ、私が巧のように戦える保証なんて何処にもない。
でも、オルフェノクと真正面から戦うにはこいつの力を借りるしかない……！

そう言いながら霊夢はファイズフォンを開き、自らの勘に任せて5
を三回押し、Enterキーを押した。
それは紛れもなく、ファイズの変身コードだった。

Standing by
「…変身！」

そして霊夢はファイズフォンをドライバーに叩きつけるように装填

した。

次の瞬間、紅いフォトンストリームが彼女の身体を包む——ことはなかった。

Error

「きゃあああつ!？」

変身拒否を告げる冷酷な電子音声と共に霊夢の身体は大きく弾き飛ばされ、ファイズギアは魔理沙の足元に転げ落ちた。

「霊夢!!」

「霊夢さん!」

ファイズギアを拾った魔理沙と、復帰していたカメレオンオルフェノクと対峙していた妖夢はすぐさま霊夢の下に駆け寄り、苦しげな彼女の身体を支えた。

どうやら今の衝撃で身体を強く打ちつけてしまったらしい。

そんな彼女たちの前に、オートバジンが盾となるかのように降り立った。

「どうして……? 変身、できない……?」

「そりゃそうさ。人間である嬢ちゃんじゃファイズにやなれねえよ」

呆然と呟く霊夢に答えたのはシャークオルフェノクだった。

そんなシャークオルフェノクを、魔理沙はキッと睨みつけた。

「おい! そりゃどういう意味だ!」

「ん……? その反応、ひょっとしなくても知らない……のか?」

するとシャークオルフェノクは可笑しくて堪らないとも言つかの

ように笑い始め、それにつられる様にカメレオンオルフェノクも笑い始めた。

表情に全く変化の無い怪人が盛大に笑うという光景は、彼女たちの心に不気味なものを感じさせた。

そんなオルフェノク二人に向かって、霊夢が顔を顰めながら口を開いた。

「何が…可笑しいって言うのよ…」

「くつくつく…、ああスマンスマン。そうだな、嬢ちゃん達に良い事を教えてやるっ」

何時でも楼観剣を振るえるように構える妖夢と、霊夢を支えながらシャークオルフェノクの拳動を見逃さないようにする魔理沙、そしてバスターホイルを構えるオートバジンをよそにシャークオルフェノクの影は鯨島の形となり、言葉を紡いでいった。

「ファイズに変身するには条件が二つある。一つは嬢ちゃん達も知ってる通りベルトを着ける事だ」

——それならまだわかる。そもそもベルトが無かったらどうやって変身しろと言うのだ。

(…でも、もう一つの条件って一体…?)

霊夢がそう思うのも当然だった。

彼女が以前巧からファイズの事を聞いた時、彼は詳しい事を何も話さなかった上、変身する条件があるなど一言も言わなかったのだから。

——だから、

もう一つの条件を聞いた瞬間、霊夢の頭の中が呆然となるのは無理

も無い事だった。

「そして、もう一つ――

――変身できるのは、オルフェノクだけだ」

(……どういう、ことだ……?)

ウルフォルフェノクは驚いていた。

自分に突き刺さる筈だったロブスターオルフェノクのレイピアはその役目を果たすことなく地面に落ち、ロブスターオルフェノクは後ろによろけながらレイピアを持っていた腕を必死に押さえていた。ウルフォルフェノクはそのこと自体に驚いている訳ではなく、ロブスターオルフェノクの腕に『刺さっている物』に驚いていた。

――手元の部分に円状の刃が付いた灰色の短剣。

それは、5年前にこの世を去った筈の『あの男』が使っていた武器だった。

『乾い!! 蝶だ! あの女が持っている蝶を狙え!!』

するとその場にどこか軽薄そうな雰囲気。『あの男』の声が響き渡り、ウルフォルフェノクは自らの耳を疑う余り、一瞬幻聴でも聞こえるようになったかと思ったほどだった。

しかし、すぐさま我に返ったウルフォルフェノクはよろけるロブス

ターオルフェノクを踏み台にして跳び上がり、不味そうな視線を向けるスマートレディに向かって一気に駆け出した。

「行かせませんよ!」

するとセンチピードオルフェノクが行く手を阻み、ウルフォルフェノクに向かって鞭を放ってその腕を絡め取った。

そしてウルフォルフェノクの身体を投げ飛ばそうとした——その瞬間。

「な……!?!」

ウルフォルフェノクが一瞬早く鞭に絡まれた腕を後ろに引つ張ったことで、センチピードオルフェノクの身体がウルフォルフェノクに向かって引つ張られる様に浮かんた。

そんなセンチピードオルフェノクの身体がウルフォルフェノクの目前まで迫った瞬間。

「らあああつ!」

「ぐはつ!」

ウルフォルフェノクのメリケンサックがセンチピードオルフェノクの顔面に叩きこまれ、その身体は勢いよく地面に叩き伏せられた。そして、障害を打ち破って駆け続けたウルフォルフェノクは遂にスマートレディの前に辿り着いた。

「きゃああん!!」

すれ違いざまにウルフォルフェノクは腕を一閃し、スマートレディの手に停まっていた灰色の紋様がある青い蝶を粉々にした。

すると目の前の空間、果てにはスマートレディや二人のラッキークローバーの姿が揺らぎ始めていった。

「きくっ！お姉さん悔しいっ！」

その言葉と共に、スマートレディたちの姿は完全に消え、やがて歪みきった空間に少しずつ白玉楼の姿が映し出されてきた。

そんな光景を目の当たりにしながらウルフルフェノクは巧の姿に戻り、呆然と言った表情で呟いた。

「……海、堂………なのか…？」

その声に答える者は、誰もいなかった。

「え………」

シャークオルフェノクの言葉に、霊夢は絶句した。魔理沙も、彼女たちほどではないが妖夢も呆然としている。

——ファイズに変身できるのはオルフェノクのみ。

その言葉が意味する事——つまり、ファイズに変身できる乾巧は

「つまり、だ。乾巧、奴もまた俺たちと同じ

——オルフェノクなんだよ」

「……嘘よ。そんなの嘘よ!!」

シャークオルフェノクを激しく睨みつけた霊夢は声を荒げた。
突きつけられた真実を必死に振り払うかのように、現実を認めたくない子どものように。

「巧が……あの巧があんた達と同じオルフェノク? そんなの……
そんなのある訳ないじゃない!!」

「そうだぜ! 出鱈目を言うな!」

認められなかった。どうしても認められなかった。

憎いオルフェノクと戦ってきた巧自身が、他ならぬオルフェノクだなどと。

目の前にいる二人と同じ怪人だと。どうしても認めたくなかったのだ。

「ほう……。なら、納得いくまで試してみるか? お前たち三人に変身できるかどうかを」

——確かに、自分達が変身出来ればシャークオルフェノクの言葉を嘘だということになる。

でも、変身できなかつたら? それこそ乾巧がオルフェノクである事を認める事になってしまう。

それを認めるのが怖い。巧が本当にオルフェノクだつたら自分達はさっきまでと同じ様に彼に接する事が出来るのか?

一瞬だけ、霊夢たちの視線が戸惑いがちにファイズギアに注がれた。
——その一瞬が、大きな過ちだった。

「シャアアアッ!!」
「「「!?!」」」

霊夢たちの視線がそれたその一瞬を狙ってシャークオルフェノクは遊泳態に変化、オートバジンがバスターホイルを乱射するより僅かに速く動き、その巨大な尾でオートバジンを薙ぎ払った。そしてそのまま猛スピードで霊夢たちに突進し、彼女たちが迎撃しようとするも間に合わず、霊夢たちは大きく跳ね飛ばされた。

「ぐうつ!!」

その中で霊夢だけ、魔理沙と妖夢から離れた場所に落とされ、その手元に魔理沙が持っていたファイズギアが落ちた。

「う、うう……」

「く、そつ……油断したぜ……」

「ふ、不覚……です……」

三人とも、立ち上がられなかった。

オルフェノクの、それも巨体の突進を生身の人間が喰らったのだ。立ち上がれないのも無理はない。

下手をすれば死んでいたかもしれないのだ。それでもオルフェノクの攻撃を直に喰らって『立ち上がれない』程度で済んだのは運が良かったとしか言えないだろう。

そして、格闘態に戻ったシャークオルフェノクが魔理沙と妖夢の前に歩み寄り、地面に伏せる二人に向かって腕をかざした。それを見た霊夢の顔から血の気が引いた。

——間違いない。あのオルフェノクは二人を殺すつもりだ。

何故自分を狙わないのか疑問だが、そんなことはどうだっていい。

そう思った霊夢は身体に無理矢理力を入れ、立ち上がろうとした。全身が震え、血が滴り落ちるがそれでも彼女は必死に立とうとした。そんな彼女を、魔理沙と妖夢が見逃すはずもなかった。

「やめろ……霊夢……」

「無理に動いたら……貴女が……！」

「……うる、さい！……私はもう……っ！？」

霊夢は最後まで言い切る事はなく、再び地面に伏せられた。見ると、身体にカメレオンオルフェノクの舌が巻きつかれていた。

「このっ……離せ！離しなさいよ！」

「だーめ」

舌の拘束はとてもではないが解けそうにない。そんな必死に暴れる霊夢の目の前で、シャークオルフェノクの腕が振り落とされようとしていた。

「……やめて……」

「やめてええええええっ！！」

——そして、

シャークオルフェノクの腕が、魔理沙たちに向かって振り落とされた。

『——靈夢。貴女、後悔してるんでしょ？その彼を巻き込んだ事』

『…な、何言ってるのよ！私は——』

『首を突っ込まれて迷惑してるって？それ、本音じゃないわよね。』

『……本当は、幻想郷で起きた問題を自分で解決できなくて、外から来た彼にまかせっきりにしている今が許せなくて、悔しくて、負い目を感じているんでしょ？…貴女は、優しい子だもの』

『…そんなことない！あんたに何が……！』

『貴女が小さい頃からスキマから紫と一緒に見てたんですもの。貴女が本当は優しくて、誰かの為に頑張れる子だってことぐらいわかるわよ。……だから、彼に任せてしまっている自分が許せないんでしょ？』

『……………っ。』

『……………わかんないのよ……』

『何でアイツがあそこまで戦ってられるのか、何で外の人間なのに此処のヒト達を守ろうとするのか』

『…一日しか顔を合わせてないのに、何で……私を助けに来たのか』
『わかんない。……私、巧の事がわからない……！』

『…だったら、一度話してみると良いんじゃないかしら？』

『え？』

『彼がここで戦う理由がわからないのなら、本人に直接聞けばいいのよ。もし黙りこく様だったら……いつそ、力ずくで聞いちゃいなさいな』

『……そうね、そりゃそうよね。聞かなきゃ…話さなきゃ、あいつのことわかる筈無いもんね』

『ええ、それでこそ霊夢よ。…きっと、彼にだって戦うだけの理由が、命を懸けるほど守りたいものがあるはずよ』

「……え…？」

そう呟いたのは誰だったか。

霊夢か、魔理沙か、妖夢か、若しくは二人のオルフェノクだったか。誰が呟いたのかもわからなくなるほど、目の前には信じられない光景が映っていた。

魔理沙と妖夢に振り落とされるシャークオルフェノクの腕。

彼女たちの命を奪わんとしていたその腕は——止められていた。刺々しい剃刀の生えた灰色の腕。

狼を模した灰色の異形。ウルフォルフェノクの手によって。

「ぐあつー！」

その姿を見て驚いた様子を見せたシャークオルフェノクの鳩尾にウルフォルフェノクが拳を叩きこみ、その身体が前のめりになると同時に蹴り上げ、宙に浮かんだシャークオルフェノクを追うように跳び上がった。

そしてシャークオルフェノクの元まで跳び上がると、その身体を蹴り飛ばすかのような勢いで足場にして跳び上がり、霊夢の目の前に着地した。

「さ、鯨嶋さん！」

それと同時に、霊夢の拘束を咄嗟に解いたカメレオンオルフェノクの舌によって受けとめられながらもシャークオルフェノクは地面に落ち、苦しげに声を発した。

「乾巧……！貴様、影山さんと琢磨さんが居たのに、何故生きて……！？」

その言葉に霊夢も、やっと復活したオートバジンに抱えられた魔理沙と妖夢も驚愕の視線をウルフォルフェノクに向け、霊夢が恐る恐ると尋ねた。

「……………た、巧……なの…………？」

霊夢の言葉にぴくりと反応したウルフォルフェノクは彼女に向き、その身体が一瞬光ったかと思うとその姿は真正正銘、乾巧の姿となっていた。

巧の目は気まずそうに伏せられ、直ぐにシャークオルフェノクへと

向き直して踏み出そうとした。

しかし、その一步は――

「……ちよつと待つて」

巧の服の裾を掴んだ霊夢によつて引きとめられた。

巧はそれを振り解こうとしたが、真剣にこちらを見つめる霊夢の目を見て思い留まつた。

「……何で？ あんた、オルフェノクなのに……なんで、なんでオルフェノクと戦うの！？ どうして私たちを守ろうとするの！？」

「……此処はあなたの居た世界じゃないのに、どうしてそこまでする事ができるの！？」

霊夢にはもうわからなかった。

巧が幻想郷で戦う理由もそうだが、何よりも何故オルフェノクであるのに同じオルフェノクと敵対するのか。何故自分達を守ろうとするのか。

幻想郷で起きた問題に巻き込ませてしまったというのに。

（……俺は……）

「そうだな、私たちにも教えてくれよ」

「私は貴方に会ったばかりで貴方の事を何も知りません。……差し出がましいようですが、どうか教えていただけないでしょうか」

答えるべきか悩む巧に言ったのは、オートバジンによつて霊夢の横に降ろされた魔理沙と妖夢だった。彼女たちを降ろしたオートバジンは、巧たちに迫ろうとしていたシャークオルフェノク達に向かつて拳を振り上げながら突進していった。

彼女たちに真髓な目で見つめられた巧は、やがて観念したかのよう

に溜息を吐いて頭をむしゃむしゃと掻きまわし、しかめっ面のまま口を開いていった。

「……お前ら、夢はあるか？」

「…夢？」

「夢って、あの夢ですか？」

夢と言えば、寝ている時に見るものか、将来何をしたいかのどちらかだが……巧の口ぶりからして恐らく後者だろう。

何故そんな事を？と言いたげな三人の視線を受け、巧は言葉を紡いでいく。

「俺には夢が無い。……でも、誰かの夢を守ることぐらいは出来るんじゃないかねかって、そう思っただ」

「……………それ、だけ？」

霊夢たちは啞然とした。

どんな理由があるのかと思ったら、何と『他人の夢を守りたい』と来た。

その答えに、霊夢は——叫んだ。

「…何よそれ！そんな叶うかどうか分からない物の為に戦うなんて、命を懸けるなんて……………あんた、馬鹿よ。筋金入りの大馬鹿よ！」

他人の夢など、その本人が諦めてしまえば叶う事がない。巧がそんなことの為に命を懸けて戦うことに信じられなかったのだ。

しかし、他人の命を——夢を影から守り、自分が持てなかった分まで夢を叶えてもらいたい。時々熱くなったり、切なくなっても夢に向かって頑張ってもらいたい。その為なら、自分はいくらでも戦える。

それが、乾巧という男だった。

「……かもな。でも、これが俺なんだ」

それだけ言った巧は今度こそシャークオルフェノクに向かって駆け出そうとした。

見ればオートバジンが二人のオルフェノクに徐々に押され始めたのだ。そろそろ加勢してやらなければ不味いだろう。

そう思ったのだが、その歩みは再び霊夢に止められた。

離すように言おうとして振り向いた巧の前に、突き出すように霊夢が差し出したのは——ファイズギアだった。

「お前……」

「……私の夢。神社を掃除して、お茶飲んで、お賽銭のチェックをして、魔理沙たちとくだらない事で弾幕ごっこをして、ルールを破るような奴や異変を起こした奴を懲らしめて、皆で宴会をして、馬鹿騒ぎする。……そんないつもの日常を取り戻すのが、今の私の、夢」

「あんたが本当に夢を守るってんなら……私の夢、手伝ってよ」

「だから使って。ファイズは……巧しくないんだから」

続けざまに発せられた霊夢の言葉に、巧は僅かながらも戸惑いを見せたが魔理沙と妖夢、そして霊夢の視線を受け……静かに、ファイズギアを手にとった。

「……ああ、かもな！」

霊夢からファイズギアを受け取った巧はドライバーを腰に巻き、フ

アイズフォンにコードを打ち込んでいく。

S t a n d i n g b y

そしてアイズフォンを空高く掲げ、力強く叫んだ。

「変身!!」

C o m p l e t e

紅いフォトンストリームの光に包まれ、巧の姿は夢の守り人、ファイズへと変わっていく。

R e a d y

ファイズポインターを展開し、右足に装備したファイズは軽くスナップすると軽やかに駆け出し、オートバジンは舌を伸ばそうとしたカメレオンオルフェノクの背中を蹴り飛ばした。

そんなファイズにオートバジンのパンチを身を擦って回避したシャークオルフェノクが迫り、拳を繰り出したもののファイズに受けとめられた。

「お前は霊夢たちの所に戻れ!」

シャークオルフェノクの拳を受け止めながらそう言ったファイズの言葉を受け、オートバジンは霊夢たちの下に飛び立ち、彼女たちを守るかのように降り立った。

「貴様：何故オルフェノクの姿で戦わない」

「ああ?」

「貴様がファイズの時よりオルフェノクの姿の方が強い事は知って

いる。なのに何故その力を使おうとしない！俺達オルフェノクにとってあの姿こそが最も価値があるというのに！」

「…お前らと一緒にすんじゃねえよ。俺はな、乾巧っていう一人の『人間』だ」

そう吐き捨てたファイズはシャークオルフェノクの鳩尾に膝蹴りを叩きこみ、前のめりになったところを思い切り蹴り飛ばし、追い打ちをかけようとしたがその背中にカメレオンオルフェノクがしがみ付いてきた。

「うおっ……！」

「鮫嶋さん、今です！」

カメレオンオルフェノクの言葉を受け、立ち上がったシャークオルフェノクはファイズの鳩尾に拳を叩きこみ、首元を掴むとその身体を投げ飛ばして仰向けに倒れたところに踏みつけるかのように蹴りつけていった。

「巧……！」

「あれは…少々不味いのでは？」

ファイズ——巧が不利になっているのは一つだけ理由があった。…体力を消耗しすぎたのだ。

昨日のレイヴンオルフェノクとの死闘、今朝のフロッグオルフェノクとの戦い、そして先程までの繰り広げていたラッキークローバーとの戦いで負った傷。

体力を消耗する要素が、十分にありすぎたのだ。

（…何か、何か私に出来る事……）

そう思った霊夢は思考を巡らせていく。

——弾幕は？…だめだ、碌に動けない今じゃ狙われたら格好の的になって巧の邪魔になってしまう。じゃあいつそのこと夢想天生なら？……確実に巧を巻き添えにするから却下。……ああもう！どうすればいいのよ！

中々いい案が浮かばない霊夢だが、その時ふとある事を思い出した。

——確か、今朝巧にある物を渡すよう頼まれていたような…？

(…そうだ！こいつがあつた！)

霊夢は胸元から金属的な重みのある、見知らぬ青年から託された腕時計らしきものを取り出した。

霊夢にはそれが何なのかわからない。しかしこの窮地を脱するにはそれが必要となる。

——霊夢の勘が、そう告げていた。

そして次の瞬間には、彼女はオートバジンに向かって叫んでいた。

「…そのあんた！あいつらを巧からどかして！」

「霊夢！？」

お安い御用だと言わんばかりに眼部センサーをピコピコと鳴らしたオートバジンは、バスターホイルを倒れるファイズを蹴り続けるシャークオルフェノクとカメレオンオルフェノクに向け乱射、二人が銃弾で弾き飛ばされるとほぼ同時に霊夢はファイズに『それ』を投げた。

「巧！受け取って！」

「……………っ！…お前！こいつをどこで……………！」

立ち上がりつつそれを受け取ったファイズは驚愕した。

何故なら、それはこの世界に来てから失くしていたファイズの拡張ツール。

——リストウオッチ型コントロールデバイス、ファイズアクセル・アクセルフォームへの変形が可能となる、ファイズのパワーアップツール——！

「え？えーっと……そう、寶銭箱よ！寶銭箱に入ってたんだけど、もしかして巧のじゃないかなーって」

目をそらしてそう言う霊夢の様子から嘘である事が一目でわかったが、魔理沙も妖夢も、そしてファイズもあえて触れようとしなかった。

針をちらつかせる様子を見たところ、問い詰めても話そうとしない事を悟ったのだろう。

「…ま、何でもいい！礼を言っぜ！」

そう言いつつ、ファイズはファイズアクセルを左手首に取り付けて赤いミッシュンメモリー——アクセルメモリーを抜き取り、それをドライバーのファイズフォンに装填した。

その瞬間——

C o m p l e t e

「おい、あれ……」

「ファイズが……」

ファイズが変わっていく——

胸部のフルメタルラングはせり上がって肩の上に展開され、胸から覗かれるブラッディ・コア。全身の紅いフォトンストリームは危険信号を意味する銀色のシルバーストリームに変化。
そして、黄色かったファイズの複眼は真紅へと染まっていった。

これこそ、ファイズの超高速形態。

—— アクセルフォームであった。

「くっ……やばい、逃げるぞ……！」

「え？ 鮫嶋さん？」

起き上がったシャークオルフェノクたちがそう言って逃げ出そうとするより速く——

S t a r t u p

ファイズが、その魂が加速し始めた——

「……すごい………」

「……速いなんてレベルじゃないぜ………自信失くすなあ」

霊夢は……いや、魔理沙と妖夢も、此处にいる者たちは皆その光景に目を奪われていた。

ファイズが『消えた』と思った瞬間、二人のオルフェノクの身体が

まるで殴られたかのように宙に浮かび、更に追い打ちをかけるかのように次々と視認できない攻撃が浴びせられていった。

——ファイズ・アクセルフォーム。

その真髄はファイズアクセルのスタータースイッチを押すことで発動する『アクセルモード』にある。

それは10秒間のみ、ありとあらゆる動作を通常の1000倍の速さで行う事ができるファイズにのみ許された奇跡の時間。

今、ファイズは1000倍の速さの世界で動いているのだ。

「うっっ！」

「ぐえっ！」

——蹴られたと思った瞬間には殴られ、殴られたと思ったたら蹴られている。

途切られることの無いファイズの猛攻にシャークオルフェノクとカメレオンオルフェノクの意識が無くなりかけた時、ついにその幕が閉じられようとしていた。

ファイズが二人を空高くに蹴り上げ、軽くスナップする様子を霊夢たちが一瞬だけ視認した次の瞬間、跳び上がるようにその姿は再び見えなくなった。

その直後——

「——！！——」

10、20、……最早数える事が億劫になるほど展開された無数のポイントインテイングマーカーが彼らを包囲するかのようにその矛先を向けていた。

そして——その内一本、二本と彼らの身体に突き刺さっていく。

— 3

続けざまに一本、二本、三本と次々とオルフェノクの身体に突き刺さっていく。

— 2

その様子を、霊夢たちは呆然と見つめる。

— 1

そして、無数にあつたポインティングマーカーは全て彼らの身体に突き刺さっていった。

T i m e o u t

その音声と共に霊夢たちの目の前にファイズが現れ——

『ぐあああ————っ!!』

R e f o r m a t i o n

断末魔と共に、ファイズの姿は元のノーマルフォームへと戻っていた。

—— アクセルクリムゾンスマッシュ。

ファイズの音速の如きその連撃は、空中に青い炎と共に紅いφの紋章を刻んだ——

「……………」
「……………」

白玉楼、その庭。

戦いが終わり、変身を解いた巧と霊夢の間に形容し難い空気が流れる。

オルフェノクであつたことを結果的に明かしてしまった巧と、巧に八つ当たりまがいの事を言っていた霊夢。

そんな二人の様子を、魔理沙と妖夢は静かに見守っていた。

「……………」
「…お、おい」

そして唐突に霊夢が無言で巧に歩み寄り、巧の手をがっしりと握りしめた。

それに僅かにたじろいだ巧だが、霊夢はそんなことおかまないなしにと巧を見つめ、口を開いた。

「…もしかしてあんた、自分がオルフェノクだから私たちの前から去ろうとか考えてなかった？」

凶星だった。

いくら人間として生きようとしても、いくら彼女たちが人外が存在

に慣れていようとオルフェノクは文字通り『異形』の存在なのだ。
そんな自分が彼女たちの傍にいては要らぬ心労や心遣いを掛けさせてしまうかもしれない。

自分のせいで誰かの心が傷つく姿は見たくない。そう思ったからだ。

そんな巧を見て、霊夢は呆れたように言った。

「…やっぱりね、いい？ 私たちはあんたに騙されたとか裏切られたとかなんて思ってない。…だから、巧を拒絶したりなんてしないし、させない」

「そうそう、『幻想郷は全てを受け入れる』って言うしな」

「少なくとも、私たちは貴方のことを受け入れますよ」

霊夢に続き、魔理沙と妖夢はそう言った。

そんな彼女たちに、巧は恐る恐るといった感じで尋ねた。

「お前ら…怖く、ないのか？」

「怖いって言うよりは…頼もしさを感じるわね」

「なんかカッコいいいな」

「先程のオルフェノク達と比べれば随分端正な姿ですよ」

即答だった。此処まで来ると流石に少々拍子抜けしてしまう。

——こいつら、適応よすぎじゃねえか？

巧はそんな彼女たちに少々呆れの感情を覚えた。

しかし、そう思う巧の表情はほんの僅かだが柔らかいものになっていた。

「あ、あー……それとね」

ふと、そう言ったのは霊夢だった。何やら照れくさそうにも見える。

彼女は暫くそわそわした後、顔をそむけながらも口を開いた。

「…さつきは八つ当たりしてゴメン。……あと、これからもよろしく」

そう言った霊夢に魔理沙がからかう様な言葉をかけ、霊夢がそれにむきになって反応して、妖夢はそんな二人を窘めていた。そんな彼女たちを見ながら、巧は静かに口を開いた。

「…ああ、よろしく頼むぜ」

冥界

「ぐはっ！く、くそ……乾、巧めえ……！」

そこに、血だらけになった鮫嶋が覚束ない足取りでふらついていた。あの時、ぎりぎりですべてを免れて逃げ続けていたがアクセルクリムゾンスマッシュの傷は相当深く、直ぐに治療を受けなければ命が無い状態だった。

「報、告しなれば……影山さんに……このこ——！？」

胸に何やら重い衝撃が走り、鮫嶋の身体は仰向けに倒れた。何が、と思った彼が自らの胸のあたりを見ると、そこには――

灰色の剣が突き刺さっていた。

「こ、の剣は……！……おのれ、おのれ死人の分際でえ！！」

血反吐を吐きながら叫ぶ鯨嶋の身体が、青い炎に包まれていく。
身体が灰になって崩れていく中、彼は憤怒の表情で呪詛を叫んでいく。

「おのれ乾巧！おのれ——め！」

下半身が完全に灰になり、胸元が崩れていても彼は叫ぶのを止めない。

「見ている……！我らの『王』がいずれ貴様らを——！！」

——鯨嶋こと、シャークオルフェノク。

彼は自らの怨敵への呪詛を叫んだまま、灰へと還っていった——

「……………」

鯨嶋の身体が完全に灰になった直後、突然その場に一人の青年が現れた。それは霊夢にファイズアクセルを渡した青年だった。

彼はその場に残された剣を抜くと、その剣は青い炎と共に青年の手の中に消えていった。

「… やつと見つけたよ。こんな所に居たのかい」

そんな青年に、声をかける者が現れた。

赤い髪、豊満な身体に着流した着物、そして巨大な鎌を携えた女性、小野塚小町だった。

彼女は青年の肩に手をかけると、親しげに話しかけた。

「いきなり居なくなるんだからびっくりしたよ。お陰であたいも映季様の説教を受ける事になっちまった」

「… すいません小野塚さん。俺たちのせいで…」

「何、慣れてるから気にしちやいないよ。…… それで、友人には会えたのかい？」

小町の言葉にぴくりと反応した青年。

彼は小町に和らげな表情を向け、口を開いた。

「ええ、直接は会ってませんが…… 彼なら大丈夫だと信じてますから」

「… そうかい、それは何よりだ」

青年の答えに、笑顔で返す小町。

恐らく青年の満足のいく形で友の無事を見れたのだろう。そう思っている――

『そうそう小野塚、聞いてくれよ。この野郎、乾のヤローを助けるのにわざわざ俺様を出しやがったんだぜ。せつかく気持ちよく寝てたうちゅーのによ』

『あれ、乾さんが危ないのを見て真っ先に出ていきましたよね？』

『な、何言ってんだオメー。こ、この俺様がそんな真似をする筈が

無いっちゅうの』

——青年から、軽薄そうな男と清楚な少女の声が聞こえてきた。青年に口を動かした様子はない。しかしそれらの声は間違いなく青年の身体から発せられていた。

それでも笑顔を崩さない青年と、男の声にニヤついた反応をする小町。

彼らにとってはいつも通りの光景なのだろう。

「さ、帰ろうか。映季様の説教が待ってるよ」

『うへえ、俺様あのガキ苦手なんだよな』

『そうですか？為になりますし、良い人ですよ？』

「うん、新しい道を教えてくれたりするしね」

そう言って笑いあいながら、小町たちは彼岸への道のりを辿っていった——

第15話 夢の守り人（後書き）

今回も読んでくれてありがとうございます。コラッタです。

というわけでアクセル初登場＆オルフェノクばれイベント（一部）
な今回でしたが、書いてるときに思ったことが一つ。

霊夢の勘って超便利

いやー、ファイズのベルトの外し方とか変身コードとかどうやって
やらせようかと思っていましたが、彼女の勘に救われました。
ありがとう、霊夢。今度お賽銭入れときます。

ちなみに、巧がオルフェノクであることはまだこの三人しか知りま
せん。まあ、妖夢なら幽々子に報告くらいはしておくとはい
ますけど。

あと最後に出てきた『彼ら』ですが……わかる人にはワカリマスヨ
ネー（棒）

最後に、オリフェノク紹介は今回もお休みにさせていただきます。
新キャラが出ていないもの。ぐすん。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第16話 寢床を求めて三千里（前書き）

皆さん、お久しぶりです。

前回からだいぶ時間が空いてしまいましたが何とか投稿できました。

ちなみに今回はタイトルからわかるとおり、結構ノリが軽くなっています。

そのため普段以上にネタが入ってますので苦手な方はご注意ください。

それでは――

ゆっくりしてってね！

P・S・

べ、別にデュオデシムに夢中になって遅れたわけじゃないんだからね！

第16話 寢床を求めて三千里

——白玉楼での戦いから二週間後、人里。

「…は？今夜はどこかで泊めてもらえ？」

朝食の時、とある話を切り出した慧音に巧は顔を顰めながらそう尋ねた。

「ああ、私がワーハクタクであることは前に話したよな？」

「まあな、それがどう関係あるんだよ」

慧音の言葉に巧は首を傾げた。

慧音曰く、彼女は人間と白沢という妖怪が合わさったワーハクタクと言う獣人であるという。普段は人間と何ら変わらないのだが、満月の夜のみ獣人としての血が目覚め、白沢化すると言うのだ。

それと今晚追い出されることとどういう関係があるのかと疑問に思った巧だったが……

「それが…今夜がその満月でな。その時にここ一ヶ月分の歴史の編纂作業をするのだが…」

そこまで言って、慧音はもじもじとして口籠る。

仕事をするから何だと言うのだ。何でそれで自分が追い出されなければならぬのだ。

若干苛々してきた巧が続きを話すように視線で語ると、慧音は恥ずかしそうに口を開いた。

「その…恥ずかしいのだが……その時の私は相当苛立っていてな。それこそ近づく者誰かれ構わず頭突きをしてしまう程に……」
「よしわかった」

即答だった。と言うより即答せざるを得なかった。

只でさえ意識が飛びかける程の慧音の頭突きが、苛立つことでセーブが効かなくなるとすれば一体どれほどになるのか想像できない。いや、想像したくない。

流石にそんな未知数極まりない威力の頭突きを喰らうなど何が何でも御免だった。

「……………ちよつと待て。何でその事をもっと早くに言わなかった？」

巧の問いに慧音は答えない。というより顔を思いつきりそらしている。

そんな慧音を巧が睨みつけると、彼女は冷や汗を流して顔をそらし続けている。

——怪しい。怪しすぎる。

「…忘れてた、とか言っんじゃねえだろうな？」

「……………すまない」

案の定、ここ一週間多忙だった慧音は巧にその事を教えるのをすっかり忘れてしまっていたのであった。

「……いねえな……」

そんなこともあり、寢床を探すために慧音の家を出た巧は里でも数少ない知り合いである耕一の家に来ていた。

が、肝心の耕一の姿が見当たらなかった。妹の巴は寺子屋に居る時間であるためまだわかるが……

「あれ？あんた耕一になんか用か？」

そんな巧に声をかけたのは、里の若者だった。

鍬を担いでいる所を見ると、恐らく畑仕事の最中だったのだろう。

「……まあな、何処に居るか知ってるか？」

「あー……あいつなら今命蓮寺にお裾分け届けに行ってる筈だぜ。妙に張り切ってたから多分すぐには戻らないな」

耕一が張り切っている理由、巧にはそれが大体ながらもわかっていった。

耕一は命蓮寺の聖白蓮に、憧れとも好意とも取れる思いを抱えている。張り切っていたのも白蓮を前に緊張で固まらないようにするためだろう。

そんな耕一だが、二週間前の事件直後は非常に沈んで仕事にも恋にも碌に手に付かない様子だった。

それも当然である。幼馴染の罪と死を目の当たりにしてしまったのだ。そんな状態で他の事に手が付く筈もなかった。

しかし最近になって彼なりの形で立ち直り始めたのだろう。それが耕一が選んだ事なら、巧は何も口を挟むつもりはない。

「……そうか、わざわざ悪かったな」

「いってことよ。じゃ、あんたも気をつけるよ。オルフェノクのせいで最近は何事だからな」

「……おう」

そう言つて、若者は去つていった。

その背中を見て、巧は何とも言えない気持ちになつた。

『オルフェノクのせいで』先程若者が放つた言葉だ。

それは間違いではない。最近の幻想郷がオルフェノクに荒らされているのも事実だ。被害者である此処の住人達にとっては迷惑な存在であることも変わりはないため、彼の言い分は何も間違っていない。

しかし、オルフェノクの中には木場や海堂、斎藤良平のように人の心を持ったオルフェノクが居ることも事実だ。

そんな彼らが将来、自分のいた世界のように、この世界の住人に迫害されるような事があつたらと思うと堪らない気持ちになる。

そうならないのが一番だが、自分に出来る事などたかが知れている。人の心を操るような事など出来るわけがないし、したくもない。

そこまで考えて、巧は気持ちを切り替えた。

こんなことを考えていてもきりが無いし、仕方がない。

それより今は目の前にある事をしなければならぬ。

「……寝床、探さねえとな」

手始めに、今夜の寝床を探すために巧は歩み始めた。

——人里、稗田邸

「申し訳ありません。阿求様は今外出中であります」

巧が次に訪れたのは、阿求の家だった。

しかし、そんな巧に稗田邸の女中が投げかけたのは主不在の意だった。

「……………そうか。邪魔したな」

そう言った巧は稗田邸を後にした。

いくら口の悪い巧でも、主が居ないのに宿を頼もうとは思わなかった。

とは言え、人里での知り合いなどもう居ない。宿泊施設も無いので人里で夜を過ごすのはほぼ不可能になってしまったと言っても過言ではない。

(…こうなったら、知ってるやつのをしらみつぶしに回るか)

そう決めた巧は、人里を後にした。

今、今夜の寝床を懸けた巧の旅が幕を開けた。

——博麗神社

「は？今夜泊めてほしいって？」

掃除途中だったのか、箒を片手にぽかんとした表情でそう問い返し

た霊夢に、巧は「ああ」とだけ返した。

「洗濯とか簡単な家事位はできるからよ。別にいいだろ」

どう考えても巧のそれは人にものを頼む態度ではない。しかしこれでも以前に比べれば大分良くなった方なのだ。

以前であれば「ありがたく思え」などと言っていたのだから。

「……うーん……。そうね……」

少しの間考えるそぶりを見せた霊夢は、「はい」と言って巧に手のひらを突き出した。

巧は暫くそれを見つめると「何だこれは」といった視線を霊夢に向け、その視線の意味を読み取った霊夢は口を開いていった。

「お金よ、お・か・ね。私だってそこまで余裕ある訳じゃないもの。当然じゃない」

そう、霊夢が要求してきたのは宿代だった。この巫女、巧の想定以上に強かだったようである。

「……一応聞いておくが、いくらだ？」

「うーん……。こんなところかしら」

そう言いながら、霊夢は箒の柄で地面に宿代の値段を描いた。その値段は、巧の手持ちの上限を振りきっていた。

「あ、言い忘れたけど御飯は別料金だからね」

と、更にここで霊夢は追い打ちを懸けてきた。

この一言で巧の気持ちは固まった。

「やっぱやめとく。じゃあな」

「あら、帰るの？」

霊夢の言葉を背に受け、巧は石段を下っていった。

このまま霊夢に頼ろうとすれば借金を背負うことになるのは明確だった。

年下の少女に借金をするのはいくら巧と言えど恥ずかしかったのだ。借金するのは啓太郎だけで十分である。

そうして石段の下に停めてあったオートバジンに跨った巧は次の場所に向かって走り去っていった。

「……………まけてあげても良かったんだけどな」

一人神社に残された霊夢の呟きが誰の耳に入ることも無く消えていった。

紅魔館

「おや、乾さんじゃないですか。何か用ですか？」

「……………お、おう」

次に巧が訪れたのは紅魔館だった。

巧の姿を捉えた美鈴が気さくに声を掛けてきたが、当の巧本人はある一点を見つめたまま啞然とした表情を浮かべていた。

その視線の先には――

「ああ、これですか？実は昨日お嬢様とフラン様が喧嘩しちゃったんですよ」

屋根の大半が吹き飛び、焦げ跡を残した紅魔館の姿だった。

よく見ると復興作業をしている妖精メイドの姿がちらほらと見え、釘を打つ音が響いている。

美鈴曰く、昨日レミリアが取っておいたプリンをフランドールが食べてしまったらしいのだ。

それを知ったレミリアはフランドールを問い詰めたが、当のフランドールが開き直ったことで弾幕ごっこに発展、いつの間にかガチ喧嘩になっていたらしい。

その最中にパチュリーが読書の邪魔になると言って二人を止めようとしたのだが、邪魔者扱いされて姉妹の攻撃をモロに喰らい、終いにはこの三人による大乱闘に発展して館がここまで半壊したというのだ。

（…あいつら、やっぱり見た目通りのガキじゃねえか）

巧がそんな風に呆れていると、ふと違和感に気付いた。

そう、紅魔館の重要人物が一人、話の中に出てこないような…

「…おい、十六夜はどうした。あいつは止めなかったの――」
「私がどうかした？」

巧の言葉を遮って背後から響いたその声にびくりと振り向くと、そこには買い物かごを下げた十六夜咲夜が立っていた。

「あ、咲夜さん。お帰りなさい」

「ただいま、サボって昼寝してないわよね？」

「い、いや。してませんよ？」

どもりながらも答える美鈴を視界に入れながら、咲夜はどこか身構えた様子を見せる巧に向き合った。
そしてそのままにこりとした表情で巧に話しかけた。

「で、何故お嬢様たちの喧嘩を止めなかったのか——だったっけ？」

「…お、おう」

話聞いていたんじゃないか。と秘かに思った巧をよそに、咲夜は口を開いていく。

「勿論、お嬢様たちの可愛い御姿を目に焼き付けるために決まってるじゃない」

「……………は？」

一瞬、巧は己の耳を疑った。

——待て、今コイツは何て言った？さらりとしたポーカーフェイスで何て言いやがった？

「プリン一つの為に御自分の感情を解き放つお嬢様、そんなお嬢様に可愛い悪い悪戯っ子のような顔を見せる妹様。こんな姿を見せられてその姿を脳裏に焼きつけようとしなないメイドなんている筈がないわ。誰だってそうするし、私だってそうする。」

特に可愛いのがお嬢様なのよね。妹様も十分すぎるほど可愛いだけね、やはりお嬢様の方が普段のギャップもあってか偶に見せるむきになる表情が堪らないのよね。『さくやー』なんて呼

ばれた日にはそれだけで不眠不休で働けるわね。…あ、いけない、想像したらちよつと興奮してきたかも。後はそうね……………――

……………で、何か用だったかしら？」

「……………いや、何でも無い。邪魔したな」

どこか悦に入つた様な表情でレミリアとフランドールへの愛を数分間に渡つて語る咲夜に、引きつった様な表情を浮かべた巧はそう言う、いそいそとオートバジンのエンジンを吹かし始めた。咲夜の話聞いて、（主に咲夜が原因で）紅魔館に泊ろうという気が一気になくなったのだ。

今、巧の中で咲夜への評価が大きく変わろうとしていた。…主に下降的な意味で。

（…あいつ、ひよつとしたら結構苦労してんじゃないのか？）

そして、こんな一面を持った従者を傍に置くレミリアは、ひよつとしたら気苦労が絶えないんじゃないかと思ひ始めた。今度飯でも奢つてやるか、と秘かに思つた巧は出来る限り振り向かないように紅魔館を後にした。

「…何だったのかしら」

「さ、さあ。何だったんでしょうね」

後に残されたのは、ポカンとした表情を浮かべる咲夜と、苦笑いする美鈴だけであつた。

——妖怪の山、麓

「……………」

「待ちなさい。許可の無い人間は通しません」

早苗やにとりの下を訪ねようとした巧の前に立ち塞がったのは白狼天狗、犬走椋であつた。

ちなみに彼女は現場に復帰して一週間である。

（…引けるかよ。こっちはな、今夜の寢床が懸かつてんだよ！）

さて、そんな椋に道を塞がれた巧は彼女の脇を突破しようとして素早く身を傾けたが——

「待ちなさい」

あつという間に進路を断たれてしまった。

すかさず今度は反対側に回ろうとしたが——

「止まりなさい」

…またもや回りこまれてしまった。

それでも諦めきれない巧は何度も突破しようとしたが、悉く椋に塞

がれてしまった。

そして、そんな小さい争いが続く事数分――

「く、くそ………」

「い、いい加減に、あきらめなさい………」

二人とも、完全に息切れていた。

ここまで来ても諦めない巧の執念と椀の仕事魂は、目を見張るものがあるだろう。

「……………おい」

「な…何ですか…」

ふと、巧は息を絶え絶えにしながら椀の顔を指差し、言った。

「お前、鼻の頭にメンチヨできてるぞ」

「……………んなっ!？」

思わず自らの鼻を押さえた椀だが、すぐに嘘だということに気付いた。

すかさず巧に振り向いた時には、彼は既に椀の横を突破しようとしていた。

「……………いい加減にしなさい!」

それに対し、とうとう堪忍袋の緒が切れた椀は弾幕を発し、巧の進路をあっという間に塞いだ。

――メンチヨ。正式名称は面丁

顔の中心、主に鼻の頭などに出来るおできの一種であり、これがで

きると非常に格好悪い。

妖怪と言えど桜も女である。肌や身なりにはそれなりに気を使うのだ。

それがメンチヨができていと言われたらとてつもなく落ち込む。嘘であるならそれはもう烈火のごとく怒る。当然である。

「う、おっ……！……くそっ、覚えてろ！」

弾幕で進む事が不可能になった巧はそう吐き捨てると、オートバジンを急旋回させて一気に山から去っていった。完全に悪役のセリフである。

「全く、女の敵め……！」

顔を赤くし、ぷりぷりと怒った様子を見せる桜は自らの仕事に戻っていった。

――数分後

「桜！さっきここに巧が来なかった！？」

「赤と銀のバイクに乗ってて、目つきと口が悪い男の人なんですけど！」

「うええっ！？」

突然、にとりと早苗が物凄い勢いで椀に詰め寄って来た。

二人の剣幕に思わず仰け反った椀は涙目になりかけながらも記憶を探り、該当する者を当てはめて口を開いた。

「そ、それらしき男なら先程追いましたけど……」

「なん……だと……」

「そ、そんな……」

椀の言葉に二人は少しふらつくと再び椀に掴みかかった。
ひい、と思わず悲鳴を漏らしたのは致し方が無い。

「酷いよ椀！ 私たち友達の筈でしょ！？」

「そうですよ！ 何てことしてくれたんですか！ せつかく——」

「——バジンちゃんに会えるところだったのに！！」

「……へ？」

掴まれながら、ぽつりとそう漏らす椀。

そんな彼女をよそに、メカ（ロボ）好きの二人の会話はエスカレートしていく。

「バジンちゃんにこっそり仕掛けた発信機に反応があったから来たものの、まさかこんなことになるなんて……！」

「椀さんにもすっかり手配しておくべきでしたね。私たちとした事

が……！」

「悔んでも仕方がない、また次に懸けるしかないよ。……と言う訳で桜！」

「ふえっ！？」

びっくりと、エスカレートしたにとりに突然呼び止められた桜は思わずそう口にした。

その姿に普段の気丈さはなく、完全に預けられた子犬状態になっていた。

「次に巧が来たらちゃんと通してあげてね！わかった！？」

「え、えと……」

「桜さん！」

「はっ、はい！！」

二人の剣幕に押し負けた桜はそう返事してしまった。
この時の彼女を責められる者などいないだろう。

「じゃ、よろしくね！」

「お願いしますね！」

それだけ言うと、二人は嵐のように去っていった。
その背中を見て、桜はぽつりと呟いた。

「……私って、一体……」

白狼天狗、犬走桜。

彼女の気苦労はこれまでも、そしてこれからも絶える事はないだろう。

余談だが、にとりがオートバジンに仕掛けた発信機は後日、点検中に偶々見つけた巧によって粉々に壊されることになる。
それはまた、別のお話――

――白玉楼

「何故私たちの演奏を拒む！ 答えろっ！ 魂魄妖夢！」

「幽々子様は今安静の身なのです！ しばらく敷地内での演奏は控えてもらいます！」

「貴女の手の中に私たちの演奏があると言っなら……私が奪い返す！」

「そうだ！ 音楽の自由と平和のために！」

「……………」

巧を迎えたのは、妖夢と楽器を鳴り散らす三人の騷霊――プリズムリバー三姉妹が激しく口論しながら弾幕ごっこをしているという光景だった。

どこか呆れたような視線を向ける巧をよそに彼女たちの闘いは加速していく。というより巧に気付いてすらいない。

「妖夢ったら張り切っちゃって……元気なのはいいことね」

「…お前、歩いて大丈夫なのかよ」

「少しだけならね。あの子が頑張ってくれてるもの」

巧の横に現れたのは、西行寺幽々子であった。やはり身体の不調は

相変わらずの様で、杖を携えていた。

ちなみに現在、二人の視線の先では妖夢が刀から放った弾幕が三女——リリカに命中し、「あーれー」と叫んで落ちていく所であった。

「…この間お前が言ってたことだけど、青い蝶で間違いないんだな？」

「ええ、……やっぱり、貴方が言っていた…？」

「ああ、ラッキークローバーの奴らの仕業で間違いないだろうな」

幽々子が力を奪われた経緯、暗躍するラッキークローバーとスマートレディの存在から、巧は力を奪ったのはラッキークローバーの仕業であると言う結論に至った。

しかしラッキークローバーが力を奪って何をしようとしているのかは、どうしてもわからなかった。

…ちなみに、目の前では妖夢が放ったスペルカードに滅多打ちにされた次女——メルランが「私は滅びん！何度でも蘇るさ！」と叫びつつ、頭から地面に突っ込んだ。

「…それで、今日は何をしに来たの？そのことを話すために来たわけじゃないでしょ？」

ふと、幽々子が朗らかな笑みを向けて巧に話しかける。

彼女の鋭さはどうやら力を奪われても相変わらずの様である。

「ちょっと色々あってな、泊めてもらおうと思ってたんだが……」

そう言つて、前に視線を向ける巧。

その先には、1対1となつた妖夢と長女——ルナサが互いのスペルカードで真つ向からぶつかり合っていた。

それによる流れ弾が時たま巧たちの元にも飛来してきたのだが、それらは全ていつの間にかバトルモードになっていたオートバジンが防いでいた。

オートバジンの仕事ぶりも相変わらずである。

「…これじゃ煩すぎて眠れそうにねえな」

「何だったら添い寝してあげましょうか？貴方の耳を優しく塞いで、静かな夜をあげられるわよ？」

「断る」

「ふふっ、冗談よ。むきになっちゃって」

「なってねえよ」

幽々子の言葉にむすつとした顔をする巧だが、彼女はにこにこしているままだった。

やはり彼女はいつも年下をおちよくるのが好きなようである。

……視線を前に向けると、ちょうどスペルカードを出しきって力尽きたルナサが「時代が望む時……私たちは必ずよみ、がえ……る」と言いながら地面に倒れ伏した。その目前には刀を掲げ、仁王立ちする妖夢の姿があった。

「…さて、と。じゃあな」

「あら、本当にいいの？」

「ああ。………それに……」

「それに？」

「…俺が居たら、あいつがお前の看病に付きつきりになれないからな」

オートバジンに跨りながらそう言う巧に、幽々子はきよとした

表情を浮かべた後、にこりと笑いかけた。

—— やっぱり彼、口は悪いけど根は優しい子ね。
…… 霊夢そっくり。

「…何だよ」

「いいえ、何でも」

「……………」

そうして、にこにことする幽々子の言葉に首を傾げながら、巧は白玉楼を後にした。

—— その直後。

「我が剣に斬れぬものは…………… って幽々子様！？無理をなされては駄目じゃないですか！」

「ふふ、御免なさいね、妖夢」

「もう、戻りますから掴まってください！」

「はいっ」

ようやく幽々子の存在に気付いた妖夢が慌てて彼女の手を掴み、そのまま幽々子の身体を支えるようにして二人は屋敷の中へ帰っていた。

「でも私の存在に気付かないなんて、まだまだ修行が足りない証拠ね」

「うぐっ！！」

——魔法の森

「……途中で迷ったら面倒だからやめとくか」

……には入らず、森を避けるように巧は去っていった。

同時刻——

「……何か今、『私の出番がつー！』って叫びそうになっちまったぜ」
「……奇遇ね魔理沙、私もよ」

魔法についての口論をしていた魔法使いが二人、何やら妙な電波を受信していた。

ちなみにこの後、同じ様な理由で永遠亭には向かおうとしない巧であった。

——命蓮寺

「——ええいいですよ。寺を利用する方の中には時に泊っていく方も居るので、その部屋でよければ」

「悪いな、助かる」

最後の望みをかけて命蓮寺を訪れた巧に返って来たのは、了承を意

味する星の言葉だった。

これまでのようにまた妙な理由で泊れなくなるのではないかと危惧していたが、どうやら杞憂だったようである。

まあ余程の事が無い限り、あの啓太郎並みのお人好しが断ると思わないが。

「そういえば耕一の奴が来てたって聞いたんだが、まだいんのか？」
「いえ、先程お帰りになりましたよ。あ、でも今稗田さんが来てるんですよ」

「……あいつ、此処にいたのか」

そんな会話を交わしながら二人は客人用の寢室の前に辿り着いた。その襖を星が開け――

「――以上！封獣ぬえの正体不明芸でしたっ！」

「おおーっ！流石ぬえ！じゃあ今度はわちきが最近考えた驚かす方法を……」

「そしてまたいつものように滑るのかー」

「ルーミアちゃん、しっ！」

「……う、ううう………何で私っていつもこんな役回りなの……」

「げんきだせ小傘！ここは一つけいきづけにさいきょーのアタイがさいきょーの弾幕をー！」

「お、いいね！じゃあ私も正体不明の弾幕を――！」

「こうなったらヤケクソよっ！普段の鬱憤を晴らしてやるわっ！」

「わはー、私もやるー」

「四人ともストップウー！」

――すぐに閉めた。

正体不明の妖怪が、古傘を持った妖怪が、氷精が、見た事の無い妖精と妖怪が何やらカオスな催しをやっていた。

今も襖の向こう側から物が壊れる音と悲鳴と笑い声が響いてくる。
正直中を見るのが怖い。

そして星は『満面の笑み』で巧に振り向き、口を開いた。

「乾さん、この通路を真っ直ぐ行くと客間に着きますので、呼びに行くまでそちらで待って下さい。私は少し用事が出来ましたので」
「あ、ちょ、おい」

巧が引きとめようとするより速くに星はカオスの中心となっている
寝室の中に入り、ピシャツと音がする勢いで襖を閉めた。
その直後、あれほどのさかった音と声がピタリと止んだ。

「……………行くか」

『中を見てはいけない』という己の本能に従い、巧は星に言われた
客間に向かって足を運び始めた。

そして巧の姿が見えなくなった頃、5人ほどの甲高い悲鳴が寝室か
ら響いたのであった。

「あら、乾さん。お久しぶりね」

「ああ、聖か」

星に言われた客間に差し掛かった辺りで、巧は向かいからやって来
た白蓮にばったりと出くわした。彼女が持っているお盆の上にはテ
ィーセット一式が積まれてあった。

聞けばこれから阿求と一緒に軽いお茶会をするらしい。

「よかつたら乾さんも一緒にどうかしら？」

「冷めたお茶なら考えてやる」

巧の返事に「あらあら」と笑いながら客間の襖をあける白蓮。その部屋の中を見た時、巧と白蓮の表情は――凍りついた。

「稗田さん――！」

顔を赤くし、息が荒くなっている阿求が倒れていた。

すぐさま彼女に駆け寄った白蓮と巧だが、その際にティーセットが割れないように浮かばせていたのは流石魔法使いと言ったところであろつか。

「！酷い熱……！乾さん、手伝っていただけないでしょうか？」

「任せろ！……おら、しっかりしろ！」

白蓮と一緒に阿求の身体を支え、巧たちは白蓮の案内の下手頃な布団に阿求を寝かせた。

そして巧は阿求の頭に濡らした布巾を乗せ、白蓮は水などの看病道具を用意した後、看病食を作るために部屋を一旦後にした。

それから暫くし、布巾を取り替えた時におぼろげながらも阿求が目覚めました。

「乾さん………すいません、迷惑掛けて………」

「喋んな、黙って寝てろ」

乱暴な言葉遣いであるが、巧の言葉には病人を労わる柔らかさがあった。

その言葉に「はい…」と小さく答えた阿求は顔を覆うように布団を被った。

「……………私、昔から偶にあるんです。こうやって突然倒れる事」

だから喋るな。と言おうとした巧だが阿求の目に何かに怯えるようなものを感じ、話せば気が紛れるかもしれないと思い、喉が乾かないように阿求に水を手渡した。

ありがとうございます。と言った阿求は水を口につけ、ぽつりぽつりと呟いていった。

阿求の家——稗田家では大体百年に一度くらいの周期で『御阿礼の子』と呼ばれる子どもが生まれるのだと言う。

それは遠い祖先である稗田阿礼自身——生まれ変わりであり、阿求の『見聞きしたものを忘れない程度の能力』のように能力を持ち、幻想郷縁起を記す役割が与えられる。

しかし詳しい原因は不明であるが、御阿礼の子は齡三十までしか生きられず、その上次代への転生の準備も長期間かかるため一生のほとんどを幻想郷縁起を描くことで終わると言うのだ。

九代目である阿求も転生の準備をする年齢になるまで幻想郷縁起を描き続けるのだと言う。

「…あ、言っておきますけど、別に自分の境遇を恨んでいるとかじゃないですよ？」

確かに短命ですけど妖怪の皆さんとは次代でまた会えますし、それなりに濃い人生を送ってますから。……ただ…」

そこまで言う一旦口を噤み、どこことなく何かに怯えるような影を出しながら口を開いていった。

「……時々、こうやって倒れる時、怖くなるんです。三十まで生きられるってわかっていても、ひよっとしたら気を失ってる間に死んじゃうんじゃないかって。」

…私、まだ死にたくない…」

そう言った阿求は布団を深くかぶった。

死から逃れるかのように。生にしがみ付くかのように。

稗田阿求は、昔から同年代の子どもと比べても身体は弱い方だった。それ故、幼い頃から御阿礼の子の運命を受け入れると同時に、いつ訪れるか解らない死に対して深く怯えるようになった。

身体の弱い自分は、天寿を全うする前に何かの拍子でこの世を去ってしまうのではないかと思い始めたのだ。

その気持ちは山登りを出来るようになった今でも変わっておらず、彼女を蝕み続けていた。

「…そんなの当たり前だろ。誰だって死ぬのは怖いさ」

そんな阿求に、巧はさも当然のように言った。

聞き様によつては冷たい言葉とも取れるが、布団から視線を出していた阿求は気付いていた。

——巧の目が、真剣なものであったことに。

「誰だっていつ死んじゃまうかわかんねえさ。だから今を一生懸命生きてるんだろ。」

……あいつらも俺も、お前も」

戦い続ける巧だからこそ、阿求の気持ちがわかっていた。

自分だっていつ戦いの中で二度目の死——本当の死を迎える事にな

るのが解らないのだ。実際、未来の夢を語り、それを叶えることなく戦いの中で散っていった仲間を巧は今まで何人も見てきた。

だから。いや、だからこそ、今を一生懸命に精一杯生きると決めたのだ。

生きられなかった仲間たちの分まで。

「……乾さん、私は……」

「……もう寝ろ、疲れただろ」

そう言いながら、巧は阿求の頭に新しい布巾を乗せた。

その瞬間、阿求は体調不良の熱とは違う、身体の奥底から何か熱いものがこみ上げてくるのを感じた。

（……え？あ、あれ？）

その感覚に阿求は大いに戸惑った。

よくよく思い出してみれば守矢神社に向かう時も、巧は自分本位なことを言っているように見えて実の所常に他者を思いやり、必死に守ろうとしていた。

——そして自分はそれを近くで見っていた。

（……と、とりあえず寝よう。うん、そうしよう……）

自らの感情に戸惑いながら、顔を真っ赤にした阿求は意識を闇に沈めていった。

生まれつつあるその感情を押し込めたまま——

「……寝たか」

寢息を立てた阿求を見て、巧は一息ついた。

思えば今日は何かと落ち着かない一日だった。

下宿先を（仕方ないとは言え）追い出され、神社を、館を、山を、冥界を巡ったものの寢床は得られず、やっとの思いで見つけた宿先では看病することになったのだから。恐らくここまで慌ただしかった一日はそうそう無いだろう。

ふと、巧は何となく——本当に何と無しに気紛れに自分の手の平を見つめた。

それを見た巧は——

「……なっ——！？」

——絶句した。

自らの手の平から、僅かながらも灰がこぼれていたのだ。

しかし今日一日巧は灰を触った覚えも、オルフェノクと戦った覚えさえない。

一体何が——と、巧が疑念を向けようとした時。

「乾さん、お疲れ様で——……？どうしました？」

「っ！……い、いや。何でも無い」

お粥の載ったお盆を手にした白蓮が部屋に入ってきて、巧は咄嗟に己の手をポケットに隠した。

その行動に白蓮は疑問符を浮かべたが、どうやら手の平は見られな

かったようである。

「……？……星が部屋の用意ができたと呼んでましたよ。後は私に任せて今日はゆっくりとお休みになってください」

「あ、ああ。悪いな」

疑問に思いながらもそう言った白蓮の言葉に、巧はいそいそとまるで逃げるようにその部屋を後にした。

その背中を白蓮は不思議そうに見つめていた。

先程までいた部屋から暫く離れ、周りに誰も居ない事を確認すると、巧はポケットから手を取り出し、もう一度その手の平を見つめた。そこには灰などこぼれていない、ごく普通の成人男性の手の平があった。

「……………気のせいか…………？」

それを見た巧はさっきのは一種の幻覚だと思うようにし、星に呼ばれた部屋に早足で向かうことにした。

——この時、巧は気付かなかった。……いや、気付きたくなかったのかもしれない。

灰は、本当はポケットの底に沈んだただだったのだと。

——命蓮寺と人里を結ぶ街道

「やっば……すっかり遅くなっちまった」

もう日が暮れかけようとしているその道を、一人の青年——田宮耕一が走っていた。

いつまでも友の死を引きずって沈んではいけないと思った彼は、手始めに以前と同じ様に命蓮寺を訪れ、野菜のお裾分けなどをすることから始めた。

その際に命蓮寺の面々から白蓮のこと（主に好みなど）を聞いていたら、予定より大幅に遅れての帰宅となってしまうていた。

（今日だけは…今日だけは先生の頭突きを避けなければ……！）

遅れた時に起こるであろう、教師の鋼の制裁に身を震わせながら急いで走る耕一。

そんな耕一の姿を、木の上から見つめる影があった。

「ほう……まさかこんな時間に獲物にありつけるとはな……今日は運がいい」

嬉しそうに呟く影は、耕一が向かう先の木から木へと飛び移っていた。

やがて、耕一が自らの真下を過ぎ去ると同時に木の上から飛び降りた。

そして影——オウルオルフェノクは耕一の無防備な背中に向かって襲いかかった。

第16話 寢床を求めて三千里（後書き）

以上、第16話でした。

今回は…まあ、ハイパーバトルビデオみたいなノリで見ていただければいいかと思い、こんなになっちゃいました。

拙作の咲夜さんは仕事面ではクールビューティですが、プライベートではこんな感じになっています。

でも一線は越えない。それが彼女のこだわり。

あとちゃっかり出てきたプリズムリバーのセリフですが、わかる人にはわかるかと思います。

阿求は……異論は認める。SPIRITSの一条ルミをイメージしていただければよろしいかと。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第17話 彷徨う百舌（前書き）

皆様お久しぶりです。コラッタです。
さて今回は少しお知らせがあります。

実は最近リアルの方が忙しくなってきた、今まで以上の亀更新になつてしまうと思われます。
なるべく早く投稿したい一心ではありますが、どうかご了承の旨よろしくお願いいたします。

それでは第17話、どうぞ。

第17話 彷徨う百舌

「はっ、はっ、はっ……！くそっ、何なんだ！何なんだあいつは！」

幻想郷の森の中。すっかり日が落ち、満月の灯りが薄らと照らされるそこを一つの影が駆け走っていた。

それはフクロウを模した灰色の異形、オウルオルフェノク。

普段は他の命を脅かすそれは、今は『何か』から必死に逃げていた。

「俺は…、俺はこんな所で死ぬ男じゃないんだぞ！」

あんな『成り立て』の奴に殺されていいわけが——！」

オウルオルフェノクの叫びは、最後まで言い切る事はなかった。

胸に鋭く激しい貫くような痛みが走ると共に、その身体は地面にうつ伏せになったのだ。

オウルオルフェノクの胸を貫いたのは飾り気の無い、質素な灰色の槍。

そして倒れると同時に、オウルオルフェノクの身体を青い炎が包んでいく。

「う…そだ……！しに、たくない…。」

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたk——！」

——そうして、絶望の言葉を叫びながらオウルオルフェノクの身体は灰に還り、その場には地面に突き刺さった槍が一本だけ残された。

——ざり

「……………」

落ち葉を踏みしめる音と共に、一つの『異形』がその場に現れた。
『異形』が地面に刺さっていた槍を引きぬくと槍は青い炎に包まれ、
まるで『異形』の手の中に吸い込まれる様に消えていった。

「……………」

そして、『異形』は自らの『灰色の手』を震えながら見つめ――

「…うあああああああああああああー！！！」

——『異形』から発せられた悲痛な『青年の声』が闇に包まれた
辺りに響き渡った。

「……………巧！そっちはどうだ！？」

「……………駄目だ、こっちにはいねえ」

——午前、まだ太陽が真上に昇りきらない頃。
人里と命蓮寺を繋ぐ街道から逸れた森の中に、必死な様子の乾巧と
上白沢慧音の姿があった。

夜が明け、人里に戻っていた最中の巧の前に必死な形相の慧音が現

れ、彼にあることへの協力を頼んできたのだ。
それは――

「耕一の野郎…、どこ行きやがった…！」

――田宮耕一。

彼が昨日命蓮寺に行ったきり、戻ってこないというのだ。
耕一が昨日のうちに命蓮寺を後にしたことを聞いていた巧は慧音の頼みをすぐさま受け入れ、そして今彼女と共に耕一を探していた。

しかし肝心の耕一が中々見つからず、二人の心は次第に焦っていく。
二週間ほど前に里の人間――耕一の友人の斎藤良平がオルフェノクになってしまったということがあったばかりなのだ。

探している内にその『前例』がどうしても浮かび上がってしまい、それを振り払おうとしても二人は嫌でもそのことを考えてしまう。

――そんなことにはさせない。いや、させてなるものか。

その思いを胸に再び二手に別れようとする巧と慧音。
その時である。

――バキバキバキバキッ！

「っつ………！？」

林の奥から木が倒れるような大きな音が響き渡り、その方向から空に飛び立つ鳥の群れが見られる。

――間違はなく、何かがいる。

妖怪がいるかもしれない。オルフェノクがいるかもしれない。

――ひょっとしたら、耕一がいるかもしれない。

「……行くぞ！」
「ああ……！」

そう考えた彼らは、手掛かりを求めて林の中に消えていった。
耕一の無事を、その胸に祈りながら。

「あれ……京くんだけ……？奇遇だなあ……」
「……北崎か」

——ラッキークローバーのアジト。

その一角ではったりと出会ったのは四方院京と北崎だった。
ちらりと北崎に目を向けた京だったが、すぐさま彼の横を通り過ぎようとする。

しかし——

「ねえ……どうして無視しようとするの……？」
「……っ」

北崎が京の肩を掴んで呼び止め、京はその手を素早く振り払った。
北崎が掴んでいた京の肩は少しだけ灰化しており、それを見た北崎の顔にはうつすらと笑みが浮かんでいた。

「ひどいなあ……、何で振り払うの……？ぼくの事嫌い……？」
「……こういう事は琢磨にでもやっている。あいつならお前の期待通りの反応をするだろう」

北崎の触れた相手を灰にする能力。それは彼の性格を歪ませる原因

になると同時に、彼にとって最高の玩具であつた。

自分の力を十分に自覚している彼は触れた相手が灰になっていく姿を、それに怯える姿を見るのがとても好きなのである。

余談だが、ここ数年北崎にとって最も面白い反応を見せるのは琢磨逸郎である。

「それに、自分を一度殺した相手をどうやって好きになれと言っただ」

まだ京が鴉天狗であつた頃、彼を殺し、オルフェノクに覚醒させたのは他でもない北崎だつた。

結果がどうあろうと曲がりなりにも自分を殺した相手を好きになれと言つのは余りにも無理がある。

「そんな言い方しないでよ、仲良くしようよ…」

「……………そうだ！仲良くするためのゲームをしようよ」
「…ゲームだと？」

北崎の『ゲーム』の提案に、京は眉を寄せた。

普段北崎が他のメンバーにゲームを持ちかけているところを見ていたが、その内容は毎度毎度碌でもない物だつた。

ルール自体は単純で、誰かを最初に殺した人が勝ちとかそのようなものだが、その罰ゲームは勝った人がしつぺするなど子どもらしいが、触れたものを灰化させる北崎にとっては十分凶器になりえる物であるのだ。

実際、影山は大抵笑って流しているが、琢磨は毎度それに対して酷く怯えている。

要するに北崎が楽しめればそれで良く、京はそんな彼を悪趣味だと思っていた。

「そうだなあ……………」

……君が気に掛けている文って子を先に殺した方が勝ち、ってのはどう？」

「……………！」

その言葉を聞いた途端、京は北崎に掴みかかっていた。

自らの手が灰化しているのにも気に掛けない彼を見て、北崎はにやにやと笑っていた。

「どうしたの……？ やっぱりの子を殺したくないんだ？」

「……勘違いするな、文を殺すのは俺の役目だ。貴様如きにそれを任せるわけにはいかないだけだ」

その言葉と共に、乱暴に北崎を離す京。

珍しく感情を露わにした京であったがそれ以降口を開こうとせず、北崎の興味が段々と薄れていった。

「ふうん……まあいいよ。ぼくはこれから遊びに行くからさ」

まるで京の態度に興味を無くしたかのように再び歩み始めた北崎。その手には――

「あの『オモチャ』もできたみたいだし……、楽しみだなあ……」

――修復したデルタギアが握られていた。

「じゃあまたね……。京くん……」

子どものような無邪気な笑い声をあげながら、北崎は闇の中に消えていった。

その後ろ姿を見ていた京は忌々しげに、ぼつりと吐き捨てた。

「……化け物め」

「……あれか」

音の発生源を求め、森の中を進んでいた巧と慧音。

彼らの視界に入ったのは、木々があちらこちらに倒れ、おがくずがもうもうと立ち込める開けた場所だった。

その中央には頭を抱えて悶える灰色の異形、モズを模したシュライクオルフェノクの姿があった。

「……オルフェノクか」

「……しかし、……様子が変ではないか？」

慧音の言う通り、シュライクオルフェノクの行動は余りにもおかしかった。

頭を抱えていたかと思えば頭を何度も地面に打ちつけ、蹲り、奇声を発しながらごろごろとのた打ち回っていた。

それはまるで——何かから必死に耐えるような……。

「グウウウウウ………ギ」

「――…っ!!」

その時、頭を抱えていたシュライクオルフェノクの瞳が偶々こちらの姿を捉えた。

それに気付いた巧の背中に一瞬寒気が走り――叫んだ。

「…慧音!! 気付かれたぞ!」

「なにっ…!!?」

「ギイイイイイ!!」

巧が叫ぶと同時に、シュライクオルフェノクが雄叫びを上げながら二人に襲いかかって来た。

二人がそれを咄嗟に避けるとシュライクオルフェノクはその勢いのまま二人の後ろにあった木に衝突。メキメキと音を立てながらその木は大地に崩れ落ちていった。

錯乱していることもあり、力をセーブできていないようである。

錯乱してしまっているため人を襲うような性格か否かもわからない。逃げるにしても今背を向けるのは余りにも危険、それにこのまま放っておけばいつ人間や妖怪を襲うとも限らない。

――ならば、やる事は一つ。

「…一旦縛り上げて話を聞きだすぞ!」

「ああ…!!」

巧が腰にファイズドライバーを巻くと同時に襲いかかって来るシュライクオルフェノク。

それを紙一重にかわした巧はシュライクオルフェノクの脇腹を蹴り飛ばし、体勢を立て直そうとするシュライクオルフェノクを慧音の

弾幕が足止めをする。

その隙に巧は素早くファイズフォンにコードを入力する。

S t a n d i n g b y

「――変身！」

C o m p l e t e

ファイズへの変身が完了すると同時に弾幕の中を強引に突進していくシュライクオルフェノク。

それを目にした慧音は弾幕を一旦撃ち止め、それと同時に同じ様にファイズが駆け出す。

両者は交差する時に拳を繰り出したが、相手を捉えた拳は一つだけ――ファイズの拳だった。

それにより僅かに仰け反ったシュライクオルフェノクの間を見逃さなかったファイズは、反撃の余地を与えないかのように拳のラッシュを繰り出していく。

――シュライクオルフェノク。

錯乱しているが故にセーブが効かなくなっているそのパワーは恐ろしいものであるが、同時に大振りで且つ直線的なものになっていた。そうであればファイズ――巧は5年以上戦い続けてきた戦士である。シュライクオルフェノクの攻撃を避け、カウンターを仕掛ける事などワケが無かった。

――しかし、しかしである。

確かに錯乱している者は行動が直線的で、読みやすいものになっている。

だがそれは時に、予期せぬ行動に出ることもある。

「——ギイエエエエエ！！」
「うおおっ！？」

拳の雨に打たれていたシュライクオルフェノクが突然ファイズの腰にしがみ付き、そのまま突進するかのような勢いで走りだしたのだ。腹部を突かれる形で拘束されたファイズは脱出しようともがくが、力のタガが外れたシュライクオルフェノクの腕はびくともしない。
——そして、押され続けるファイズの後方に一本の巨大な木が現れる。あれとこのオルフェノクにサンドイッチにされたら幾らファイズでもひとたまりもない。

「巧！！！」

そこに慧音が急いで駆け付ける。しかし彼女の腕力ではシュライクオルフェノクをファイズから引き離す事は不可能であるし、弾幕で気を引こうとしても今のシュライクオルフェノクには効かないだろう。

そこで彼女は手近にあった太めの木の枝をシュライクオルフェノクの僅か前方に向かって投げ放ち、それはファイズを押し続けていたシュライクオルフェノクの両足の間に見事に挟まった。

その結果——

「ギッ……！！？」
「うおおっ……！」

足がもつれたシュライクオルフェノクの身体が宙を舞い、しがみ付かれていたファイズも同様に空中に投げだされる。

やがて二人の身体はファイズを下にして落下し始める。このままではファイズはシュライクオルフェノクの下敷きになってしまうだろう。

——しかし、このまま下敷きになる気などファイズには毛頭なかった。

「うお——らあああ——！」

ファイズは地面に落ちると同時にシュライクオルフェノクの身体を力強く掴み、落下した時のエネルギーを流れるように利用してシュライクオルフェノクを巴投げのように投げ飛ばした。

宙を舞ってからアーチを描くように落下した事と、腰から地面に落ちた事が功を成した。

「助かったぜ、慧音」

「礼は後でいい。来るぞ……！」

二人をよそに地面に転がったシュライクオルフェノクは素早く立ち上がり、再びファイズに襲いかかり始めた。

ファイズはその攻撃を避けながらミッシェンメモリーをファイズショットに装填し、右手に装着する。

R e a d y

「はあっ……！」

慧音が弾幕を放ってシュライクオルフェノクの注意をファイズから引き離し、その隙にファイズが拳を振りかぶってシュライクオルフェノクに駆け出す。

ファイズショット。パンチングユニットであるそれは、グランインパクトを放つ時以外でも素手の時よりも数倍の威力の拳を放つ事ができる。

並のオルフェノクなら圧倒できるスペックを持つファイズ。ファイ

ズショットを装備したその拳がノーガードの急所、例えば頭を狙えば――

「眠ってやがれっ!!」

「ギベエエツ!!」

――脳震盪を起こして気絶させる事くらいは可能となる。

慧音の弾幕に気を取られていたシュライクオルフェノクの顔面にフアイズの拳がクリーンヒットし、その身体は叩きつけられる様に地面を転がって動かなくなった。

胸が動いているところを見ると、気絶したようである。

「…やったか」

「ああ。…後は起きる前に縛り上げて――!？」

縛り上げようと歩を進めたフアイズと慧音の目の前でシュライクオルフェノクの身体が光始め、人間態へと変化した。

その姿は――

「っ……………!!」

「……………こう、いち……………?」

二人が探していた張本人、田宮耕一だった。

それを見て変身を解除した巧は苦虫を噛んだような表情に、慧音は呆然とその名を呟き、彼に駆け寄った。

「そんな…耕一までもが…!」

そう言う慧音の顔に、陰が落ちる。

無理もない。これで彼女の教え子が二人もオルフェノクになってし

まったのだ。

それも先程の錯乱した様子、あれは明らかに斎藤良平に表れたものと同じだった。下手をすれば彼も人里を襲ってしまっていたかもしれないのである。

「……………う……………う……………」

「っ、耕一！私の声がわかるか！？耕一！」

「……………せん……………せ、い……………」

その時、耕一が意識を取り戻し、慧音が必死に呼びかけると彼はおぼろげながらそう呟き――

「……………っ！来ないでください！」

一気に意識が覚醒し、慧音の身体を突き飛ばした。そしてその直後、再び苦しそうに頭を抱え始めた。

「こ、耕一……？」

「……………俺の事を、今すぐ殺すか……、出来なければ……縛り、上げて、ここから……逃げてください……！」

「……………お前、何があつた？」

息絶え絶えに言う耕一に、巧は顔を顰めながらそう尋ねた。

尋ねはしたものの、巧には耕一に何が起きているか大体予想がついていた。

何故なら、自分もかつては同じ目に遭つたのだから……。

「……………声が、聞こえるんすよ……………。『殺せ、殺せ』っていうドス黒い、声が……………」

「声……………」

(……やっぱりな)

巧の予想は当たっていた。

オルフェノクに覚醒したばかりの自分を、恐らくは木場勇治や斎藤良平をも苦しめたあの『声』。オルフェノク以外の存在を許さないと言わんばかりの邪悪でドス黒い、気を抜けば直ちに精神が蝕まれる声。

それが、オルフェノクに覚醒してしまった耕一を苦しめていたのだ。

「だ、だから……早く、俺の……ことを、殺し——！」

「……ふんっ!!」

不意に、二人を拒絶する耕一の頭を掴む慧音。その直後、『ごち』と岩にぶつかった様な音と共に彼に思いつきり頭突きをした。

うげ。と表情を濁らせる巧をよそに、耕一は頭を抱えてもがき始めた。

……精神的な意味ではなく、物理的な意味で。

そんな殺人的な頭突きをした当の慧音とは言つと、落ち着かせるような穏やかな声色で耕一に話しかける。

「突然すまなかった。しかし、私はお前に……良平と同じ様な事に、良平と同じ様な事を言つてほしくないのだ……」

「……せ、先生……」

「……落ち着いたか？何があつたか、話してくれるか？」

慧音の頭突きの方が勝つたのか、『声』から一時的ながらも逃れた耕一がゆっくりと昨日の出来事を話していく。

命蓮寺から帰る途中、突然オルフェノクに襲われて抵抗も空しく胸を貫かれて、『殺された』と実感しながら意識を失つたこと。

次に目が覚めたら目の前には自分を襲ったオルフェノクの亡き殻があり、それを見つめる自分の手は灰色になっていた事。

そこで悟ったのだ。自分はオルフェノクになり、目の前のオルフェノクを殺した事。

その直後にあの『声』が襲いかかり、ついさっきまで意識が殆どおぼろげになっていた事。

「……………」

「……………」

誰も、喋らない。

巧も、慧音も、耕一も。重い沈黙がその場を支配していた。

当然である。望んでもいない身体に無理矢理変えられてしまったのだ。

突然身体を全く別の物に変えられて喜ぶ者などいない。

それは当事者である耕一は勿論、他者を思いやれる慧音も、そして幼い頃にオルフェノクになった巧にも痛いほどわかっていた。

——そして、辺りを包んでいたその沈黙は——

「久しぶりだね……………乾くん……………」

——招かれざる客によって破られることになった。

「誰だ……………」

「……………お前は……………」

気配も無く突然現れた珍客を前に慧音は顔を訝しげにし、巧は険し

い表情で相手を睨みつけた。

それは、あどけなさそうな笑みを浮かべる薄着の少年。
忘れられる筈がなかった。それは、巧が知る限り最凶最悪の能力を
持つ……オルフェノク。

「ラッキークローバーの北崎！…何しに来やがった！」

——ラッキークローバー最後の一人、北崎だった。

「やだなあ…そんなに怖い顔しないでよ…。せっかく遊びに来たんだから…」

「何……！？」

一見無邪気そうな笑顔で巧の眼光を受け流す北崎はそう言うところ
物を取り出し、それを腰に巻き付けた。

巧は、そして慧音も目を見開いた。

——そう、彼らは二週間前にこれを目にしているのだから。

「あのベルトは…まさか…！！」

「…デルタギア！やっぱりお前が…！」

巧と慧音の言葉にや、と口の端を釣り上げた北崎は続いて取りだ
したデルタフォンを指でくるくると回し、口元に持ってきた。

そして——

「変身」

S t a n d i n g b y

C o m p l e t e

流れるようにデルタフォンを腰のデルタドライバーの右側に差し込んだ。

その直後、青白いフォトンストリームが北崎の身体を駆け巡り、光が止んだ頃には変身は完了していた。

黒い装甲とスーツの上を流れる白いフォトンストリーム。

——白き魔人、デルタ。

デルタギアを手にした、北崎のもう一つの姿。

「……………あいつが…あいつが良平を……………」

——そして、巧と慧音の後ろから響く、黒い感情が籠った低い声。二人が振り返ると、そこには今まで見たことも無いような形相でデルタを睨みつける耕一の姿が。

当然である。目の前で殺された親友の仇と巡り合ったのだ。だから

「待て！こっい——！！」

「お前があああああああつ！！」

——復讐に走るのも無理が無かった。

止めようとした慧音の言葉を振り払ってデルタに駆け出す耕一。

その最中、彼の身体に紋様が浮かび上がり、シュライクオルフェノクへと変化した。

シュライクオルフェノクはデルタとの距離をあつという間に詰める
と拳を振り上げ——

「最初はキミが相手をしてくれるの？……………でも残念だなあ…」

「……………ぐっ！？」

「キミじゃあ弱すぎるよ……」

デルタの手に、易々と受け止められてしまった。

デルタ。最初に開発されたそのベルトは帝王のベルトの基になったこともあり、三本のベルトの中では最も強い力を持っている。

加えて、今それに変身しているのはエリートであるラッキークローバー中最強を誇る北崎。使徒再生で生まれたばかりのオルフェノクの拳を止めるくらい訳なかった。

そしてシュライクオルフェノクが離れようとするより先にデルタが彼の首を掴み、締め上げ始めた。

「ぐ…あ、あああ……！」

「耕一を離せ！！」

「変身！！」

C o m p l e t e

シュライクオルフェノクを助けるために一点に集中させた弾幕を放つ慧音と、ファイズに変身して駆け出す巧。

デルタはそんな二人をちらりと見ると、右腰のデルタフォンが差さっているデルタムーバーを抜くと口元に持つて行き――

「F i r e

B u r s t m o d e

視線を向けずに、二人に向かって迷わず引き金を引いた。

「うわっ！！」

「ぐあっ！！」

その弾丸は正確に二人の足元に着弾し、その衝撃で二人の身体は吹き飛ばされた。

「……………ん？」

「北崎とやら…。耕一を離してもらっぞ…！」

——しかし、それを由としない者がここにはいる。

そう、上白沢慧音だ。彼女はデルタの背後を取ると彼の背中にはぼ突き出すような形で掌を向け、零距离で弾幕を放った。

それらは全てデルタの背中に吸い込まれていく。しかし、彼にダメージを受けている様子は見られない。

そう、この北崎が変身したデルタはかつて殺傷力を高めた慧音のスペルカード三連続の中でほとんど無傷だったのだから。

「きみもこりないね……。効かないってわかってるくせに」

「そんな事…百も承知さ」

「何……？」

慧音に振り向いたデルタが目にしたのは、不敵な笑みを浮かべる慧音。

そこでふと気付く。——手の平を挟む感触が無くなっている事に。

（——まさかっ！）

慌てて視線を戻すと、そこには途中からぼつきりと折れた槍と、シユライクオルフェノクを引きずったままこちらにフォンブラスターの銃口を向けるファイズ。

そしてそのまま引き金を引くと同時に、慧音が弾幕を撃ち止めてその場から飛び上がった。

「うわっ！」

流石にフォンブラスターの銃弾を受けてはよろめいた様子を見せるデルタ。

ファイズはフォンブラスターを放ちながらデルタに近づいていき、目前まで迫ると強引に拳を繰り出してきたデルタを迎え撃つように自らも拳を放った。

「ぐっ!!」

「うあっ!!」

その拳は互いの顔面を捉えてクロスカウンターとなり、仰け反るファイズとデルタ――

「うらあああああっ!!」

――いや、ファイズは仰け反らなかった。

彼は強引にデルタに掴みかかり、そのまま叩きつけるように押し倒した。

そしてファイズはマウントポジションを取り、デルタに拳を次々と打ち込んでいく。

「……いったいなあ!」

が、そのまま攻撃を許している程デルタ――北崎は甘くない。

デルタはマウントポジションを取るファイズの背中に膝蹴りを打ち込んで蹴り飛ばし、ファイズの拘束から逃れた。

そして転がりながら受け身を取り、素早く体勢を整えるファイズ。デルタはその間にデルタムーバーを抜き、口元で呟いた。

「Three Eight Two One」

Jet Slinger Come Closer

「——ッ!!」

それを聞いたファイズは一瞬、己の耳を疑った。

—— 待て、今こいつは何と言った？何を呼びやがった!？

—— まさか……！まさか……！！

「……何だ？」

「何か……変な音が……、こっちに……来る？」

そして慧音と、彼女に抱えられたシュライクオルフェノクの耳に奇妙な音が聴こえてくる。

風を切り、木々を薙ぎ倒し、段々と近づいてくるような音が。

—— やがて、その音の源は——

「——な」

「逃げろっ!! 慧音！耕一！」

—— 木々を薙ぎ倒し、慧音とシュライクオルフェノクの目の前に現れ。

…… 二人を、その巨体で容易く跳ね飛ばした。

それは巨大な単車だった。黒と白で彩られた車体に刻まれた、『SMART BRAIN』のロゴ。

しかし、余りに巨大で歪な形状のそれを、果たしてバイクと言っていいのだろうか。

前後の車輪はタイヤと言うよりも自由回転するホバーと言った方がまだしっくりくる。

——それは、三本のベルトのサポートマシンの一つだった。
ファイズ、カイザ、そしてデルタに一台ずつ当てられた、正に『高
速移動可能な戦車』。

——その名は、ジェットスライガー。

圧倒的な機動性と破壊力を持つ、最強のサポートマシン——！

「二人と——ぐあつ——！」

跳ね飛ばされた慧音と耕一の下に駆け寄ろうとしたファイズだが、
自身も同じ様にジェットスライガーに跳ね飛ばされてしまった。

悪い事は更に重なる。その衝撃でファイズの変身が解け、ファイズ
ギアも林の中に飛んでいって行方がわからなくなってしまったのだ。

「う……うう………」

「た……く、み………」

その声にハッとした巧が見回すと、そこには血まみれでかろうじて
意識を保っている耕一と慧音の姿があった。

どうやら跳ね飛ばされた先が、二人の下だったようである。

「おら、掴まれ……！」

そして二人を抱えて、立ち上がろうとする巧。

——しかし、そんなことをあの男がみすみす見逃す筈がなかった。

「ほら、早く逃げないとまた轢いちゃうよ……？」

——そう、デルタだ。

ジェットスライガーに乗り込んだ彼は巧たちに向かって猛スピード
で突進し始めた。

——また跳ね飛ばすつもりでいるのが、火の目を見るよりも明らかであった。

「くっ……そっ……！」

対する巧は二人の身体を抱えている上、跳ね飛ばされたダメージが二人より軽いとは言え深く残っているのだ。当然、避ける事など儘ならない。

ならば、このまま再び跳ね飛ばされてしまうのか？

——答えは、否。

何故なら、巧の『相棒』がそんなことを許さないからだ。

B a t t l e m o d e

「うわっ！……邪魔だなあ！」

そう、オートバジンだ。バスターホイールの弾丸をデルタに浴びさせ、注意を自分に向けさせていく。

その際に、巧は見た。

オートバジンが頭部をこちらに向け、眼部センサーを光らせていたのを。

（…………お前……！）

——今のうちに逃げろ。と言いたいのだろう。

その間にもオートバジンはデルタを引き寄せて巧たちから離れていく。

「……二人とも、行くぞ……！」

感情など持たない筈のオートバジンの『想い』を受け、巧は急いでその場から離れていく。

しかし深手を負ったことと、二人を抱えていることでその足取りはゆっくりとしたものになっていた。

「巧……無茶、を……する、な……」

「……うるっせえな……黙ってる……！」

慧音の言葉を撥ね退け、一步、また一步と二人を抱えて離れていく巧。

——このままではいずれ追い付かれる。どこかに身を隠さなければ。

巧がそう思った矢先だった。

——キイイイイイ……

「くそっ！もう来やがったのか！！」

背後から迫りくる、ジェットスライガーの風を切る音。

オートバジンはどうなったのか。無事を確かめに行きたい巧であったが二人の事を考え、その思いを必死に抑えた。

そして重い身体に鞭を入れて先程よりも早足で進んでいく。

少しでも背後の悪魔から逃れるために。

「みーつけ、た」

——しかし、とうとうデルタにその姿を捉えられてしまった。

巧たちから付かず離れずの距離で追いかけてくるデルタ。巧はそれに薄ら寒い気味の悪さを感じた。

先程のように跳ね飛ばそうと猛スピードで突進する訳でもなく、距離を一定に保つ『ジェットスライガー』。

(……まさか……！)

「さて、と………」

不吉な予想が脳裏を駆け巡った巧を目の前に、デルタは目前にあるパネルを操作していく。

パネルに映っていたのは巧たちで、彼らを囲むようにロックオンマーカーが浮かんでいく。

——そう、巧の予想は的中していた。最悪な形で。

「バイバイ」

そう呟いたデルタがパネルの赤いボタンを押した瞬間、ジェットスライガーの両側面が展開した。

そこから覗くのは、何十もの数のフォトンミサイル。それらが一斉に、巧たちに向かって放たれた——

迫りくるフォトンミサイルを前に、巧は決断を迫られていた。

——ファイズギアは無い。オートバジンもない。

ならば、誰がこの二人を守り抜く？

——決まっている、自分自身だ。

——どうやって？それも決まっている。

………そう、やるしかない。

「……二人とも、舌嚙むなよ」

そう呟いた巧は二人を抱えたまま、身体に力を籠める。

その身体に浮かび上がるは、紋様。
そして巧の腕が、脚が、身体が、灰色に盛り上がっていく。
真の姿、ウルフォルフェノクへと。

「巧……！おま、え……！」

「うらあああああつ……！」

息絶え絶えながらも驚く様子の慧音を半ば無視する形で、ウルフォルフェノクは駆け出す。

追尾してくるフォトンミサイルから木々の間を縫い、攪乱するような動きで逃れていく。

そして一本、また一本とフォトンミサイルが木々にぶつかり、本来の目的を果たさずに爆散していく。

「へえ……どこまで逃げられるかな……？」

その様子を、デルタは楽しそうに眺めている。

その間にもフォトンミサイルは数を減らしていき、遂に彼らを追うのは残り一本になっていた。

——しかし、ここで予想外の事がウルフォルフェノクを襲う。

元々ウルフォルフェノク——巧は深手を負っていた。

加えて、今は慧音と耕一の二人を抱えて逃げている状態。

つまり——

——ずるり

（……しまった！）

——いつ足を踏み外してもおかしくなかった。

足を踏み外したことで体勢が悪くなったウルフォルフェノクの背後の木に、フォトンミサイルが着弾する。
瞬間、破裂、爆発。

「ぐあああつー!!」

爆風と木々の破片が彼らを襲い、吹き飛ばされた先にあるのは――

(…川…！)

流れの激しい、荒れた川だった。
当然のように、三人の身体はそこに吸い込まれていく。

(慧音……！耕一……！)

ウルフォルフェノクの変化が解けた巧は完全に気を失った慧音と耕一に手を伸ばそうとする。

――しかし、その手は届かない。

(ちく……しょ……)

やがて、巧自身の意識も失われていく。

――そして、
巧、慧音、耕一の三人の姿は、川の中に叩きつけられる様に消えていった。

第17話 彷徨う百舌（後書き）

耕一のオルフェノクへの覚醒、北崎デルタとの再戦の第17話、いかがだったでしょうか？

色々と言りたいところではありますが今回は諸事情につき、久々のオリフェノク紹介のみとさせていただきます。申し訳ございません、このような形で（ニコリ

シユライクオルフェノク。

田宮耕一が変化する、モズの特性を持つオルフェノク。

使徒再生で生まれたこともあり、その力はさほど強いと言う訳でもなく、並のオルフェノクよりも少々上という程度である。

しかし武器である槍の切れ味はとても凄まじく、これに貫かれた敵はさながらモズのはやにえのような姿になる。また、この槍には『返し』が無く、抜くのは容易である。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第18話 紅きΦ、白きΔ（前書き）

皆さんお待たせしました、第18話です。今回も長丁場になります。

…しかし、自分は北崎くんを関わらせるとどうしてこつ長丁場になってしまうのだろうか…？

第18話 紅き中、白き△

「…それで、わざわざこんな所に来て一体何のつもりかな？」
「…うるせえな。来てるのはお前の方じゃねえのかよ」

——西洋洗濯店舗菊地。

……と言うより菊地啓太郎の家のリビングに二人の男がいた。
一人はしかめっ面でテーブルの椅子に腰掛けている乾巧。そしてもう一人はキッチンで手を動かしている嫌味な口調の男、草加雅人だった。

——さて、ここで疑問が生まれる。

この啓太郎の家はオルフェノクの支配が始まった6年ほど前からとても人が住めるような状態では無くなっているし、そもそも巧の目の前にいる雅人だって5年前に殺されている筈なのだ。
大体巧はついさっきまで・・・にいたのだ。それがいきなり壊れる前の啓太郎の家に現れるなどどう考えても理に合わない。

となると導き出される答えは一つ。

ここは巧の夢か、死ぬ前に見る走馬灯——とは違うかもしれない。
どちらかと言うと幻覚の方だろうか。ともかく、現実では無い事に間違いは無かった。

そんな巧の前に雅人が一杯のカップを差し出した。
そこには湯気を立てる熱々のコーヒーが入っていた。香り立つ苦みと飲んだ者の身体を温めるそれは猫舌の巧にとって凶器にしかない。
えない。

当然、コーヒーを出された巧の顔は更に険しいものになっていった。

「飲むか？フーフーしてやってもいいけど？」

「ふざけてんのか。嫌み言いに來ただけならさっさと出てけよ」

―― 大体、何でよりもよってこいつがでてくんだよ。

あれか、こいつは俺の夢の中にまで嫌味を言いに來るのか。前からしつこい奴とは思ってたが人の夢の中にまで出てくるまでとはな。

「何を勘違いしてるのかな。出ていくのはキミの方だろ」

「ああ？」

雅人の言葉に疑問の声を発しようとした巧だが、その言葉が出る事が無かった。

リビングの床を、壁を、天井を、テーブルも家具も、全てが突然黒く塗りつぶされていった。

リビングだった場所は瞬く間に闇に包まれ、それに驚くような巧に対して雅人はまるで何でも無いかのように佇んでいた。

「キミはまだこっちにくるような奴じゃないんだ。お呼びじゃないんだよ」

「……何だと？」

「忘れたのかな、全くオルフェノクと言う奴は物覚えが悪いんだな。

…キミはまだ、あの世界でやるべき事があるんじゃないか？」

「あの……世界……？」

雅人に言われ、巧の脳裏に何かを思い出すような頭痛が走る。

——そうだ、俺は今まで何をしていた？

……確か……俺は幻想郷とか言うヘンテコ世界に居て……、そこで濃い連中と出会って……、でもオルフェノクが……ラッキークローバーの奴らもいて……。

……それから……色々あって……北崎の野郎が現れて……あいつらと一緒に川に……あいつら？

——……そうだ！慧音、耕一！

「思い出したようだな。ならさっさと出て行ってもらおうか」

「……ああ、そうさせてもらうぜ」

そうと決めたら巧のやる事は唯一つ。

雅人に背を向け、闇に向かって力強く歩いていくのだった。

全ては目を覚まし、やるべきことをやるため。

「ああ、そうそう。一つ言い忘れていた」

ふと、不意に雅人がそう言って巧を引き留め、巧は足を止めたものの、振り向こうとはしなかった。

その態度に特に何も言おうとしない雅人は、そのまま口を開いた。

「真理を傷つけてみる。承知しないからな」

「……ああ、わかったよ」

——これでわかった。こいつはやっぱり俺が良く知る草加雅人だ。嫌味だけどうしようもなく真理が大切に、命に変えても守りたいと思っているあの草加雅人だ。

そうして、巧はこの空間を後にした。

「……み……た……み……！」
「……う、うう……」

——誰かが、呼んでいる。
……この声は、誰だ——？

「……くみ……！たくみ……！！」

——ああ、お前か。
わかった。わかったからよ、頭突きはすんなよ？

「巧！すっかりしろ！」
「……慧……音、か……」

自らに呼び掛ける慧音の顔を見て、乾巧は意識を取り戻した。
視線を横に動かすと、そこには自分達が流れていたであろう川、そして背中に感じる河原の砂利。
そして後頭部に感じる柔らかな膝の感触と、黒い法衣。その法衣を辿って視線を上に向けると——

「……聖？」
「はい。気分はどうですか、乾さん」

柔らかな笑みを浮かべる尼、聖白蓮だった。

「なんでここに……って慧音、お前大丈夫なのかよ」

身体をゆっくりと起こしながら、巧はそう尋ねた。

そもそも意識を失うまでは巧は勿論、慧音と耕一もデルタによって重傷を負わされていたのだ。

耕一の姿は見当たらないが慧音の姿は怪我が無くなっているようだし、意識もはつきりしている。

どういうことなのか、と疑問に浮かぶ巧だったが、その答えはすぐに知ることになる。

「聖殿のおかげだ。彼女が川に流されていた私たちを助けて下さったんだ」

曰く、白蓮も耕一が行方不明になった事を聞き付け、探していたところ川に流されていた自分達を発見したらしい。

そして今の今まで以前良平にしたように治癒の魔法を施していたらしい。

巧たちの怪我が治っているのはそう言う理由であった。

「そうか……。それで、耕一の奴は？」

「ああ、耕一なら——」

「…俺ならここっすよ」

慧音の言葉を遮ったのは、木陰から現れた耕一だった。彼は座り込むと、その顔に垂れる脂汗をぐいと拭った。

「もう、大丈夫なのですか？」

「……ええ、大分落ち着きました」

そう言う白蓮に何があったのかと巧が尋ねると、彼女は一度耕一の顔を窺い、彼が静かに頷くと語り始めた。

巧が気を失っている間、再び耕一にあの『声』が襲いかかってオルフェノクになり、自我を失う直前にまで至ったのだ。

そこで白蓮が魔法で耕一の中のオルフェノクの破壊衝動を抑え込み、魔法が完全に効いて自我を取り戻すまで木陰に隠れていたらしい。

「……俺、正直言うと自信ないんす」

不意にそう呟いたのは耕一だった。

汗を拭い、俯きながら呟く彼の表情は、途方もなく暗い。

「……オルフェノクの破壊衝動に勝つ自信が、『声』に耐えられる自信が……ないんです」

「耕一、それは——」

「俺は良平みたいに落ち着いた奴じゃ、乾サンのように強くも無い！……さつきだって、先生達や聖さんの助けが無けりや自分で抑える事さえできない！……こんな俺がこれから誰かを襲わずに生きていける筈がない……！」

……だから、早く殺し——」

「——止めますよ」

耕一の言葉を遮り、そう言ったのは白蓮だった。

彼女は耕一の手を握り、真髓な目で彼を見つめていた。

「ひ、聖さ——」

「貴方がその『声』に負けるようだったら、私は何度でも貴方を戻します。」

貴方が一人で耐えられないようなら、耐えられるようになるまで

貴方に付いています。

貴方が助けを求めるようなら、私はいつでもその手を取ります。

……だから、諦めないで。

本能に立ち向かって」

白蓮の言葉に耕一はただ気圧されていた。

白蓮は、本気だ。今言った事を本当に行おうとする『凄み』が彼女の瞳にあった。

……しかしそれでも、それでも耕一は自信が持ちきれない。弱音が出てしまう。

その弱音は、彼の口からするりと出てしまう。

「でも、もし俺が……心の底から完全にオルフェノクになっちまったら……」

「……その時は……私が責任を持って、貴方を殺します」

聖白蓮は退かない。

彼を救おうとするその気持ちに妥協はない。それに伴う責任からも逃れようとするしない。

——そして、それは彼女だけではなかった。

「……おい、一人で背負いこもうとするんじゃないやねえよ」

「私たちも協力する。……勿論、責任は取る」

「……だそうだ」

慧音が、巧が応える。

今、耕一の目の前には仲間がいる。

自らの本能に共に立ち向かうと言ってくれる仲間が。

——気付いた時には、その瞳から涙が出ていた。

「俺は…俺は……！」

「…一緒に、頑張りましょう？」

「……はい…、はいっ……！」

差し出された白蓮の手を、耕一は固く握りしめた。
その顔をぐしゃぐしゃにして、涙を流しながら。

——突如苦難の道に晒された彼には、支えてくれる人が必要だったのだ。

それは白蓮でもあるし、慧音でもあるし、巧でもある。
例え支えると言葉にしなくても、存在するだけで十分支えとなることもある。

彼にとってそれは、妹の巴でもある。

——そして今、彼は支えを得た。

「…巧。正直に言うと私はオルフェノクが嫌いだ」

耕一と白蓮の様子を眺めていた慧音が、静かにそう呟いた。
突然そう言いだした彼女に巧は視線を向けながらも、彼女は言葉を紡いでいく。

「奴らのせいで里の人々は傷つき、耕一と良平が苦しい思いをすることになった。」

耕一などを受け入れる事ができても、奴らだけは許す事が出来ない」

「……俺も、その『奴ら』の中に入っているのか？」

慧音の言い分は当然と言えた。

人を襲わなければ存在を保てない妖怪ならば思うところはあるものの、彼女はまだ納得する事ができた。……最も、妖怪は人里を直接襲うことはないだろうが。

しかしオルフェノクは違う。彼らは人を襲わなければ存在を保てない訳ではない。

仲間のオルフェノクを増やすということもあるが、それは副産物のようなものである。彼らは只自分が楽しむために人を、妖怪さえもその手に掛ける。

慧音がオルフェノクのそのあり方を受け入れられないのは当然だった。

「……それは違う。確かにお前が正体を隠していたことについては言いたい事が沢山あるし、怒ってもいる。私たちが信用できないのか、などな」

「……………」

「だがお前にはお前なりの都合があるだろうし、自分の負の面を話したくない人など大勢いる。」

……それに、お前は人を襲うような奴じゃない。二ヶ月近くも一緒に居ればそれくらいはわかる」

そう言つて、巧に笑みを向ける慧音。

その笑みは穏やかで、どこか凜々しさを感じさせるものだった。その風体はまるで――

「まるで先公だな」

「本職だからな。問題児の扱いは心得ているつもりだ」

「……一言余計だったの」

憎たらしげにそう言う巧だが、その表情には穏やかな感情が浮かんでいた。

「い、いたい……」

「くそおお……星めええ、ドジッ虎のくせに……」

——ところ変わり、幻想郷の森の中。

その中を二人の妖怪がふらついていた。

一人は一つ目と長い舌が出ている紫色の古傘を差すオッドアイの少女——多々良小傘。

そしてもう一人は奇妙な翼を生やした黒いワンピースの少女——封獣ぬえだった。

昨日命蓮寺の客室で大騒ぎして散らかした彼女たちは寅丸星によって物理的にもこってり絞られ、こうして現在その辺をふらつきながら愚痴を吐きだしていた。

「……何だか、このまま引き下がったら一妖怪として負ける気がする」

「よく言った小傘！こうなったら今度思いっきり怖がらせてやろう」

「！」

しかしいつまでも不貞腐れている程彼女たちは暗く無かった。どちらかと言えばこの二人は前向きで、くよくよ悩むような性格ではないのだ。

現に小傘は人を脅かすのに何度も失敗しているが、挫けた事は無かった。

——さて、それじゃどうやって怖がらせようかな？星はどこかぽけつとした所があるから並大抵ではびびらないだろうし……。いつそ正体不明の種で毘沙門天に化けてみようかな？いやそれとも出られないような迷路の幻を見せて、時間をかけてメンタルを削るなんてのも……

「あれ？何だろこれ？」

唐突に響いた小傘の声によってぬえの意識は現実に戻された。何かと思っただけがみ込む小傘に視線を向けると、彼女の目の前に緑生い茂る森の中では浮いた物体があった。

それは紅いラインが入った、銀色のベルトだった。

小傘はそれをぬえに手渡すと、まじまじと見つめ始めた。

「何だろ…腹巻？」

「……うーん……。どっかで見た事あるような…」

どこか抜けたような疑問を口にする小傘をよそに、ぬえはこのベル

トに既視感を拭えずにいた。

……そう、どこかで見た事があるような気がするのだが、靄がかかったように思い出せない。人里がぼんやりと浮かんでくるのだが、はつきりとはわからない。

（どっかの誰かが巻いていたような気も……）

「——ねえ君たち。こんなところで何をしてるの？」

「わひゃっ!？」

突然背後から掛かってきた声にびくりと驚いた小傘。

慌てて二人が振り向くと、そこにはシャツを着崩した天然パーマの少年がいた。

（何コイツ、一体いつから……!）

ぬえは目の前の少年に警戒していた。

薄らと笑みを浮かべるその少年は声をかけるまで彼女らに気配を一切感じさせなかったのだ。

妖怪とはそのあり方故、自衛のために気配を読み取る力が人間や動物よりも強い。

加えてぬえは大昔に封印されるほど強力な妖怪である。そんな彼女に目の前の少年は気配を一切感じさせなかったのだ。

彼女が知る限りそんなことが出来るのは妖怪の賢者と謳われるスキマ妖怪くらいである。

「わ、私たちはね、人を驚かせようと色々考えていたんだよ！」

しかし楽天家の小傘はそんなぬえの考えなど露知らず、えっへんと言わんばかりに少年に話しかける。

仮にも驚かせようとしている相手にそんな事を言っては意味が無い気もするが、そこは御愛嬌である。

「へえ……それって楽しいの？」

「もちろん！楽しいし、元気が出るで一石二鳥なんだよ！」

「そっかあ……じゃあ、君たちを驚かせてみようかな……」

唐突にそう言いだした少年。

それを聞いた小傘は一瞬ぱかんとしたが、すぐに不敵な笑みを浮かべた。

と言っても幼い顔立ちの為、悪戯好きな子どもの顔にしか見えなかったが。

「ちっちっち……只の人間が妖怪の私たちを驚かそうなんて百年

早いよ?」

そう言う小傘だが、ついさっきその人間にびっくりと驚いた事は忘れていた様である。

「ふふふ……いいからほら、握手しようよ」

「……………」

「小傘まつ——」

笑いながら手を差し出す少年に少々戸惑いながらも、小傘はぬえの言葉を振りきって彼の手を握った。

——その時である。

「——え」

「——っ！小傘っ！！」

「ふふふ……………」

顔を青ざめる小傘、彼女を少年から引き離すぬえ、一層笑みを浮かべる少年。

そこには、妖怪である彼女たちでさえ信じられない光景があった。

「う、腕……………わたしのうでがあああつ!!」

少年の手を握っていた小傘の右腕。

それが手先から肘までが灰となって崩れ落ちてしまったのだ。

（な、何これ……いや、怖い怖い怖いコワイコワイコワイコワイ）

小傘は恐怖していた。それだけではなく、気味の悪さも感じていた。腕を失ったのに痛みを何も感じないのだ。そこにはただ『腕が無くなった』という実感があるだけだった。

「あんた！小傘に何を……！」

「何もしてないよ……ただ握手しただけだよ」

殺すといわんばかりに少年を睨みつけるぬえに、少年はそう言った。だが触っただけで人を――妖怪を灰にする能力などぬえは聞いた事が無い。

――いや、彼女たちが知らなかっただけで存在しているのだ。

触っただけで相手を灰にしてしまう、そんな恐ろしい能力を持った存在が。

「……そう言えば僕が触ったものはみいんな灰になっちゃうんだっかなあ……」

「……………！！」

まるでたった今、大したことの無い忘れ物を思い出したかのような感覚でそう呟く少年。

それを聞いた途端、ぬえは小傘を連れてそこから逃げ出した。

——冗談じゃない。触っただけで灰になるなんてこっちの方が悪すぎる。

小傘をあいつから離すのがもう少し遅かったら死んでいたかもしれないし、あいつの実力はわからないままだ。捕まったらそれだけで終わってしまう。

——何より、あいつはヤバい。雰囲気を見ていればわかる。

あいつは狂気の塊だ。嵐みたいな暴力的な狂気が服を着て歩いているような奴だ。

……あんなえげつない奴、妖怪にだってそうそういるもんか……！

「…待つてよ、逃げないでよ。ねえ……」

…そっか、鬼ごっこするんだ！じゃあ僕が鬼だね、フッフ……」

そして少年——北崎は口元を釣り上げながら彼女たちの後を追いつめた。

「乾さん、ちょっといいですか？」

「何だよ」

一方、巧たちは森の中を掻き分けて進んでいた。

耕一は自分の力をコントロールできるようになるまで命蓮寺で修練

することに決めた彼らは、先の戦いで紛失したファイズギアとオートバジンを探すため、森の中を探索していた。
デルタ——北崎に見つからないように慎重に。

そんな中、白蓮が巧に声をかけた。他の二人に聞こえないような小さな声で。

巧が見た彼女はどこか聞きづらそうに伏目がちな表情をしていたが、やがて意を決したかのように口を開いた。

「——乾さんは何故、同胞である筈のオルフェノクと戦うのですか？」

「……………」

予想はしていた。

種を超えた共存を唱え、人が良い白蓮の事だ。自分がオルフェノクと知ればいつかこういう質問が来るとは思っていた。

とは言え、どう言ったものだろうか。

夢を守るためなど巧自身はそれほど大それたことなどとは思っていない。ただ夢を持てなかった自分はこれしか手段が無かったただけの話だ。

——それに正直なところ、これ以上自分の本心をほいほいと話す気にはなれない。

例え正体が知られたとしても、巧が自分の内側を他人に開く事を恐れる事には変わりなかったのだ。

そうして暫く思案顔をしていた巧は、やがてゆるりと口を開いた。

「……人間同士でもあくどい奴を懲らしめたりすんだろ。あれと似たようなもんだ」

「あっ……………」

それだけ言って再び歩き出す巧に白蓮が声をかけようとするも、その手は所在なさに空を切り、彼を呼び止める事は無かった。

……恐らく、白蓮も心のどこかで悟ったのかもしれない。これ以上問い詰めても巧は口を割ろうとしない事を。

(…しかし、もうちょっと上手い言い方出来なかったのかよ……)

そうして巧が一人自己嫌悪に陥っていると――

「っ、慧音？」

「…………誰かいる」

前方を歩いていった慧音が巧たちを手で制し、物音がする草陰に向かって構えた。巧もそれに倣う。

――もしかすると、北崎に出くわしてしまったのかもしれない。そう考えて警戒していると、やがて物音の主が草陰から飛び出してきた。

「ぬえ！？それに小傘！？」

「白蓮！？……………」と、その他」

封黙ぬえと、ぐったりと彼女に抱えられた多々良小傘だった。

共に暮らしていることもあり、すぐさま彼女たちに駆け寄った白蓮は気付いた。

小傘の右肘から先が無くなっており、そこから灰がこぼれている事に。

「酷い……！一体何が……？」

「……それがさ、かなりヤバイ奴に出くわしちゃったんだ」

それからぬえは素早く、簡単に説明した。

自分達の前に現れた少年。小傘が彼と握手した瞬間、彼女の腕が灰になった事。

そのショックで気絶した小傘を抱え、その少年から逃げてきた事。その話を聞いた途端、巧は鋭い剣幕でぬえに詰め寄った。

「おい！そいつって、黒いシャツを着た天然パーマの奴だったか！？」

「う、うん。間違いないよ」

それで巧は確信した。

黒いシャツ、天然パーマ、少年、そして触れた物を灰にする能力。これらが当てはまる人物など、一人しかいない。

「北崎か……！」

「乾さん、北崎というのは、あの……！？」

巧が呟いた名前に、白蓮がぴくりと反応した。

彼女は聞いていた。デルタとなった北崎が巧たちを追い詰めていた事を。

——そして、目の前で良平を殺したデルタも北崎であると言う事を。

「みいつけた。…………あれえ？みんなそろって何してるの？」

——噂をすれば、である。

ラッキークローバー最強の北崎が今、再び巧たちの前に立ち塞がった。

「北崎……！」

「やあ……あれを喰らってまだ生きてたんだ？……それじゃあ今度は……」

身構えて北崎を睨みつける巧たちと、彼らが生きていた事に口だけでも驚いている様子の北崎。

そう言った彼はデルタドライバーを腰に巻き——

「っ……！」

「しっかりと殺してあげなきゃね。……変身」

S t a n d i n g
b y
C o m p l e t e

——デルタへの変身を遂げた。

邪悪の化身とも言つべき、白き魔人に。

「フフフ……」

手を合わせながらゆつくりと歩み寄ってくるデルタ。

彼から溢れ出る狂気に包まれた彼女たちが身動きできなくなりそうになった時――

「うおらあああああつ!!」

「巧っ!?!」

単身、ウルフォルフェノクとなった巧がデルタに立ち向かっていった。

そしてデルタに掴みかかったウルフォルフェノクの影が巧の形になると、口を開いた。

「俺が時間を稼ぐ!お前らは先に逃げる!!」

「巧!それは――」

「早くしろっ!――うおっ!!」

慧音の言葉を遮るように怒鳴ったウルフォルフェノクはデルタに投げ飛ばされ、地面に叩きつけられた。

そんな彼を前に慧音は――いや、彼女だけではない。白蓮も耕一も互いを見つめあい――決断した。

「……すまない、巧……」

「私たちは――」

「――そいつから逃げるわけにはいかないんだ!!」

その言葉と共に慧音と白蓮は弾幕を、シュライクオルフェノクに変化した耕一は槍を放つ。

それらはウルフォルフェノクに迫ろうとしていたデルタの背中に吸い込まれ、彼の身体を大きく仰け反らせた。

その隙にシュライクオルフェノクはデルタに掴みかかって取っ組み合い、慧音はウルフォルフェノクに駆け寄って彼の身体を支え起こした。

「お前ら……！」

「悪いな、巧。……しかし、奴は私や耕一にとっての『壁』なんだ。

奴との因縁がある限り、私たちはあの日から前に進めない。

……………何となくだが、そんな

気がするんだ」

慧音がそう言い終わるとほぼ同時にデルタに突き飛ばされたシュライクオルフェノクが彼らの下に転がり、体勢を直しながら言葉を発した。

「そういうこつた。あの二週間前から俺は前に進めてない、進んだつもりになってたのがオルフェノクになってはつきりとわかったんだ。

……だから、俺はこいつとの呪縛を断って、前に進み始める！」

デルタを睨みつけながら、雄々しくそう叫ぶシュライクオルフェノク。

二週間前、北崎によって親友の良平を喪った耕一。

あれ以来気丈にふるまおうとしても、彼の心には良平を殺したことによる憎悪と圧倒的な力による恐怖心が燻っていた。

そんな負の心を秘かに抱えたままオルフェノクとなり、その結果『

声』に付け入る暇を与えてしまったのだと、今ならわかる。

「……たつく、仕方ねえな」

そう言ったウルフオルフェノクは慧音の支えで立ち上がり、彼女らに背を向けながら続けて言った。

「死ぬなよ」

「「応っ！！」」

力強く答え、彼ら三人はデルタに向かって駆け出した。

「……いいよ、そこまで死にたいんだったら……」

……全員捻り潰してやるよ」

——そして、デルタは地の底に響くような低い声色で三人を迎え撃った。

「——これで、大丈夫。灰化は止めたから、数日もすれば腕は元に戻る筈よ」

一方、白蓮は右腕が灰化した小傘の手当てを行っていた。彼女の魔法により小傘の腕の灰化の進行は食い止められ、穏やかな表情で眠りについていた。

「……あいつら、何でああにまでなつて戦うんだろ」

そう呟くは、三人とデルタの戦いを見つめていたぬえ。

その視線の先では三対一であるにも関わらず全く遅れを見せないデルタの姿があった。

三対一でようやく互角になれた強敵、デルタ。その実力を察するのは想像するに難くない。

そんな相手に勇んで立ち向かっていく巧たち。ぬえにはそれがわからない。

彼女にとって、力の差が絶望的な相手には挑むよりも逃げるなりして戦いを避ける方が賢明な判断に思える。事実、彼女はそうやって生きてきた。

いや、彼女だけではない。妖怪も妖精も動物も人間も、皆そうやって生きているのだから。

だから、ぬえには巧たちがわからない。

あのような恐ろしい狂気の塊を前に逃げる事を選択せず、戦いを挑む巧たちが。

「皆、きっと引き下がれないのよ」

答えたのは白蓮だった。彼女もまた、険しい顔つきで戦いを見つめる。

三人にはそれぞれ引き下がれない理由があった。巧は同胞のツケを、6年前から続いているラッキークローバーとの因縁に決着をつけるため。

慧音と耕一は良平を殺した張本人である北崎の呪縛を断ち切り、前に進むため。

そしてそれは、目の前で良平を失った白蓮も同じであった。

「貴女は小傘を守るためにここまで逃げてきたのでしょうか？彼らも同じなのよ」

「…そういうもの、なのかな」

「ええ。」

…貴女は小傘の傍にいてあげて」

そう続けて告げた白蓮は彼らに加勢すべく、駆け出そうとした時――

「…………あら？それは…」

ぬえの腕の中にある『それ』の存在に気付いた。

「——うらああっ!!」

雄叫びと共に一瞬で距離を詰め、デルタに蹴りと拳を繰り出している。ウルフォルフェノク。

対するデルタはそれらを焦ることなく正確に受け、自らの身を守っている。

ウルフォルフェノクの戦闘スタイルは素早い身のこなしを活かした高速戦闘である。その攻撃を的確に防いでいくのは流石デルタ——いや北崎であると言っべきか。

「…もう。しつこい、なあっ!」

やがてデルタはウルフォルフェノクの拳を完全に受け止めてその動きを止めたことにより、両者は鰐迫り合いの姿勢となる。

二人は互いを押し返すべく、ぎりぎりと力を入れていく。鰐迫り合いが泥沼に発展していきそうになった時——

「どらあああっ!!」

木の上より、槍を携えたシュライクオルフェノクが急降下してきた。それと同時に一気に全身の力を抜いたウルフォルフェノクはすり抜ける様にデルタから離れ、力が空回りする形で前のめりになったデルタはそのまま前転してその場から離れる。

直後、デルタがいた場所にシュライクオルフェノクの槍が突き刺さる。後一瞬遅ければデルタの脳天に突き刺さっていただろう。

そしてデルタムーバーを引き抜いたデルタはシュライクオルフェノクに向けてその引き金を引く。

シュライクオルフェノクは槍を回転させるなりしてその弾丸を防ぐ

ものの、余りの乱射を前に動きを封じられてしまっていた。

——国符『三種の神器 剣』

しかしそれを見逃す慧音ではない。

彼女はスperlカードを発動させると剣を模った弾幕をデルタに向けて集中砲火させ、デルタの注意を自分に逸らす。

その際にシュライクオルフェノクはデルタの視界から離脱。慧音にデルタの牙が向く前にウルフォルフェノクが弾幕の隙間を縫って割って入り、再び互いの拳を打ち合い始める。

（……改めて思うが奴は強い。三人がかりで一度も決定打を入れられないとは……！）

それを見つめる慧音の表情は険しい。

先程から互角の——少しこちらが押しているほどの戦いであるというのに、デルタに決定打を入れる事は全くなかった。

何度も追い詰めようとしても、その度にデルタはその類稀なる戦闘センスで危機を回避する。

巧から聞いていた『ラッキークローバー最強』の実力を、慧音は今改めて実感していた。

「調子に…乗るなあっ……！」

その叫びと共にデルタはウルフォルフェノクの腕を鷲掴みし、その身体を投げ飛ばす。

地面に叩きつめられたウルフォルフェノクは急いで体勢を立て直すと、その目前にはデルタームーバーの銃口を向けるデルタの姿があった。

（しまつ——！！）

「巧——！」

「巧サン——！」

それを目にした慧音は弾幕を、シュライクオルフェノクは槍を放とうとする。

——しかし、どちらもデルタムーバーの銃口が火を噴くまでには間に合わないだろう。距離が離れすぎていた。

そして、デルタがその引き金を引こうとした時——

——『聖尼公のエア巻物』

宣言と共にデルタの身体に弾幕でできた巻物が何重にも巻き付き——

「うわあああつ——！」

デルタを浮かび上がらせ、彼らから離れた場所に大きく投げ飛ばした。

そして、彼女が立ち上がったウルフォルフェノクに駆け寄る。

「大丈夫ですか？乾さん」

——そう、聖白蓮が。

彼女はウルフォルフェノクに駆け寄ると、腕の中にある『ある物』を渡す。

それを見たウルフォルフェノクは外見上の変化は無いものの、大きく目を見開いた。

それは——

「お前…、これは…！」

「ぬえが拾っていたんです。もしかしたらとは思いましたが」

先の戦いで紛失していたファイズギアだった。

ウルフオルフェノクはファイズギアと白蓮に交互に視線を向けると、彼女はそれに応えるように口を開いた。

「…先程から、オルフェノクの力を振るう貴方が辛そうに見えたので…」

言葉が出なかった。

確かにオルフェノクの状態ならファイズの時よりも有利に戦う事ができる。…しかし、やはり自分は心のどこかでその力を使う事を恐れているのかもしれない。

巧にとって、オルフェノクの自分は最大のコンプレックスである。いつ人間の心を失うのかという恐れが知らぬ間に表に出てしまっていたのかもしれない。

——そして、それを見抜いた白蓮は——

「…お前、やっぱりあいつにそっくりだよ」

「乾さん？」

——己の友、木場勇治に似ているのかもしれない。

そう再認識した巧は人間の姿に戻り、ファイズドライバーを腰に巻く。

そしてファイズフォンにコードを入力していく。

S t a n d i n g b y

「礼を言っぜ。——変身!！」

C o m p l e t e

「巧!」

「聖さん!」

フォトンストリームが巧の全身を包み、ファイズへの変身が完了する。

それと同時に慧音とシユライクオルフェノクがファイズと白蓮の隣に並び立ち、デルタが消えていった方向を睨みつける。

今か今かとデルタが現れるのを警戒していたその時——

「——避けるっ!！」

ファイズの怒声と共に横に飛び退く一同。

その直後、彼らがいた場所を凜猛な風が横切つていった。

一瞬遅ければ彼らの身体を跳ね飛ばしていたであろう風。その正体は——

「つままないなあ…。今のは轢かれてくれないと」

デルタが駆る悪魔のマシン、ジェットスライガーであった。

デルタはすぐさまハンドルを切り、ジェットスライガーの矛先をファイズと、彼と一緒に避けた白蓮に向ける。

——どうやら、先の攻撃で目をつけられてしまったらしい。

「やばっ…!」

「乾さん！」

それを認識して身構えたファイズに、宙に浮かび、彼に手をさしのべる白蓮が呼び掛ける。

彼女の意図を読んだファイズが白蓮の手を掴み、それと同時にスペルカードを発動させた。

——超人『聖白蓮』

スペルカードの効力により、白蓮の身体能力が大きく向上されていく。それにより白蓮の動きは素早いものになり、彼女に掴まっているファイズも同様になる。

そして白蓮は不規則に動いてデルタを翻弄し、それと同時にファイズもフォンブラスターをデルタに向けて発砲する。

「うざったい、なあっ——！」

その攻撃に我慢できなくなったデルタは座席のパネルに映っている二人にロックオンマークを入力し、機体の側面を展開させて無数のフォトンミサイルを発射する。

迫りくるフォトンミサイルがファイズと白蓮に襲いかかるうとした時——

——産霊『ファーストピラミッド』

慧音のスペルカードによる弾幕がフォトンミサイルに振りかかり、ファイズ達に届く前に打ち落としていく。

その結果、先の戦いで三人を苦しめたフォトンミサイルはその役割を全うすること無く、その姿を消していった。

「もう、そいつを喰らう訳にはいかないな！」

「この——っ!？」

フォトンミサイルを封じた慧音を睨みつけるデルタ。

その時、背後から何かを突き破る音と共にジェットスライガーの動きがガクンと落ちていく。

振り向いたデルタの視線の先には——

「これ以上、お前の好きにさせるか！」

ジェットスライガーに深々と槍を突き立てるシュライクオルフェノクの姿があった。

火花が散り、コントロール不能になったジェットスライガーを乗り捨てようとデルタが座席を立とうとした時——

E x c e e d c h a r g e

ファイズショットを携え、白蓮に投げられるように飛んできたファイズがデルタにその拳を向ける。

デルタはそれを避けようとするものの、不安定な座席の上では碌に身動きができないままファイズの接近を許してしまう。

そして——

「やああああ——っ!！」

「うわああああっ!！」

ファイズの鉄拳、グランインパクトが咄嗟に腕でガードしたデルタに突き刺さり、その身を大きく打ち飛ばされた。

その衝撃でデルタドライバーが外れ、地面を転がるその姿は北崎に戻っていた。

「く……そおっ……！」

地面に手をつき、こちらを睨みつける北崎。

ファイズ達は警戒を解かないよう、彼との距離をじりじりと詰める。そう、デルタだけが北崎の力ではない。彼にはまだ本来の力——凶悪なオルフェノクとしての力が残っているのだから。

「きいさまらああっ……！」

——そして、雄たけびと共に北崎の体に紋様が浮かび上がり灰色に盛り上がっていく。

そして、その姿は龍を模したオルフェノク、ドラゴンオルフェノク・魔人態へと変化した。

（ついに使つてきやがったか……！）

「……聖、頼みがある」

「え？」

そう思いながらファイズは隣にいた白蓮に小声で話しかけ、あることを頼んだ。

ドラゴンオルフェノクと戦う上で、どうしても彼女の助けが必要な事があったからだ。

—— 本当の戦いは、これからである。

ズシン、とドラゴンオルフェノクが力強く大地を蹴る。その先にはシュライクオルフェノクがいる。

シュライクオルフェノクは槍を構え、ドラゴンオルフェノクの攻撃を受け流そうとする。

そして、距離を詰めたドラゴンオルフェノクがその龍頭を模した手甲を振りかぶり――

「なっ――！」

シュライクオルフェノクの槍を呆気なく叩き折り、その身体を斬りつけた。

デルタの時より段違いなパワーに一瞬気を取られたシュライクオルフェノクにドラゴンオルフェノクの横殴りが襲いかかる。

結果、シュライクオルフェノクは大きく殴り飛ばされ、その姿は耕一に戻っていった。

――これが僅か1〜2秒の出来事であった。

「耕一！……貴様っ！！」

慧音が弾幕を放ち、ドラゴンオルフェノクに吸い込まれていく。

しかしデルタの時にはダメージは無くとも反応はあったのに、今はそれすら見られない。

やがてドラゴンオルフェノクは手甲の先端を青く発光させ、ぼつりと呟いた。

「じゃま」

その言葉と共に、巨大な青いエネルギー弾を慧音に向けて放った。それに大きく目を見開いた慧音は咄嗟に避け、その顔を更に驚愕の色に染める事になる。

――エネルギー弾が着弾した木が、一瞬で灰と化したのだ。

もし避けるのが遅く、あれを喰らっていたと思うとぞっとするような光景であった。

（ラッキークローバー最強とは、こういうことだったのか…！）

慧音は北崎に対する認識を改めていた。

今まで彼女は北崎が最強と言われる訳をデルタの力や、その類稀なる戦闘センスから来るものだと思っていた。

しかし実際は違った。それらはどちらかと言うとおまけみたいなものであり、本当の理由はその余りにも凶悪すぎるオルフェノクの力だったのだ。

「くっ…！」

そんなドラゴンオルフェノクが次に目を付けたのはファイズだった。ファイズはドラゴンオルフェノクの攻撃を辛うじて防いでいくがダメージは完全に流しきれていなかった。そこに白蓮が助太刀に入っていくが、肉体を強化した彼女の攻撃も強固な装甲に包まれたドラゴンオルフェノクに通じる事は無かった。

「——くそっ…！」

「乾さん…！」

やがてドラゴンオルフェノクに殴り飛ばされたファイズは白蓮を巻き込む形で地面を転がり、彼女を無理矢理抱きとめることで彼女へ衝撃が伝わる事を防いだ。

そして地面に膝を着きながらファイズは左腕のファイズアクセルからアクセルメモリーを抜き取り、立ち上がる的同时にファイズフォーンへ装填した。

C o m p l e t e

フルメタルラングが展開、フォトンストリームは銀色のシルバーストリームに、そして複眼——アルティメットファイnderが真紅になることでアクセルフォームへの変身が完了する。

すかさずファイズショットを構え、ファイズアクセルのスタータースイッチを押す。

S t a r t u p

アクセルモードとなり、超加速の世界に突入したファイズ。

瞬く間にドラゴンオルフェノクとの距離を詰め、その鉄拳を振るおうとする。

しかし——

「ぐあっ——」

その拳は届く事無く、逆に殴り返されてしまう。

しかもそれだけでは終わらず、拳、肘打ち、蹴りの嵐が次々とファイズを襲う。

——いや、ファイズだけではない。慧音も白蓮もその嵐に為す術もなく晒されていく。

辛うじてファイズが視界に捉えたのはアクセルフォーム以上の速さで動く、装甲を脱ぎ捨てて一回りスマートになったドラゴンオルフェノクの姿だった。

——ドラゴンオルフェノク・龍人態。

魔人態の装甲を脱ぎ捨てる事で現れる、ドラゴンオルフェノクのもう一つの姿。パワーと防御力では劣るものの、最大の武器はアクセルフォームすらも凌ぐ恐るべき速さであった。

ファイズは、ドラゴンオルフェノクの猛攻に打ち勝つ術を持っていなかった。

Time out——Reformation

「くっ！！……慧音、聖……！」

——やがて、アクセルモードの制限時間が切れると同時にノーマルフォームに戻ったファイズは地面に叩きつけられた。視線を動かせば、そこにはファイズと同じ様に叩き伏せられた慧音と白蓮の姿があった。

——そう、五体満足で。

「おかしいなあ……何で灰になってないのかなあ……？」

そう不思議そうに呟くのは、魔人態に戻ったドラゴンオルフェノク。彼の言う通り、触れられたにも関わらず慧音と白蓮は灰化していなかったのだ。

彼女たちが灰化しなかった理由、それは巧が白蓮に頼んでいたのだ。『白蓮と慧音の身体に魔法で防御膜を張るように』と。巧が一番恐れたのは北崎の灰化能力だった。オルフェノクである巧や耕一は灰化の影響を微々たるものしか受けないが、慧音や白蓮はそうはいかない。

人間の身体を持つ慧音は勿論、妖怪でさえ灰化の影響を大きく受けるようでは白蓮も只では済まない。

そこで巧は彼女たちが灰化しないように、二人の身体を防御膜で包むように白蓮に頼んでいたのだ。そうなれば肉体に影響する魔法は白蓮の十八番である。身を守る防御膜を張る事は容易であった。

「まあいいや。誰もぼくには勝てないんだから」

そう言いながらドラゴンオルフェノクは倒れる慧音の下へ歩んでいく。

それを見たファイズと白蓮は瞬時に悟った。直接手に掛けるつもりなのだ。

慧音を狙ったのはドラゴンオルフェノクの単なる気まぐれなのだろう。その足取りはとても軽い物だった。

「やめろ、北崎……！」

「慧音さん……！」

ファイズと白蓮がそう言うが、二人とも息絶え絶えで身体が思うように動かなかった。

その上、ドラゴンオルフェノクは二人の事を完全に無視していた。

そしてとうとう、ドラゴンオルフェノクは慧音の下に辿り着いてしまった。

「これで今度こそ、バイバイだね」

そう軽く言いながら慧音を一突きで仕留めるべく、手甲を掲げるドラゴンオルフェノク。

白蓮は魔法を唱えようとするが、先程の攻撃で頭を強く打ってしまったのか上手く唱えられない。ファイズはフォンプラスターを撃とうとするが手元が狂ってしまい、狙いが定められない。

ドラゴンオルフェノクはそんな二人を嘲笑うかの如く、爪が光るその手甲を無慈悲に振り下ろし――

「——やめろっ!!」

——力強く、生気に溢れた怒号によってぴたりと止められることになった。

その声の主にドラゴンオルフェノクも、倒れ伏す慧音も白蓮も、そしてファイズも視線を向ける。

そこには——

「耕、——!!」

「お前、それは……!!」

服を自らの血で赤く濡らし、力強くドラゴンオルフェノクを睨みつける耕一の姿があった。

——そしてその腰には、デルタドライバーが巻かれていた。

「……変、身……!!」

S t a n d i n g b y

そして耕一はデルタフォンをデルタドライバーに差し込み――

Complete

電子音声と共に、耕一の身体を青白いブライトストリームが包んでいく。

光が一際強く輝き、収まっていくとそこには一人の戦士が佇んでいた。

魔人などではなく、守りたい者の為に戦う戦士――デルタが。

「――うおおおおおっ!!」

自らを鼓舞するかの如く叫び、駆け出していくデルタ。

ドラゴンオルフェノクへ掴みかかるとそのまま彼の身体を押し出していき、我武者羅に拳を打ちつけていく。

「いたい…なあっ!!」

お返しと言わんばかりに手甲を振るって殴りつけるドラゴンオルフェノクだが、よろめいても倒れようとしないデルタは拳を振るっていく事を止めなかった。

「…聖、俺の身体を動かせるようにしてくれ!」

その光景を見ていたファイズは白蓮にそう叫んだ。

しかしそれに対して白蓮は険しい表情で口を開いていく。

「そんな……!今の状態でそんなことをしたら…!」

彼女が危惧するのはファイズの身体だった。

今ファイズはドラゴンオルフェノクの攻撃により、身動きが碌に取れないほど負傷している。そんな身体を動かせるようにするには強力な魔法を唱えなければならない。身体関係の魔法は対象の状態に合わせた物を使用しなければならぬ。もしも身に合わないような強力な魔法で身体を無理矢理動かせるようにすればどうなるか。

——後に待っているのは、強烈なりバウンドである。

「今しかねえんだよっ！頼む、やってくれ！」

それでもファイズ——巧は退こうとしない。

彼にとつて、今日の前で戦っている者を助ける事さえできればそれでいい。そのためならバウンドでも何でも受け入れる気であるのだ。

白蓮はそんなファイズの気持ちを察したのか、観念したような表情で頷いた。

「……………わかりました。少しお時間をください」

「きみ、いい加減ウザイよ」

ドラゴンオルフェノクへ拳を入れ続けていたデルタ。

格下の存在に攻撃を受け続けているという現状に耐えられなくなつたのか、ドラゴンオルフェノクはデルタの拳を弾くとその首を掴み、吊るしあげた。

「ぐっつ…！」

「ぼくとここまで戦えたのは誉めてあげるよ。でも、これでおしまい」

そう言いながらデルタの腹部に手甲をかざすドラゴンオルフェノク。串刺しにするつもりなのだろう。

それに気付いたデルタは逃れようとがくがドラゴンオルフェノクの力は強く、拘束から逃れられる気配は無い。

（くっ…そお……！）

そして、ドラゴンオルフェノクの手甲がデルタに突き刺さろうとした時――

――ズガガガガガガッ！！

「っ！…なんだあ……？」

ドラゴンオルフェノクに無数の銃弾が撃ち込まれ、その身がたじろいだ。

ドラゴンオルフェノクがそちらに視線を向けると――

――そこには、半壊の状態に至る所から煙と火花を散らしながらも、バスターホイルを構えるオートバジンの姿があった。

「——っ！ふあ、ファイア！」

B u r s t m o d e

ドラゴンオルフェノクの注意がそれた隙にデルタは右腰のデルタムーバーを抜き、電子音声が響くと同時にその銃口をドラゴンオルフェノクに向けた。

それに気付いたドラゴンオルフェノクがデルタの首を絞めようとするが、一瞬早くその引き金は引かれた。

「うわあああっ！！！」

零距离でデルタムーバーの弾丸を撃ち込まれてデルタを掴んでいた手を離し、後ろに仰け反るドラゴンオルフェノク。

デルタは十分に距離を離すと傍らに立つオートバジンに視線を向け、言葉を発した。

「助かったよ。さんきゅな」

V e e c l e m o d e

オートバジンの肩をぽんと軽くたたくと眼部センサーをピコピコと鳴らし、ビークルモードに変形するとそのまま動かなくなった。

——巧たちを助けるためにジェットスライガーを引きつけ、半壊したボディでここまで駆けつけたのだ。恐らく限界が来てしまったのだろう。

「耕一！無事か！」

「巧サン！？あんた大丈夫なのかよ！」

そこにファイズが駆け付け、デルタが驚きの声をあげる。

そんなデルタにファイズは何でも無いかのように言葉を発する。

「気にすんな。大した事ねえよ」

実の所、そうではない。

今のファイズは白蓮の魔法によって無理矢理身体を動かしているに過ぎない。実際は碌に動けないほどの重傷であるのだ。

そう言いながら、ファイズはちらりとオートバジンの見つめる。傷ついた身体を押してここまで駆けつけ、仲間を救ってくれた相棒を。

(…ありがとな。ゆっくり休め)

ファイズの気持ちを讀んだのか、オートバジンのライトが一瞬チカリと灯ったかのように見えた。

そこには確かに、機械であるオートバジンの意志が感じられた。

——そして、並び立つ二人のベルトの戦士、ファイズとデルタ。その視線の先にはこちらに殺気を放つドラゴンオルフェノク。

ファイズは軽くスナップし、デルタは両拳を握りしめ、構える。

「——行くぞー!!」

「おうっ!!」

同時に駆け出し、ドラゴンオルフェノクに立ち向かっていくファイズとデルタ。

デルタが腕を振るうとドラゴンオルフェノクは屈んでそれを避け、そこにファイズが蹴りを入れる事でその身体を仰け反らせる。

ドラゴンオルフェノクは手甲による突きを繰り出すが、ファイズとデルタはそれを受け流すように弾き、カウンターの拳を同時に繰り出す。

ドラゴンオルフェノクもやられてばかりではなく、二人に攻撃を命中させていくが、互いが互いをフォローすることでダメージを最小に抑えていた。

これまで圧倒していたドラゴンオルフェノクが二人のベルトの戦士を前に押され始め、今や互角の戦いを繰り広げていた。

そんな攻防戦を繰り広げている中、ドラゴンオルフェノクの頭部の巨大な角が紫電を帯び始めていた。

——そしてそれを、一気に放出した。

「うわっ!!」

「ぐあっ!!」

ドラゴンオルフェノクによる高圧電流を喰らったことにより大きく身を投げ出され、火花を散らしながら地面を転がるファイズとデルタ。

膝をつき、立ち上がろうとする彼らの前には、交差した腕を青く発光させてこちらに放とうとするドラゴンオルフェノクの姿があった。発光の強さから見て先程慧音に放った物より強力なエネルギー弾である事が窺える。

そして二人が立ち上がると同時にエネルギー弾が放たれようとしたその時——

「うわっ！なんだこれ！？」

どう言葉にすればよいのかわからない、弾幕のような『何か』がドラゴンオルフェノクに一齐に襲いかかった。

『何か』の奇襲により溜めていたエネルギーが宙に散り、自らの邪魔をした相手に視線を向けるドラゴンオルフェノク。

そこには――

「小傘と白蓮をこんな目に合わせて！好きにはさせないよっ！」

先程まで自分が追いかけていた相手、封獣ぬえがいた。

思わぬ外野の乱入に気を悪くしたドラゴンオルフェノクが彼女を排除しようと脚を踏み出したその時。

R e a d y

R e a d y

完全に体勢を立て直したファイズとデルタがそれぞれのツールにミッションメモリーを装填する。

ファイズはファイズポインターに装填してポインターモードに。

デルタはデルタムーバーに装填してポインターモードに。

そしてファイズはファイズフォンのEnterキーを押し、デルタは口元にデルタムーバーを運び、叫ぶ。

E x c e e d c h a r g e

「チェック！！」

E x c e e d c h a r g e

ファイズの右足に、デルタの銃口に、フォトンブラッドが送りこま

れていく。

それに気付いたドラゴンオルフェノクが龍人態になるより一瞬早く

「うつ！！」

デルタから放たれた薄紫色のポインティングマークが、遅れて宙に舞ったファイズから放たれた紅いポインティングマークが無防備になったドラゴンオルフェノクの身体を拘束する。

そして、デルタもファイズと同じ様に跳び上がり――

「やああああーっ！！」

「だああああーっ！！」

――ファイズのクリムゾンスマッシュが。

――デルタのルシファーズハンマーが。

二人の戦士の必殺キックがドラゴンオルフェノクに深々と突き刺さり、二人の姿がその背後に現れると同時にその身体に紅いφの紋章と薄紫の△の紋章が刻まれた。

本来ならここで青い炎と赤い炎に包まれて灰に還っていくのだが――

「うつあゝあゝあゝあゝっ！！」

あろうことかドラゴンオルフェノクは二つの紋章を強引に破壊し、炎を消してしまったのだ。

余りに規格外なドラゴンオルフェノクの力技に二人は仮面の下で顔を青くし、どう出るのか窺っている――

「……………」
「……逃げた、か」

脱ぎ捨てられた魔人態の装甲を残し、ドラゴンオルフェノクの姿は消えていた。

恐らく龍人態となり、この場から退いたのだろう。
辺りには、静寂が包まれていた。

「…生きてるんだな、俺達」
「おう」

ぽつりとそう呟いたのはデルタ。それにファイズは生返事と言わんばかりに返す。

「あのバケモノから、今度は皆を守れたんだよな」
「おう」

二週間前は良平を救えなかった。でも今は違う。

慧音も白蓮も、ぬえと小傘、耕一に巧も皆ボロボロだが生きている。

——そう、皆生きているのだ。

「——ありがとう。乾サン」
「……おう」

そう言いながらファイズとデルタ、二人の戦士は互いの拳をコツンと合わせた。

その直後――

(……………お?)

――身体の限界を迎え、ファイズの意識が闇に落ちた。

「俺が……！俺がやられただとおっ！！」

――ラッキークローバーのアジト。

その廊下に壁に拳を打ちつけ、その表情を憤怒で歪ませる北崎がいた。

彼はこれまで、自分の力に絶対的な自信を持っていた。自分はこの世界で一番強い、自分が負ける筈がない、そう思っていたのだ。しかし今、彼は格下だと思っていた相手に深手を負われ、こうして無様な姿を晒している。

そのような事実が、北崎には認められなかったのだ。

「――随分と手痛くやられたようだな、北崎」

そんな彼に話しかける存在がいた。

廊下の闇から浮き出るように現れ、黒い翼の生えた背中を壁に預けている青年。

四方院京が、感情のこもらない瞳で北崎を見つめていた。

「——っ！うああっ！！」

そんな京の目が癪に障ったのか、彼の顔を殴りつける北崎。頬が腫れ、灰がこぼれても表情を変えようとしない京を前に北崎の不満は更に積もるばかりだった。彼を痛めつけても苛々を解消できないと悟ったのか、その場から逃げるように離れていく北崎。そうして去っていく彼の背中に京は声を掛けた。

「——計画が最終段階に入るそうだ。後で確認しておけ」

北崎は何も答えない。

京もそれ以上何も言う事は無く、自らも闇の中に消えていった。

「……何をやっているの、輝夜」
「あ、永林」

——永遠亭。

呆れたような顔の永林の目の前には廊下のだ真ん中で仰向けに寝転がる姫、蓬萊山輝夜の姿があった。

仮にも王族がこんな所で寝転がるなど言いたくなかった永林であったが、今に始まった事ではないし、のんびりな幻想郷らしいと言えば幻想郷らしいので止めた。

「あ、その顔。こんな所で寝るのかなと言いたそうな顔ね？でもこれには海より深い事情があるのよ。聞いてくれる？」

「はいはい」

どうせまた何か新しい暇潰しを考えただけなのだろうと思った永林は輝夜を部屋まで引きずりつつ、新しい薬の調合法でも考えながら彼女の話に耳を傾ける事にした。

そんな永林の考えなど露知らず、輝夜は口を開いていく。

「盆栽の手入れをしていたらね、青い蝶がいたのよ。竹林で蝶なんて珍しいから捕まえて標本にしようと思ったの。」

で、捕まえたら全身の力が一気に抜けちゃって――

――能力が使えなくなっちゃった」

「はいは……………」

……………は？」

気の抜けた声と共に、八意永林の思考が数秒間停止したのであった。

「――以上が報告になります」
「そう、御苦労さま」

――????

幻想郷にあるようで幻想郷に無い家屋。
その一角に襖の向こうの『彼女』に膝を着く、金色の九尾を持った
一人の女性がいた。

――名は八雲藍。

この幻想郷を創り上げた『賢者』の式である。

「……奴らが動くとなると、そろそろ彼と会う必要があるわね」
「彼……ファイズのことでしょうか」

『彼女』の言葉に藍はそう言葉に紡ぐ。
その脳裏に浮かぶは、二か月前に幻想郷を訪れた一人の戦士。

――『彼女』が呼び寄せた、異界の戦士。

「ええ、彼には全てを話さなければいけないもの」

そう言いながら襖に歩み寄り、その戸を開く『彼女』。

そんな『彼女』に藍は跪く。

『彼女』は鮮やかな金髪をなびかせ、少女のような笑みで藍に語り
かける。

「お願いね、藍」

「畏まりました。紫様」

——『彼女』の名は、八雲紫。

幻想郷を創り上げた、『妖怪の賢者』である。

第18話 紅きΦ、白きΔ（後書き）

以上、ドラゴン初披露兼、耕一デルタ変身の第18話でした。

やっと…やっと耕一を変身させられました。このシーンを考えてからこうして実際に出すまでどれほどの時間がかかったことやら…！デルタを出すにあたって誰を変身させるかでしたが、東方キャラにはなるべくベルトではなく自分の力で戦ってほしかったこともあり、こうしてオリキャラの耕一に変身させることにしました。

ちなみに耕一はオルフェノクになったことにより、ベルトに適合できた…という設定です。その辺は大目に見てください。（汗）あと以前の感想で耕一がデルタになると予想したフジさん、おめでとうございます。影山さんがシャンパンを送ったそうなので楽しみにしててください。

さて次回以降ですが、色々と核心に入り始める予定です。

それに伴って今回の小傘のように主に『物理的に』苦しめられる展開が出てくると思いますが、どうかご容赦ください。

それでもお付き合いしてくださいのならば、応援よろす「僕と契約して、魔法少女になつてよ！」

……。

すいません、なんか今変なのが沸いて出ました。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第19話 胎動する闇（前書き）

皆さん、お久しぶりでございます。

長らく留守にして申し訳ありませんでした。

これと言つのも、リアルが忙しかった＋モチベーションが上がらないという悪循環に陥ってしまったのが原因でございます。

それもあり、今回は時間がかかったくせにいつもより短いという結果になってしまったことをお詫び申し上げます。

長くなりましたが、それでは本編へどうぞ。

第19話 胎動する闇

「傷の具合は大丈夫か？耕一」

「はい、なんとか」

——永遠亭。

その一室に、患者用の布団の上で座り込む耕一と付き添う慧音、そしてそんな二人の傍らで眠り込む巧の姿があった。

——北崎——ドラゴンオルフェノクとの死闘から3時間後。

あれから彼らは互いを支えつつ、白蓮一人では手に余る傷を癒すためここ永遠亭に訪れていた。

交友関係故によく訪れる慧音の案内の下、永遠亭に辿り着いた一行はすぐさま永林や鈴仙によって担ぎ込まれた。

その結果、比較的傷の軽かった慧音と白蓮、そしてほぼ無傷のぬえは軽い処置で即日退院。身体に鞭を打って激闘を繰り広げた耕一と右腕を失った小傘、そして魔法のリバウンドで倒れた巧の三人は永林の薬の効果を持って尚、一日ここで安静にするようになった。

また、半壊したオートバジンは突如現れたにとりによって回収された。嘆きながら工房に連れて帰っていったが何故あの場所にやってきたのか慧音は疑問に思っていた。

それがオートバジンにこっそり付けた発信機のせいだと気づくのはもう少し後である。

——そして、今に至る。

「そついや、巧サンの具合はどうだったんですか？今はもう寝てるみたいですけど」

「ああ、それは――」

「全身傷だらけ、筋はズタズタで全身複雑骨折一步手前の重傷だったわよ」

慧音の言葉を遮り、部屋に入ってきたのは永林だった。

彼女は眠る巧を呆れたような目で見ながら、言葉を紡いでいく。

「久しぶりに見たと思ったたらこんなに重傷で…、彼は怪我でもしないところに来れないのかしら」

「複雑骨折…、それってかなりやばいんじゃない？」

永林の言葉に顔を青くしながらそう呟く耕一。

知り合いがそんな重傷中の重傷になっていれば思わず引いてしまうのも無理は無い。

「心配しなくても大丈夫よ。一晩安静にしていれば明日には動けるようになるから」

「あ、そうなんですか…」

が、永林の手に掛かれればそれほどの怪我でも治すことは造作も無い。元より持っていた医療の腕に加え、『あらゆる薬を作る程度の能力』による治療薬の作製。

かつて蓬莱の薬を作った腕は伊達ではなかった。

「…やはりいつ見ても八意殿の腕は素晴らしいですね。感謝します」
「どういたしまして。…それで、これからどうするのかしら？」

「そうですね…。できればここで二人のことを見ていきたいのですが…」

そう言いながらちらりと耕一に視線を移す慧音。それに気付いた耕一ははにかむように口を開いた。

「俺たちの事は大丈夫ですよ。明日は寺子屋もあるだろうし、先生は先に帰ってください」

「…だそうなので、今日のところはお暇させていただきます」

明日の寺子屋の準備と、里の皆に自分や耕一の無事を伝える事、その他諸々。

里の守護者たる慧音はやらねばならない事が沢山あるのだ。幾ら知人が怪我を負ったからと言ってその役目をおいそれにしてはならない。

「わかったわ。それじゃあ田宮君…だったかしら？その彼が起きたら一緒に私の所に来て頂戴。話があるわ」

「え？わ、わかりました」

そう言い残し、永林は部屋を後にした。

後に残された耕一と慧音は眠る巧の姿を見つめ、やがて口を開いていった。

「…この人、何でもここまでボロボロになってまで戦うんでしょうね」
「…巧自身が話してくれない限り、私にはわからない。しかし…」
「しかし？」

「巧には裏表がない。良くも悪くも、な。」

だから理由はどうあれ、人を守ろうとする姿勢には偽り

は無いのだろう」

——翌日。人里、稗田邸

「……そうですか、耕一さんは無事だったんですね」

「ええ、明日にでもなれば帰って来る事でしょう」

その縁側で茶をお共に話をする慧音と阿求の姿があった。

二人が——正しくは慧音が語っている事は昨日までの出来事。

行方不明になっていた耕一が見つかり、オルフェノクと戦闘になった事。

白蓮達の協力もあつて退けたものの、耕一と偶然出くわした小傘、そして巧が永遠亭で一晩安静になった事を。

しかし耕一がオルフェノクになったこと、巧がオルフェノクであった事は口にしていなかった。

本人がいけない間にその秘密を勝手に漏らすなど、真面目な慧音にとつて忌み嫌うものであった。

巧に至つてはオルフェノクである事を周囲に知られたくないのだろう。だから何時の日か巧自身が打ち明けるまで言おうとはしなかった。

（乾さん…また無理しちゃったのかな…）

そして慧音の話聞いた阿求は耕一の無事を喜ぶ反面、彼と共に倒れた巧の身を案じていた。

耕一の無事を何よりも喜ぶべき筈なのに頭の中には傷つく巧の姿ばかりが浮かび、そのせいあつてか素直に喜べずにいた。それから阿求の頭に浮かんでくるのは無愛想だったり不機嫌だったり滅多に見せない笑顔など様々な表情の巧であつた。

そうして次々と浮かんでくる巧の姿に彼女の頭がぼうつとなりかけた時――

「ところで稗田殿」

「ひゃいつ!？」

横合いから慧音が話しかけてきた。

ぼうつとしかけた所を呼び戻されたため、冷水に当たったかのごとく驚いた阿求は思わず可愛らしい悲鳴を上げてしまった。

そんな彼女をよそに慧音は訝しげな表情で言葉を発していく。

「…何故妹紅はあんなに機嫌が悪そうなのでしょう」

彼女らの視線の先には部屋の中で寝転がり、不機嫌ですと言わんばかりのオーラを発している藤原妹紅の姿があつた。

「…それが、昨夜ですね……」

――昨夜、深夜零時――

殆ど月1回の恒例となつた妹紅と輝夜の殺しても死なない殺し合い。昨夜もそれをするべく竹林の中で輝夜を待ち続ける妹紅であつたが

―― 15分後

「……………」

輝夜は来ない。とは言えこのくらい遅れるのはよくある事であった。

―― 30分後

「……まだか？」

未だ来ない。ここまで遅いのは稀である。

―― 1時間後

「……遅い」

遅い。いくらなんでも遅すぎである。

―― 2時間後

「八目鰻食べる？奢ってあげるよ」

「いいの？さんきゅ」

通りすがりの夜雀から八目鰻の蒲焼を貰った。美味しかった。

―― 3時間後

「……………」

余りに退屈なので座禅を組んでみる。飄々とした輝夜ばかりが浮かんで全く無心になれなかった。

―― 4時間後

「……………」

寝ていた。

―― 6時間後、朝

こけー、こっこっこ

「……かあぐうぐやあぐ!!」

怒りの炎を滾らせる少女の姿がそこにあったとき。

「……と言う事があつたらしくて……」

「そ、そうですか」

阿求にそう返す慧音の顔はどこか引きつりつつも、「ああまたか」と言つたような表情をしていた。

藤原妹紅は不老不死である。

その詳しい経緯は省くが、そのことに深く関わっている蓬萊山輝夜のことを彼女は深く恨んでいる。そんなこともあり妹紅と輝夜は互いを無限に殺し合う、血で血を洗う関係になっている。

……なっている筈、なのだが。

どうもここ最近はそれも緩くなっているきらいもある。

最近では永遠亭の妖怪兎を送り届けたり、小さい事で張り合うなど、他人から見れば「喧嘩するけど実は仲いいんじゃないか?」といったような感じである。

殺し合うという関係自体は続いているものの、それも月一回の恒例と両者とその関係者の中で暗黙の了解になっている。

さて、妹紅は輝夜のことを敵視しているわけだが、輝夜は妹紅のことをそれほど敵視している訳ではない。というよりもどこかからかい甲斐のある相手として見ている節がある。

そんなわけで妹紅は輝夜によくからかわれて空回りし、今回もそのような目に会ったという訳だろう。

「ちょっと、さつきから好き勝手言わないでくれるか。私は別にあいつが来なかった事に怒ってる訳じゃない。

ただ今回もあいつをぎゃふんと言わせられなかったことが悔しいだけだからな！」

そう言うは阿求たちの話に納得がいかなかった様子の妹紅。ただその表情はむきになる子どものものであり、慧音と阿求は互いに生温かい笑みを浮かべていた。

「…大体さつきから私のことを好きに言ってるけどさ、阿求だってそうそう笑える事でもないだろ」

「え、私ですか？」

ふとそう切り出した妹紅にきよとした阿求。

妹紅はそんな阿求を見ながらにやにやとした表情を隠そうとせず口を開いた。

「阿求ってさ——」

——巧のこと、好きだろ？」

「……………え？」

にやにやとする妹紅に、「おお」と呟く慧音。
そして肝心の阿求はきょとんとして数秒後――

「――っ！」

ボンッと、茹でダコのように顔が真っ赤になった。

そのまま彼女はあわわと慌てたまま、口を開いていく。

「えっ、ちょっ、も、妹紅さん!？」

「ふふん、何年女やつてると思ってるのさ。さっきの様子見てりゃバレバレだったの」

頭から湯気を発しながら慌てる阿求に、にやにやとした笑みを浮かべる妹紅。

得意げにそう言う彼女だったが、そこに慧音が口を挟んだ。

「…その割には浮いた話を聞かないな」

「うっ、うるさいな！」

凶星を突かれ、むきになるようにそう言う妹紅。

阿求はそんな妹紅に言い返すかのように、顔を赤くしたまま口を開いていく。

「そ、そんなことはありませんよ！」

大体、あんな口が悪くて猫舌の人なんか別に何とも――」

「あれ、巧じゃん？随分早かったな――」

「くぁwせdrftgyふじこlp!？」

が、そこで妹紅の発した言葉により、言葉にならない悲鳴を上げる阿求。

顔を更に赤くし、慌てながら出入り口に視線を向ける彼女だったがそこには巧はおるか、人っ子一人の影すらなかった。要するに、嵌められたのである。

「…も、妹紅…さん？」

「いやあ、初々しい反応をどうもありがとう」

舌をペロツと出し、清々しい笑顔でサムズアップをする妹紅。

先程まで不機嫌だった反動もあったせいか、その笑顔の清々しさはより一層輝かしいものになっていた。

嵌められた阿求本人にとっては堪ったものではない上、憎たらしい笑みにしか見えないが。

「で、実際どういうところに惚れたわけ？」

「う、ううう…」

妹紅に詰め寄られ、更に顔を赤くする阿求。

暫くは口を閉ざしていたが、やがて観念したかのようにぼつと口を開いていった。

「……確かに乾さんは無愛想な上に口が悪いです」

「でも本当は優しくて…器が広くて、他の人の事を第一に考えていて…」

「だけど不器用だからそれを相手に上手く伝えられなくて…」

「……そうですね、そんな不器用な優しさに惹かれたって言うか何と言うか…」

「ええと…。こういう時、何て言えばいいか…」

しどろもどろになりながらも言葉を紡いでいく阿求。

その様子に妹紅はにやにやつつも満足そうな笑みを浮かべ、慧音は別の思いで彼女を見つめていた。

（稗田殿は本気、か。

…お前は誰かと付き合うことに引け目を感じていないだろうな？巧）

乾巧はオルフェノクである。

彼はそれにより自分に引け目を感じている。そんな巧が素直に阿求の思いを受け止められるかどうか…。

それに関しては阿求もそうである。

彼女はまだ、巧がオルフェノクである事を知らない。そのことを知った時、阿求は巧を好きでいられるのか…。

——いや、こんなことを考えていても仕方がない。

これは巧と阿求、当人たちの問題なのだ。幾ら心配であるとは言え自分が口を出して良い問題ではないのだ。

慧音に出来るのは信じる事だけである。

上辺や自己嫌悪に囚われる事の無い、二人の心を——。

——稗田阿求の能力、『一度見た物を忘れない程度の能力』
彼女のその力は幻想郷縁起の執筆に役に立ち、幸せな思い出や大事な記録を忘れないでいる事ができる。
しかし、それは同時に——

——恐怖に染まった記憶も忘れられない、と言つことになる。

——同じ頃。永遠亭、庭。

「……さっきのこと、どう思う」
「どつって言われても……、あんまり良くないって事くらいしか……」

その一角で険しい顔をしながら話しあう、巧と耕一の姿があった。

——遡ること、数時間前。

意識を取り戻し、永林の処置のおかげもあつて動けるようになった巧は耕一と共に永林の部屋を訪れていた。

「話があるから」と永林に呼ばれた二人、そして永林の三人は難しい顔で向かい合っていた。

「…どう言つことだ？」

「…そうね、今度はもう少し具体的に話すわ」

そう言いながら永林は三枚の写真を取り出す。

それらは黒を背景に緑や赤い球体が無数に浮かんでいた。

「いい？これが貴方たちぐらいの男性の細胞。普通ならこの緑の——生きている細胞であふれ返っているはずなの」

そう言つて永林が指すは緑色の球体——細胞が無数に浮かんでいる写真。

その写真はほとんど緑の細胞で埋め尽くされており、赤い細胞は数えるほどしかなかった。

「それで、こつちが貴方達の細胞。赤い——死んでいる細胞が多くなっているのよ。」

特に乾巧。貴方の細胞の致死率ははつきり言つて異常よ」

永林が指し出した残り二枚の——巧と耕一の細胞の写真。

耕一の細胞はまだ生きている細胞の方が多いが、死んでいる細胞が目に見えて増えている。

巧に至つては死んでいる細胞が圧倒的な数を占めていた。

「このままだと数年、長くても十数年で貴方達の身体は限界を迎えるわ。」

そうならないように私の方でも力は尽くすけど、記憶に留めておいてね」

そんな会話をしたのが数時間前。

そうして今、二人は自らの身体について話し合っていた。身体に起きた異変と、その原因について。

「俺たちがオルフェノクであることと、何か関係があるのか…？」
「…さあな。でも、無関係ってことは無いだろうな」

心当たりがあるとすれば、オルフェノクである自分達の身体。

覚醒したばかりの耕一は勿論、小さい頃からオルフェノクである巧でさえオルフェノクについて詳しいわけではないのだ。

何せ人間の身体を異形の姿に変えてしまうのである。何か影響が出ても不思議ではない。

…いや、影響が無ければおかしいのだ。

（…待てよ。あれは見間違いじゃなかったのか？）

そこで巧が思い出したのは、一昨日阿求の看病をしている最中に灰が零れ落ちた自分の手。

あれが見間違いでないとすると、ひょっとしてオルフェノクは――

「お二人とも、どうかしました？」

聞き覚えのある声に振り向くと、そこには聖白蓮がいた。

彼女が二人の下に歩み寄ると、そこで耕一が口を開いた。

「ひ、聖さん？どうかしたんですか？」

「小傘が意識を取り戻したので迎えに来たのです。ぬえと一緒に」

「あ、そういうことか……」

白蓮の言葉に納得したように頷く耕一。

聞けば件の少女、多々良小傘は命蓮寺のお世話になっていらっしゃるらしく、最近ではよく寺に寝泊まりするような仲であるらしい。

ちなみに、ぬえも似たような境遇だとか。

「そこで難しい顔をしているお二人を見かけたので声を掛けたのですが……、もしかしてまだ身体の具合が……？」

「ええと……、何て言うか……」

「ま、そんなとこだ。でも八意のやつが何とかするって言ってたし、あんたが気に病む必要はねえよ」

白蓮の問いにどう答えるべきかと悩む耕一の前に口を挟んだのは巧だった。

実は自分達の細胞が崩壊しかけています。ひょっとしたらオルフェノクであることと関係あるかもしれません。

こんなことを正直に言えば人の良い白蓮は何かしらの形で手を貸そうとするだろう。

以前の耕一であれば内容はどうあれすぐに白蓮に相談していただろう。

しかしオルフェノクとなり、力を持つ者としての自覚が生まれ始めた今の彼は他人に——特に自分と面と向かい合った白蓮には余り心配を掛けたくなかった。

それ故に嘘は言っていないが真実は隠している巧の言葉は有難かつ

た。

——自分達を心配してくれている白蓮に罪悪感を抱きながら。

「そうですか……。でも、何かあった時は遠慮なく言ってくださいね。微力ではありますが、力になります。

さて、それでは私はぬえ達の手伝いをするのでこれで——」

「ちょうどいい耕一。お前聖を手伝ってこい」

白蓮の言葉を遮るように突然そう言いだす巧。

巧の言葉に慌て、彼を問い詰めようとした耕一だがあつという間に巧の腕に捕まってしまった。

そして巧は耕一を捕えたまま、白蓮から見えないように彼の耳元で囁いていく。

「ちよつ、巧サンいきなり何を——」

「いいから黙って聞け。お前聖の奴が好きなんだろ？」

「ちよつ！ なななな何な……！」

そう言われ、一瞬で顔を真っ赤にする耕一。

図星であった。確かに自分は以前から白蓮に心惹かれていたし、叶うのなら彼女と親密な仲になりたいと思っていた。

しかし彼女を前にすると緊張で固まってしまい、碌に話せないため中々彼女と話す機会が無かった。今でも前と比べてマシになっているが緊張しているのである。

「だったらあいつとお近づきになるいい機会じゃねえか。

ここで距離を縮めとくんた。応援するぜ」

「そ、そうか？」

……よ、よし。やってやる、やってやるぞ！」

そう言つて決意を固めたかのように白蓮に向き直る耕一。
その間ずっと巧がにやにやしていたことには気づいていない。

「ひ、聖さん！お、俺も手伝います！」

「あら。でも病み上がりの身で無理をしてもらつては……」

「俺なら大丈夫です！いやむしろ手伝わせて下さいお願いします！」

「そ、そうですか？……でしたら荷を纏めるのを手伝ってもらつてもよろしいでしょうか？」

「は、はい！よろこんで！」

耕一の押しに若干引きつつも笑顔を崩さない白蓮と、そんな彼女に顔を赤くしながら付き添つていく耕一。

そんなある意味珍妙な二人の様子を巧は見送っていた。

やがて二人の姿が完全に見えなくなった頃、誰もいない庭の真ん中で巧は静かに口を開いた。

「……そろそろどうだ？出てきやがれ」

「……お見事です。流石はフェイスと言つたところでしょうか」

「よく言うぜ。隠れる気なかつたくせによ」

巧の言葉に応えるように、木陰の中から彼女はスツと現れた。
青い衣に身を包み、鮮やかな金色の髪と九本の尾を持った女性。
その名は——八雲藍。

「お初に御目にかかります。私は紫様の式、八雲藍と申します。

乾巧殿、我が主が貴方をお呼びです。共に来ていただけますか」

「お前が八雲紫つてやつの手下か。俺もそいつには用があるんだ。

…けど話があるならそつちから来やがれ。俺はもうこつちから出向くなんてかつたるいことはお断りだ」

これまで巧に用がある人物のほとんどは自ら赴かず、巧を自分の下へ呼び寄せていた。

そんなやりとりにつんざりしてきたというのもあり、巧の言葉は無意識に挑発的なものになっていた。

そんな巧の言葉に藍は瞳を閉じて静かに首を振り、口を開いた。

「本来ならそうしたいところですがあの方は今、ある病によつて身動きが取れないのです。

…心当たりはありませんか？貴方はそれを白玉楼で目にした筈です」

——病、身動きが取れない、白玉楼。

それらの単語から巧の脳裏に浮かび上がるは敵の罠に落ち、力を失った白玉楼の主。

それが意味する事は——

「…そういうことが。お前の主人もラッキークローバーにしてやられたって訳か」

巧の言葉に藍は何も言わず、ただ頷いて肯定の意を示した。

その顔が少し険しくなったのは、主を守れなかった自分を恥じているのか。いずれにせよ、巧には彼女の本心はわからない。

「…それで？俺に何を話そうってんだ」

「…私たちがこれまで調べた事。」

——ラッキークローバーの目的と奴らがこれから何をするか、貴方がここに来た経緯。

…そして、貴方の身に何が起きているか」

藍の言葉に、巧はぴくりと反応した。

まさかここまで自分が知りたい事を挙げてくるとは思っていなかった。

この話が嘘でなければ、例え罠に落ちたとしても妖怪の賢者の名は伊達ではないということになるのだろうか。

どうやったのかは知らないが、ここまで情報を集めようとは。

「知りたいのであれば私と共に来てください。紫様がお話しいたします」

そう言いながら手を差し出す藍。来るのであれば手を掴め、ということだろう。

差し出された手を前に巧は舌打ちを打ちつつも口を開いた。

「…たつく、断りようがねえじゃねえか。」

「良いぜ、連れて行け。八雲紫って奴の所に」

「——あれ、巧サン？」

数分後。

白蓮の手伝いを終え、戻ってきた耕一の目の前にあったのは人っ子一人いない庭であり、乾巧の姿は何処にも無かった。

「——時は満ちた」

暗く、広い空間の中で影山冴子が囁く。

彼女と共に円を描くように琢磨逸郎が、四方院京が、北崎がいた。彼ら四人の足元にはオルフェノクの紋章が描かれた巨大な魔法陣が、その四隅に置かれた台座の上には青い蝶が止まっており、それらのうち三羽は紫、桃、群青色に発光していた。

「いよいよ、最終段階に入るですね」

影山に応えるように琢磨が呟く。

彼らが囲んでいるのは魔法陣の中心に置かれた、一人一人が寝そべられそうな台座が、その上空には人より一回り大きい繭が浮かんでいた。

蝶の光に応えるように、小さく鼓動を発しながら。

「……………」

「早く遊びたいなあ……」

無言で腕を組む京、退屈そうに呟く北崎。

そんな彼らに妖艶な笑みを浮かべ、影山は空間に響くように言葉を発した。

「さあ、行きましょう。我らの未来の為に、我らの王の降臨の為に！」

第19話 胎動する闇（後書き）

さて、今回は色んなフラグ（？）が立ったと思います。

その中で皆さん阿求に気付いたと思いますが……

……そうです。

この作品では阿求がヒロインなのです。異論は認める。

はい、その「犯罪だ!」というアナタ。

この作品では阿求は15歳という設定ですので犯罪には……

……うん、手を出したら犯罪ですね。

でもこの巧と阿求は「仮面ライダーSPIRITS」の村雨良と一条ルミをイメージしています。

後は……わかるな?（何様）

それでは今回はこのへんで、それでは。ノシ

第20話 戦士の称号（前書き）

皆さんお久しぶりでございます！今まで以上に遅れてしまってます！

実はついこの間までパソコンに触れることができなくて執筆を全然進められませんでした。
すいません（汗）

前書きはここまでにして、それでは第20話、どうぞ。

第20話 戦士の称号

——妖怪の山、にとりの工房

「嗚呼バジンちゃん、またこんなにボロボロになっちゃって……」

全く、巧はもうちよつとバジンちゃんを大事にするべきなんだよ。そうだよね椀？」

「え、えつと………そうかもね」

北崎との死闘で半壊になったオートバジンを修理しながらぷりぷりと怒る河城にとりと、そんな彼女に戸惑いながらも相槌を打つ犬走椀の姿があつた。

椀が小さく「多分……」と呟いていたがオートバジンに夢中のとりは気付かなかつた。

何故このようになっていたのか。

にとりと将棋を打とうと思つた非番の椀が彼女を尋ねたところ、当のにとりは一昨日の失礼極まりない侵入者が乗っていた乗り物——オートバジンを弄つていて、そのままなし崩しのにとりの愚痴に付き合わされていたということである。

彼女の話から事の発端は一昨日の侵入者らしいので今度会つたら恨みついでに懲らしめてやろうと思つた椀であつた。

——そう考えていると、来客がまた一人やってきた。

「あやや、こんなところにいたのね椀」

「げ、文さん」

黒い翼を羽ばたかせて降り立ったのは射命丸文だった。

彼女の姿を見た椀は「また何か面倒事に巻き込まれるんじゃないか」と本能的に察し、表情を歪ませた。

……最も、毎回抵抗空しく面倒事に巻き込まれるので無駄な努力とも言えるが。

「おやにとりさん、そこにあるのは巧さんのバイクですか？」

「そうだよ。全く巧ったらバジンちゃん使いが荒いんだから……もうちょっと優しく扱ってあげればいいのに」

「……で？文さんは何しに来たんですか？」

文にとりの間に割り込むように、口を挟む椀。

彼女にしてみれば碌でもないことと分かりつつも、さっさと文から用件を聞いて彼女からおさらばしたいといったところである。

そんな椀に「おお、忘れてました」と呟いた文は彼女に向き直り、満面の笑みで言った。

「椀、私しばらく山を空けるから上の方によろしく言って頂戴」

「はいは——…はあ！？」

文の言葉に椀は思わずそう聞き返してしまった。

椀が知る限りでは今日から数日は文に仕事が入っていたが、そんな状態で文が仕事をボイコットすればどうなるか。

——間違いなく、部下である自分に上からのとばっちりがやって来る。

「そう言うわけだから。サボっちゃ駄目よ、椀！」

「あなたが言うかぁー!？」

椛の叫びも虚しく、文は黒い翼を羽ばたかせて飛び去っていった。
また。

後に残ったのはオートバジンの修理に集中するにとりと、頂垂れる
椛であった。

椛たちと別れた後、幻想郷の空を駆ける文。

その表情は先程椛たちに見せた楽しげなものではなく、鋭く歪ませ
ていた。

「……………京、私は……………」

—— 幻想郷のどこか、八雲紫の屋敷

「到着しました」

「……………随分とへんぴなところに住んでるんだな」

その玄関前に八雲藍と彼女に手を引かれた乾巧が降り立った。

巧がそう言ったのも、ここに来るまで言葉にするのも面倒になるくらい複雑な道を通ってきて、最早この屋敷が幻想郷の何処にあるのか見当がつかなくなってしまったからである。
そんな巧をよそに藍は彼に向き直り、口を開いた。

「これから紫様とお会いになっていただきます。……と言いたいく所ですが……」

そう言いながら藍は巧の横に視線を向け、呆れたように溜息を吐く。
彼女の視線の先には――

「へえ。紫の奴、最近はこんなところに住んでたのね」

「……何故お前がいるんだ。霊夢」

「細かい事は気にしないで頂戴。だいたい私だって慣れない尾行したせいで疲れてるのよ」

本来招く筈ではなかった巫女、博麗霊夢の姿があった。

何故彼女がここに居るのかと言う理由はいたって簡単である。

出かけている最中に偶々藍と巧の姿を見かけ、『紫に会う絶好のチャンスかもしれない』という勘に従って二人の後を付け、今に至るというわけである。

追跡を許してしまった己の失態に溜息をつく藍をよそに霊夢は先程までの気だるそうな雰囲気を消し、真剣な表情で口を開いていく。

「…第一、これ以上置いてけぼりにされるのは御免よ。私は私に出来る事をやる。」

だから今日は何が何でも話を聞かせてもらおうよ」

霊夢は今回の件について知らない事が沢山ある。

紫が姿を現さない理由、幽々子が能力を奪われた理由、オルフェノクの目的。

これまでの異変は悉く自らの勘に従って解決してきたが今回ばかりはそうはいかない。

全貌が不明慮すぎるし、自分一人では明らかに手に余る。だからここで何としても紫と会い、話しあい、自らのやるべき事を見つけようとしていた。

そんな彼女を前に藍が自らの耳に手を当て、何か考えている様子を見せたかと思うと小さく驚いたような表情を見せた。

その様子を疑問に思った巧が霊夢に尋ねると彼女曰く「紫と話しあっている」らしい。

そうしていると話がついたのか藍が二人に向き直り、口を開いた。

「…どうやら紫様はお前にも会うそうだ。——こちらに」

そうして藍の案内の下、二人は屋敷の中を進んでいく。

やがて一室の襖の前で立ち止まり、膝について藍が言葉を発する。

「紫様、乾巧殿と博麗霊夢をお連れしま——」

「紫、邪魔するわよー」

しかし藍の言葉を霊夢が遮り、そのことに我関せずと言う様な表情で襖をガラツと開ける。

その横では藍が膝をついたまま、本日何度目になるかわからない溜息をついていたが彼女は無視した。

襖を開けた先には紫色を基調とした寝間着を纏い、布団から上半身だけを起こした女性が巧たちに向き、笑みを浮かべた。

「久しぶりね、霊夢。そして始めまして、乾巧」

腰までも届く鮮やかな金髪、少女のような幼さと大人の女らしさが入り混じったような顔立ち。

どこか浮世離れたような雰囲気を纏う彼女こそ『妖怪の賢者』――

――八雲紫。

恐らく巧が望む情報を持っているであろう彼女が今、こうして姿を現した。

「さーで、それじゃあ知ってる事キリキリ吐いてもらいましょうか」
「つれないわね、ここは傷ついた友の身を案じる所じゃないの？私と霊夢の仲じゃない」

「あんたと友達になった覚えは無いし、意外と元気なあんたの姿を見てそんな気が失せたわ」

「ふふ、やっぱり心配してくれたのね。素直じゃないんだから」

「……減らず口だけは相変わらずね」

そうして言葉を交わしていく霊夢と紫をよそに、巧は一人置いてけぼりになったような気がした。

すると目の前にすっとお茶が出された。その先に目をやると焦げ茶色の髪に猫耳を生やした少女がおぼんを手にしていた。

「じゅっくり」

巧にそう告げた少女は同じ様に霊夢と紫の前にお茶を差し出すと藍の前にとととと歩いていった。

藍はそんな少女に「いい子だ」と言って頭を撫でると、少女は満面の笑みを浮かべていた。

とりあえず巧は差し出されたお茶に口をつけてみると、その表情は驚愕の色に染まった。

熱さが丁度良かったのだ。重度の猫舌である巧でもすぐに飲めるように冷まされていた。

このような芸当が出来るのは、同じ猫舌の苦しみがわかる者だけである。

「……おいお前、名前は？」

「え？あ、あの橙と言います」

聞くや否や、巧は少女——橙の手をがっしりと握った。

「にやつ！？」と驚く橙をよそに、巧は滅多に見せないような爽やかな笑顔で言い放った。

「乾巧だ、よろしく！」

「……あつちの猫舌がなんだか熱くなってるけど、そろそろ本題に入っていいかしら」

呆れたような霊夢の呟きが部屋に吸い込まれていった。

——さて、まずどこから話そうかしら？

「そうね…、やっぱりあんたも幽々子みたいに能力を奪われたの？」

ええ、恥ずかしい事にね。

何とかギリギリのところまで全部奪われるのは防げたけど、彼——乾巧を連れてくるので殆どすっからかんになっちゃった。

「……てことは俺がここに来たのはお前の仕業だったのか」

そう。能力のほとんどを奪われた私は奴らの微かな足跡を辿って貴方の世界、そして貴方を見つけた。

そうしたら貴方ったら無茶な戦いをして死にかけていたんですもの。咄嗟に残りの力を使って貴方をこの幻想郷に送ったの。

永遠亭の近くに落ちたのはホント運が良かったとしか言いようがないわ。

「ちょっと待って。巧って外から来たんじゃないの？あんたの言い方だと違うように聞こえるんだけど」

—— ああ、霊夢は知らなかったのね。

彼はこの幻想郷がある世界とは別の世界、そっくりだけど全く違う世界から来たのよ。

「…そういうこと。だから神社から帰せなかったのね」

「俺がここに来た経緯は大体わかったからもういい。」

…… お前や西行寺の能力を奪ってまでラッキークローバーの奴らは何を企んでやる？」

… 彼らの目的は王を、オルフェノクの王を蘇らせること。

「オルフェノクの……王？」

ええ、オルフェノクの頂点に立つ王。

王についてわかつている事は絶大な力を秘めていることと、蘇れば人間も妖怪も滅び、オルフェノクがこの世を支配するということだけ。

そして王を蘇らせるために奴らは4つの力とある人間の魂を求めている。

奴らが今手にしているのは『境界を操る程度の能力』、『死を操る程度の能力』、『永遠と須臾を操る程度の能力』

「！……輝夜まで……！」

確認できたのはつい昨日よ。

…そして残っているのが『運命を操る程度の能力』と『転生を重ねた人間の魂』

「運命……レミリアの事？」

彼女はまだ無事よ。とは言え近いうちに彼女も襲われるでしょうね。奴らの企みを防ぐためにも無事でいてくれると良いのだけど。

「…おい、お前の言う人間の魂ってまさか…」

……気付いたのね。

霊夢、貴女もわかるでしょう？ 転生を重ねた人間なんてこの幻想郷には一人しかいない。

「まさかとは思うけど………阿求が？」

……そう、稗田阿求。

私達四人の力と彼女の魂を使って王を蘇らせる事が奴らの目的。

「…何て奴らのよ。でも何でそんな奴らにあんたが気が付かなかったのよ」

……耳が痛いわ。

奴らは幻想郷に侵入してから妖怪の仕業に見せかけたりしてひっそりと気付かれないように活動していたらしいの。

それに気付いたのは能力を奪われた後で、その時にはもう手が付けられないほど規模が拡大していたの。情けないわ。

「……一つだけ、気になる事がある」

何かしら？

「俺がこの世界に来たのはお前の手によってらしいけど、奴らはどうなんだ？」

ラッキークローバーの奴らは一体どうやってこの世界にやってきたんだ？」

「それが……わからないんです」

「わからない？どういうこと？」

藍の言う通り、そのままの意味よ。

藍に奴らの事を色々調べ上げてもらったんだけど、ラッキークローバーがどうやって幻想郷に来たのかさっぱりわからないのよ。

ラッキークローバーにはそんな能力を持ったオルフェノクなんて居ないし、スマートレディって呼ばれる女は空間制御の方法を齧ってるみたいだけどあの程度じゃ自分一人だけが精一杯だと思うし……

「……まるで、どっかの輩が手を貸してるみたいね…」

——数分後——

「……それじゃ、私はそろそろ行くわ」

あら、もういいのかしら？

「ええ。聞きたい事は聞いたし、やることも決まったからね。

とりあえずはその王って奴を蘇らせないためにレミリアと阿求に注意促してくるわ。

……まあ、レミリアはちゃんと聞くかわかんないけど」

お願いするわ、霊夢。

あの我俣吸血鬼がちゃんと聞くとは思えないけど言わないよりはマシなものね。

「それもそうね。……それで、巧はまだいるの？」

「ああ、お前は先に行け。俺は里に戻ったら慧音達に伝えておく」
「わかったわ。それじゃ紫、用があったらまた来るわ」

ええ、またね霊夢。今度は茶菓子も持ってきて頂戴ね。

——さて、予想はつくけど何が聞きたいのかしら？

「俺の——いや、オルフェノクの身体について教える。
王を蘇らせることだってよ、ホントは何か深い理由があるんじゃないのか？」

……その言い回しだと、何か勘づいている様ね。

「ああ。……俺の手から灰がこぼれた。八意の奴は俺の身体に限界が来てるって言っていた。

……ひょっとしてオルフェノクってのは、長くは生きられないんじゃないか？」

……そこまで気付いてるとは思わなかったわ。そうね、その通りよ。
……オルフェノクは確かに妖怪をも凌駕する力を持っている。その点では進化と言えるかもしれないわ。
でも、身体がその力についていけない。濃度の高い酸素が人体に有害になるように、急激な進化は身体に悪影響を与えていたの。

……だからオルフェノクは総じて短命なの。早ければ数年、長ければ二・三十年でその身体は灰となって消えてしまう。

「……言つなければオルフェノクつてのは、不治の病みたいなもんか」

そこで出てくるのがオルフェノクの王よ。

さつきは黙っていたけど、不死の存在たる王は他のオルフェノクに自分の力を分け与える事ができるの。

王の祝福を受けたオルフェノクは見事死の運命から解放されて、王と末永く暮らしましたとさ、めでたしめでたし。

……これが彼らの真の目的。

王の力で不死になり、この世を支配するのが彼らの目論見。

「胸糞悪い話だな。ますます王って奴の復活を防がなきゃいけない訳か」

貴方はそれでいいの？

「……何がだよ」

貴方自身、自分がもう長くない事くらい気付いているでしょう？

なのに貴方は王の力で命を永らえさせることよりも王を倒す事を考えている。

…貴方、もっと生きたくないの？死ぬのが怖くないの？

「…馬鹿言つな。怖いに決まってるだろ」

へえ？

「そりゃあよ、死ぬのは確かに怖いさ。

でも…、いやだからこそ、一生懸命生きてんだよ。」

……この連中を、守るためにな」

本当にそれでいいのかしら？

私たちは貴方が思っている程優しいわけじゃないわよ？特に私たちは妖怪は人間を食べる訳なのだし。

……知ってるかしら？妖怪は人間を食べるのに何故人里を襲っていけないのか、如何してそんな妖怪が生きていられるのか。

「……知らねえな」

私たち妖怪は人間が私たちに抱く恐怖や畏敬、そういった感情を生きる糧としている。これは知ってるわね？

でも里の人間を襲ってしまったら幻想郷から人間は一気にいなくなってしまう。だから私は結界の外の世界から餌になりそうな人間を調達しているの。

自殺志願者やどうしようもない悪人とかの類をね。

「……………」

ふふっ、怒った？

……でもね、肝に銘じておきなさい。これが私たち妖怪なの。

いくら表向きは人間と仲良くなるうとも人間を食べなければ、襲わなければ生きられない。それが妖怪と言う存在。

それでも貴方は幻想郷で戦うの？無理矢理連れてこられたのに？妖怪も人間を襲うのに？

「……かもな。確かにお前の言う通り俺はここで戦う義理なんて無いし、妖怪もオルフェノクも人間を襲うって点では対して変わらねえ

「かもしれねえ」

「でもな、そんなのは関係ねえんだよ」

……へえ……

「大体よ、人間だろうが妖怪だろうがオルフェノクだろうが良い奴もいれば悪い奴もいる。そんなの当たり前じゃねえか。」

俺はこの連中を自分勝手に無茶苦茶だけど良い奴らだと思った。だから見捨てねえ」

「それによ、要は人間が妖怪を怖がれば人間を襲ったり食べたりする必要はねえ訳だろ？」

だったら人間を襲うの止めさせてやる。人間を食べたいとかぬかす奴がいたら根性叩き直してやる。

どうだ、文句あつか」

…妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を退治する。

遙か昔から続いてきたそんな関係がそう簡単に崩れると思っているのかしら？

「思ってねえよ。でもお前ら妖怪は俺たち人間やオルフェノクより

も長生きだろ？

だったら時間を掛けていけばいつか叶うんじゃないか？争わないに越したことはねえんだからよ。

……そうだ、折角だからお前やれよ。そんな関係変えちまえよ。俺をこっちに連れてきた事と今までの分のツケだ。うん、それがいい」

欲張りな人ね。

そんな男の人は女の子にもてないわよ？

「悪かったな。どうせ生まれてこの方もてたことなんてねえよ」

あら、本当だったのね。

やっぱりその口の悪さと猫舌が原因かしら？

「猫舌は余計だ！それに口が悪いのは生まれつきなんだよ！」

ふふふつ、可笑しな人。

……御免なさいね、試すような事言っちゃって。

確かめたかったのよ。貴方が本当に――

——『仮面ライダー』たる人物なのか。

「か、かめ…？」

…何だ、その、かめんなんたらってのは「

うふふ、内緒」

強いて言うなら悪に立ち向かう正義のヒーローってところかしら。

「ヒーロー？俺が？有り得ねえな、ガラじゃねえんだよそいつの「

あら、帰っちゃうの？

「ああ、聞きたい事は聞いたしな。

それにやる事が色々と増えちまったからな」

…そう。

…彼女たちのこと、お願いね。

「…まかせとけ」

「……あの、紫さま。」

結局『かめんらいだあ』って何なんですか？」

あら橙、気になっちゃった？

そうね……『仮面ライダー』って言うのは『絶対に曲げない信念を胸に秘めた戦士』のことを言うのよ。彼らは自分達の力を弱き人々の為に使い、そして守ると決めた対象は人間であろうとなかろうと守り通そうとする。

例え守るべき相手に忌み嫌われようと、ね。

そう言った強靱な精神を持つ者の事を余所の世界では『仮面ライダー』と呼んでいるのよ。

「あれ？でもさっきの猫舌は自分の事を違うって言ってましたよ？」
「橙、あれは照れているんだよ。外の世界で言うツンデレと言う奴さ」

「っん……？」

そうね、今日話しあって確信を得たわ。

彼は口では悪ぶっているけどその胸の奥、精神の在りようは正に『仮面ライダー』その物だという事を。

——連れてきた私が言うのも何だけど。
あの子たちを、幻想郷を助けてあげて。

乾巧――

――仮面ライダーファイズ。

――人里、稗田邸

「あー……そのー、阿求さん？」
「むー……………」

顔を真っ赤にしてくれる阿求と、苦笑いで平謝りする妹紅の姿があった。

簡単に言えば妹紅が阿求をからかいすぎた結果、このように拗ねてしまったのである。

ちなみに慧音は我関せずと言った状態でお茶を啜っていた。

「ホント悪かった。調子乗りすぎちゃったんだ。

阿求の反応が余りに面白かったもんだから……………」

「妹紅、それは逆効果じゃないか？」

確かに私もさっさと告白してしまえと何度か思ったが……」

……訂正。この教師もからかう気満々であった。

「っ……！もうっ、知りません！」

当然のごとく顔を更に真っ赤にして怒りだした阿求は縁側から立ち上がり、ずかずかと庭に歩きだしていった。

庭に歩いて行ったことに深い意味は無い。ただ単に目の前に歩く場所がそこ位しか無かったことに加え、慧音と妹紅の顔を見なくなっただけということもある。

（大体告白するって言っても乾さんは外の人なワケだし、惚気てる姿が想像できないし。……それに、こんな長く生きられない人間なんかと一緒に居たっていつかは……）

「……きゃっ!？」

考え事に没頭していると何かに躓いたらしく、その場に転んでしまった。

膝にチクリとした痛みが走り、どうやら擦り剥いてしまったようだ。後ろで慧音と妹紅が何か言っているあたり、どうやら派手に躓いてしまったらしい。

「いたた………」

痛みに堪えつつ、阿求は小石にでも躓いたのだろうつかと思いい、自らの足元に視線を向けた。

……そう、向けてしまった。

「——え……？」

彼女が躓いた原因。それは小石などでは無かった。

——地面から伸びた灰色の異形の腕が、阿求の足首をがっちりと掴んでいたのだった。

——紅魔館、正門

姉妹喧嘩によって半壊した館の修復も終わり、いつものように仕事をしつつ昼寝しようとしていた美鈴だったが、今日はそれも叶わなかった。

何故なら門番の仕事が——それも荒っぽい方向での仕事をする必要になりそうだからである。

「……どちらさまでしょうか？アポは取っていますか？」

油断なく視線を向ける美鈴の前には一つの集団の姿があった。集団……と言ってもその人数はたったの三人であり、リーダー格と思われるパーマの少年はあどけない様な表情で口を開いていく。

「うん……、このレミリアっていう子に会いに来たんだ。でもアポを確かめる必要なんてないよ……」

一挙一動に注意を払いながら少年を警戒する美鈴。
その時――

「っ……………!!」

少年から身の丈には不釣り合いな狂気と殺気が放たれた。
それはまるで、腹を空かせた凶暴な邪龍のような――

「今日は機嫌が悪いからさ……」

…キミを殺してから彼女に会うことにしたんだ」

その言葉と共に少年――北崎の身体に紋様が浮かび、その肉体をドラゴンオルフェノクへと変化させた。

それを見届けると同時に完全に戦闘形態となった美鈴は構えながら口を開く。

「そうですか……」。

…でしたら今日とは言わず永遠にお引き取り願います!!」

ドラゴンオルフェノクがズシンと甲骨を纏った脚を踏み出すと同時に美鈴はその身体に気を纏い、主を守るべく『敵』に立ち向かっていった――

第20話 戦士の称号（後書き）

以上、第20話でした。

思えばここに投稿を初めて一年半……ようやくここまで進めることができました。

気付いたら総合ポイントも555を超えてしまい、何だか感無量です。これもひとえにここまで応援してくださった皆様のおかげです。本当にありがとうございます！

さて東方紅蓮閃光はとうとう佳境に入り、これまで以上に重くなっています。ですがどうかお付き合いよろしくお願いします！

今回はこのへんで、それでは。ノシ

……とうとうR - 15の本領を発揮する時が来たかくボソリ

第21話 龍の戯れ（前書き）

WARNING!! WARNING!!

今回の展開はある意味「やりすぎた」感があります。

R - 15……もしかしたらR - 17に行くかもしれないので十分ご注意ください。

覚悟はよろしいですか？

第21話 龍の戯れ

——紅魔館、正門

「君たちは手を出しちゃダメだよ。この人はボクのおもちゃなんだから」

北崎——ドラゴンオルフェノクがそう言うと、後ろに控えていた二人の男女はすっと一歩引き下がった。

それを視線を向けることなく確認するとドラゴンオルフェノクは美鈴の正拳突きを龍頭を模した手甲で受け止めた。

彼のイメージではこのまま美鈴の拳が灰化していたが、実際には彼女の拳は灰化する気配は無い。

目を凝らせば彼女の身体は薄く発光していた。

「へえ……。ボクに触っても灰にならないなんて…、キミひょっとしてオルフェノク？」

「貴方みたいなタイプとは前に一度戦ったので保険かけてたんですよ。それと…」

そう言いながら美鈴は拳をすうっと引き、同時に回し蹴りを繰り出していく。

その動きは流水の如く緩やかで、風のように迅い。

「——残念ながら、私は100%純粋な妖怪です！」

美鈴の回し蹴りを手甲で受け止めるドラゴンオルフェノク。
しかし美鈴は反撃の隙を与えないかの如く次々と突き、拳、蹴りを
繰り出していき、ドラゴンオルフェノクは防戦一方となる。
そして遂に美鈴の拳がドラゴンオルフェノクの鳩尾を的確に捉え、
その身をたじろがせた。

「ふうん、少しはやるみたいだね…」

そこからも美鈴の攻撃は止まる事は無い。

流れるように繰り出されていく彼女の攻めに防ぐだけで精一杯のド
ラゴンオルフェノク。

しかし――

「調子に…乗るなあっ!!」

「くっ!?!」

ドラゴンオルフェノクの角から放たれた紫電が美鈴の身体を吹き飛
ばした。

空中で体勢を直しつつ着地した彼女は顔を苦痛に歪ませ、脇腹を押
えていた。

彼女の脇腹は紫電の残り滓が僅かに走り、小さくはあるものの焼け
焦げていた。

肉の焼ける臭いが鼻を突く中、美鈴は目の前の敵に思考を巡らせて
いく。

――見たところ、パワーも防御力もあの龍が勝っている…!

………なら、スピードで翻弄して隙を突く!

「はああっ!!」

そこから、美鈴の反撃が始まった。
威力を度外視し、あくまでスピードとキレを重視とした攻撃を繰り出していく。

威力が小さいためドラゴンオルフェノクには殆どダメージは通っていないが、それでも時たま急所を突いてくる攻撃の前には防御をせざるを得なかった。

そして、ついに――

(……そこだっ!!)

美鈴の攻撃を防ぐ防御の際に生まれた僅かな隙。

ドラゴンオルフェノクを打ち倒す絶好の機会を逃さぬよう、彼女はありったけの力を籠めて急所を――装甲の隙間から覗く首筋を狙う。一撃で、確実に倒せるように。

「はあああああっ!!」

気合一閃。

美鈴の渾身の突きがドラゴンオルフェノクの首筋に伸びていく。

それに気付き、防御しようとするドラゴンオルフェノクだが突きは最早1センチにまで迫っており、首を守るには間に合わなかった。突きが首筋に突き刺さり、ドラゴンオルフェノクを葬るまで後1ミリ。

その瞬間――

「なっ——！」

ドラゴンオルフェノクの姿がぶれ、

身体を走る鈍い衝撃と共に、

紅美鈴の意識は

途切れた。

「……ねえレミィ、——っ聞いていいかしら」

「なあに、パチエ」

紅魔館、その一室にてレミリアとパチュリーが小振りなテーブルを挟んで向かい合っていた。

レミリアの傍らには静かに佇む咲夜が、パチュリーの傍らには小悪魔がどこかそわそわしながら佇んでいた。

パチュリーは開いている本の上から覗き込むようにレミリアに視線を向け、対するレミリアが紅茶のカップをソーサーに置いたところで再び口を開いていく。

「貴女がこんな日中に、しかも雨の日に私を呼んでお茶にするなんてどついう風の吹きまわしかしら？」

吸血鬼であるレミリアは夜の住人ではあるが、だからといって夜の間にだけ起きているというわけではない。昼間でも起きている事はよくあるのだ。

しかし雨の日となると別である。吸血鬼という種族ゆえか彼女自身の好みの問題か定かではないがレミリアは雨の日になると昼間に起きる事は余りない。お茶会にするなど以ての外である。

しかし今、現にレミリアはパチュリーを呼んでまでお茶会をしている。普段はだらしのない恰好は見せられないと言って雨の日は顔すら合わせようとしないのに、である。

「……運命を視たから、とでも言っておこうかしら」

「運命？ 気に入らない運命だったら変えてしまえばいいじゃない」

運命を視る、というのはレミリアにとって珍しい事ではない。むしろ見えて当然という様な事である。

『運命を操る程度の能力』を有する彼女にとって運命とは視る事は

勿論、気に入らなければ操る事さえ可能なのだから。

故にパチュリーの言う通り気に入らないのなら変えてしまえばいいだけの話。

しかし――

「偶には能力に頼らずに運命に抗うのも面白いものよ。

それともパチエは私が運命に敗れるとも思っているのかしら？」

「まさか」

結局のところ、レミリアの単なる気まぐれ、退屈しのぎの一環に過ぎない。

それでもパチュリーが不安がる様子を見せないのは親友に対する信頼の表れ故か。

「それで、どんな運命を視たかくらいは教えてくれてもいいのかしら？」

「……そうね、教えてあげましょうか」

レミリアがそう言うと同時に、彼女たちの居る部屋――紅魔館の正面ロビーの扉がギイイと開かれていく。

扉の向こうから溢れてくる邪気と狂気に顔を歪ませながらパチュリーは納得していた。

――ああ、だからこんな場所でお茶にしたのかと。

「狼藉者が私を狙ってくるってことよ」

彼女たちの視線の先には二人の男女とそれを率いる少年――北崎の姿があった。

「やあ……、はじめましてだね」

「一つ聞くわ。門番がいたと思うけど、彼女にちゃんと通してもらったのかしら？」

視線を向けずに北崎と言葉を交わすレミリア。

それを咲夜は静かに見守り、パチュリーは注意深く観察し、小悪魔は北崎のプレッシャーに当てられたのか顔を蒼くして震えていた。

「うん…、ちょっと煩かったけどついてきてもらったんだ。でも…

……」

「ひつ………！」

そう言いながらある物を投げる北崎。

それは彼女たちの前にゴトリと音を立てて転がり、それを見て耐えきれなくなったのか小悪魔が小さい悲鳴を上げていた。

それは――

「腕しか持つてこれなかったけどね」

――肩から服ごと切断された、美鈴の左腕だった。

そして転がって間もなく、美鈴の腕は灰と化してしまった。

「め…美鈴、さ……」

「ああ……そう言えばそんな名前だった……。いい遊び相手だったよ……」

震えながら発した小悪魔の呟きに反応して話す北崎。

楽しそうに、無邪気な子どものように歪んだ事柄を話すその様子は、果たしてどのように映るのだろうか。

何れにせよ、彼が狂気に満ちている事に変わりはない。

「楽しかったなあ……灰にならないからお腹刺したりして遊んでた
らいつの間にか腕が取れちゃって——」

「それ以上喋るな。下郎」

——必殺『ハートブレイク』

北崎の言葉を遮るかのごとくレミリアによって放たれた赤い魔力の
槍が、北崎に着弾する。

舞い上がる瓦礫や砂埃にパチュリーが顔を顰める中、北崎たちが居
た場所の砂埃が晴れてきた。

「危ないなあ……でも、やっぱり君と遊んだ方が面白そうだね」

結果から言えば北崎は健在だった。いや、それどころか傷一つ付い
ていなかった。

理由は簡単だ。彼の後ろに控えていた男女が前に出て、北崎を守っ
たのだ。

ただし、男は象を模したエレファントオルフェノクに、女はイモガ
イを模したコーンシエルオルフェノクに変化していた。

「君たちは他の子と遊んでね。…間違っても僕の邪魔だけはする
なよ」

北崎は男女のオルフェノクにそう告げると自らも身体に紋様を浮か
べ、ドラゴンオルフェノクへと変化すると他には目もくれずレミリ

アに向かつて一直線に駆け出した。

無論それを許す咲夜達ではない。しかし咲夜の前にはコーンシエル
オルフェノクが、パチュリーと小悪魔の前にはエレファントオルフ
エノクがそれぞれ立ち塞がった。

「…邪魔しないでもらえるかしら」

「そっちこそ。北崎様に手は出させないわ」

「北崎さんの邪魔はさせねえぜ。あの人ほど怒らせると恐ろしい人
はい——うおっ!？」

「退きなさい。私今すごく機嫌が悪いの」

自分の前に立ち塞がった異形——エレファントオルフェノクの言葉
を遮るようにパチュリーは問答無用で弾幕を放った。

雨の日にいきなり呼び出され、お茶をしていたら侵入者が現れて、
美鈴が手酷くやられていて、埃っぽい思いをして、拳句に目の前の
象は私の邪魔をする。

もう——うんざりだ！

「小悪魔、手伝いなさい。即刻片づけるわよ」

「はっ、はい！」

応えた小悪魔は戸惑いながらもパチュリーの背後に移動し、彼女に
手をかざすと小悪魔からパチュリーに魔力が送られていく。

小悪魔はパチュリーの使い魔だ。それ故自らの魔力を主に送ることは容易なのだ。

小悪魔から送られた魔力により、パチュリーの魔法が形作られていく。

——時間は掛けない、一撃だ。一撃で敵を葬り去る魔法を——！

——火金符『セントエルモピラー』

小悪魔から分けられた魔力により普段より巨大となった熱の塊が、弾幕を避けるのに必死なエレファントオルフェノクに放たれる。

「う、お、お、お——！？」

弾幕に気を取られすぎたエレファントオルフェノクに火球が直撃、爆散して彼を爆風と共に吹き飛ばした。

後に残ったのは焦げる匂いに、爆発の痕、そして壁に大きく開けられた穴だった。

「……片付いたようね」

警戒は怠らないが、何も出てこない。……今の攻撃で吹き飛んだか。

「ぱ、パチュリー様。ご無事、ですか？」

振り返れば、息も絶え絶えな小悪魔の姿があった。

無理もない。パチュリーに魔力を——それも余分多めに分けていたのだ。

過剰な疲労は当然の結果だった。

「ご苦労さま、貴女は休んでいなさい。レミイのことは私に任せて」
「は、はい。わかりまし——！？」

応えようとしたその時、小悪魔に言い難き悪寒が走った。
主の危機を、理屈など無く、直感で。
気付いた時には身体が勝手に動いていた。

「パチュリー様っ！！」

「きゃっ！？貴女、何を——」

突然小悪魔に突き飛ばされたパチュリーは、目の前の光景に言いかけた言葉を失った。

自分を突き飛ばした小悪魔の身体が、横から飛び出た灰色の巨大な脚にゴム毬のごとく蹴り飛ばされた。

数回床を跳ねた小悪魔の身体は壁に叩きつけられると同時に、ピクリとも動かなくなった。

「こ……こあ、くま……？」

「ところがどっこい。お片づけはまだ終わっていませんでした。

………しかし痛えなあ。こりや火傷なんて生易しいもんじゃねえぞ。よくてレアか、最悪ウエルダンだな」

上から降りかかってきた声に、パチュリーは呆然としたように顔を上げる。

そこには体中が焼け焦げ、全身から煙を上げながらも未だ健在の灰色の異形が。

腰から下が巨大な象の身体そのものになっているエレファントオルフェノク・疾走態の姿があった。

「なん、で」

「ん？確かにさっきのはマジで死ぬかと思ったな。まあ運良く生きてたわけだし、とりあえずはだな……………」

残念だったな、魔女さんよ」

「——あ」

言うや否や、エレファントオルフェノクの腕がパチュリーに伸びて

——彼女の視界は、真っ暗になった。

「ぐ…う、うう……………」

「呆氣ないわね」

十六夜咲夜とコーンシエルオルフェノクの戦いはあっという間に幕を閉じた。

勝因は至って強力でシンプル。時間を止めた咲夜がコーンシエルオルフェノクに無数のナイフを突き立てたのだ。

結果、咲夜は殆ど無傷、コーンシエルオルフェノクは身体中に剣山

の如くナイフが突き刺さり地に伏せていた。
そしてオルフェノクの死を意味する青い炎が、コーンシエルオルフ
エノクの身体から小さく燃え上がり始めた。

——もう此処に留まる必要はない。お嬢様の所に向かわなければ。
そう思い立った咲夜は主の下に向かうべく、足を踏み出し——

——カラン

(……………?)

足元に落ちた金属音。

何かと思い視線を向けると、そこには愛用のナイフが落ちていた。

——気を抜いてしまったのだろうか？こんな時に……。

咲夜はナイフを拾おうと腕を伸ばそうとした。
しかし——

「……………え？」

動かない。

痺れたかのように、自分の手が動かない。

突然の事態に困惑している内に痺れはどんどん広がっていき、——
——気付いた時には立っている事すら出来なくなっていた。

「なに、これ」

上手く喋れない。身体が石の様に重い。
何故？どうして？

「……アハハ。ようやく効き始めたみたいね」

掛けられた声にゆっくりと振り返ると、下半身が完全に炎に包まれたコーンシエルオルフェノクの姿があった。

しかしその様子は死に対する恐怖は無く、笑っていた。

「さっき刺された時にね、あんたに毒を打ちこんでいたのよ」

——咲夜がコーンシエルオルフェノクをナイフで剣山にした瞬間。
あの時コーンシエルオルフェノクは極微細な毒銚を咲夜に打ちこんでいたのだ。

痛みも感じないほど微細な銚を。

「ど、く？」

「とびつきり強力な神経毒。血清なんてありはしないわ。

精々お嬢様とやらを守れずに絶望しながら死んでいくと良いわ！

アハ、アハハ、アハハハハハハハハ——！！」

炎に全身を包まれたコーンシエルオルフェノクは高々に笑いながら灰へと還っていった。

後に残されたのは彼女だった灰の山と、毒に全身を蝕まれ、能力を使う余力も無く地に倒れ伏す咲夜だけだった。

（お……………じょう、さ……ま……………）

最早まともに考えられなくなった脳裏にその言葉を浮かべ、咲夜の意識は闇に塗りつぶされていった。

「裂けるっ!!」
「ちっ!!」

――爪と手甲

「死んじゃえよ!!」
「くっ……!!」

――脚と脚

「――天罰『スターオブダビデ』!!」
「はああああ、はあっ!!」

――弾幕とエネルギー弾

レミリア・スカーレットと北崎ことドラゴンオルフェノク。
二人の戦いは互いに一步も引かない、熾烈を極めたものになっていた。

拳を繰り出せば拳が、蹴りを出せば蹴りが返っていくことが繰り返
し起こり、その結果がこの現状を生み出していた。

弾幕と特大のエネルギー弾が真正面からぶつかったことにより、砂

煙で覆い尽される一面。

視界が全く効かない。そんな状況の中でレミリアに迫る灰色の腕。視界に留める事すら不可能な速さで背後から襲いかかる腕がレミリアの身体を引き裂く――

「……………!？」

――ことはなかった。

レミリアの身体が無数の蝙蝠に分裂したことで腕は空を切り、更に同時に溢れ出た弾幕が腕の正体――ドラゴンオルフェノク・龍人態の無防備な身体を襲った。

装甲を脱ぎ捨てたことにより防御が薄くなったドラゴンオルフェノクに弾幕は容赦なく突き刺さっていく。

深刻なダメージを喰らう前に急いで魔人態へと戻ったドラゴンオルフェノクは分裂した蝙蝠が一か所に集まり、レミリアの姿に戻っていくのを見据えていた。

レミリアが完全に元の姿に戻るとドラゴンオルフェノクの影が北崎の形になり、口を開いた。

「へえ……。今のをかわすなんて、生意気だなあ……」

「あんたみたいに突然現れるような奴の相手なんて感覚でわかるのよ。」

その点ではうちのメイドの方が上ね」

レミリアにとっては咲夜の時間停止に比べればドラゴンオルフェノク的高速移動は避けられる余地が十分にあった。

吸血鬼の身体能力に加えて誰よりも咲夜と彼女の能力に詳しいレミリアだからこそ成せる業であった。

「ふうん……。でも、それで僕に勝ったつもりにならないほうがいいよ。」

——そろそろ“来る”ころじゃないかな？」

ドラゴンオルフェノクが言い終わるや否や、大きな爆発音と共に近くの壁が爆散した。

大量の瓦礫と砂煙の前にレミリアが顔を顰めていると、そこに一人の小柄な少女が立っていた。

それはレミリアが見間違える筈も無い、たった一人の妹——フランドールだった。

「フラン！？」

「…………お前か……」

俯いたフランドールはレミリアの言葉に返すことなく、ぽつりと呟く。

——いや、レミリアに気付いてすらいなかった。

まさかと思ったレミリアは、顔を上げたフランドールの表情を見て確信した。

今のフランドールは俗に言えば『キレている』。怒りの余り、周囲が何も見えていないのだ。

瞳孔が極限まで細くなっており、視線で殺さんばかりにドラゴンオ

ルフェノクを睨みつけるフランドールの姿がそれを物語っていた。

「美鈴をいじめたのは…お前かああっ…!!」

そう叫ぶと同時に爪を立て、ドラゴンオルフェノクへと踊りかかるフランドール。

ドラゴンオルフェノクは身を振って彼女の爪を避けると、空を切った腕が床に突き刺さり、突き刺さった部分の床に大きく亀裂が生じた。

フランドールはすぐさま弾幕を出そうとしたが、ドラゴンオルフェノクは弾幕を出そうとした彼女の掌を横殴りで身体ごと払い飛ばした。

「落ち着きなさい、フラン…!!」

宝石のような羽を羽ばたかせて停止したフランドールの横にレミリアが現れ、彼女を止めようとする。

——しかし、そんな言葉で止まるほどフランドールはおとなしくない。

「お姉様、邪魔…!!」

「つつ…!! フラン…!!」

フランドールはレミリアに向かって至近距離で弾幕を放ち、彼女の制止を無視して再びドラゴンオルフェノクへ駆けて行ってしまった。

（フラン…!! 貴女が行っては…!!）

フランドールの残した弾幕を捌きながら、レミリアは言い知れぬ不安に満ちていた。

彼女はフランドールの力を過小評価しているわけではない。むしろ潜在能力では姉である自分よりも勝っているのだ。

しかしフランドールの戦い方は一言で言えば力任せの一言に尽きる。彼女は強大な己の力を完全にコントロール出来ていないのだ。

反面、ドラゴンオルフェノクの戦い方は一見力任せの様にも見えるが、実際はその力を最大限に発揮する応用力と奇抜性に溢れている。直接戦ったからこそわかる。

それに先程微かに見えたフランドールの運命。

あの運命の通りに進んでしまったら、彼女は――

——壊してやる。

[illegible]

——壊してやる！壊しつくしてやる！

思考をその一つで埋め尽くし、ドラゴンオルフェノクに猛攻を仕掛けていくフランドール。

爪、拳、蹴り、弾幕と途切れる事の無い猛攻を前に、ドラゴンオルフェノクは――

「へえ、なかなかやるね。キミのお姉さんなんかよりもずっと面白いや」

――笑っていた。

心の奥底に狂気を秘めた者同士、通じるものが何かあったのだろうか。

ドラゴンオルフェノク――北崎の『自分の思い通りで楽しい』といった狂気。

フランドールの親しいものを傷つけられた故に『壊す』という怒りに支配された状態もまた、狂気と呼ぶのかもしれない。

「お前なんか！お前なんか両手足をもいでたるまさんにして！美鈴に謝らせた後で遊び潰して殺してやる！！」

「面白いね。やってみなよ」

――禁忌『恋の迷路』

フランドールから円を描くように放たれる無数の弾幕がドラゴンオルフェノクの身体を吹き飛ばした。

ドラゴンオルフェノクが弾幕に圧されて影でしか見えなくなった時、フランドールは右手を開いた。

そこに現れるは、ドラゴンオルフェノクの両手足の『目』。

――『あらゆるものを破壊する程度の能力』

ありとあらゆる万物を形作る『目』を自らの手の平に移し、それを握りつぶすことで対象を破壊する、フランドールが有する『最凶』と呼ぶにふさわしい能力。

ドラゴンオルフェノクの両手足が砕け散る姿をイメージし、フラン
ドールはその右手を――閉じた。

――きゅっとして、ドカーン!!

あれ？

なんで、あいつが目の前にいるの？なんで、細くなってるの？なん
で、腕を振りかぶってるの？
なんで、壊れてないの？

――ぼん

あれ、あそこに落ちてるのって何？なんで、見覚えがあるの？
なんで、右手を握れないの？

……ああそっか。あれは――

わたしの腕だもん

「……うわあああああああつ！！」

自分の右腕が千切り飛ばされたという事実気付いた瞬間、フラン
ドールは叫びながら残った左腕でドラゴンオルフェノクを切り裂か
んばかりに手を伸ばした。
しかし――

「遅いなあ」

「っ！ああああーっ！！」

龍人態となったドラゴンオルフェノクの速さには敵わず、残った左
腕、更には両足まで千切られてしまった。
結果、彼女は文字通り手も足も出せなくなってしまった。

「だるまさんになったのはキミの方だったね」
「うう……。はな、せえ……」

魔人態となったドラゴンオルフェノクはサイドポニーに纏められたフランドールの髪を掴み、彼女の身体を持ち上げた。意識を失いかねない激痛を押してフランドールはドラゴンオルフェノクを睨みつけるが、それも彼には喜びを昇華させる材料にしかなり得なかった。

「——貴様アアアア!!」

そこにフランドールの弾幕をくぐり抜け、妹の変わり果てた姿を目の当たりにして激昂したレミリアがドラゴンオルフェノクに魔力の槍を突き出すも、空いた腕によって防がれてしまった。

「お前達の狙いは私だろう!! フランをよくも……!!」

「じゃあ何でキミは運命を操らなかったの? キミが能力を使っていればこの子はこんなことにならなかったよ」

「……………っ!!」

痛いところを突かれた。

そうだ、そもそも『偶には面白いから』と言って自分の運命を操らなかったのは他でもない自分だ。

だからフランが傷ついたのは自分のせいと言われても仕方ないかもしれない。

——だとしても

「フランが傷ついていい理由にはならない!!」

「おねえ…さま……」

息絶え絶えに、レミリアに視線を向けるフランドール。

レミリアはそんな彼女に一瞬、姉として、家族としての視線を向けていた。

——ごめんなさい、フラン。
それでも、貴女は私が必ず助けて——

「……………つまんないな」

低く、それでいて確かに響くドラゴンオルフェノクの言葉。

彼はフランドールの身体を投げ捨て、それを目にして激情したレミアはもう一方の腕でドラゴンオルフェノクに拳を突き出し、彼はその拳を手甲で受け止めた。

その瞬間、どうやって潜んでいたのか手甲から青い蝶が飛び立ち

レミアの肌に、触れた。

「——ああああああ——っ!!」

力を吸い取られ、響き渡るレミアの絶叫。

魔力の槍が霧散し、能力を、力を奪われて衰弱する彼女とは対照的に赤い光を帯び始める蝶。

「……………あ」

やがて力を吸い尽されたレミアの身体は声にならない呻き声をあげ、床に崩れ落ちた。

そんな彼女の身体をドラゴンオルフェノクは追い打ちをかけるが如く、ぐりぐりと踏みつけ始めた。

「もうちょっと遊んでからキミの力を貰おうと思ってたけどやめた。キミいちいち癪に障るんだもん。」

——だから、これから遊ぶことにするよ」

「あれ？北崎さんもう終わったんですか？流石っすね」

そこにやってきたのはエレファントオルフェノク。

所々ボロボロになっていながらも健在の彼は血まみれのパチュリー
の身体を引きずるように投げ捨てた。

「ぱ、ちえ……。さく、やは……？」

「うん？あー…そりやあそこで痙攣してる奴のことか？

まあ無理も無いわな。あの女の毒を喰らっちゃお終いだな」

エレファントオルフェノクの言葉にかろうじて目線を動かしたレミ
リアの先には自分と同じ様に地に伏せ、時折身体が痙攣している咲
夜の姿があつた。

「あの人は死んじやつたのかあなあ……？」

「そうなんじゃないですか？で、道連れに毒を打ちこんだと。

いやあ女の執念つてのは怖いっすねえ」

「ふーん……。さて、と」

大して興味無さそうに相槌を打つドラゴンオルフェノクは、再びフ
ランドールの身体を持ち上げた。

フランドールは身体を振るなど精一杯の抵抗を示すが、ドラゴンオ
ルフェノクはそれを無視して言葉を発した。

「気になってた事があるんだけど、吸血鬼って流水に弱いんだよね？

……じゃあ、雨の中に放り込んだらどうなるのかな？」

その言葉を聞いた途端、びっくりとフランドールの身体は震えあがり、
これから起こる事を予想して顔が真っ青になった。

ふと何かに気付き、視線を動かすドラゴンオルフェノク。
その先には体力すらも奪われているにも関わらず、地面を這ってフランドールの下へ向かうレミリアの姿があった。

「……ふうん」

それを見たドラゴンオルフェノクは何を思ったのか彼女の頭を乱暴に掴み、フランドールの下に投げ飛ばした。

何か面白い事でもすると思ったのだろうか。どの道衰弱しきったレミリアが自分達に手を出せる筈が無いと考えていたため、エレファントオルフェノクは彼を止めようとはしなかった。

「っ……！ フラン……！」

僅かに髪からこぼれる自分の髪だった灰を撒き散らし、弱り切った自らの身体を打つ雨の激痛に耐えながらもレミリアはフランドールの下に辿り着き、弱々しくも翼を広げて彼女の身体を覆った。
忌々しい雨から妹の身を守るように。

「おねえ……さま……」

「フラン……だい、じょうぶよ……」

痛みの余り涙で顔がぐしゃぐしゃになったフランドールに微笑みを向けるレミリア。

力を奪われて衰弱した上に雨により身体が焼かれているにも拘らず、何故そこまでできるのか、答えは簡単である。

——レミリアが、フランドールの姉だからである。

「あなたは、私が、守る」

「なんだ。つまんないや」

そんな二人を見て、不満を漏らすはドラゴンオルフェノク。

姉妹の様子が気に入らなかった彼は止めを刺すつもりなのか、青いエネルギー弾を作り始めた。

エレファントオルフェノクはそれをただじっと見ている。特に反対する理由も無いし、北崎に逆らうことの恐ろしさを知っているからだ。

やがてエネルギー弾が完成し、ドラゴンオルフェノクが放とうとした時――

――カキンッ

「……？何だ？」

自分の身体に何か当たった感触と響いた金属音に気を取られ、エネルギー弾をもみ消したドラゴンオルフェノクが辺りを見回すと、足元に一本のナイフが落ちていた。

それは紛れもなく、十六夜咲夜が愛用している銀製のナイフだった。

「……何だと？」

在り得ないものがある事に驚き、ドラゴンオルフェノクとエレファントオルフェノクが視線を向けた先には倒れたままで呼吸が不安定であるものの、ナイフを投げたであろう腕をだらりと垂らし、射抜かんばかりにこちらを睨みつける咲夜の姿があった。

（なっ！？あいつの毒を喰らってまだ生きているだと！？）

虫の息ながらも咲夜が生きていたことに戸惑いを隠せないエレファントオルフェノクは、何が起きたのかと周囲を素早く見回し、そして気付いた。

（……まさか！この女……！）

自分の近くに倒れているのは、血まみれのパチュリー。

意識が無いのは変わらないが、その手にはさっきまでは無かった、あるスペルカードが握られていた。

そのスペルカードは——水符『ジェリーフィッシュプリンセス』

「この女——っ……！」

怒りに震えたエレファントオルフェノクがパチュリーにその剛腕を振るおうとした時、彼とドラゴンオルフェノクにどこからともなく飛んできた弾幕が被弾し、行動を阻害された。

エレファントオルフェノクが弾幕の飛んできた方を向くと、そこには館の妖精メイドたちが怯えながらも弾幕を打ちだす姿があった。

更にその隙に別の所に隠れていた妖精メイドたちが彼らの横を素早く通り抜け、一目散にレミリアとフランドールの下に飛んでいった。

「お嬢様！妹様！こちらです！」

「貴女たち……！」

メイドたちは傘を差してレミリアとフランドールを雨から守り、二人の身体を支えながら館の別の場所へと避難し始めた。

「……逃がすと思ってるの？」

しかしそれを易々とさせないのはドラゴンオルフェノク。

弾幕から抜け出した彼はある程度彼女らに近づくと、角に紫電を走らせ、雷撃を飛ばした。

そして放たれた雷撃がレミリア達に襲いかかるうとした時――

――夢符『二重結界』

レミリア達を守るように二重の結界が張りめぐられ、雷撃を打ち消した。

それだけには留まらず、弾幕という形でドラゴンオルフェノクに返していった。

このようなスペルカードを持つ人物は、幻想郷でただ一人。

「れい、む……？」

「レミリア……遅かったかつ……！」

舞い降りた博麗霊夢はレミリアとフランドールの姿を見て、口を噛みしめた。

来るのが遅かった。レミリアは既に能力を奪われてしまったのだ。

門で倒れる美鈴の姿を見た時点で嫌な予感はしていたが、結果は予想以上だった。

レミリアは能力を奪われ、咲夜とパチュリー、小悪魔は虫の息。フランドールに至っては目も当てられないほど惨い姿になっていた。しかし敵は後悔させる時間など与えてくれない。

「びっくりしたなあ……」

「…貴様、何のつもりだ」

低い声を響かせ、弾幕の中から現れるはドラゴンオルフェノク。レミリア達を苦しめた悪魔の前に、霊夢は思わず息を呑んだ。

——これまでの奴とは殺意だとか威圧感だとか、とにかく格が違う——！

これまで霊夢が相手にしてきたどんなオルフェノクよりも、目の前のドラゴンオルフェノクは比べ物にならない威圧感や悪意を放っていた。

思わず吞まれそうになった意識を抑え、霊夢は針や札を構えて立ち向かった。

（こいつが…巧から聞いていた『ラッキークローバー』……！）

一方、エレファントオルフェノクは――

「く、くそつ……!!」

——深く傷つき、立ちくらんでいた。

弾幕に晒された彼は疾走態へと変化し、妖精メイドたちを踏みつぶそうとしていた。

その時彼の巨体は何者かに蹴り飛ばされ、袈裟がけによる斬撃を喰らったのだ。

深く斬りつけられた傷は深く、エレファントオルフェノクの体力だけでなく、意識までも徐々に奪っていく。

「まだだ……! 北崎さんを、援護せねば……!!」

ふらつく身体を押してドラゴンオルフェノクの下へ向かおうとするエレファントオルフェノク。

そんな彼の歩みは脚への違和感と共に止まることとなった。

「いかせま………せん……!」

違和感の正体——それは片腕を失くし、腹部を血で真っ赤に染めながらもエレファントオルフェノクのアキレス腱を突いた美鈴だった。

アキレス腱を突かれたことにより脚を動かせなくなったエレファントオルフェノクは激昂し、拳を振り上げる。

「この……! 死にぞこないが——!!」

……しかし、エレファントオルフェノクの拳が美鈴に振り下ろされることは無かった。

振り下ろそうとした瞬間、背後からの横一文字の斬撃がエレファン

トオルフェノクを両断し、腰から上が下半身と離れて上半身が逆さになって落ち始めたのだ。
腰から下が灰になり、残った上半身も逆さに落ちながら灰化し始めた。

（なぜ、だ……。きさまは、5年前に……！）

逆さになった視界でエレファントオルフェノクが最後に見たもの、それは――

――剣と盾を構えた、灰色の『馬』だった。

「逃げてばっかじゃなくて偶には反撃しなよ。さっきみたいにさあ……」
「くっ……！」

ドラゴンオルフェノクの攻撃を弾幕で牽制しつつ、結界などで避け続けてきた霊夢の表情には焦りの色が見られた。
ドラゴンオルフェノクには針や札、弾幕がほとんど効かず、身体能力は人間の少女そのものである霊夢には攻め手が殆ど無く、攻撃を避け続けるしか手段が無かったのだ。

いや、仮に霊夢が妖怪並みの腕力を持っていたとしても、ドラゴンオルフェノクに体術で立ち向かおうとはしなかっただろう。彼女の勘が『奴には絶対に触れるな』と警笛を鳴らし続けていたからだ。事実、それは正しかった。

とはいえこのままでは体力が無くなったところを突かれるのが落ちである。

夢想天生を使えば今すぐに負ける事は無いだろうがそれだけで倒しきれるか怪しいし、何より霊力切れを狙われたら一貫のお終いである。

結局有効な攻め手が見つからないまま、霊夢の体力と霊力は少しずつ減っていく。

そして――

「っ……しまっ……!!」

凡ミスだ。

牽制に放とうとした針が、手の汗で滑り落ちてしまった。

その隙を逃さなかったドラゴンオルフェノクは弾幕の縫い目を一気に突破して霊夢との距離を詰めた。

気付いた時には遅く、目の前には腕を振りかぶったドラゴンオルフェノクが迫っていた。

しかし、霊夢の目には諦めの色は浮かんでいなかった。

―― 霊符『夢想封印』

とつさに発動したスペルカードにより、最早爆発と言っても差し支えない弾幕が至近距離でドラゴンオルフェノクを襲う。

ドラゴンオルフェノクはその弾幕を前に脚がもつれそうになったが

どうにか持ちこたえ、足に力を入れて踏ん張った。

そのまま集中するように目を閉じながらスペルカードを発動する霊夢に向かって爪を構え、今度こそ振り下ろした。

しかし――

「……なんだ、お前」

「あんたは……！？」

その腕は霊夢に届くギリギリのところまで止められた。第三者の手によって。

ドラゴンオルフェノクの腕を止めたのは灰色の――オルフェノクの腕だった。

その強靱な腕の持ち主はまるで騎士を思わせるような風貌をした馬を模したオルフェノク。

――ホースオルフェノクだった。

「味方……なの？」

「……………」

ホースオルフェノクは無言で腕を振り払うと、空いた拳をドラゴンオルフェノクに叩きつける。

対するドラゴンオルフェノクは少しだけたじろぐと反撃と言わんばかりに手甲の爪を繰り出し、ホースオルフェノクはそれを剣で受け流した。

それからも二人は一進一退の攻防を繰り返して、やがて痺れを切らしたドラゴンオルフェノクが均衡を破った。

「……………っ!!」

龍人態となったドラゴンオルフェノクがホースオルフェノクに次々と攻撃を繰り返していき、ホースオルフェノクの身体は右に左と大きく揺れ動いた。

そしてドラゴンオルフェノクに対抗するかのように、ホースオルフェノクの身体も光り始め、光が止んだところには一回り身体が大きくなり、刺々しい雰囲気を纏った姿、激情態へと変化していた。

激情態となったホースオルフェノクは咄嗟に察知した影に向かって一回り大きくなった剣を一振りした。

するとその場にドラゴンオルフェノク・龍人態が崩れ落ちたのが霊夢の目に映った。

防御の薄い龍人態では、パワーも増大した激情態の力には耐えきれなかったのだ。

（あの速さを見切ったって言うの!?!この間の巧よりも速かったわよ!?!）

「く…そっ…!覚えてろ……………!!」

驚きを隠せない霊夢をよそに、ドラゴンオルフェノクはよろよろと立ち上がってそれだけ言うと、龍人態の超スピードでその場から去った。

その場に残されたのは霊夢とホースオルフェノク、そして満身創痍となったレミリア達になった。

「あんた…一体…」
「……………」

霊夢の問いに、ホースオルフェノクは何も答えない。
そんな彼に霊夢が詰め寄ろうとした時――

「おい霊夢！こりや一体何が起きちまったんだ！？」

「魔理沙！？」

上空から聞き覚えのある声と共に、魔理沙が降り立ってきた。
大方また図書館に本を『借りに』来たのだろうが、紅魔館の凄惨な
様子に彼女も驚きと困惑を隠せていないようだった。

「えっ……！？」

霊夢がホースオルフェノクに向き直ると、そこには誰もいなかった。
何時の間に消えたのかと困惑していると、そこに不思議そうな表情
の魔理沙が歩み寄ってきた。

「おい霊夢？どうしたんだ？」

「……い、いえ。何でも無いわ。」

それよりお願い、手伝って！永遠亭に運ぶわよ！」

そして霊夢と魔理沙はレミリア達や咲夜達に駆け寄り始めた――

第21話 龍の戯れ（後書き）

…と言うわけで、第21話でしたが……

レミリアやフランを始めとした紅魔館キャラは俺の嫁という皆様。

………ほんつとくに申し訳ございません！！（ジャンピング土下座）

これを読んだ方の中には「俺の嫁の強さはこんなもんじゃねえ！！」
と言う方もおらっしゃることでしょう。

しかしここではあえて、あえて彼女たちには倒れるという道を選んでもらいました。

無論、彼女たちの活躍はここで終わりではありませんのでそれまで
お付き合いしていただければ幸いです。

では最後に、今回のオリフェノク紹介で締めたいと思います。

コーンシエルオルフェノク

北崎の部下の女が変化する、イモガイを模したオルフェノク。

極微細な毒銛を発射することができ、その強力な神経毒には血清が
存在せず、毒を喰らった時は自らの体力で峠を乗り切るしかない。

また、変化する女は実は筋金入りのドMであり、北崎に心酔してい
る。

そのため日ごろから北崎に虐められる琢磨の事を、羨ましいと思う
同時に嫉妬していた。

今回はこのへんで、それでは。ノシ

第22話 すれちがい（前書き）

皆様長らくお待たせしました、コラッタです。

リアルが多忙につき投稿が遅れてしまいました。

早く読みたいと言う方もいるかもしれないので今回の前書きはこの
へんで、どうぞ。

何をためらうのです。中へお進みください。

第22話 すれちがい

——幻想郷、人里近くの森

——その上空

そこに二つの人影があった。

「…何のつもりだ、文」

一つは元鴉天狗のレイヴンオルフェノクこと、四方院京。

「…貴方を止めに来たのよ、京」

もう一つは彼の幼馴染の鴉天狗、射命丸文。

京に命を狙われたあの日から、彼女は考え続けていた。

どうして京は敵に回ったのか。どうしてオルフェノクになったことに気付いてやらなかったのか。自分は彼にこれから何をできるのか。

考え抜いたが、明確な答えは浮かんでこなかった。

だから彼女は京の真意を探すことにした。彼の凶行を止める事にした。

四方院京の幼馴染、射命丸文として。

「俺には俺の仕事がある。そこをどけ」

「嫌よ。通りたかったら力づくで退かしてみなさい」

お互い譲る気は毛頭なく、一步も譲らずに睨み合い続けている。

そうしていると、京が折れたように溜息を吐いた。

「そうか……………」

では、遠慮なく」

その言葉と同時に京は身体に紋様を浮かべ、レイヴンオルフェノクへと変化した。

それに倣うように文も自らの身体をばねのように縮め――

「「覚悟っ――!!」」

正に一陣の『疾風』となって飛び出し、二人の『鴉』は激突した――

――人里、稗田邸

「――い…………いやあああつ――!!」

灰色の腕に掴まれた自分の足を見て、顔を恐怖の色に染めて悲鳴を上げる阿求。

それも当然である。

地面から異形の腕が現れて且つそれが自分の足を掴んでいるとなれば大の大人だって恐怖する。少女である阿求が恐怖の余り悲鳴を上

げるのは無理も無かった。

「……お？いきなりアタリ引いちゃったよ。運良くね？」

そう言いながら地面から上半身まで現れた腕の正体——ケラを模したモールクリケットオルフェノクは阿求を自らが掘った穴の中に引きずり込もうとするが――

「阿求から離れる！このおケラ男！！」
「ぶべらっ！？」

飛び出してきた妹紅の蹴りを顔面に食らったことで阿求を掴んでいた腕を離してしまい、その隙に慧音が阿求の身体を抱きとめた。

「大丈夫ですか、稗田殿！」
「は……はい」

慧音の言葉には応えたものの、阿求の身体も言葉も未だ震えていた。慧音達と違って彼女は戦う力を持っていない少女なのだから当然だった。

「慧音！阿求を安全なところに！」

地面から這い上がって来るモールクリケットオルフェノクと対峙しながら叫ぶ妹紅。

稗田邸の中に侵入されたものの、外から騒ぎが聞こえないことから敵の狙いは阿求一人だと察しがつく。現にさっきのオルフェノクは阿求を狙い、「運がいい」と言っていた。

となると稗田邸の外に逃げても里を混乱させるだけである。故に道

は一つしかない。

「稗田殿！こちらへ！」

「は、はい！」

つまり彼女たちは敵に侵入されたこの稗田邸の中で、阿求を守らねばならないのだ。

「そこをどきな！白髪おん」

あちゃちゃちゃちゃちゃ！！」

阿求を追いかけようとした瞬間に火達磨になり、情けない悲鳴を上げるモールクリケットオルフェノク。

彼を火達磨にした妹紅はモールクリケットオルフェノクの出てきた穴を見つめていた。

「…やっぱりか。こいつだけとは思わなかったけどさ」

憎たらしげに呟く妹紅の視線の先にはミミズを模したワームオルフェノクや、小金虫を模したスカラベオルフェノクが穴から次々と出てくる光景があった。

自分の予想が当たっていたことに舌を打ちつつ、妹紅は襲いかかるオルフェノクに炎で以て迎え撃った。

一方、慧音は阿求と屋敷に居た使用人たちの安全のため、敷地の端に逃れていた。

しかしそれも、目の前の存在――

「残念ですが、逃げられませんよ」

ラッキークローバー・センチピードオルフェノクによって塞がれてしまった。

「オルフェノク……！回りこんでいたのか……！」

「ええ、人間の姿で行ったら楽に里を抜けられましたよ」

やられた。と慧音は心の中で舌打ちをした。

そう、オルフェノクは皆人間だった頃の姿をそのまま有している。それ故正体さえ知らなければ普通の人間と見分けがつかないのだ。例えば人里に入ったとしても里の者からは精々外来人くらいにしか見られないだろう。現に慧音もセンチピードオルフェノクの間人間の姿を知らなかったのだから。

ともあれ、阿求達を守らねばならない。

そう思った慧音はセンチピードオルフェノクに駆け出そうとするが

「遅いですよ」

「っ……！くっ……！」

「慧音さん……！」

センチピードオルフェノクの方が一手速かった。

手にした鞭を慧音の身体に巻き付け、彼女を拘束したのだ。
鞭の棘が身体に喰い込み、もがけばもがくほど彼女の体力を蝕んでいく。

「さあ、稗田阿求。我々と共に来てもらいましょう」
「っ……………」

そう言つて阿求に手を差し出すセンチピードオルフェノク。
しかしその間に立ち塞がる影があった。

「阿求様に近寄るんじゃないよ!!」
「そうだ! あっちに行け化け物!!」

そう、稗田家の使用人達だ。

彼らは阿求の前に立つと、己を盾にしてセンチピードオルフェノクから彼女を守ろうとした。

センチピードオルフェノクはそんな彼女を見て呆れたように溜息を吐くと、鞭で拘束していた慧音を彼らに向けて放り投げた。
慧音の身体は慣性に従つて宙に弧を描き、使用人たちの中に突っ込んだことで彼らも共倒れになって阿求を守る陣形がばらついてしまつていた。

「人間ごときがよく吠えますね。
いいでしょう。お望みとあれば全員殺して差し上げますよ」

そう言いながら鞭を地面に打ち、一步一步と歩み寄つて来るセンチピードオルフェノク。

使用人たちは慧音や倒れた者を抱き起こしつつ身構えた。

「みつ、皆さん待つて下さい!」

「阿求様、出てきてはいけません！」

自らの身を投げ出そうとする彼らを止めようとする阿求だが、近くの使用人に押し留められてしまった。

自分を守るために親しい者が犠牲になるなど、阿求には耐えがたい苦痛である。

彼らもそれがわかつている。

しかしそれでも守らないわけにはいかない。

阿求が幼い頃から家に仕えていた者も、それほど歳が離れていない者も主の危機を前に逃げ出す訳にはいかないのだ。

いや、これしきの危機に挫けるようで御阿礼の子に仕える事ができるだろうか。

「では、覚悟してもらいましょうか」

そしてある程度近づいたセンチピードオルフェノクが彼らに鞭を放とうとした時――

「――うおおおおおおっ!!」

「ぐっ!?!」

横から出てきた人影による体当たりがセンチピードオルフェノクに命中し、両者は纏れるように転がり合った。

使用人たちはその人影を見て目を見開き、彼らの気持ちを代弁するかのように慧音が口を開いた。

「耕一!?!」

「無事ですか慧音先生、皆!」

体当たりをした人影——田宮耕一は身体を起こしながらそう声を張り上げた。

永遠亭から帰ってきた耕一は慧音に一言挨拶しようと思い、里人の言葉を頼りに稗田家を訪れていた。

しかし屋敷内で感じた戦いの気配とオルフェノクになったことで研ぎ澄まされた感覚によってセンチピードオルフェノクに襲われる慧音達を見つけ、現在に至るのである。

耕一は立ち上がるセンチピードオルフェノクを見つめる。いや、睨みつけていると言っても過言ではない。

あの日、正気を失った良平を引き連れて里を襲ったのは他でもないセンチピードオルフェノクだった。良平を苦しめた存在の一人であることを忘れられるわけがなかった。

言わば耕一にとって、センチピードオルフェノクは親友の仇の一人なのだ。

「……ほう。そうですか、貴方が」

耕一の腰に巻かれたベルト——デルタドライバーを見て納得いったように呟くセンチピードオルフェノク。

——北崎さんが乾巧と覚醒したばかりのオルフェノクにデルタギアを奪われたとは聞いていたが、このような少年だったとは……。

…ならば私がデルタギアを取り返せば北崎さんを見下せる！

「丁度良い。稗田阿求のついでにそのベルト、返してもらいますよ」
「やらせるかよ…！変身…！」

C o m p l e t e

デルタドライバーから白いブライトストリームが耕一の身体を包み、デルタへと変身を遂げる。

デルタとセンチピードオルフェノクは互いに距離を取り、相手の出方を窺う。

——ぽつり、ぽつりと雨が降り始め、両者の身体を打つ。

そしてデルタムーバーと鞭、それぞれの得物を殆ど同時に相手に放った——

（——くそつ、なかなかしぶといな）

3体のオルフェノクを相手取っていた妹紅は攻めあぐねていた。と言うのも敵の攻撃が連携を描いていたからだ。

ワームオルフェノクが遠距離からブーメランを投げ、スカラベオルフェノクが近距離で斬りつけ、モールケットオルフェノクが地中から彼女を足止めしていた。

火力を上げれば一気に燃やしつくすことも出来るのだがそうすれば稗田邸も消し炭になってしまう上、慧音達を巻き添えにしてしまう可能性もある。

かといって屋敷の外に出そうものなら里の中はパニックになってしまう。

オルフェノクの襲撃で疲弊している里の者たちを刺激すれば良からぬ事態になってしまうのは目に見えているため、それだけは避けたかった。

「———今だ!!」
「うわっ!?!」

この事態をどう凌ぐか考えていると、それを隙と見たスカラベオルフェノクの合図の下、一斉に攻撃を仕掛けてきた。避けることも儘ならないため、炎で迎え撃とうとした時——

S t a r t u p

「へ?」
「ぬ!?!」
「お!?!」

聞きなれない電子音声が聞こえたと思った途端、オルフェノク達の身体を紅いマーカーが拘束し——

「くぐああああ——っ!!」

銀色の影が薄らと見えた途端、彼らの身体にマーカーが突き刺さり

T i m e o u t

R e f o r m a t i o n

宙に浮かぶ紅いφの紋章と共に現れた音速の戦士——ファイズ・アクセルフォームのアクセルクリムゾンスマッシュによって妹紅が対処に手こずっていたオルフェノク達は一斉に灰に還った。

「巧か!？」

「おう、無事か？」

慧音から話を聞いていた妹紅はファイズ——巧に駆け寄り、ファイズはいつものように気だるそうに応える。

巧も耕一と同じ様に慧音や阿求がここにいることを聞き付け、紫から聞いた話を伝えようとしていた。

しかし戦いの空気を感じ取り、急いで駆け付けたら妹紅が三人のオルフエノクを相手取っていたため加勢すべくファイズに変身、続いてアクセルフォームに変形して今に至る。

ファイズの圧倒的な力で事なきを得た妹紅だったが、すぐに顔を引き締めた。

そう、まだ慧音や阿求たちの無事を確認してないのだ。

「っと、慧音達が心配だ。早く行こう!」

「慧音達が?——わかった!」

そう言つて妹紅とファイズは慧音達の後を追いつ始めた。

雨はだんだんと強くなっていく。

「所詮、デルタを手にしたとしても成り立ての貴方はこの程度ということですね」

「くっ、くそっ……!」

一方、センチピードオルフェノクと戦っていたデルタだが、鞭捌きの前に手が出せないでいた。

これというのもデルタ——耕一がオルフェノクに覚醒して戦うようになったのは昨日からであり、喧嘩程度しかしたこと無かった彼には経験が壊滅的に足りていなかったからである。

ドラゴンオルフェノクと渡り合えたのもファイズ——乾巧という6年間戦い続けたベテランが共に居たからであり、彼一人でラッキークローバーと戦うには荷が重すぎたのだ。

とは言えデルタを前にセンチピードオルフェノクが無傷かと言うと流石にそういうことは無く、身体にちらほらと銃撃の痕が見受けられた。

「さて、そろそろベルトを返してもらいましょうか」

「ふざ………けんなっ……！」

………チエツク……！」

Exceed charge

ポインターモードとなったデルタムーバーからポインティングマークが放たれ、咄嗟に鞭を構えたセンチピードオルフェノクを拘束する。

そしてデルタがマークに跳び込んで繰り出されるルシファーズハンマーがセンチピードオルフェノクを貫——

「うううう………おおおおっ……！」

「うわあっ……！」

——…かなかった。

鞭を構えていたことで防御体制となっていたセンチピードオルフェノクはデルタとの激しい拮抗を繰り広げた末、デルタを弾き飛ばすことに成功したのだ。

「少し肝が冷えましたが…これで終わりです」

そしてついにセンチピードオルフェノクの鞭がデルタドライバーに吸い込まれていき――

「……何？」

デルタに届く寸前で横から飛び出てきた弾幕によって跳ね返された。それを放ったのは青い衣に身を包んだ凛々しい女性――上白沢慧音その人であった。

「せ、先生！」

「…私の教え子にこれ以上手出しはさせん！」

デルタを守るように仁王立ちする慧音を見て、センチピードオルフェノクは思考を巡らせていた。

幾ら教え子が危機に遭っているからと言え、慧音が阿求達を守ることを放棄して戦列に並ぶなど考えられない。しかし今現在阿求達の気配は感じられないし、『保険』を掛けているため稗田邸から出たとは考えにくい。

となれば考えられる理由は一つ。慧音の能力『歴史を食べる程度の能力』で阿求達がここに居たという歴史を食べて彼女たちを隠したのだろう。

そうと分かれば話は早い。確かに自分には稗田阿求を見つけるのは不可能だろう。

——『彼女』にとっては関係ないが。

「いいんですか？こんな所に居て」

「何がだ」

油断なく身構える慧音に声をかけるセンチピードオルフェノク。
彼女のそんな様子を見て笑いを堪えながら言葉を紡いでいく。

「貴女的能力に我々が何も対策を立てていないと思っっているのですか？」

「……………！！」

その言葉を聞いた途端、慧音に言いようの無い悪寒が走った。

——しかし、既に遅かった。

「そうです」私には貴女の歴史喰いなんて関係ありません。ざんねん」

「いやっ…！離して…！！」

耳障りな明るい声と共にゆらりと現れたのは青いキャンペーンガール——スマートレディ。

その傍らには未だ抵抗を続ける阿求の腕を握るマンティスオルフェノクが控えており、彼女たちの後ろでは使用人達がオクラオルフェノクのネットによって拘束されていた。

「なっ……………！ありえない！どういうことだ！！」

慧音の言う通り、目の前の光景は普通なら在り得ないことだ。
慧音の能力『歴史を食う程度の能力』はものの姿を見えなくする能力ではあるが、発動さえすれば対象を目で見る事はおろか触れる事すらも出来なくなるのだ。

オルフェノク達が阿求を狙っている事は明らかであるため、『阿求がここに居た』という歴史を隠してしまえば彼らが阿求を捕える事は不可能になる筈だった。
だと言うのに目の前の女——スマートレディは阿求達の存在を簡単に捉えてしまっていた。

「教えてあげませうん。良い女は、秘密が多いものよ。ウフッ」

「くそっ!!」

「稗田殿!!」

ウィンクをしながら慧音にそう返すスマートレディの様子から、ともに答える気はなさそうである。
すぐに彼女を助け出そうとした慧音とデルタだったが——

「行かせると思っているのですか？」

センチピードオルフェノクの鞭がデルタの身体に巻き付き、そのまま慧音に向かって放り投げたことで二人は絡まりながら倒れてしまった。

「ハイ。琢磨くん、お疲れ様

それじゃあお姉さんは先に帰って準備してますね」

「ご苦労さまです。また後ほど」

スマートレディはセンチピードオルフェノクとそう会話を交わすと、まるで最初から居なかったかのようにすっと姿を消した。

それを見届けたセンチピードオルフェノクは他のオルフェノクたちに声を掛けた。

「貴方がたは稗田阿求を連れていきなさい。私はデルタギアを回収していきます」

「やらせるかつ！」

「稗田殿を返せっ！」

センチピードオルフェノクのその言葉に抗わない訳にはいかない慧音とデルタは、それぞれ阿求とセンチピードオルフェノクの下に向かおうとする。

しかし二人ともセンチピードオルフェノクの鞭によって弾き飛ばされ、二人の身体が重なると鞭が幾重にも巻き付いて拘束されてしまった。

「これは返してもらいますよ」

「つつっ！！おい待てっ！！」

拘束されたデルタの腰からデルタドライバーを剥ぎ取られ、その姿は耕一に戻った。

そしてセンチピードオルフェノクの姿が琢磨に戻るとその腰にデルタドライバーを巻き付け――

「変身」

C o m p l e t e

デルタフォンを装填し、デルタへと変身した。

デルタは己の力を確かめるように拳を開閉するとデルタムーバーの銃口を耕一達に向けた。

それを見た阿求は思わず叫んだ。

「待つて下さい！何を！？」

「始末するのですよ。うるちよろされても邪魔なので」

「やめろ！」「この外道！」とざわめく使用人たちを無視して引き金を引こうとするデルタ。

その瞬間、耕一は選択を迫られていた。

このまま慧音諸共撃ち殺されるか、オルフェノクに変化して反撃するか。

ただオルフェノクに変化すると言うことはこの場に居る全員にオルフェノクとなった自分を晒すことになる。自分でも自信が持ちきれている訳でもないのにオルフェノクである事を恐れられ、拒絶されることに耐えられるのか――

（……いや！ここで皆殺されちゃったら元も子もないだろ！）

しかし耕一には選択肢はあるようで無いも同然だった。

恩師を、故郷の人たちを見殺しにしてまで自信の秘密を隠すほど耕一は人で無しにも臆病にもなれなかった。

そして決意した耕一はオルフェノクに変化すべく、紋様を浮かべよ

うとした――

「私とそのベルトがあれば十分なんでしょう！？慧音さん達に手を出さないでください！」

「言っただでしょう。邪魔者だからですよ」

「そ、そんな……！」

それと同じ頃、阿求は葛藤に駆られていた。

何故、自分がこのような目に遭うのか。何故、自分を守ろうとする人が傷つかなければならないのか。

何故、自分は何も出来ないのか。

自分の命を質にして彼女らに手を出さないようにするというのが考えたが、実行に移そうとした時思わず臆してしまい、その上勘づいたマンティスオルフェノクによって手出しができないように縛り上げられてしまっていた。

こうなると阿求に許されたのは、祈ることだけであった。

（誰か……誰か皆を助けて………！！）

――乾さん……！――

「……ん？」

最初にそう呟いたのは誰だったのだろうか。

マンティスオルフェノクが自らの背後から漂う熱と焦げ臭さに気付いて後ろに振り向くと、その無表情な顔面が驚愕の色に染まった。

「なっ！？ひっ、火い！？」

彼の背中で火が燃えており、その上どんどん燃え広がっていたのだ。慌てて手をばたつかせて揉み消しそうとしていると――

「うらあっ！！」

「ぐあっ！？」

力強い掛け声と共に、背後から蹴り飛ばされてしまった。

突然の襲撃にオクラオルフェノクが視線を奪われていると――

「よそ見は禁物だよ！」

こちらも背後から襲ってきた弾幕により、思いっきり吹っ飛ばされてしまった。

状況を一瞬のうちに変えた乱入者達の姿を見て、慧音達は思わずその名を叫んだ。

「妹紅！！」

「巧サン！！」

「……乾さん！！」

ファイズ——乾巧と藤原妹紅の名を。

「下がってる」と短く阿求に言ったファイズは軽くスナップすると一気に駆け出してデルタとの距離を詰め、拳を繰り出した。

対するデルタはその拳を受け止め、空いたもう一方の手も互いにぶつかり合い、鐔迫り合いとなった。

「また貴方ですか。いい加減我々の邪魔をするのはやめてもらえませんか。」

それが貴方の為にもなるんですよ」

「嫌だね。お前らの味方をするくらいなら死んだ方がましだ！」

鐔迫り合いのまま鬱陶しそうに話すデルタとそれに反論するファイズ。

彼の視線の先には鞭で拘束されている慧音と、浮かべようとした紋様を驚いて引つ込めた耕一の姿があった。

デルタの声と挙動、そして耕一の姿から琢磨にベルトを奪われたのだろうと察することができた。

「阿求は連れていかせねえ。ついでにそのベルトも置いて行け。」

そいつはもう耕一のモンだ」

「お断りします。彼女は我々の王に必要ですし、せつかく手に入れたデルタギアをこんな所で手放す訳ないじゃないですか！」

デルタがそう言った瞬間、ファイズの動きを封じようとオクラオールフェノクがネットを投げつけ、それを見越していた妹紅が炎でネットを焼き払った。

それが引き金となったかのようにファイズとデルタは同時に離れ、

互いに距離を取った。

「……とは言え、貴方を相手にこの人数は少々心許ないですし、ここは駒を増やさせてもらいます。

——来なさい」

そう言ったデルタが指を鳴らすとマンティスオルフェノクとオクラオルフェノクがその姿を黒いスーツを着た男に戻し、更にどこに隠れていたのか同じ様な姿の男たちが四人現れ、計六人の男がデルタの前に立った。

そしてその男達は同じデザインのベルトを腰に巻き付けた。

中央に『SMART BRAIN』のロゴがプリントされたバックルが付いた、シンプルなベルトを。

それを見たファイズは仮面の下で目を見開いた。

見覚えがあると言うレベルではない。かつて自分はそのベルトに散々追い詰められた経験があるのだから。

「お前！それは……！」

「六本しか復元できませんでしたが、まあ十分でしょう。」

——やれ」

『変身』

《Complete》

デルタの号令の下、一斉にその言葉を発した男たちはベルト——スマートバックルのバックル部分をスライドさせ、次の瞬間には光に包まれその姿は『変身』していた。

黒地のスーツに銅色のアーマー。〇を模った無機質な銀色のファイ
ンダー。

かつて元の世界で圧倒的な物量で巧を、人間を幾度となく苦しめて
きたスマートブレインが誇る量産兵。

その名は——ライオトルーパー！

「なんだあのベルトは……！」

「あんなのまであったのかよ!?」

その姿を見て驚く慧音と耕一を尻目に、ライオトルーパー達はそれ
ぞれダガーと銃が一体となった武器——アクセレイガンを抜いた。
そして——

「行きなさい！」

『うおおおおっ!!』

デルタの合図の下、ファイズに四人、妹紅に二人と一斉に襲いかか
った。

妹紅は自分に向かってきたライオトルーパーに応戦しようと炎を撃
ちだしたが、彼らは炎に怯むことなく一人は斬りかかり、もう一人
はアクセレイガンを発砲してきた。

「うわっ！………火力が足りなかったか？」

それらを避け、接近してきた方を蹴り飛ばすともう一人が再び発砲
してきた。その銃弾を避けながら妹紅は沸き上がった疑問を口にす
る。

妹紅の考えは的を射ていた。

ライオトルーパーはファイズやカイザと言った他のベルトと違って

フォトンストリームが省略されていてパワーで大きく劣る上、そのパワーは変身するオルフェノクの力量と変化することは無い。云わばライオトルーパーとは、オルフェノクが武器と鎧を装備しただけのようなものだ。

しかし鎧を装備すると言うことは防御力が上昇することに繋がる。事実妹紅の炎に怯むことが無かったのはそのおかげであり、オルフェノク態のままだったら炎に焼かれていただろう。

（…だったら！）

突然妹紅は牽制に出し続けていた炎を止め、アクセレイガンの銃弾を回避することに専念しだした。

それを好機と捉えたライオトルーパーは仲間の銃弾をかわしつつ一気に距離を詰め、アクセレイガンのダガー部分を――

――妹紅の腹に深く突き立てた。

「妹紅！！」

慧音の悲鳴と使用人たちのざわめきが響き渡り、彼女を刺したライオトルーパーは仮面の下でにい、と笑っていた。あっけないものだと、そう思っていた。

しかし、笑みを浮かべていたのは彼だけではない。刺された妹紅本人までも、笑みを浮かべていたのだ。

「…肉を斬らせて骨を断つってね！」

そう言うや否や、妹紅は自分を刺したライオトルーパーにしがみついて離れられないようにした。

慌てて逃れようとするライオトルーパーだが彼女の拘束はびくともせず、身動きができない。

「ここまで密着してれば……周囲に燃え移るなんてことはないからな！」

そう言った瞬間、妹紅の身体が激しく燃え上がり、彼女に密着していたライオトルーパーもその身体を焼き尽くされていった。

炎が止んだ頃には密着していたライオトルーパーの身体がぐらりと仰向けに倒れ、その衝撃で外れた仮面と胴体の中には灰だけがぎっしりと詰まっていた。

藤原妹紅は不老不死——蓬萊人である。

故にその身体は歳を取らないし、傷つこうが致命傷を負おうが、身体半分吹き飛ばされてもたちまち再生するのだ。

彼女が取った行動は、その再生力を生かした闘戦法だった。

「妹紅！！そんな無茶をするんじゃない！」

「わ！ごめん！」

彼女の無茶を咎める慧音の怒号に答え、残ったライオトルーパーをいなしつつファイズの加勢に行こうとした妹紅の目に入ったのは――

「巧！？」

「稗田殿！？何故あんなところに！？」

変身が解除されて地に伏せた巧と、ライオトルーパーに迫られる阿

求の姿だった。

使用人達と下がっていた筈の彼女が何故あんな前に出ているのか疑問に思いつつ、妹紅は二人を助けるべく駆け出した。
そのとき――

――狼が、吠えた。

――時を少し遡り

デルタの号令のもと、ファイズには四人のライオトルーパーが襲いかかってきた。

一人は斬りかかり、またもう一人は射撃を行うなど流れるような連携で攻めていた。

ファイズはそれらをかわし、受け流し、反撃し、時には他のライオトルーパーを盾にするなど四対一を前に一步も引かずに渡り合っていた。

しかし――

「ぐっ!?!」

「ふふふ。いい様ですね」

「てめっ……………、っ!ぐああああー!っ!」

背後から放たれたデルタムーパーの銃弾がファイズの背中に命中してしまい、その時に生じた隙を突かれ、四人のライオトルーパーとデルタによる一斉射撃に晒されてしまった。

身体の至る所から火花を散らし、吹き飛ばされたファイズの腰からファイズドライバーが外れ、強制的に変身が解除された。

地に伏せた巧に、一人のライオトルーパーが止めを刺そうとアクセレイガンの銃口を向け、その引き金を引こうとした。

そのとき、ライオトルーパーの後頭部に何かが叩きつけられる感触が走った。

「つつ、……ん？」

「い、乾さんから…離れて！」

振り返ったライオトルーパーの前には叩き付けたであろう木の板を持ち、震えながら彼を睨みつける阿求の姿があった。

巧が痛みつけられている姿に我慢できなくなった阿求は使用人の制止を振り払い、近くにあった木の板をライオトルーパーの後頭部に叩き付けたのだ。

結果は見ての通り全く効かなかった上、木の板はへし折れてしまったが。

そんな事は露知らぬライオトルーパーは呆れたように溜息を吐き――

「邪魔すんな！生贄風情がっ！」

「きゃあっ！！」

阿求を叩き倒した。

地面に倒れた阿求は赤く腫れた頬を抑えながらライオトルーパーを

睨みつける。

その光景に使用人たちが飛び出そうとするが、他のライオトルーパーがそれを押さえつける。

阿求の態度に苛立ったライオトルーパーにふと残虐な思考が浮かび上がり、デルタへある言葉呼びかけた。

「琢磨さん！別に手足の一本や二本くらい折っても良いっすよねえ！？」

——見てみたい。この反抗的な小娘の苦痛にゆがむ顔が。

——見てみたい。生贄としてしか価値の無いこの小娘の許しを請う姿が。

ライオトルーパーの言葉にふむ、と少し考えたデルタは——

「……少しだけなら構いませんが、間違っても死なせてはいけませんよ」

——実質的なゴーサインを出したのであった。

デルタの許可を受けたライオトルーパーは一步一步と阿求に迫りよって来る。

阿求は彼から逃れようとするが極度の緊張で腰が抜けてしまったのか上手く動けない。

使用人たちが飛び出そうとするが他のライオトルーパーに悉く阻まれ、動けない。

慧音と耕一は鞭の拘束から急いで逃れようと四苦八苦しているが中々うまくいかない。

妹紅は駆け出してくるが、デルタが立ち塞がって思うように近づけない。

皆が皆、阿求を助けようとするがそれを状況が許してくれない。ならば最後まで媚びず、許しを請わずに相手を睨みつけてやろうと阿求の中にささやかな反抗心が芽生える。そもそもこんなことになったのは力量を弁えない自分が原因ではないか。ならばそのツケは自分自身で支払わなければならない。

（……そう、私が悪いのに、私の自業自得なのに……）

そう、その筈なのに――

――やっぱり、怖いなあ――

「――やめろおおっ！！」

雄叫びが響き、ライオトルーパーの手が阿求に届く前に止まった。阿求の盾となるかのように現れた乾巧が、その手を押さえつけたのだ。

（乾さん……！そんな、生身でそんな無茶をしちゃ……！）

自分が言えた義理ではないが、ライオトルーパーという鎧を纏ったオルフェノクに武装も何もない生身の人間が立ち向かうなど、無茶にも程がある。

そう思った阿求は背を向けたままライオトルーパーと掴みあう巧に声をかけようとする。

——そう。

確かに阿求の言う通り、生身の人間が丸腰でライオトルーパーに挑むなど、無茶にも程があるだろう。

——生身の『人間』ならば。

「——え？」

——私は今、何を見てるんだろう。

何故、乾さんの背中に紋様が浮かんでいるんだろう。

何故、乾さんの身体が灰色に盛り上がっているんだろう。

何故、何故、何故、なんで、なんで——

——なんで、『人間』であるはずの乾さんが——

——『オルフェノク』になっているんだろう。

「き、きさつ——ぎゃっ!!」

慌てたライオトルーパーが言い終わる前に、その身体を拳が、蹴りが、全身の剃刀がアーマーを貫いて引き裂いていく。

そうして反撃どころか防御すらも儘ならないまま、そのライオトルーパーの身体はあっという間に灰となって崩れ落ちた。

乾巧——否、ウルフォルフェノクの目にも留らぬ猛攻によって。

「――阿求！無事か！？」

そう言いながら阿求を起こそうとして彼女に手を伸ばすウルフォルフェノク。

呆然となりながらも阿求はその手を取ろうとして――

――鮮明に浮かび上がる過去の記憶。

――先程まで彼女を襲おうとしたライオトルーパー。

――地面から彼女の足を掴んだモールクリケットオルフェノク。

――彼女を人質に取ったモスキートオルフェノク。

――それらの姿がウルフォルフェノクに重なった。

「っ！い、いやっ……………！」

気付いた時には、阿求はウルフォルフェノクの手を叩いてしまっていた。

条件反射でやってしまったのか、彼女自身気付いた時には自分のしたことに酷くうろたえていた。

――そう。

稗田阿求は今、本能でウルフォルフェノクを――乾巧を拒絶したのだ。

「あ、あの……………わた、わたし……………」

「……………」

びくりと動きを止めてしまったウルフォルフェノク。

しかしその背後に殺気を感じ取り、咄嗟に振り返るとライオトルー

パーがアクセレイガンで斬りかかってきた。
それも一人だけでなく、残った四人全員がウルフォルフェノクに襲いかかっていた。

「——くそっ……！」

ウルフォルフェノクは襲いかかるライオトルーパーを迎え撃つ。
感傷に浸る暇など与えないかのように——

駆け出したウルフォルフェノクは一番近くまで迫っていたライオトルーパーの斬撃を避けるどころかスピードを乗せたメリケンサックを繰り出し、アクセレイガンを真つ二つにへし折った。

アクセレイガンへし折られたライオトルーパーは折られた自分の武器を見て、啞然とした様子で呟いた。

「こいつ、はや——！？」

しかし言い終わる前にウルフォルフェノクに首根っこを掴まれ、そのまま猛スピードで引き摺られ始めた。

ウルフォルフェノクは引き摺ったライオトルーパーをアクセレイガンでこちらを撃ってくるライオトルーパー目掛けて放り投げ、二人が絡まり合った瞬間を狙ってメリケンサックを叩き付け、爪と剃刀で引き裂いていく。

そしてまた二人のライオトルーパーが灰に還っていき、ウルフォルフェノクは残った『敵』をその雨に濡れ白く濁った眼光で睨みつける。

その様はまさに、獲物を狩る狼そのものだった。

「くそっ！お前どけよ！」

「通す理由がありませんね！！」

一方、妹紅はデルタの妨害を前に四苦八苦していた。

やたら無暗に弾幕や炎を撒き散らせば阿求達が巻き添えになってしまふ。

デルタは妹紅の再生力を生かした捨て身戦法を警戒しているのか中々近づかず、中距離からなぶるようにじわじわと撃っていた。

かと言って無視して力づくで通ろうとすれば、デルタは彼女の目、首、脇腹と言った急所を狙い撃ちして体勢を崩し、その隙に連射して彼女を押し戻していた。

いつまで続くかわからないこの状況に妹紅が対処に困っていたとき、何者かがデルタの肩をポンと掴んだ。

それをデルタが振り払おうとした時――

「ふんっ！！」

「がっ……！！？」

後頭部に凄まじい衝撃が走った。

軽い脳震盪を起こし、ふらつきながら振り返ったデルタの視線に映ったのは――

――鞭の拘束からようやく逃れ、自分に頭突きを繰り返したであらう慧音の姿だった。

そして今度はふらつくデルタの腰に巻かれたデルタドライバーに妹

紅の手が添えられた。

まずい、とデルタが思った頃にはもう遅く――

「喰らえっ!!」

零距离でデルタの腹部に火球が打ち込まれた。

その衝撃でデルタドライバーが弾き飛ばされ、琢磨逸郎の姿へと戻った。

そして飛ばされたデルタギアは――

「つと!変身!」

Complete

同じく拘束から逃れた耕一の手に渡り、彼は再びデルタへと変身した。

妹紅、慧音、そしてデルタの三人は並び立ち、体勢を直した琢磨が再び変化したセンチピードオルフェノクと向かい合う。

そして一斉に駆け出そうとした瞬間――

「っ!?!」

「なんだ!?!」

空から三人の目の前に人影が急落下し、砂塵を巻き上げて地面に激突したのだ。

その隙にセンチピードオルフェノクは三人の前から逃れ、やがて砂塵が晴れると人影の正体が明らかになった。

「文!?!お前何が...!?!」

身体中傷だらけでよろめく、射命丸文だった。

慧音が咄嗟に文を支えるが、支えられていることにすら気付かない文は視線が宙を泳ぎながら呟いた。

「京………まって……！」

ウルフルフェノクとライオトルーパーの戦いは迅速に且つ、呆気なく終わった。

地面を転がるライオトルーパーの残骸を跳び越え、阿求と向かい合ったウルフルフェノクは乾巧の姿に戻った。

しかし向かい合う二人の視線は交じり合うことは無く、沈黙だけが二人の間を支配していた。

阿求の下に駆け寄っていた使用人達——特に若い連中は巧を仇でも見るかのように睨みつける。

当然だな、と巧はそう思った。

どこまで行こうと、守ろうとしても、結局自分は忌み嫌われる化物なのだ。

そうして琢磨と戦っているであろう妹紅に加勢しようと背を向ける巧。

その背中を見た阿求は思わず使用人達の前に飛び出して口を開いた。

「い、乾さん！その、私——！」

「——うわあああつ!?!」
「なっ——!?!」

——続きを発しようとしたその時、突如舞い降りた突風が彼女たちを襲った。

使用人たちは旋風によって吹き飛ばされ、巧は余りの暴風に立っているだけで精一杯であった。

唯一、阿求の姿は巻き上がる砂塵に隠れて見つけられず、やがて暴風と砂塵が晴れるとその姿がくつきりと見る事ができた。

「——っ!阿求!

お前はあの時の……!」

「久しぶりだな、乾巧」

当て身を当てられたのか、気を失った阿求を抱えたレイヴンオルフエノクの姿が。

すぐさま彼女を助けるべくウルフォルフェノクに変化しようとする巧だったが——

「シャッ!!!」

「ぐあっ!!!——うああああつ!!!」

センチピードオルフェノクの鞭によって足払いされ、地面に倒れた所で何度も何度も鞭を打ちつけられた。

朦朧とした意識の中、巧は阿求に手を伸ばそうとするが、センチピードオルフェノクはそんな彼に追い打ちをかけるかの如く鞭を打ちつける。

慧音達が駆けつけてくるがセンチピードオルフェノクが放つ光弾によって妨害され、その姿を嘲笑うかの如く彼らはレイヴンオルフェ

ノクが起こした風に包まれていく。

「ま、て……！阿求……！！」

「…返してほしければ、お前自身の手で奪い返してみろ」

レイヴンオルフェノクのその言葉を最後に、阿求を連れ去った二人の姿は完全に消え

——同時に、乾巧の意識も闇に落ちた。

第22話 すれちがい（後書き）

以上、第22話でした。

しかしたつくんファイズと耕一デルタ、久々の登場だと言うのにこの扱い…

だが私は謝らない。（キリッ

さて今回もオリフェノク紹介を入れたと思います。どうぞ。

モールクリケットオルフェノク

琢磨の部下が変化する、ケラの特性を持ったオルフェノク。

両腕の棘を使うことでオートバジンに匹敵する速度で地面を掘り進めることができる。逆に言えばそれしか能がない。

ちなみに彼がちらりと見たのは白だったとか何とか。

……え？白って何のことだって？

………言わせんな恥ずかしい。

少々短い気もしますが今回はこのへんで、それでは。ノシ

P・S・今年のMOVIE大戦が無茶苦茶面白かった件について。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6365k/>

東方紅蓮閃光

2011年12月13日03時48分発行